
ドラゴン・ライフ

チェロバス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴン・ライフ

【Nコード】

N9492V

【作者名】

チェロバス

【あらすじ】

私は人間（女）だった。だが名前が思い出せない。なぜなら私はドラゴン（雌）になってしまったからだ。

しかもある国での伝説級のドラゴン。主食は人間です。……え？人間？

どうやら人間を食べてその人間の持つ魔力を糧に生きているらしいです。なんてグロテスク。

今では慣れてしまい躊躇無くぱくりと食べますよ。ええ。だって生きたいんですもん。

私になってしまった”アースドラゴン”という種は、歴代ある国の人間と契約して未だに仲の悪い大国との戦争に何度も勝利を導いたらしい。

知らんがな。私は平和に生きるんだ。異世界だろうと長閑に暮らすんだ。

しかしもふもふしいアングラ兎の友人と暮らしていたら”人喰いドラゴン”なんて名前を付けられる始末。

討伐隊にもうんざりして平和を求め人間になって人里に降りたら城で奉公する事になったり、おいしそうな人がたくさんいたり。

仕事にも落ち着いたらすぐに配属変更だとよ。第四騎士隊寮のお掃除です。

そこで私は、最高級食材並みのおいしそうな人に出会いました。

※イメージイラスト・注意書き。(前書き)

※ここは『ドラゴン・ライフ』第一話ではないので、初めて来られた方は次話の『私は人間だった。名前は思い出せない。』の方へお願いします。

※イメージイラスト・注意書き。

※注意書き。

このスペースは『ドラゴン・ライフ』のイメージイラストを置いています。

【ネタバレ満載】なので本編を読んでからお願いします。

頂きました！頂きましたよ！嬉しいです！形になるのは嬉しいです
ね！

ですが、皆さんそれぞれのイメージがあると思われるので、それを崩したくない方はブラウザバックプリーズ。または戻るボタンを押してください。

また、人それぞれ好みの絵というものもありますので、リアル絵じゃないとやだ！アニメ絵じゃないといやだ！萌絵じゃないといやだ！という好みが一方通行の方もブラウザバックプリーズ。または戻るボタンを押してください。

そのような方は脳内変換で『ドラゴン・ライフ』をお楽しみ頂けると幸いです。

私は全部大丈夫だ！むしろイメージふくらませたいから是非見たい！と言われるお方だけ下へスクロールお願いします。

『ドラゴン・ライフ』は残酷表現が有りの小説ですので、血などの表現が苦手！と言われる方もお勧めできません。私はぼっちこいで

順番はてけとーですが、新しいものは下の方へ順次追加していく予定です。

挿絵は「する」表示でお願いします。

でないと表示されないようなので。

ちょっと私の興奮具合がやばいので危険を察知された方もブラウザバックプリーズ。

または戻るボタンを押してください。

途中休憩と称して変な茶番劇が入ると思われませんが、危険を察知された方はブラウザバックプリーズ。
または戻るボタンを押してください。

> i 3 0 5 7 6 — 3 9 1 4 <

翼がないー!!

まんまとかげです。ヴィトさんに怒られそうです。食われそうです。
コン、コン。

・・・おっと、誰かが来たようだ。すまないが私の事は置いて先に
スクロールしてくれたまえ。

プー太郎様。

> i 2 9 8 5 1 — 2 2 8 2 <

によほほほほ。ですよ奥さん。頂いた瞬間呼吸困難と動悸に襲われました。もう歳ですかね？え？違う？

これはもうヴィトさん視点です。私ヴィトさんになっていいですか？いいですよ？

私だったら左腕と言わず全部食べてしまうかもしれません！

私的イメージよりかっこよく描いて下さって、本望です！死んでいいです。・・・いややっぱりもうちょっと生きたいかな。

最近では隊長さんの描写を書いたたびにキーボードをうつ両手が震えてしまいます。

鼻血も枯れます。ついでににやにやがおさまりません。助けて下さい。死因…隊長さんでお願いします。

・・・いややっぱりもうちょっと生きたいです。

本当にありがとうございました！！

休憩？

> i 3 0 5 7 6 — 3 9 1 4 <

・ ・ ・ ヴィトさん今度描くときはちゃんと翼つけますんで勘弁して下さい。

指かじらないでください。

プー太郎様。

> i 3 0 2 9 0 — 2 2 8 2 <

にに、二枚目を描いて下さりました！プー太郎様に足を向けて眠ることなどできません！！

見よ！この繊細なイラストを！私のトカゲと比べることなんてできないほどドラゴンです！鱗凄いです！

ちょっと見てください！ドラゴンですよ！ドラゴン！骨格！翼！ドラゴン好きだー！！

小説家になろう！の隅でドラゴンに愛を叫びます。

興奮しすぎて呼吸困難はいつものことです。鼻血枯れるのもいつものことです。

こ、このような素敵なものを本当に頂いてよろしかったのか！

本当にありがとうございました！

休憩？

> i30576 — 3914 <

え？ちゃんと描けて？・・・だから描きますってば。翼つけばいいんですよ？

角も？あ、そういうば忘れてた。あいたたたただから噛まないでください！

斎様。

> i 3 0 3 6 8 — 3 8 9 9 <

によっほー。腕が！隊長さんの腕が！食べられた後だ！ごめんよ隊長さん！

たまに奇声を発するのもご愛敬です。

もう最高です。名場面です。嬉しいです。呼吸困難と動悸です。

鱗と隊長さんの髪に時間がかかったということで大変申し訳なく思
い・・・思い・・・思いますがありがとうございます！！みつあみ
最高！

ヴィトさんの赤い瞳が可愛らしくて恋をしちゃいそうです。恋、し
ていいですか？ヴィトさん立派なドラゴンになって・・・お母さん
は嬉しいよ。

私もうろおぼえな背景も描いて下さって感無量とはまさにこのこと！

本当にありがとうございました！

休憩？

> i 3 1 0 0 5 — 3 9 1 4 <

どうだいヴィトさん。これで文句はないだろう。
翼も付けたし角も気持ち程度に付けたし、空も飛んでるし火も吐いてるぞ！

・・・え、とかげの文字はいらない？あいたたたた。

鳥越様。

>i30973—3942<

鳥越様のセンスと技術に度肝を抜かれたチェロバスです。

そしてとても素敵なピクニックです！！ヴィトさんはお弁当として隊長さんをぱくりと食べちゃうんですね。わかります。

ヴィトさんが好みのど直球真ん中ストライク！で呼吸困難に陥りました・・・！か、可愛い！可愛すぎる！私もその白い身体に埋まりたいです・・・！

隊長さんがかっこよすぎて直視できません！おさががこんなに似合う隊長さんを描いて下さり感無量です。素晴らしい。そして仲睦まじい。もう二人くっ付きゃばいいよ。私が許す。

こんなに素敵に描いて下さり本当にありがとうございました！

休憩？

> i 3 1 0 0 5 — 3 9 1 4 <

ごめんなさいごめんなさい。負けました。私がヴィトさんを描くのは100万年早かったんですね。わかります。練習してきます・・・！！脱兎。

プー太郎様。

ななな、なんとプー太郎様が25話のとあるシーンを漫画チックに描いて下さいました！

嬉し恥ずかしです！

どうぞ！！

？の方が縮小して表示されるみたいなんですが、今解決策を考え中。
なのでぽちりと二回ほど押して頂いて拡大して頂くと大丈夫かと。

？

> i 3 0 7 6 3 — 2 2 8 2 <

？

> i 3 0 7 6 4 — 2 2 8 2 <

休憩？

> i 3 1 1 5 5 — 3 9 1 4 <

あれ、ヴィトさんちよつと太った？でかくな・・・あいたたたた。
ごめんなさいごめんなさい。

・・・おや、誰かが来たようだ。

続きはwebで！

茶番劇にお付き合い下さりありがとうございました。これにて茶番
劇は終了とさせて頂きまあいたたたた。

詩羽たう様。

> i 3 1 0 1 2 — 3 9 5 1 <

隊長さんがとうとう朝っぱらから変態行為をヴィトさんにやらかしております。最高です。ぐっじよぶです。

ありがとうございます。妄想が膨らみます。お腹いっぱいです。にやにやが止まりません。

きつと毎朝こうなんですネ、わかります。

ヴィトさんは編み込みにくそうですが、隊長さんは凄く嬉しそうですねによりです。笑。

頭なでなでが私的にツボです。微笑ましい！羨ましい！

ありがとうございます！

休憩？

茶番劇はまだまだ続く様です。

> i 3 1 2 4 5 — 3 9 1 4 <

ぐわし。

おやおや、ヴィトさん掴まってしまいました。

かむ様。

> i 3 1 2 4 3 — 3 9 1 4 <

まるで本の表紙のような惚れ惚れするイラストでございます！

私の妄想内で本になったのは言うまでもありません。もちろん表紙衝動買いです。

隊長さんがかつこよくて目を合わせる事ができません！重症です。
にやにやと凝視していたらなんと！ヴィトさんの角が一本折れてる
と言う細かいお仕事を・・・！！ありがとうございます！私ですら
たまに忘れるのに・・・！
本当にありがとうございます！

休憩？

> i 3 1 2 4 7 — 3 9 1 4 <
なでなで。

かむ様。

> i 3 1 2 4 4 — 3 9 1 4 <

二枚目頂きましたひゃっほう。

ヴィトさんの一枚絵初めてなので凄く嬉しいです。お、大人っぽい・
・・！惚れそうです。隊長さんなんかやめて私にさせなごふつ。
髪とか目とか服とかの色の設定がそのままで本当に読んで下さって
るんだな、と泣いて喜んでます。

私ですらたまにわから（一言多い）

うう、こんなに立派な女の子になってお母さん嬉しいよ。かむ様あ
りがとうございます。

ちょこんとサウスが居るのも、か、可愛い・・・！持って帰ってい
いますか？え？だめ？も、もふもふしたい。

休憩？

＞i31399—3914＜
ひふき。

にらたま様。

＞i31339—3964＜

村娘ヴィトさんが可愛いすぎて動悸が激しい。

御伽話から出てきたかのような可愛い女の子に一目惚れですとも。

こ、こんな可愛い子がヴィトさんだと・・・！むしろヴィトさんでいて下さいお願いします。

これまた服のデザインが凝っていて細かい作業に感嘆します。素晴らしい。

綺麗な柔らかい雰囲気大好きです。好きすぎてやばいです・・・！うむむ、こんな可愛いヴィトさんが隊長さんの髪を頬張ってる姿を想像するだけでお腹いっぱいだ。

リスみたいに両頬膨らませてたんでしょうか。ああ、可愛い。

男まさりなはずのヴィトさんをこんなに可愛い女の子らしく描いて頂き、ありがとうございました！

え、男まさりはいらない・・・？

夜光虫様。

$$\begin{array}{r} > i \\ 3 \\ 1 \\ 3 \\ 8 \\ 7 \\ \hline 2 \\ 7 \\ 6 \\ 3 \\ < \end{array}$$

いやはや、なんてーか、凄いです。

「ドラゴンやん、チェロバス、これがドラゴンやで。とかげヴィトさんちやうで!!」

陰影の感じがともかつこいいます。・・・ ヴィトさんがたくましい・
・・・！翼！翼かつこい！鱗！鱗かつこい！全部かつこい！
か、かつこいぞーヴィトさん！」と、呼吸困難に陥ったり。

ダブルヴィトさん。

$$\begin{array}{r} > \\ \dot{1} \\ 3 \\ 1 \\ 3 \\ 8 \\ 4 \\ \hline 2 \\ 7 \\ 6 \\ 3 \\ < \end{array}$$

「人間バージョンのヴィトさんも、か、可愛らしく描いて頂けて本

望でございます・・・!!可愛い&頼れるヴィトさん好きだー!」
とPC前に愛の告白をしていたり。

などなど、はたから見たら変な行動をしている私のその場にいたかったと夜光虫様がおっしゃって下さっていますので、ちょっと夜光虫様の所へ逝ってきます。・・・え?だめ?

人間とドラゴンのヴィトさんが並ぶと、胸からこみ上げる何かがありますね!嬉しいです!

素敵すぎるイラストを描いて下さり、本当にありがとうございます!
た!

翠嘩様。

>i31428—3931<

ドラゴンヴィトさんを頂きました!

ほう、やっぱりドラゴンです!どこからどう見てもドラゴンです。
素晴らしい!

ああ、ヴィトさん、どうしてヴィトさんはそんなにドラゴンなの？
それは人喰いドラゴンだからさ！きゃー！ですね。わかります。
うーん、妄想が膨らんで仕方がない。
ヴィトさんのつぶらな赤い瞳が可愛らしいです。もうヴィトさん一
生ドラゴンでいいよ。私が許す。
本当にありがとうございます！

鳥越様。

>i31931—3942<

ごめんなさいヴィトさん許してくださいごめんなさいごめんなさい。
と土下座して平謝りしたくなるほどの迫力でございます。なんて素
晴らしいヴィトさん！あなおそろしや敵には絶対まわしたくない。

（真顔）

あの場面ですよ！あのシーン！

「生きて帰れると、思わないで」

はいそうですとも、生きて帰れませんっごふ。

ヴィトさんの笑みが嘲笑ってるかのような憫笑のような愉快そうな
笑顔がツボです！

ドラゴンヴィットさんもかつこいい・・・かつこよさにほいほいと付いていっちゃってがぶりと食べられるんですね、わかります。製作過程も素晴らしかったです！やっぱりイラストを描く人は違うな、凄いな、と感動でした。

気になる方はどうぞぼちりとイラストを押して鳥越様のみてみんなPへGO！

イラストを頂くたびににやにやと椅子の上でガッツポーズしてる私は変ですか。そうですか。

一枚の絵にするのって思うより大変だと思うんです。私も数年前美術の授業でポスターを描くのに先生からどれだけ駄目だし食らったか・・・え？ちょっと違う？まあいいじゃないですか。

だから絵を描ける方を尊敬しています。

わかりやすい綺麗な文章を書ける方も尊敬してます。

『ドラゴン・ライフ』のために時間をかけて描いて下さり、本当にありがとうございます。

もちろん宝物ファイル入りです。にやにや。

私は人間だった。名前は思い出せない。（前書き）

※ドラゴンが人間を食べる描写や少々グロテスクな表現がありますのでご注意下さい。それと主人公ですが喋り方など女々しくありません。

ドラゴンの解釈についてもかなりのアレンジしています。名前を考えるのが面倒だったので神話や物語から名前を借りました。そうぐらい考えろよ。

私は人間だった。名前は思い出せない。

皆さんはドラゴンと言えば何を連想するだろうか。

角が生えた頭に四本の足、長い蛇のような胴体、ぎざぎざの長い尻尾、コウモリのような翼、鋭い爪と歯を生やし口から火を吐く。そんなイメージではないだろうか。

私もそうだ。厳密に連想するとなれば今時のゲームや小説に登場するようなカッコいい姿のドラゴンを思い浮かべる。

時にはか弱い乙女を攫い悪になり、時には主人公の良きパートナーとして悪を倒す。はたまた神話では天と地を創ったり人間と交合してその種を残したとさえ言われている。

しかし現実、ドラゴンなんて存在しない。恐竜が跋扈していたとされる中生代のジュラ紀・白亜紀にはそれに類似した姿の生物が生きていたかもしれないが、その中で火を吹くなんてことをやってのける生物は一種類たりとていないだろう。

未開拓地が未だあった時代の生物学者はドラゴンが存在していると信じられていたらしいが、地球大陸のほぼ全てを網羅した現代ではドラゴンが想像・空想の生物だと今では誰もが知っている。そもそもドラゴンという概念はファンタジーそのもので、あらゆる物語に登場するドラゴンは人間が作り上げた存在して欲しい生物としてのひとつの象徴なのではないだろうかと私は思うわけで。

と少々語ってしまったかもしれないが、とにかく結論はひとつ。

”ドラゴン”なんて生物は存在しないということ。

品種改良されていつの日かそれに似た生物ができるかもしれないが、私達が想像する空想上のドラゴンは決して存在する事はないのだ。

しかし、しかしだ。それを崩すかのような出来事が今まさに起こっ

ている。

いったい何が起こったんだ。

私が異変に気付いたのはとても遅かった。

どのくらい遅いかと言えば人をひとり、それもまだ若い村娘をおいしく食した後だった。

貴族出身でもないただの村娘にしては魔力がとても豊富で、特に地の精霊に好かれていたようでかなりの美味だった。満足満腹けぷつ、と喉を鳴らす。

——いやいやちょっと待って。おいしかったとかそう言うんじゃない。

しかし今し方食べたのはまぎれもなく私の同族である人間だ。脅えて泣き叫ぶ表情、口の中で噛みしめたあの肉の食感と血の味。そして恍惚するほどの魔力が溢れ私はそれを貪るように”食した”。本当においしかった。私は口元についた血を長い舌で舐めとる。今まで食べてきた人間の中で——って待て!?

今絶対に変だ!! 私は人間を食べていない! そんな記憶全くない! ！今まで生きてきた私の人生の中で人間なんてももの食べた事はないしそんなカニバリズムな趣味も無い! そんなものは映画か何かで十分だ!!

——ああでも、本当にとろけるほどおいし・・・あれ?

考えれば考えるほど自分の思考が”人間はおいしい”にたどりついてしまう。もっと厳密にいうならば”魔力が豊富な人間はおいしい”だ。

おかしい。自分は人間のはずだ。そして人間は食べない。食べたら人間として何か終わったような気がするし食べるなんてそんな気持ち悪・・・いやおいしそうな行為・・・いやいやだから待て。私待て。お願いだから待って!!

わたしは　こんらん　している。

まるで私の脳と人間はおいしいという脳がぐちゃぐちゃにかき回されてしまったようだ。

人間は食べたくない、おいしくない、という思いに重なって人間を食べたい、おいしいという思いが存在して、その矛盾に戸惑う。

一体私の脳みそはどうなってしまったのだろうか、発酵でもしてただのみそになってしまったのだろうか。

取りあえず落ち着こうと辺りを見渡しているとどうやらここは森の中のようなだ。

いつのまに森の中に来たんだろう。私が住んでいるのは確かに田舎だけど、こんな森らしい森は無いはず。

不思議に首をかしげているとかさかさとした音がすぐ近くから聞こえてきた。

『ヴィトお、どったのお？ニンゲンまずかったあ？』

ひょっこりと草むらから出てきたのは真っ白な兎だった。なんと言葉喋っている！！一時期流行ったアンゴラ兎だろうか、長い毛をぴよこぴよこと跳ねさせながらこちらに駆け寄ってくる。夏には近寄りたくない毛の塊りだが、今は少し肌寒い季節なので是非ともそのふかふかの毛を膝の上に乗せて撫でまわしたい。

それにしても兎って喋るものだっただろうか。不思議の国じゃあるまいし。

『ヴィト？』

『ああ、ごめん。村娘にしてはとてもおいしかったよ。ありがとうサウス』

すんなりと出た言葉に自分自身で驚いた。少年声の兎は嬉しそうにきゅいきゅい笑う。なんだその可愛い鳴き声は！けしからん！いますぐ私の膝の上に乗せてもふもふ——なんて考えてる場合では無かった。

私はこの兎を知っているのだろうか？

ううむ、と考えてみるとどうも心あたりがある。確か初めて会った

のは数年前でサウスが狼の群れに襲われていた所を助けたんだっけ。そうそう、その時から懷かれて、度々こうして食事の世話をして貰ってる。そんな記憶はあるのにどうも体験した覚えがない。

『よかったあ！きょうのニンゲンはね、けーかいしなかったからカンタンだったよ！もつとほめてえ』

いかん、もふもふしたい。ほめる！いくらでもほめるから今すぐ私の膝の上に乗せてもふもふ——取りあえず邪念を払おう。

つまり、サウスがああ村娘を私の所まで連れてきて、私がそれを食べたと。

・・・可愛い顔してやるじゃないかこの兎。

『どったの？ヴィトなんかヘンだよ？』

『・・・ねえ、私って人間だよ？なんで人間・・・その、食べてるの？』

聞いていいのかわからないが、聞くひと（兎）がサウスしかない。自分でも変な事を聞いていると思うが、動物界後生動物亜界脊索動物門羊膜亜門哺乳綱真獸亜綱正獸下綱霊長目真猿亜目狭鼻猿下目ヒト上科ヒト科ヒト下科ホモ属サピエンス種サピエンス亜種に属するホモサピエンスとして疑問に思わずにはいられないのだ。

サウスは首をこてんと傾けまんまるい赤い瞳で私を見上げる。

——兎ってこんなに小さかったけ。

まるで一軒家の屋根の上から見下ろしているようだ。

サウスの隣に手をついている私の腕もいつもより太いような。あらやだ太った？鱗もてかってるし。

おおっと、三本の鋭い爪でサウスに傷を付けないように気をつけないくちやいけないな・・・

——・・・え？

私は自分の腕をガン見した。

太いどころかどうみても鱗に覆われた腕です。しかも三本の指しかないってどういうこと。鋭い爪って？そう言えば、さっきから視界の端にある白くてカーテン状のものは——翼、ですか？

そして思考回路が止まってしまった私にさらに追い打ちを掛けるようなサウスの爆弾投下である。

『なにいつてるのー？ ヴィトはドラゴンでしょー？ しろくて、おおきくて、やさしいドラゴン!!』

「・・・え？」

”どらごん”？

いったいなにが起こった。

私は人間だった。名前は思い出せない。（後書き）

動物界後生動物亜界脊索動物門羊膜亜門哺乳綱真獸亜綱正獸下綱霊
長目真猿亜目狭鼻猿下目ヒト上科ヒト科ヒト下科ホモ属サピエンス
種サピエンス亜種（wiki参考）

兎は可愛い。可愛いは正義。正義は兎。

私は人間だ。

それは紛れもない事実である。

でも、何も思いだせない。お父さんやお母さん、友達もいたはずなのに、自分の姿、名前さえ思い出せない。

人間としての断片的な記憶はあるのに人間としての確固たる証拠がないのだ。

それらに加えて今はドラゴンの姿をしているため説得力がない。しかも体験したことのないドラゴンとしての記憶や幾らかの知識もある。

なんていうか、まるでドラゴンにそのまま人間の私が入りこんでしまったようだ。

なんて憑依。

そして驚くほど冷静な自分に戸惑いを隠せない。

『ヴィトだいじょーぶ？』

きゅいきゅい言いながら心配・・・考えてみればサウスは言葉を喋っていないな。きゅいきゅい鳴いているのは聞こえるのだが、それが脳内で一番慣れ親しんでいる”日本語”に変換されているようなのだ。

ああ、そういえば私は日本人だったと思います。しかし何処に住んでいたかは思い出せない。

もどかしい。

”ヴィト”というのは私の名前らしい。記憶を探ってみるとどうやら私が産まれた時から引きこもっているここヴィザンヌ山の名前か

らとったのを思い出す。ちなみに出会ったばかりの頃のサウスが名前がないという私に名付けたのだ。

ドラゴンって名前付けられるとやばいんじゃないかって。その、主従関係とか服従とかなんかの物語で読んだけど。サウスに聞いてみると『なにそれ』だそう。取りあえず名前を付けられるのになんの支障はないらしい。ああ安心した。生涯のツレがこんな小さい兎だったらうっかり潰してしまいそうで怖いよ。・・・いやでも可愛いかからそれもありかも。

いかん。今はそれどころじゃなかったんだ。

『サウス、少し聞きたい事があるんだけど』

『さっきからきいてるよー？ へんなことばかり』

取りあえず視線を少しでも合わせるために寝そべる。頭を地面すれすれに降ろすとサウスの姿が良く見えた。長い毛からちらちらと覗く赤い木の実のような瞳と視線が合う。

『私は、ドラゴンなんだね？』

『うん』

『名前はヴィト。産まれた時からこの山に住んでいて、人間を食べ生きてる』

『セイカクにはーマリヨクなんだよねー』

『魔力？・・・ここには魔法があるの？』

そう言えばさっき食べた村娘は魔力が豊富だったから美味しかったとか思ってたっけ。

『あるよーといってもほとんどニンゲンしかもってないけどね！それもね、セイレイにいったいカゴされたニンゲンしかマホウはつかえないんだよ！』

『精霊の加護？それは地の精霊とか？』

『うん！ミズとかヒとかカゼとか、ほかにもいっぱいー！』

なんてファンタジー。魔法とか夢じゃないですか。わくわくしちゃいますよ。

『魔法の使い方って？』

『うーん、そこまではわかんないよ。だってボクただのウサギだし。マリヨクないし』

そうか、ただのウサギか。マリヨクないか。うん、可愛いから許す。人間しか魔法を使えないと言う事に落ち込んだが、私ってばその魔力を糧に生きてるんじゃない。もしかしたら使えるかも。

そんなことをサウスに言う。わかんないと言っていつの間にか草をむぐむぐ頬張っていた。

何だこの生き物は！可愛すぎる！手が！私に人間の手があったらいますぐわしゃわしゃとしてやるのに！！

ああ憎たらしい！！ドラゴンの手が憎たらしい！

悔しいので顎でサウスの頭に触れるのを試みるとぎゅむ、と少し潰れたような声が顎下から聞こえた。しまった力の加減がわからん。

『おもしろいよ』

ごめん。

しばらくドラゴンとして生活していると様々な事を思い知らされる。川で自分の姿を見た時なんて驚いた驚いた。真っ白いドラゴンの姿が水面に揺れていたのだ。瞳はサウスのような真っ赤な瞳でまるで大きな蛇のようだとも思った。でも気持ち悪いとは感じない。

一番戸惑ったのが食事である。

どうやら私は人間を食べその人間の魔力で生きているらしい。

それもいつもわずかな魔力しかもっていない人間を襲って食べているため、満腹になるには3人ほど食べなくてはいけない。それも一ヶ月に一度は必須だ。

サウスが人間を私の所まで誘導してくれるため食料には困らなかったが、脅えた表情の人間を食べるのは少し気が引ける。だが口にし

てしまえばドラゴンとしての本能なのか何の抵抗もなくぺろりと平らげてしまう。服ごとむしゃむしゃ。人間だけの私だったらB級ホラー顔負けのグロテスクさに気分が悪くなるどころか吐いて気絶している所だろう。

食べなくて済む方法はないか考えてみたが、血だけ啜るのももったいないし結局は二口三口で全部食べてしまう。

この人にも家族や恋人いるんだろうなあと思いつながら遠慮なくぱりぱりむしゃむしゃ食べる姿は滑稽と言えるだろう。仕方ない、私も人間と同じように生きてるんだ。生きる為には他の生物の命を犠牲にせにゃならん。これも立派な食物連鎖だ。いずれ私が死んで土の栄養分となるだろう。

それに自分の食事以外の無駄な殺生はしていない。ひとりで自己完結すると口の周りについた血を舐める。

今回の人間は魔力の量はそこそこだったが質が悪い。あれだ、賞味期限切れのプリンを食べてしまったような感覚だ。

お腹壊さないといいけど。

人間を食べ終わり、近くでふぐふぐと草を頬張っているサウスを微笑ましく見ていると視線に気付いたのかこちらを振り向いた。

『おわったー？』

『終わったよ。それと約束してた山の頂上まで行こうか』

『ほんと！？やったあ、あそこのクサおいしいんだもんー！たいよーのヒカリにあたってあったかいのー！』

ぴよこんとどび跳ねながら手にすり寄ってくる。可愛いなあ。

踏みつぶさないように寝そべると今度は頬にすり寄ってくる。体毛のない鱗で覆われた皮膚だが、サウスの暖かい温もりは伝わってくる。

ドラゴンとして半年ほど山で過ごしているが、この生活に順応した自分に驚きながらも特に不自由と感じたことは無かった。本当は夢

なんじゃないかと時々人間の記憶が断片的に思い出されるが、ドラゴンとしての生活に支障は出ない。むしろ記憶の割合でいうとドラゴン…人間Ⅱ8…2だ。

そしてなによりサウスがいるから心強い。傍から見たらただの小さな兎だが、私にとってはこの世界でのたったひとりの友人である。他にもドラゴンがいるとは聞くがこの山には私しかないように、他には熊や鹿など一般的な野生動物しかない。しかも私を見るだけで脱兎のごとく逃げてしまう。少し悲しい。動物は食べないんだけどな。

脱兎と言えば兎のサウスだが、この子は別。

突然『自分は人間か?』と聞いたり、変なところでこの世界での記憶が飛んでいる私を気持ち悪がりもせず知っている限りの知識を教えてくれる。

最近では様子のおかしい私を心配してか巢には戻らず私の洞穴で一緒に寝てくれる。

優しい兎だ。

ううむ。やはり頂上からの眺めは絶景だな。

私が住んでいるヴィザンヌ山はこの辺りで一番大きく、辺りを一望できる山だ。平らで木々に覆われているのが特徴である。

山のふもとの森付近には小さな村がいくつかありもっと向こうには大きな街がある。街から小さな山をひとつ越えたもっと向こうには立派な城が建っている国のようなものが見える。飛んで1、2時間の距離だが人間の足では何週間もかかるだろう。

一度高く飛んで陸地の形を見た事があるが、C文字のようなひとつの大きな大陸だった。中央部が中側に膨らんでおり下方にいくにつ

れ細くなっている。勾玉か、まるで胎児が丸くなっているような形の大陸だ。ヴィザンヌ山はこの大陸の丁度中央部に位置している。私が知っている”地球”の地形はこんな形状をしていない。それどころかドラゴンという生物は生きていないし、いつ空を見ても飛行機のひとつも飛んでいない。時々飛んでいるものを見るが私とは違う不思議な形をしたドラゴンだ。背には人が乗っており大軍をひきつれ、まるでどこかに戦争をしに行くような様子だったな。

どこに行くのだろうと疑問になって気付かれないように後を付けてみたことがあるが、やはり戦争だった。ドラゴンは野生のものだとばかり思っていたが人に従っているドラゴンもいるようだ。サウスに聞くとそれはほとんど”ファイアドレーク”と言う種類だそうだ。他にもペットにされている小さなドラゴンもいるようで世界は知らないことだらけである。

これらが私が人間の頃住んでいた世界とは別世界だと決定づけた理由だった。

色々考えたがこの世界は私が住んでいた世界とは全く別で、そもそも私が住んでいた世界すら本当にあったのかさえ今でははっきりしない。ドラゴンとしての自分の方が自我として確立しているのか、人間の記憶は予備知識のような形でおさまってしまった。未だに自分の名前すら思い出せないのだ、この記憶が本物かどうかさえ怪しい。

取りあえず今の私にはドラゴンとして生きる術しかないのだろう。

私が思想に浸っている一方、サウスはと言いうと草を一心不乱に頬張っている。

草の味は私にはわからないが、兎のサウスにとってこの草は質の高い魔力が豊富な人間のように美味なのだろう。例えば変だが要はそうだ。

私は柔らかい草の上に寝そべり昼寝でもして待つことにする。

サウスはこうみえて大食いなのだ。放っておいたらその辺り一面の草を食べつくしてしまう。小さな身体のどこに入るんだか。暖かい太陽の温もりが眠気を誘う。私はゆっくりと瞼を閉じた。

世話好きな渡り鳥と心配性な一匹狼。

『サウスー？サウス？・・・いったいどこに行ったのやら』

いつの間にかいなくなってしまうた友人の兎を探す。

そんなに遠くには行っていないはずなのだが、このあたりは兎の天敵である狼の群れがたまに姿を見せるため早く探し出さないと食べられてしまうかもしれない。

飛んで探しても良いが、何せサウスはとても小さな兎だ。それに木が邪魔をして見にくい。地道に歩いて探すしかない。

森の中にサウスの好きな草がある場所の辺りを探しているんだが、他の野生動物もたくさんいるため私を見る度に動物達は逃げだして行く。

うう、お母さんは寂しいよ。サウスよはよ出てきておくれ・・・本当にどこに行ったんだか。

と、近くの繁みがガサガサと蠢く。

『サウス？』

サウスかと思ったが繁みの揺れがいつもより大きい。熊か何かだろうか？・・・どっちにしろ私の姿を見れば逃げてしまうだろう。

目を凝らして繁みを見ていると、それは出てきた。

狼だ。

『きゃ—————！！』

何とも女々しい叫び声を上げる狼だ。

おかしいな。この辺に出没する狼じゃない。毛並みが違う。他の狼は知らないがこの狼は灰色がかった毛並みである。

しかし今日の前で目を見開いて恐怖でぶるぶると震えている狼は、驚くほどに真っ白だった。それも私の姿のように。間違って漂白しちゃいましたと言わんばかりの。

『わわわわたしたべてもおいしくありませんよお！！？？まずいです

う！！腐ったケボの実ぐらいますう！！』

いや逃げろよ。普通ドラゴンの姿を目に留めたならば一目散に逃げに行くもののだが、この白い狼は逃げるどころか尻尾を丸めて地面に這いつくばりおいしくないの連呼である。正直、どうしたらいいかわからない。

『おいしくないですよ！おなか壊すだけですー！ラウにも言われましたもん！お前はまずそうだって！！だからまずいんですよー！！』

『・・・食べないけど』

『ですよね！食べないですよね！まずいんですもん！！・・・ふへ？』

『私には狼を食べる趣味はないよ。私の主食は人間だから』

脅えきった狼の視線を合わせるように首を曲げて地面に降ろす。びくりと狼は這いつくばった状態から飛び起きて後退った。なんだか可哀想なぐらい脅えてるぞ。これ私のせいかな？そうなのか？

人間ならまだしも、食べない動物に脅えられるのは少し落ち込む。

話せばサウスのように仲良くなれるかなーって思ってるんだけど。

『た、食べないんですか・・・？』

『食べないよ』

狼は不思議そうな顔をして私を見上げる。

『で、でもドラゴンは兇暴で、何でも食べるってラウが・・・』

『そのラウってのが誰だか知らないし他のドラゴンのことはわからないけど、少なくとも私は食べないから』

安心してくれないかな、となるべく優しく言っただけだが、なにせ自分はドラゴンである。私の脳内では日本語変換されていても実際はただの唸り声になってしまう。つまり、こうだ。

「くうん、くうーん・・・」

「グルルルグル　ガアグル」

うん、こりゃ怖い。いつもこんな感じでサウスとも喋ってたのか。今度から気持ち高い声で唸るか。少しはマシになるかもしれない。

しかし今日の前の事態にどうしたものかと首をひねっていると、突然サウスの叫び声が聞こえてきて驚いた。

『ヴィトお——！！！！』

繁みから飛び出してきたサウスは私の前足に隠れると脅えた様子で泣きつく。

どうしたの、と問う前にサウスが飛び出してきた繁みから、今度は何やら黒いものが飛び込んでくる。大きな鳥だ。それも普通の鳥よりも一回り大きい。

『ちょこまかちょこまかと逃げるなあー！！・・・ん？』

突っ込んできた鳥は私の姿を見ると驚いた表情になる。地面降り立って翼をしまうと今度は狼がその鳥に泣きついた。

『ら、ラウ！一体どこにいたんですかぁ！！怖かったんですからね！！』

狼に体当たりされるかと思ったがひらりと回避。やるなこの鳥。

『なんだ？お前いたのか』

『い、いたのかって酷いです！！ここで待ってろっていったのはラウですよ！？わ、わたしずっと待ってたのに、ラウ帰ってこないし、ど、ドラゴンだって現れるし！！』

や、だから私食べないって。

『お前のために兎捕ってきてやってるんだから文句言うな。ひとりじゃ狩りもまともにできないくせに』

『うう、そうですけど・・・』

何だと！サウスを食べようとしていたのか！それは許せん。

サウスは未だ脅えた様子で縮こまっている。安心させるように優しく（最近ようやく加減がわかってきた）顎で頭を撫でた。いかん、きゅいきゅい鳴いてて可愛いぞ。

それを見ていた鳥が私に話しかけてくる。

『それにしても、そのドラゴン。あんた他のドラゴンと違うようだけど・・・何モンだ？』

『そう言う貴方達こそ何かな。私の大事な友人を食べようとしてた

だって？』

『友人？その兎が？』

烏と狼は驚いたのだろう目を丸くさせて私を見ている。

友人で悪いか。サウスは可愛いんだぞ。可愛いは正義だ。

しかしここで張り合ってもどうにもならないだろう。

『私はこの山に住んでいるヴィトと言う。貴方達は見かけない顔だけれどどこからきたの？』

『・・・ここからずっと遠い、北の土地からだ』

『2匹で旅を？』

『悪いか』

悪くないけど、群れで行動するはずの彼らが種族の違う相棒と一緒に旅をしているのはとても珍しい。旅はしていないけれどまるで私とサウスのようなじゃないか。

一方は真つ白な狼、一方は体格の大きな烏。アンバランスなコンビだがなぜかしつくりくるものがある。種族の違う2匹が旅をしなくてはいけない何かがあるのか。彼らの姿を一目見れば納得するものがある。

『何か訳有りみたいだね』

烏は押し黙る。言いたくない事なのだろう。

『ああ、聞いているわけじゃないから言わなくて良いよ。ただ珍しい組み合わせだし、北から来るとあるとあの大きな川を渡らなくちゃいけないよね。そこまでしてここまで来たのは大変だったんだろうなって』

一度山の頂上から大陸を見渡したことがあるが、中央部に位置すること北の土地の間には大きな川が流れていたのだ。橋は架けられていたがそれは人間が架けたもので嚴重に警備がされてあった。ただの野生動物が、橋を渡ることはおろかあの大きな川を泳いでくるのも大変だろう。

『あ、あのですね。ラウは飛べるから、運んでくれたんです』

おどおどと挙動不審だった狼が口を挟む。未だ私の事を警戒してい

るというか脅えているのだろうか、烏と普通に話しているのを見て少しは警戒を解いてくれたのだろう。うん、嬉しい。

それにしても運んだのか。確かに烏はその狼よりも幾分大きい。小さなドラゴンと言っても過言ではない程の大きさだ。

だがそれでも大変だっただろう。自分より小さくとも重量はあるからな。

『シロ、余計な事を言うな』

『ご、ごめんなさい』

狼はシロと言うらしい。外見からして納得するがあまりにも安易な名前なためおもしろい。

なんだか狼が犬に見えてくる。

烏がラウ、狼がシロ。物覚えの悪い私でも簡単に覚えられそうだ。

『ヴィトお・・・』

か細い声が下の方から聞こえる。不安そうな瞳の色で見上げてくるサウスはきゅい、と鼻を鳴らした。

そうだった。ラウはサウスを追いかけてここにやってきたのだ。

『大丈夫だよサウス』

そして2匹に向き直る。

『悪いけど餌なら他をあたって欲しいな。貴方も2匹で旅をしているのなら、大切な友人が餌として食われるのをただ見ているだけなんてできないだろう？』

『・・・確かにそのとおりだ。だが仮にも捕食側であるドラゴンのお前が兎を匿うのはどう言う訳だ？』

ドラゴンと言うのはそんなに凶暴なイメージなのだろうか。彼らの態度を見る限りそうとは思えない。

『こ、このドラゴン、動物は食べないんだって』

確かに人間しか食べないね、と補足するとラウは大きく目を見開く。白目のない真っ黒な瞳はサウスに負けないぐらいつぶらだった事は心の内に秘めておこう。

『人間しか食べないだど？・・・あんたもしかして”アースドラゴ

ン”か？』

『なにそれ』

『人間が名付けたドラゴンの一種だ』

ぶつぶつとラウは何か考え込んでいる。

”アースドラゴン”聞き覚えがある。

確か人間の記憶だ。私が住んでいた地球の数多くある一つの名前は。良く覚えていないけれど、地球は宇宙に浮かんでいるし、火山は火を吐く。また山が背骨にみえたり、大陸が大きく翼を広げたドラゴンの姿に見えると誰かが呼び始めた名らしい。昔読んだ本にそんな感じで書かれていた。

その時はロマンだなあなんて思いながら読んでたな。まさかこんな事が起きるとは思わなかったわけで。

『大陸中には様々な種類のドラゴンが生息しているのは知っているよな？』

『名前は知らないけれど』

『そいつらに名前をつけたのが人間だ。一般的に知られているドラゴンと言うのはそれらの総称』

要するにドラゴン科アースドラゴン属みたいな感じですか。ドラゴンってそんなにたくさんいるの。

『ドラゴンと言えば鱗があり、火を吐き、空を飛ぶものだよね』

そう言うトラウは呆れたように大きなため息をついた。

『・・・まいったな。こんなに世間知らずなアースドラゴンがいるのか』

『違うの？』

『この大陸に生息しているドラゴンという生物は火どころか空さえ飛べない種もいるのが当たり前なんだ。一般的なドラゴンで一番数の多いのはワームだな。次に人間が手懐けているファイアドレーク。ワイバーンは一応空は飛べるが長時間は飛べなしバシリクスは飛ぶことすらできない、ああ、ワームも飛べないものもあるな。他にも死体を食ったり獲物を横取りしたりするニーズヘッグなんてのもい

る。とにかく様々な種類のドラゴンがいるが、その中でもとりわけ珍しく、しかもある国の人間の中で”伝説”とも称されるドラゴンが”アースドラゴン”だ』

おや。聞いた事のあるような名前だらけだ。これも脳内変換機能のせいだろうか。なるほど、ドラゴンの種類なんてあっちの世界にはなかったからどうしても神話や物語の存在上の名前になってしまうのか。どういう基準かわからないが。なんだか新鮮だ。

『従来のドラゴンとは一風変わった存在だな。お前が思っているような鱗があり、火を吐き、空を飛ぶドラゴンだ。伝説と称されている程の絶滅危惧種のようなドラゴンだが、決して絶滅危惧ではない理由は数が少数にもかかわらず数千年、数万年も前から存在しているとされるからだ。獰猛で人間が好物らしい。動物は一切食べないと言われている』

私は人間しか食べない。それも魔力でしか生きていない。ほかのドラゴンがどうかは知らないが、少なくとも私のように好き好んで人間ばかりを食べている種はいないらしい。

『・・・それが、私だと』

『さあな。人間の言うことだから詳しい事はわからない。だが数千年前から人間同士の争いにとてつもない力を持ったドラゴンが何度か介入した、という噂は俺らの間にも広まっている。人間のやる事にや興味ねえが』

話す事に飽きたのかラウは大きな翼を羽ばたかせ近くの木の枝に止まる。地面よりも木の枝の方が留まりやすいのだろう。

『随分、物知りなんだね』

『随分、旅をしてきたからな』

人間が居る所もうろろしてきたんだ。嫌でもそういう噂や一般常識が入ってくるさ、と羽の毛繕いをしながら答える。

『そして随分、説明してくれる』

おかげでドラゴンの事が少しわかった。ありがとうと素直にお礼を述べると『そんなつもりで言ったんじゃない』と。ツンデレですね。

わかります。

『ラウは優しいんですよ！困った動物がいたら見逃せないんです。狩り下手な私にいつも餌をとってきてくれるし』

『肉食獣のくせして果物しか食べねえお前が悪いんだろ』
なにそのヘタレ。

『だ、だって可哀想なんですもん！』

『だから他の狼にもバカにされるんだろうが！せっかく仕留めて来ても結局は泣いて謝って終わりだなんて狼が廃れるぜ』

なにそれ可愛い。もしかして2匹で旅をしてる理由ってシロが狼の群れから追い出されたからか？そして世話好きなラウが『しかたねえな俺が付いて行ってやるよ』的な展開になったからなのか？そうなのか？いかん、顔がにやける。夫婦すぎるこの2匹。なんて痴話喧嘩なんだろう。

『・・・ヴィト』

『ごめんね、怖かったよね。でも彼らは悪い動物じゃなさそうだよ。だから許してあげよう？』

戸惑いながらも頷くサウスに私の心はきゅいきゅいです。

しかしいつまでたっても痴話喧嘩は終わらない。多少は微笑ましいがいつまでもこうだと日が沈んでしまう。何度か話しかけたが気づかないらしい。

仕方ないと私の大きな身体を二人の間に滑り込ませて強制的に話を終わらせる。行き成り現れた私に2匹の顔はきよんとしていて、次に放った私の言葉にもっときよんとさせた。

『お腹空いてない？』

変な通り名が付いた。止めてくれ。

ヴィザンヌ山の奥深く、人間が到底たどり着きそうにない所に私の住処はある。あると言っても自然にできた洞窟なのだが、いい感じで吹き抜けになっているので風通しがよく気に入っていた。そこから遠くない離れた所に泉があり、水が澄んでいるせいなのか泉の周りには果物の実がたくさんなっている。

ユニコーンでも居ればまるで幻想的な景色になりそうだ、いつも思う。

そういやラウに聞いたんだけどユニコーンって存在するらしい。どこかの国が聖獣として世話をしているそう。

一度会ってみたいものだが純真な乙女のイメージが強いため私には無理そう。

人間の記憶は確かに女のものだがなにせ今はドラゴン。雌だとしてもドラゴンの姿じゃ到底に会う事は適わないだろう。

2匹の痴話喧嘩を終わらせてお腹が減っただろうとこの場所へ案内した。

シロは目を輝かせながら果物を頬張っており、ラウは興味なさそうに口ばしで突いていたが視線はいつもシロに向いていた。

サウスは最初のうちは警戒しきっていたが、次第にシロと仲良くなり一緒に泉の周りを駆け回るようにもなった。

その間に物知りなラウにこの世界の事を聞くことができ私は満足だ。

ラウは本当に何でも知っていた。

この大陸の名前がバルトリア大陸である事や、国同士の事情なんてものも詳しくあった。

ここから一番近い国はアルヴィナ国で北のティルゾート国と仲が悪いらしい。数十年前の戦争でアルヴィナ国が勝利してからは表向きに良好な関係が続いているようにも思われているがずっと昔から争いが絶えず、その度に戦争をし最近でもまた小規模な戦を始めたらしい。二国の大規模な戦争は100年前に起こっており、しかもその戦いにアースドラゴンが加わっていたそうだ。アースドラゴンを聖獣としている国はそのアルヴィナ国で、ユニコーンはティルゾート国、他にも国によって聖獣があるらしく信仰の違いみたいなやつだろう。

そもそもアースドラゴンというものはあるひとりの人間と契約する事ができるらしい。しかしその契約も極まれで、歴史上で知られている中ではたった4匹のドラゴンしか人間に従わなかったそうなの。他のドラゴンに比べて気性が激しく獰猛だと聞いたが、どうも自分には人間の記憶があるせいかそうはならなかったみたいだ。あれか、人間としての理性があるからか。人間の理性で人間を食うってどんなだよと突っ込みたくなるがそこはあえて目を瞑ろう。今はドラゴンとして人間を食さねば生きてはいけないのだから。

しかし本当に不思議な光景だ。

食べられるはずの兎が狼と戯れそれを烏とドラゴンが見守っているだなんて。我ながら滑稽すぎる。

2匹は暫くこの山に滞在した。シロの好きな果物も豊富で彼らにとつての危険が無い比較的安全な場所だったからだ。

一度ラウとシロに人間を食べている所を見られたりもしたが特に何も無かった。シロにいたっては『凄いですね尊敬します!』だ。動物意外だったら可哀想じゃないのか。人間だったら良いのか。まあ確かに彼らにとつて人間よりも動物の方が身近な存在だ。人間なんてただのかい害虫にしか見えてないかもしれない。なんていい過ぎたか。

数ヶ月ほど過ぎた頃にとんでもない事が判明した。

人里付近に下りていたラウが面白い話を盗み聞いてきたぜと笑いを堪えながら帰ってきた。

『ヴィト、噂になってんぞ』

噂? 何の事だろうと首を傾げると。

『このヴィザンヌ山には”人喰いドラゴン”がいるらしい。それもとてつもなく凶暴で山の三分の一程の巨体に血走った目、鋭いぎざぎざの牙で串刺しにして食べるんだそう。山に入った村人や旅人が消えてしまうのはその凶暴なドラゴンに食われてしまったからだ』

間違っていないけど。・・・間違っていないけど、間違ってる。山の三分の一ってどんだけかいんだよ。血走った目って、確かに赤い目だけどそんなに血走ってる? ねえ血走ってる? 継り付く様にサウスに聞くと『ハウセキみたいできれいなメだよー』とほにゃんと笑って言うてくれた。なんて出来た子なんだ! お母さんは嬉しいぞ!

『しかも行方不明者が続出したもんで、国が雇った討伐隊が派遣されるそう』

『それって危険じゃないですかっ!』

『国直属の討伐隊よりマシだろう。金目当ての寄せ集め集団なんだから。あんただったらそう易々と死にやしないだろう?』

『え? 無理』

即答だよ。まさか自分を倒すための討伐隊が結成されてたなんて。寄せ集めの集団? それって今までの無力な人間じゃなくて武器とか

持って「さあ今からドラゴン退治にいくぜえ!!」のような人ばかりなんでしょ? そんな人間相手にした事がないから正直不安だ。

『火のひとつ吹きやあ全滅するだろうが』

『そんな火吹いたこと無いんだよ』

寒い夜の暖をとるために小さい火を吹いたことはあるが、何人もを相手にするような火は吹いたことがない。

『それにそんな事したら山火事になってしまう。一体誰がその火を消すの?』

『水の精霊とかですか?』

『バカかシロ。精霊つうもんは人間にしか協力しねえんだよ』

『え? そうなの? どうして?』

『そりゃ精霊は人間が創ったもんだからさ。信仰心と言うやつか? ずっと昔から精霊という存在が人間の中で信じられていて、それが本物になったらしいんだと。だから精霊は人間には答えるが俺ら動物には答えない。その代わり俺らには大樹の加護がついてるけどな』
信仰心と言うものは凄いな。人間は神も創り上げるだけでなく、精霊も創るのか。万能だなあ。

ちよつと待てよ。じゃあその魔力の源である精霊を餌としてる私って何だろう。

・・・疑問に思ったがややこしくなりそうだから考えることを止めた。

『その大樹って?』

『この世界の根本的な存在だ』

『ボクきいたことあるーここよりずっとおくのモリのなかにね、いるんだって』

『生きとし生けるもの全てを見守る存在。この世界の理屈や真理で世界が滅びないために干渉しているそうだ』

難しすぎる。考えるのを止めにしたい。

『これも言い伝えて正確かどうかは俺だってはっきりしねえ。それよりあんたは討伐隊の方を気にした方がいいんじゃないか?』

ああ忘れてた！！疑問に思う事はすぐ聞いてしまうから話が脱線しやすいんだ。

『その討伐隊っていつ来るか言ってた？』

『今夜だそうだ』

『そっか、今夜か・・・ってええ！？今夜！？』

『眠った所をどかーん！ぐさっ！だそうだ』

夜襲か。人間の考えらしい。

もう日が沈んでいる頃だから夜まで時間はあまりないな。

『仕方ないな・・・サウス、今日は自分の巣に戻って。ラウとシロもなるべく私に近づかないように』

『ええー！？でも、ヴィトあぶないよ！』

『大丈夫、考えはある』

向こうが夜襲をしかけるって言うのならこっちは山のふもとにある森の入り口で奇襲してやる。まさか「さあこれからドラゴン退治だ！」と意気込んですぐのところでドラゴンに遭遇するとは思わないだろう。

討伐隊の人数がどのくらいかわからないがあまり多くない事を祈ろう。

森の入り口付近で隠れる場所を探すのは至難だった。なにせ私はサウスやシロのように真っ白い身体をしているのだ。それがアースドラゴンの特徴だとラウに聞いたが、奇襲するこんな時は黒い色がありがたい。今度から泥でも塗りつけようか。

とにかく何とか隠れ場所を探し出してそこで息を潜めていると、数十分もしないうちに松明の灯が遠くから現れた。

———本当に来た。

ラウを疑っていたのではないが本当に現れるとため息をつきたくな
った。無益な殺生は好まないがこれは正当防衛だ、致し方ない。

それはだんだん近づいてきて大きくなりそれと同時に人間の輪郭も
見えてきた。人数からして5、6人だろうか。さほど多くないので
安心した。

だが相手は私を退治するのが目的の武器を持った人間だ。油断はで
きない。

私は目の前を全員が通り過ぎるのを見計らって、最後の人間だけを
隠れている茂みに引きずり込む。悲鳴を上げる前に頭からばくりと
食らい付いた。

——あんまりおいしくない。

「お、おい？ ガンがいねえぞ」

仲間が一人居なくなっただけに気づいたのだろう彼らに動揺が走る。
私は頭だけを食べた体を彼らの前に放り投げた。

「ぎゃあ！」 「ガン！」 「う、嘘だろ！！？」 「悲鳴が聞こえそれぞ
れが武器を構える。」

「ど、ドラゴンだ！！ 人喰いドラゴンがいるぞ！ 気をつけろ！！」
思ってたけど”人喰いドラゴン”ってそのまんまだよね。

私は茂みから出ると息を吸って咆哮をあげる。地鳴りを響かせるよ
うに轟いた雄叫びは聞いたところによると山奥に避難してたサウスの
元まで聞こえていたそう。

練習しといてよかった。

迫力に押されたのか、討伐隊の人間は苦渋の表情をしながらも切り
かかってくる。

「く、くそおおおおおっ！！！」

「かかれえっ！！」

剣が私の鱗に到達する前に私は火を吹いた。上手くできるかどうか
わからなかったが先ほどのように息を吸い込んで思いっきり吐く。
この時に喉元の奥に火を吐く元となる器官があるのだがこれを意識
しながらやると思いのほか上手く火が吐けた。襲い掛かってきた2

人の人間が悲鳴をあげるまもなく丸焦げになる。

しかし手加減がわからなかったのであたり一面火の海だ。やばい。が、急にスコール並みの雨のようなものが降出して火は静まった。

ローブを被り杖のようなものを持った人間の周りに魔方阵のようなきらきらした模様が地面に浮かび上がっている。

どうやらこの人間が魔法を使って火を鎮火したらしい。

魔法を使うという事は魔力があるという事だ。即ち”おいしい人間の部類に入る。私は断然やる気が出てきた。最近はずのいい魔力の人間に出会っていないから嬉しい。

水の魔法を使うという事は水の加護を受けた人間なのだろう。楽しみだ。

武器を持った残りの人間を鋭い手の爪で切り付けたり噛み付いてなるべく一瞬で絶命させる。

生きている人間はその魔法を使う人間だけになってしまった。恐怖の表情で歪んでおり、腰を抜かしているのか悲鳴を上げ尻餅をついたまま後退っている。

私はその人間の近くまで素早く移動するとそのまま容赦なく頭から齧り付いた。

結論、最高。

村娘ほどではないが、今まで食べた中で二番目においしい魔力を持っていた。討伐隊もなかなかやるじゃないか。

これまでに何人も精霊の加護を受けた人間を食べたが、精霊の違いによって魔力の味も違う。

例えば村娘は地の精霊の加護を受けており、あたたかい魔力の味だった。風の精霊の加護はすっきりとした爽やかな魔力。火の精霊の加護はエネルギーだけけれども繊細な魔力。水の精霊の加護は優しくて潤いがある魔力。

魔力によって味が違い、満たされる感じも違う。ちなみに私が一番

好きなのは地の精霊の加護を受けた人間だ。

食べ終え辺りを見渡すと血の海である。中途半端に齧った人間の体や鋭い爪で串刺しになった人間の死体がごろごろと転がっていた。なんてスプラッタ。

人間としてこのまま放置しておくのはなんとも言えないが、ドラゴンとしては警告の意味でこのまま残しておきたい。

まさか自分がこんな血の惨劇を作り上げてしまうモンスターになっってしまったことを改めて思うが、さほど悲しくは無かった。

私にはサウスがいるし、ラウやシロだっている。他の動物も話せば仲良くしてくれると信じている。

たとえ人間に理解されなくても、私は私なのだと。

しかしこの時の私はまだわかっていなかった。

将来その人間と深く繋がり合わなければいけないことになることを。

そろそろ引っ越そうか、そうしよう。

初めの討伐隊がやってきてあれから3ヶ月程経ったが凝りもなく討伐隊は何度もやってきた。

あれから5度目の討伐隊の襲来になるが人数は3倍になり作戦も何度も練り直してきているようだ。

しかし手こずる事はなかった。剣を通さない程頑丈な鱗のおかげか、それとも討伐隊の扱いに慣れてきたせいかな。

皆私の姿をみると一様に驚くが襲いかかると我に返ったように攻撃をしかけてくる。そんなに白いドラゴンが珍しいのだろうか。

・・・そういえばラウが珍しいとか言っていたな。すっかり忘れていた。

とにかく彼らの襲撃にうんざりしていた。

討伐隊が来るたびにサウスたちを安全な山奥に避難させなければいけないし、月に何度もこられても満腹の状態なため食べようとは思わない。結果、死体は放置状態になってしまふ。魔法を使う人間だけは食べるけどさ。

そろそろ真面目に引っ越す事を考えていた時のことだ。ラウとシロがまた旅を再開させると言うらしい。

『ここには長居し過ぎちゃったが、もともと南の地を目指して旅してたんだ』

2匹が居なくなれば寂しいが以前も言っていたことなのでいつかは別れなければいけないだろうとは覚悟はしていた。それにこれ以上この山にいるのも危険だろう。懸命な判断と思う。しかしそうとなると、今まではラウとシロがいたからどうにかなったかもしれないが、サウスが危険になるかもしれない。

人間がこの山に入るといふ事は他の動物にも危害を加える可能性があるのだ。今までも食料として殺された鹿や爪だけ剥ぎ取られた熊などの死骸を見かけた。

それに動物どころか森の中に迷い込んだ人間の女の子も襲っていた奴らもいた。腹立たしくて全員火で炭にしてやったよ。

兎なんてものは人間にとって一番の食料になるだろう。毛皮もつなぎ合わせて服や入れ物を作っているらしいし。あのもふもふは生きているからこそ価値があると言うのに。

私はその夜考えた。考えに考えた。

討伐隊は私を倒さない限り来るだろう。今では寄せ集めの集団だが、回数を重ねれば国直属の騎士隊が派遣されてくるかもしれない。もっと酷くなれば山を焼き尽くしてしまうことも人間ならやりかねない。

どっちにしろ私はもう長くこの山に居られないことになる。

どこか他の安全な住処を探さなければならぬが、ずっとこの山に引きこもってばかりの私は外の世界に出た事が無い。そこで私よりも恐ろしい何かに襲われて死んでしまう事もあるかもしれないのだ。考える。一番安全なところはどこだ？

敵を欺くなら味方から。

木を隠すなら森の中。

だったらドラゴンを隠すなら、ドラゴンの中？ いやいやドラゴンは寧猛だと聞いている。私みたいに話しの通じるやつはめったにないだろうとラウも言っていたし。

———そうか。一番根本的な大事な事を忘れていた。

だったら、”私”を隠すなら———

答えは一つ。

私を隠すなら”人間の中”。

私はドラゴンである前に、ひとりの人間なのだ。

その日の夜、私は寢床を抜けてそう離れていない泉へとやってきた。サウスたちはぐっすりと眠っているだろう。それを見届けて抜けてきたのだから。

泉の淵で座り込んで水面に顔を映す。白いドラゴンの顔が水面に揺れている。いつみても立派な鱗だ。ナルシストじゃないが惚れ惚れする。

だが人間の中に隠れるとなればドラゴンの姿のままでは駄目だ。しかし人間の姿になるなんて私にできるだろうか。

他の動物には魔力がなく魔法は使えないが魔力を糧としている私だったら魔法が使えるのではないかと、私は考えた。

でも使い方がわからない。

ため息をつく。

もともと人間だった頃の容姿なんて覚えてやいないし、誰の姿になればいいのやら。

そう言えばあの村娘、可愛かったな。栗色の髪の毛を二つ結びしたっけ。顔立ちは普通だが日に焼けた健康的な肌の色、少しくすんでいたがこの泉のように澄んだ色の瞳は好印象だった。ただ脅えた表情しか見れなかったのが残念か、笑顔を見て見たかったな。って、食べた私が言う台詞じゃないな。

——そうだ、彼女になってみようか。

やって見なければ何も起きない。瞳を閉じて彼女の容姿を思い出す。女の子にしては少し高めで細身な背格好は臍脂色の服に身を包んでいた。栗色の二つ結びに健康的な肌、くすんだ青の瞳。声は可愛ら

しいが少しボーイッシュなソプラノアルト。

そして地の精霊の加護を存分に受けていた人間。

もう1年も前になるというのにはっきりと覚えていた。やはり人間として初めて食べたからだろうか。それとも一番おいしい魔力の持ち主だったからだろうか。

そつと瞼を開けると、水面に浮かんで微笑んでいる彼女の姿が目の前に現れた。次の瞬間には驚いた表情になったが、それが自分の姿だと気づく。

泉の淵に添えている両手はまぎれもなく人間の手である。まだ成長期途中の少女の手だ。顔を触ってみても鱗ひとつないすべすべの肌。もう一度水面で姿を確認する。

「すごい。本当に人間になれた」

声も人間のものだ。

聞きなれない声になんだかむずむずする。立って歩くのも一苦勞しそうだが、人間の記憶があるためものの数分で慣れた。

「あーあー、うん。そう言えば話す時ってこんな感じか」

言葉はやはり脳内変換され日本語になっているが、話すのに支障はない。

人間になれたことが嬉しくなり泉を駆け回ってみる。ドラゴンのとくとは違う低い目線が新鮮だった。

もしかしたら他の人間にもなれるだろうか？様々な人間になろうと挑戦してみたが食べた人間しか無理なようだ。それもはっきりと容姿を覚えていないと駄目らしい。

しかし彼女になれただけでも随分な収穫。これで人間の中に混じっても不思議には思われない。

誰が女の子をドラゴンと思うだろう？

少しおかしくなっていくすくす笑うと空が明るくなってきているのに気づいた。

もう朝なのか早いな。一睡もしていないのだが疲れはない。

サウスたちを驚かしてやろうと住処に戻ると、彼らはもう起きていたようだ。

私が居ないのに気づいてしきりに名前を呼んでいる。人間になっても彼らの言葉がわかるのはありがたいね。

「サウス」

名前を呼ぶとサウスが振り向く。私の姿を見て驚きに固まった兎を優しく抱き上げると、そのふわふわの毛に顔を埋めた。

いかん、このもふもふクセになる！

草の匂いと太陽の暖かい匂いが鼻をくすぐる。サウスは今だ固まったままで私を見上げていた。

「サウス、酷いな。私だよ、私」

『・・・ヴィト？』

「あたり」

もう一度その軟らかい毛に顔を埋めると頬ずりをする。

『え？ヴィト？なんでニンゲン！』

「なろうと思ったらなれた」

そうこうしている内に向こうからラウとシロが駆け寄ってきた。私の姿を見ると明らかに警戒していたが、私が私だと知るとぽかんとした表情になったから面白かった。

「魔力を糧にしている私なら人間のように魔法が使えるかもしれないって思ったんだよ。結果成功。どう、すごくね？」

『凄いが・・・その、お前雌だったのか？』

ラウが面白いくらい挙動不審になっている。

「ああ、これは私が食べた人間の姿だよ。まあドラゴンの時でも雌だね。あれ、知らなかったの？」

『ラウ知らなかったんですか！？』

『ドラゴンの性別の見分け方なんて知らねえよ！』

『同じ雌なのに！！』

シロは物凄い爆弾を投下してきました。え？ラウが雌？女性？女の子？・・・俺って言ってたよね？

『俺よりヘタレな雄には言われたくなねえぞ!』

はい、ラウも爆弾投下して이었습니다。シロが雄? 男性? 男の子だって?

つまり、私は彼らの性別を間違って認識していたようです。動物ってわからん。

ちなみにサウスは安定の男の子でした。

性別を巡ってまた2匹が言い合いを始める前に他の話題に逸らそう。しかしサウスもふもふ。こんなに真面目に近くで顔とか見た事無かったからわからなかったけど、ひくひくピンク色の鼻が絶えず動いてて可愛いなの。

「それは置いといて、ラウとシロに頼みがあるんだよ」

頼み? と首をかしげる仕草も可愛すぎる。

「近いうちに旅に出るんだよね? できればサウスも連れて行ってやって欲しい」

『そりゃまた何でだ』

一番驚いているのはサウスだ。垂れた耳をぴんつ、と伸ばしている。「私が人間になったのは、人間の世界で生きようと思ったからなんだ。これ以上ここにいるのも山の動物にも山自体にも迷惑をかけると思う。他の住処を探そうとも思ったけど私は人間の世界で生きていくほうが性に合うと思うんだ。私がいなくなっても暫くは討伐隊は来るだろうしサウスも危険な目に合うかもしれない。だから一緒に連れて行って欲しい」

『ばれたらあぶないよ!』

自分の行く先よりも私の心配をしてくれる小さな友人を安心させるように頭を優しく撫でる。本当はサウスのもといた兎の群れに戻るのが一番だ。だがそうしたらこの山にいらなくてはなくなる。少しでも危険がある限り私はそれを避けたいんだ。一緒に連れて行くことも考えたが、難しいだろう。

私が彼らの旅に同行してもいいのだが、私の糧となる食料が人間の魔力なため、迷惑をかけることになると思う。だから私は付いてい

けない。

「私の我俣を許してくれないかな」

つぶらな赤い瞳が私を見上げる。私と同じ白と赤の色を持った大事な友人。彼がいなかったらきつとこの山で生きていけなかったかもしれない。

「いつかまた会えるから」

会いに行くからとは言えなかった。保障がないからだ。しかしつかきつとまた出会える。それを信じてる。

サウスは暫く黙っていたが、小さな桃色の口を開いて慣れ親しんだ声できゅい、と鳴く。

『それはヴィトがかんがえたコトなんだよね・・・だったらボクはそれでいいよ。ボクだって、ヴィトのあしでまといにはなりたくないもん・・・それにいろんなところタビするのもたのしそう!』

「サウス、・・・ありがとう」

軟らかい毛に顔を埋めて優しく抱きしめる。彼の幾分早い鼓動が伝わってきてあたたかい気持ちになった。

『おいおいおい、俺らのこと忘れてねえか』

置いてけぼりの2匹を忘れていました。

『いいじゃないですか! サウスの小ささならラウの背に乗っても重くありませんよ!』

『俺が運ぶのは決定事項なのかよ』

ラウはため息をつくが『しかたねえな』と承諾してくれた。シロは言わずもがな最初から乗り気だ。

しかし烏に狼に兎・・・なんてアンバランスな組み合わせなんだろう。

「ラウ、シロ、ありがとう。サウスも我俣を聞いてくれてありがとう」

私は我俣だ。

この山には他の動物もたくさん生きているというのに、目の前のたった一つの大切な命しか助けない。

卑怯だと言われても良い。罵られても良い。

私は、卑劣で獰猛なドラゴンなのだから。

木は森に、ドラゴンは人に。

ヴィザンヌ山から人里に降りる事になったが、ふもとの村は避けた。この村娘はきつとその村出身である可能性があったからだ。1年も前に行方不明になった娘が突然戻ってくるなんておかしいだろうし。長い距離だったがその村よりも離れた所にある街まで歩いて行った。自分でも無謀な事をしたと今では思うよ。

でも道すがら旅商人や村・街人と出会うものだからドラゴンの姿にもどって飛ぶことはできなかった。目立つし、これから人間として生きて行くならチートは使いたくない。使うときは、どうしよもなくなったときに使おうとこの時決意した。ほら、食事のときとか。

初めて人間が住んでいる街へ訪れたが、自分が知っているような雰囲気と全く異なっていて驚いた。

街の入り口には兵隊らしき男性が立っており、訪れる人の検問を行っていたのだ。それもかなり厳重に。どうやらこの街はアルヴィナ国の領土らしく、他国特にティルゾート国の者を警戒している様子だった。

私は上手いこと商隊に紛れ込んでなんとか街の中に入る事はできたが、街の中も不思議な光景だった。

私は生粋の日本人である。今はドラゴンであるが、日本で普段目に見ている光景とは全く別の景気にしばしば呆然としていた。映画のセットにでも使われそうな中世ヨーロッパ時代を思わせるような街並みであったからだ。石畳の歩道に時折馬車が闊歩し、行き交う人々は一昔風のような服装をしている。男性はだぼついたズボンにシヤツ。身なりの良い紳士はタキシードみたいなものを着ている人もいる。女性は何足まで届くドレスを着ており、髪の高い人は誰一人

としていなかった。それぞれが薄い髪や瞳の色をしていた。金髪や茶髪、赤毛などはいら思っていたが青色や緑色までいるのは驚いた。どんな色素をしているんだろう。その奇抜な色がまた違和感なく街に馴染んでいるから不思議だ。

疑問に思ったのが黒い髪や瞳を持った人間と会ったことが無い事だ。ここにくればひとりぐらいはいらるうと思っただが見渡す限りひとりもない。黒を纏った生物はラウしか見た事が無い。見慣れていた黒が見当たらず居心地が悪く、やはりこの世界は私の知っている世界ではないんだなと思ひ知らされる。

家はレンガや木材でできたものが多く、住居は二階建てで店などは一階建てらしい。店といっても市のようなものが門前で行われていたのでそれしか知らないが。「おじょうちゃんひとつどうだね」と果物のような実を差し出されて、そこでようやく私が人間のお金を持つていないことに気がついた。

人間の世界に馴染むためには職探しは必須だ。話しかけてきたおじさんに断りを入れてどうしたものかと街をぶらぶらしているのが今の状況である。

仕事か。検問も行っていたし身分証明がないと駄目なのかな。ううむそれは困ったぞ。

職探しのような建物はないかと探していると、とある店の看板に”ハローワーク”と書かれた文字が目に入ってきて思わず噴出した。脳内でハローワークと変換されているのだがこの街並みに合わない。確か兄もハローワークの世話になっていたっけ。・・・ああ私には兄がいたんだな。ふとした瞬間に思ひ出すから変なものだ。

職探しの場所であっているのだろうか、とにかく藁をも縋る思いでその建物の中に入るとなにやら慌しそくに男性と女性が駆け回っていた。

「全く！前日でキャンセルするなんて礼儀がなってないわ！どんな躰で育ったのか親の顔が見て見たいくらいね！」

「騒いでも仕方ないよりリーそれより早く代わりの子を見つけない

と！」

慌しく書類を持ってきては見比べている。こじんまりとした室内だが受付や待合席などがちゃんとある。

くすんだブロンド色の髪的女性と薄茶の髪の男性の他、人はいない。「そうだ！この間来てたあの子はどう？確か住み込みで働きたいって言ってたわよね！」

「駄目だ。あの子は確かアレクサンドロ家に奉公が決まってたはずだよ！」

「いつのまに決めたのよ！もう！」

「リリーがいつまでたっても決めないからだろ！」

「だってあの子に会う家が見つからなかったんですもの。ああ猫の手でも借りたいくらいだわ！！」

ドラゴンの手なら空いています。

なにやら忙しそうだし出直そうかと建物から出ようとする、女の人が私に気づいて「あらあらまああ！」ときらきらした瞳で近寄ってくる。

気を押されて一歩後ずさると女の方は両手をがしっと掴んでぶんぶん上下に振る。

これがまさにシェイクハンド。

「もしかしてあなた職探しに来たの！？」

「なに！？」

男の方も私の存在に気づいたのか書類から顔を上げてこちらに駆け寄ってくる。

「あ、あの忙しそうなのでまた後日に」

来ます。その言葉を遮り男の方は頭の天辺から足の先まで嘗め回すように見られる。

「そこそこの顔立ちに謙虚な姿勢、年も15、16ぐらいか・・・うんばっちりだ！」

「ちよっとロイ！女の子に失礼でしょ！」

「ああごめんよりりー。この緊急事態だからつい」

ついつて何だ。ついつて。

この人からはシロ並みのヘタレ臭がするよ。頭もぼさぼさだし、着ている服もよれよれだ。将来嫁さんには尻に敷かれそうなタイプである。

それに比べてリリーさんという女性は大して着飾っても居ないがきらきらとしたオーラがある。もしかして多少魔力があるのかな。うん、おいしそう。

「名前を聞いてもいいかいしら？」

「ヴィトです」

「あら珍しい名前ね。出身はどこ？」

「ここから東にあるヴィザンヌ山・・・のふもとの村です」

「あそこはたくさん村があるものね。もしかして一番山に近いティエーヌ村かしら？」

「はい、そこです」

全くの嘘っぱちである。

「なるほどねえ、一応理由を聞いてもいいかしら？・・・あ、疑っているわけじゃないのよ？職を探してる女の子って珍しいの。ほとんどの子が嫁いだり実家のお手伝いをしているものなのよ。だから私達のところに来る女の子は訳有りだったりするの。あなたより遠くの村から来る子だっているし。・・・あそこはそれ程貧しくもないしあなたぐらいの女の子ひとりなら生きてけると思うんだけど」

こうなったら嘘を突き通せ！だ。がんがいこうぜ！！

私は頭の中をぐるぐる回転させて何か理由を思いつく。貧しくなくとも女の子が村を出なければいけないほどの理由って何だ？男の子ではなくて、女の子。・・・そうだ、今一番リアルに起こっている出来事なら説得力あるし信じてくれるかも。

だがそれは私の存在巻き込むことになるな・・・ま、いっか。どうせあの山にはもう居ないし。

「最近ヴィザンヌ山に人喰いドラゴンが出るのを・・・ご存知です

か」

「ええ、確か討伐隊が何度も退治に出かけているけど一人として生きて帰ってきたものはいないらしいわね」

やっぱりここまで知れ渡っているのか。好都合だが複雑な気持ちだ。私は両手を胸の前で組み悲しそうに目を伏せる。涙は出なかったけれど、どこからどうみても可哀想な女の子に見えるはず。

「父と母がこのまま村に居るのは危ないからどこか奉公に出なさいと、言われたんです。だけど、私は危険でも一緒に居たかった・・・！でも父と母は必死に私に頼みます。危険な目にあってからでは遅い。・・・それに現に村の人も山に入って行方不明になった人もいますし、正直私も、・・・怖かったです。それでこの街までやってきたんです。ですが途中で川に落ちて荷物も全部なくなってしまうました。途方に暮れていたときに、このお店に」

ぐすつ、と鼻をすすする音が聞こえる。決して私じゃないよ。リリーさんの隣から聞こえてくるからきつとロイと言う男の人だろう。ちらりと見ると淡い色のハンカチを出して涙を拭いている。なんて情にもろい人なんだ。騙してごめん。

「り、リリー、この子にしよう。絶対この子がいいよ！礼儀作法はちょっと頑張ればできるだろうし、何より可哀想だよ！ぼくは少しでも良い暮らしをさせてあげたいよ！」

「ええ、・・・そうね。でもちょっとは鼻かむの止めなさいよロイ、女の子の前でそれは汚いわ」

「ご、ごめんよう。でも涙が止まらないんだっ」

こんなに良い人を騙していいんだろうか。少し罪悪感が残るがこっちだって職を探さなきゃいけないんだ。それにこれは絶好の機会だと思う。あと1日遅かったり、早かったりしたらきつとこのチャンスは巡ってこなかっただろう。だからこの目の前のチャンスを逃すわけには行かない。

「あの、私身分証明なんてもの持って無くて・・・」

「心配には及ばないわ。言ったでしょ？訳有りの女の子も来るって。」

それに貴女の場合出身地もはっきりしてる。新しく発行すればいいから心配なくていいわ。それより、仕事の事なんだけど突然キャンセルしちゃった子がいて困っていたの。奉公先が場所だけに代わりになる子なんていなかったし・・・正直貴女が来てくれて助かったわ」

「なんてったって城だもんな」

ようやく涙と鼻水がとまったのか、鼻声のロイさんが一枚の書類を見ながら言う。

そっか、城か。キャッスルか。それは場所だけに訳有りの女の子は・・・

なんですと？

「ここから西にアルヴィナ国があるのは知ってるわよね？そのお城に奉公にあがってほしいの。とは行っても貴女でもできる簡単な内容よ。少し規則が厳しいけど衣食住は約束されているしお給料も申し分ないほどもらえるわ。こんな絶好の職はなかなかないんだけどね、まさかあの子がこの話を蹴るとは思わなかったわ！ああ腹が立つ！！」

お城に奉公。とてつもない事になってしまった。この街でそこそこの職にありつけばいいかなあ、なんて思っていたがまさかこの街をすっ飛ばして西のアルヴィナ国に行くことになるとは思ってもみなかったよ。人生何が起こるかかわからないね。

「直ぐに行くことは無いから安心して。この街に滞在している依頼主の人から必要最低限の事を学んでから行くの。他にもあなたのような子が2人いるから仲良くなると思うわ」

それは安心だ。いきなり城にいつて働けなんて言われても何をしたらいいかかわかないし。

「でもそれが明日からなのよ。大丈夫？」

「はい。問題ありません」

リリーさんはとても嬉しそうに笑い私を抱きしめる。うわあ、軟らかいものが顔に当たってときどきする。人間の女の人ってこんなに

軟らかくて良い匂いがするんだなあ。

今まで動物としか戯れなかったからわからなかったよ。

「そう言えばあなた荷物を川に流されたって行ってたわね。だったら今夜はここに泊まってちょうだい。私達からのせめてものお礼よ。夕食と朝食もつけちゃう！」

「え、いいんですか？」

それは願ったり適ったりだ。明日までどうして過ごそうか頭の中考えていたがそうしてくれるととてもありがたい。野宿は慣れているがこの街で野宿するところなんてなさそうだし。

「いいわよね、ロイ」

ロイさんはさっそく書類の手直しをしてるようだ。人のよさそうな笑みを向けると勢いよく顔を縦に振る。愛嬌のある人だ。

それから書類の書き直しや身分証明の発行に幾つか質問をされてから上の部屋に案内された。それから直ぐに身分証を作りに行くことになった。

身分証明ってそんなに簡単に作れるものなんですか、と聞くと案外簡単に作れるそうだ。そもそも身分証明というものは大きな街や国に行き来する人がどこの国出身かを見分けるために必要なもので、田舎の村に住んでいる人は持っていないのが普通らしい。だからそういう村から来る人が身分証を新しく作るのは珍しくないのだそうだ。

ただ身分証を作る時に村の事を聞かれたが、問題はなかった。身分証は身につけられるように腕輪や指輪など、その人が身につけられやすいように作ってくれるそうで私は腕輪にした。ドラゴンになるときは外さないと壊れそうだなと思いながら、自分の身分証が嬉しくてつい笑顔になる。この姿はあの子のもので多少罪悪感はあるが、自分がここに存在するという証明になるのだ。

それから店に戻ると、もう夜も遅くロイさんは既に自分の家に帰っていた。どうやらこの店に今住んでいるのはリリーさんだけで、本来はこの店のオーナーが住んでいるらしい。遠くに出ているためリ

リリーさんがこの店を任されているのだと。リリーさんは店の奥にある台所で夕食を作ってくれた。待っているだけなのもなんだか悪いのでお手伝いをしたが役に立ったかどうかは正直わからない。私にできることといえば皮むきぐらいだ。家庭的なリリーさんが羨ましい。

リリーさんが作ってくれた夕食はおいしかった。どのくらいおいしかったかというと質も良い量もある魔力のある人間をまる飲みしたときのおいしさだ。しかも地の精霊の加護をうけている。

例えが悪くて申し訳ない。だって家庭料理なんてここ最近食べてないから。記憶にあるのは人間のとき、カップラーメンとか食べていたのを覚えている。あのジャンクフードもおいしいんだよね。でもリリーさんの手料理には負ける。お嫁さんに貰いたいぐらいだ。なにより2人で食べる食事はおいしい。

放っておけない身寄りのない子を拾ってきちゃうのよねえ、と愚痴りながらもオーナーの事を話すリリーさんは嬉しそうに笑っていた。人間もいいなあ、としみじみ感じた私でした。

使用人見習い三人娘。ただしドラゴン含む。

お店に泊まらせてもらい、朝起きるとリリーさんが朝食を作って待っていてくれた。

しまった。ドラゴンの時は時間の感覚が無かったから寝坊してしまった。

寝たいときに寝て食べたいときに食べるぐうたらな生活ばかりしていたから人間のリズムにあわせないといけないな。

少し面倒だ。

それにしても朝食も大変おいしかった。

場所を教えてもらいそこへ行くと、随分大きな家が目の前にあって暫く呆けていた。この街で一番大きな屋敷じゃないだろうか。おっかなビックリそろそろと屋敷に入ろうとすると私と同じなのだろうか、女の子が数秒前の私と同じように呆けて屋敷を見上げていたので話しかけると、どうやら彼女もリリーさんの紹介でここに来たらしい。

名前はシフォンと良いなんともおいしいそうな名前である。しかし彼女自身魔力は無いのか食べたいと言う魅力はあまり感じなかった。・・・人に会うたびおいしいかどうか考えるのは止めにしないとやばそうだ。ぼろっと何かの拍子で出てくるかもしれない。

シフォンは私より身長が低く、はちみつ色のふんわりとした髪が特徴だ。健康的な私の肌の色と違って日焼け知らずの白い肌。瞳もはちみつ色。ぱっとさえない色だが、私は好きだ。はにかむ顔がどことなくサウスに似ている。む、動物と人間じゃ違うって？ 甘いな。私にはわかるのさ。そういうことにしておいてくれ。

屋敷をノックすると年を召した強面の婦人がでてきて私とシフォンをじろじろと見ると「時間通りですね。大変よろしい」にっこり笑って屋敷の中へ入れてくれた。強面顔は素なのだろうか、笑顔とのギャップがあってびっくりした。シフォンは「びっくりしたわ。最初怖そうな人かと思ったけど笑顔が素敵な人なのね」といって笑った。なんて天然。

通された部屋は壺や絵画、家具など部屋自体がありとあらゆるものに豪華絢爛に装飾されており、眩しかった。天井にはシャンデリアなるものがぶら下がっている。

残りの一人はもう既に来ており、部屋の三人がけの椅子に座って待っていた。婦人は私達にそこに座るようにいうと正面の椅子に座って手元の書類を見ながら喋る。

「アリアーデ・バルロー、アルヴィーナ街出身の15歳」

「・・・はい」

この街出身なのか。しかしアルヴィーナ国管轄の街だからってアルヴィーナ街の名前は安易過ぎないか。考えすぎか？

苗字を持っているとなるとそこそ良いお嬢さんのはずだ。どうしてお城に勤めようと思ったんだろう？

アリアーデさんをちらりと観察するとリリーさんよりも濃いブロンドの髪をポニーテールに結んでいる。碧眼で目尻が少し釣り上がっているためか、冷たい感じで近寄りがたい印象だ。

しかし同い年か。いや私自身が何歳かしらないから適当に自分の年齢を決めたのだけだ。

「シフォン・カルテット、カルテット村出身の16歳」

「は、はい」

シフォンはひとつ年上だったらしい。緊張した面持ちで返事をした。

「ヴィト・ティエーヌ、ティエーヌ村出身の15歳」

「はい」

ちなみ私やシフォンのような村出身の人は苗字がないため村の名前を苗字にするらしい。苗字を持っている人はこの街の人のようにそ

こそ稼ぎがあつて家名を買うんだそう。珍しい家名ほど高いらしい。

「よろしい。あなたたちはこれからお城にあがるために必要最低限の作法を身につけてもらいます。国の象徴となるお城でお勤めするのですから厳粛な態度で学びなさい。それと私のことはマダムと呼ぶように。お城の女使用人総まとめ役です」

「はい、マダム」と3人の声が被る。マダムは満足したように頷き、さっそく作法のレッスンに取り掛かる。

1日目は立ち振る舞いだった。猫背になったり足音を立てて歩いたり両手を振り回しながら歩いていると叱責が飛んでくる。鞭じやないだけマシだがあの強面で叱られると迫力があるため恐ろしい。胸を張って顎を引き、手元は前で軽く重ねる。歩くときは静かに淑女の嗜みを忘れず歩く事。歩き方でこんなに疲れるとは思わなかった。シフォンが一番怒られてたよ。怒られれば怒られるほど歩き方が変になってしまふのに気づいたのかマダムはそれ以上は叱らなくなった。さすが使用に総まとめ役。良く人を見ている。私は人並みに出来て人並みに怒られたよ。アリアーデさんは凄い。実は貴族の女性でしたと言われても疑わないほど動作が綺麗で思わず見惚れてしまった。マダムは満足気にうんうんとあのギャップのある笑顔で頷いていたよ。

次に挨拶の仕方。これは基本中の基本だ。まず自分が配属された場所を言いその後名前を告げる。簡単だが声が震えないようにしなければいけない。発声練習をさせられたがドラゴンの時も威嚇用に練習していたから苦にはならなかった。シフォンはもともと声が小さいためか辛そうだった。アリアーデさんは澄んだ声ですごく綺麗だった。あんな声に生まれたかったよ。・・・さてよ、アリアーデさん食べたらなれるんじゃない？そもそもアリアーデさん魔力もって

そんなオーラあるし・・・いやいやいやいかん。人間のときはドラゴンだった時のことを忘れるんだ。忘れろ私！

1日目の最後は位の高い人と廊下ですれ違う時のためのお辞儀の仕方だ。45℃に腰だけを折り曲げて通り過ぎるまでひたすらお辞儀をするらしい。これも猫背になったりお尻だけが突き出たりしては駄目だそうで。足音が去るころに頭を上げて良いそう。地味に辛くないか。腹筋とか鍛えてないと駄目だよこれ。

「ふわあ、疲れたあ・・・」

シフォンが部屋に入るなり真ん中のベットによろよろと歩いて倒れ込んだ。もともとそんなに要領がよくないのか、作法中はシフォンが一番辛そうだった。

私？人並みだったよ。人並みに使っていない筋肉使って筋肉痛になりそう。

三人で部屋を一つ使うみたいだ。お城にいれば2人で一つの部屋になるから今のうちに慣れておきなさいということだろう。

先ほどの豪華な部屋に比べて随分質素だ。やはりたかが使用人。しかも平民出だ。お城でも雑用ばかりやる事になると思うが、必要最低限は身に付けさせなければいけないのだろう。そもそも位の高い人を御世話するメイドさんのイメージがある侍女さんはそこその貴族の娘が花嫁修業のためにやるもので、しかも将来のお婿さんをそれとなく探すためだ。そんな貴族のお嬢様がやらないような仕事を平民出の我々がやるらしい。例えばお城の掃除、洗濯、重たいものの持ち運びもやらなければいけないらしい。着る服もメイドさん（これから彼女らの事はメイドさんと呼ぼう）のような水色のエプロンドレスではなく、汚れても良いようなくすんだ紺色だ。実は今来ているのもソレだ。シフォンは可愛いと喜んでいるが、まあ確かに村娘の服よりかは幾分フリルもついているし可愛いかもしれない。それに丈夫だ。ここ重要。

「シフォン、寝るなら着替えて寝よう。服に皺が寄ってしまうよ」寝巻きも至急品だ。灰色のワンピース。身体のでこぼこの少ない私に着たら見事に足首までストーンと障害物がなく着ることができた。この身体寸胴だったのね。親近感沸くわ。・・・と言う事は人間だった私は寸胴なのか。日本人だから仕方ないのか？

しかしシフォンは違っていた。何だその胸！！どこにどう隠していたのやら、メロンが二つ胸元から零れ落ちそうなほどの大きさだ。寝巻きのワンピースを着るのも四苦八苦しているのか手伝ってあげると「ありがとうヴィトちゃん」ふんわり笑う。マシユマロみたいな子だよこの子は。胸もマシユマロみたいだよ。

寝る準備をしているとアリアーデさんも寝巻きに着替えたらしく。ポニーテールを解いていた。腰まである色の濃いブロンドが背に流れ落ちる。シフォンほど胸は大きくないが丁度良いくらいの大きさで、胸から腰までのラインなんて芸術美だ。アリアーデさんは全体的に大人の色気がある。同じ年の身体なのにこの差はなんなんだろう。

そして私はなんつう目で2人を観察しているんだ。これじゃただのスケベオヤジじゃないか。

というかあれ、アリアーデさん私より背が高かったんですね。一般的な女の子より高いはずの私でも見上げなくちゃいけないほどだ。

「そうだ！あらためて紹介しようよ。私はシフォン・カルテット、ここから西のカルテット村から来たの。ココの実がおいしくて豊かな村だからよかったら遊びに来てね」

笑顔が似合う可愛らしい女の子だ。胸はマシユマロメロンだけど。

「えっとね。私のお姉ちゃんもお城にお勤めしてるの。お姉ちゃん是我的憧れだから私もいつかはお城で働きたいなあ、って。そして偶然リリーさんたちが使用人を募集してるって聞いたからチャンスだと思って」

お姉ちゃん思いの良い子でした。泣ける話だよ全く。胸はマシユマロメロンだけど。

「アリアーデちゃんは？」

あ、そこは先にアリアーデさんに振るんですね。アリアーデさんはまさか振られると思わなかったのか少し戸惑った様子だったが、口を開く。

「私は・・・その」

良いにくい事なのだろうか視線をそらして黙り込む。なにやら事情がありそうだ。

「その？」

やばいシフォンは空気を読めない子だ。「ええっと私はねー」私は助け舟を出す事にした。

「ティエーヌ村の近くにヴィザンヌ山があるのは知ってるよね？」ここで変に黙っていてもおかしいだろう。リリーさんと同じような説明をすることにする。

「あ、知ってるわ！人喰いドラゴンがでる山ね！」

シフォンが食いついた。ありがたいがその人喰いドラゴンはそんなに噂になっているのか？これじゃあドラゴンの姿に戻るのも大変かもしれない。

アリアーデさんもドラゴンの話に思い当たる節があるのか、興味あり気に私の方をちらっと見る。

「そう、村にも犠牲になった人が数人いてね、お父さんとお母さんもこの村は危険だからってこの街に来たんだよ。討伐隊の人もたくさん来て村に泊まったりもしたんだけどマナーが悪い人ばかりでね。私みたいな若い女の子は危ないんだって」

マナー云々はリリーさんには話してない部分である。最初の内の討伐隊は寄せ集めのせいかなマナーが凄く悪かった。森に入るなり害の無い動物をいじめたりゴミなんてその辺りに捨ててしまう。あげくの果てには山に迷い込んだ女の子を手籠めにしようとしたから私は怒って全員まとめて火吹きの刑にしたよ。人間でもやっていいことと悪い事がある。それはドラゴンにしてもそうだ。私は生きるために人間を糧にしている。だから人間を殺めることに躊躇いはなしそ

うしないとこの命を保つ事ができないからだ。しかし彼らは関係の無いまだ幼い女の子を数人がかりで取り押さえようとしたのだ。思い出しても腸が煮え躁り替えそうだ。火吹きじゃ足りなかったかな。でも骨まで焼いたから山の良い栄養分にはなったんじゃないかな。

「野蛮な人がいるのね・・・ドラゴンより怖いわ。村から出てきて正解よ！」

そう言われるとなんだか複雑だが嬉しい気もする。

それから他愛も無い話をしていたが、疲れがピークに達したのかシフォンはいつの間にか寝てしまった。シーツをかけてあげると規則正しい吐息が聞こえてくる。なんだか微笑ましい。

私も寝ようと端のベットに潜り込んだ。

アリアーデさんにおやすみなさいと言ったが、彼女は何か考え込んでいるのだろう、暫くの間は起きていた。

ああ私も限界が来ていたのかな。

すぐに睡魔が襲ってきて眠りに落ちた。

2日目は午前が1日目の復習と午後が仕事の仕方を学んだ。覚えることがたくさんで頭がパンクしそうだ。仕事にも作法があるんだね。初めて知った・・・。

3日目は午前が1日目の復習と午後が一般知識。これは焦った。この一般常識なんて全く知らない私は質問に答えられなかった。が、マニアックな質問は答える事ができた。これもひとえにラウのおかげだろう。マダムに不思議な顔をされたが笑ってごまかしたよ。H A H A H A H A。

4日目は息抜きにお茶の入れ方。この仕事はめったにないが知っておいて損はないのだとおいしいお菓子と一緒に行った。意外にもシ

フォンが一番上手で驚いた。村に居た頃は好きでお茶やお菓子を作っていたらしい。これにはマダムも驚いていた。

5日目は最後の日だ、今までの総復習とひとりひとりマダムに見てもらおう。アリアーデは見事に一発合格。私は何度か失敗したが合格は貰えた。シフォンは緊張しきっていて十回ぐらいは失敗したが、なんとか合格を貰って喜んだ。これで3人とも合格だ。明日にはここを出発して城のお勤めに入るらしい。

この部屋も最後となると寂しいな。一応3人とも同じ所に配属されるらしいが、部屋はばらばらになってしまうかもしれない。

シフォンが最初に寝付いて私もそろそろ寝ようかとベットに潜り込もうとしたが、アリアーデに名前を呼ばれる。

「ヴィト」

今更だが実はここ数日で名前を呼び捨てにするまでに急成長した。

シフォンは私達のことをちゃん付けで呼ぶのが好きらしいから彼女だけはちゃん付けだが。

ベッドから起き上がってシフォン越しにベッドに座っている彼女を見る。まだポニーテールを解いておらず、何か思いつめたような面持ちで私を見ていた。

「どうかしたアリアーデ？」

「その・・・ティエーヌ村出身と言っていたわよね。聞いてほしいことがあって」

頷くと、アリアーデは意を決したように口を開いた。

「私にはまだ幼い妹がいるの。今は病で床に臥せているんだけどそれはお大事に！アリアーデの妹ぐらいだからとても可愛らしいのだろう。だが床に臥せているとはどういうことだろう。それを私に告げる意味もわからないが、話を聞いてみないかぎりなんとも言えない。私はただ黙って彼女の話を聞いていた。

「数週間前に祖母の住んでいる村に遊びにいったときの事よ。目を離した隙に妹はいなくなっって必死でさがしたけど、何時間もみつか

らなかったの。けど次の日の朝、見つかったわ。その、ヴィザンヌ山のふもとの森の中で・・・可哀想なくらい弱りきっていた。身体は見ていて痛々しいほど傷や泥だらけで、顔を真っ青にさせてうわ言のように呟くのよ。・・・”ドラゴンが”って」

私はどきりとする。

今まで遭遇した人間で私から逃げおおせた人間はいない。その前に私が食うか、殺すからだ。

だがひとりだけ、見逃した女の子がいる。気絶している様子だったから私の姿は見られてないと思っていたが、見られてたのか。もしかしてその子は――

「私はその時になって初めて人喰いドラゴンの噂を聞いたわ。そして妹が病の床に臥せったのは、そのドラゴンのせいだとずっと思っていた。ずっとずっと、今まで憎んでた」

アリアーデは悲しそうに笑う。

「城に奉公あがろうと思ったのも妹ためなのよ。両親は貴族向けの小さなお店をやってるんだけどね、それだけの稼ぎじゃ妹の病は治せないみたいなの。だから私も何かできないかって、思ってたリリーさんのお店に行ったの。そうしたらこの仕事を紹介してくれたわ」

「治せない病と言うのは精神を病んでしまった、という事なのだろうか。」

そこまでは聞けなかった。

「・・・それでね、先日のヴィトの話を聞いて疑問に感じたわ」

「一番最初の夜の話だろうか？」

「あの時、討伐隊はマナーが悪いって言ってたわよね？」

「・・・うん」

「・・・妹の身体には、殴られたような痣がたくさんついてたの。でもそれは大人の握りこぶし程度の痣。大きな体格のドラゴンがつけるはずがない。・・・もしかしたら妹はドラゴンではなくて、その討伐隊に・・・そこまで考えて悔しくなった。味方のはずの人間が、妹に危害を加えて心に傷を付けたかもしれないって」

もしかして最近アリアーデに元気がなかったのはそれを考えていたせいだろうか。

1日目には見れなかった小さなミスも何度かしていたし、ずっと悩んでいたせいだったのか。

「私はわからなくなったわ。何を信じたらいいか」

今までずっとドラゴンを憎んでいたのだろう。それが私の話を聞いて、もしかして味方であるはずの人間の仕業かもしれないという可能性もでてきて戸惑っている。

私が話した事はアリアーデを困らせることだったのか。そう知っていれば、話しは、・・・しなかったのだろうか。私は。

私は彼女に気の良い言葉を掛ける事は出来ない。だけど、私の言葉で彼女が迷っているのなら。

「アリアーデ、無理に何かを信じなくて良いんだよ。信じたいと思う事ができたらそれを信じたら良い」

妹さんが討伐隊に襲われたのは紛れもなく本当だろう。しかしそれを言うことは私にはできない。その根拠を示す事はできないし、私がそのドラゴンだから知っていると告白することもできない。

「妹さんの事は不幸だったと思う。だけどそれで貴女が心を病んでしまったら意味が無いよ。妹さんもきつと悲しむ。ドラゴンに襲われたのか、討伐隊に襲われたのか、私には何も言えない・・・でも答えはきつといつか見つかるはずさ」

それより、妹さんのために城で一生懸命働くんでしょ？ だったら今を頑張ろうよ。考えてもでない答えは考えてもしようがないよ。

励まし方がわからなかったが、精一杯の気持ちを込めてそういうと、「そう、ね」と呟いて弱々しいけれど、アリアーデは笑った。

話を妹さんにそらすことしか、私にはできなかった。

城内事情と配属事情。ややこしい。

お城の中は立派でした。贅沢な装飾が施してあり、豪華すぎて眩しく目がしょぼしょぼとなりました。シフォンは目を輝かせてすごいわ！の連発。アリアーデはいつものように冷静沈着で城の内装を眺めていた。

暫くしてマダムが帰ってくる。後ろには私達と同じような服装をした女性が付いてきていた。

「貴方達は城内清掃の仕事をしてもらいます。この人がまとめ役なので言うことをしっかり聞くように」

「はじめまして皆さん。城内の清掃を取り仕切っていますミレーナと申します。これからよろしくお願いしますね」

薄茶の髪を後ろでお団子にまとめ、橙色の瞳をした優しそうな三代後半ぐらいの女性だ。

城内清掃か、洗濯や庭掃除なんてのものあるけどやはり最初は一般的な仕事からなのだろう。

私達は順番に挨拶をするさっそく割り当てられた部屋い案内してもらった。その途中で様々なことを教えてもらった。

城内は複雑にできているから早く道を覚えること。

位の高い方に出会ったら必ず頭を下げる。ここでの位の高い人とは王族や貴族らしい。城には王族しかいないイメージだったが上流貴族は部屋が空いており申請さえすれば住めるそう。現在は二十もの名家が住んでいると聞いた。どんだけでかいんだよこの城。やはり城に住むという事自体ステータスなんだね。私は嫌だな。だって場所は違って王族と共同生活って辛い？

食事の時間は決まっているため時間を守ること。

夜9時以降は決して部屋から出てはいけないこと。

なるべく目立たず騒ぎを起こさないこと。

一ヶ月に数日ぐらいなら休みがとれるらしい。

要するに空気のように行動して仕事をこなせ！ってことですね。わかります。私自身あまり目立った行動はしたくないし、衣食住お給料ももらえる良い仕事をやすやすと手放すことはしない。困った事に食事はどうしようかと思ったが今はまだそんなに空腹を感じていないから大丈夫だろう。山を降りる前にたらふく食べてきたし。いざとなれば休みをとってどこか飛んで遠いところで調達すればいい。なにせ飛べるからな。

部屋割りはシフォンと同じ部屋になった。アリアーデは隣部屋にひとりで入るらしい。もともと使用人の数が偶数だったからこのような部屋割りになったのだろう。

いいな、ひとり部屋。今度遊びに行こう。

その日ミレーナさんに仕事場や城内を案内してもらった。その途中で貴族の人と初めて出会ったため言われたとおり去るまでお辞儀をした。筋肉痛で腰が痛かった。

最初は緊張したものの、働きはじめて、私達が働く時間と貴族の人の活動時間はずらされているためかそうそう会うことはなかった。会ったとしてもお辞儀をしていれば去ってくれる。

でも一度王族に出くわしたのは驚いたな。まだ若くて王子様だったけれど足元を見る限りお上品に育ったんだろうな、と感じる。

しかしあれだな。貴族や王族はオーラがすさまじい。きつと親戚同士で結婚しているから血が濃いのだろう。魔力がだだもれだ。おいしそう。・・・いかん、暴走しなけりゃいいんだけど。

今まで暴走しそうなほどおいしいような人には会った事がない。いるかどうかさえも怪しいしそんな人いたら絶対食べるよ。間違いない。食べる。すぐ食べなくても食べる機会を伺う。

私の仕事はこうだ。

貴族や王族の人たちが活動しない頃に城内の廊下や階段の清掃を済ませる。この階段がすごいなの。螺旋階段やら舞台のような階段だらけで掃除が大変だよ。先輩達も愚痴をいながら掃除してるし。それに同じ平民出だから話しやすい人たちで助かる。

しかしこの間の貴族出身のメイドさんに会ったときは嫌な気分になったな。害虫みたいなものをみるかのような目で見るから。そんな人ばかりじゃなくてお菓子とかおすそ分けしてくれる良い人もいるんだけど。あれだね、媚探しに躍起になってる人は怖いね。何でも敵視する。そのくせしてお目当ての貴族の男性や王族のあの王子相手なんかになるところつと顔が代わって媚びたような笑顔になるんだ。・・・女は怖いよ。

特に彼らの修羅場には巻き込まれたくない。彼らにとって恋は仕事のようなもので、どこの平安貴族だよとつっこみたくなるがそれが日常生活の一部なのだろう。特に女同士之争いが耐えない。早朝とある部屋にて身分の高そうな女性が下着一枚で飛び出してきたのは驚いた。その後から顔を真っ赤にして素っ裸の女性が出てきて追いかけていったのにはもつと驚いた。この世界で女性は肌を見せることはあまり好ましく思われないはずなのに。そんなに必死な形相してどんな男を取り合っているんだと思ったが相手の男はそれほどかっこよくない。身なりや身分は良いが極普通の顔だ。やっぱり身分なのか。そうなのか。

ミレーナさんは見なかった事にしなさい。と優しく笑って安心してくれた。なんだかシフォンが恋愛恐怖症になりそうでお母さん心配だよ。・・・や、ちょっと試みてみただけ。

こんな事が何度もあっていると嫌でも慣れてしまう。今では先輩と「あ、またかー」なんて苦笑しながらスルーしている。

朝の仕事が終わると遅めの朝食を食べて今度は通行の邪魔にならない程度に窓拭きを行う。それが終われば少しの休憩が入る。なんて不自由ない生活だろう！これでお金も申し分ないほどもらえる。お

金を貯めてどこか遠くに行こうかな。森の中で小屋を建ててサウスやラウ、シロと一緒に暮らすなんてのもいい。ああ、なんて平和なんだ。

そう思っていた時期が私にもありました。

お城で働いて半年が過ぎようとしていた頃だ。ちなみにその間食料はドラゴンに戻り遠くへ飛んで調達していました。

今日は点呼係だったので皆の点呼をつけてミレーナさんの部屋に報告に行くと、なにやら部屋が慌しい雰囲気だった。

「駄目ね。あの場所に適応できる子たちなんていないわ。どうしましょう」

「彼女なら続くと思ったんですけど・・・申し訳有りません。私の人選が悪かったんですね」

「いいえ貴女の責任ではありません。あなたは良くやってくれているわ。それに彼女達も年頃の女性だから耐えられなかったのでしょう。仕方のない事よ」

ミレーナさんとマダムが困った様子でため息をついている。

これは邪魔しちゃいけないなと小さく「しつれいします・・・」といって扉を閉めようとしたが、マダムとばかり目があってしまった。

それに気づいたミレーナさんも私のほうに視線を向ける。

あれ、デジャヴ？

「あら、もしかして点呼のことかしら」

「はい、全員の点呼を取りましたので報告に来ました」

「ごくろうさま。すぐに皆掃除にかかってちょうだい」

はいもちろんですともと今度こそ扉を閉めて出て行こうとしたら、マダムに止められた。

「ヴィト・ティエヌ。貴女にお願いがあります」

その言葉にミレーナさんも「マダム!？」と驚いていた。ああ嫌な

予感しかしないよ。

「な、んでしょうか」

「実は第四騎士隊寮配属の使用人が突然辞めてしまったのです。今日中に何とかその子の埋め合わせをしなければならいのですが、いにく適任者がいません」

それを私がやれと？そうおっしゃるのですねマダムよくわかります。その強面の鋭い視線で見つめられたらまるで蛇に睨まれたカエルのように動けない。

しまった、正確には蛇に睨まれたドラゴンか。

「ですがヴィトはまだ半人前です。この子に勤まるかどうか・・・」

「大丈夫ですよミレーナ。この子はどんなことでも人並みにできます。秀でたところはないですが、要領がいいのでしょう」

それは所謂手先は器用だけど何も出来ない凡人と言う事ですか？褒められているのか褒めていないのかわからない。

「ええっと、その・・・突然辞めてしまわれたんですか？」

騎士隊寮配属の使用人と言えば人気配属場所じゃないですか。シフオンの姉も第一騎士隊寮配属で彼女も懂れていたし、使用人の間でも国を守る騎士というお姫様を守るナイト的な存在に黄色い声を出していた。第三騎士隊寮配属の子なんて騎士隊の人との噂がある程だ。それなのにどうしてだろう？何かあったのだろうかと思わずにはいられない。

マダムは小さくため息をついた。

「最初から隠していてもどうしよありません。正直に言いましょう。第四騎士隊寮に配属になる子は次から次へと辞めていってしまうのですよ。第一隊、第二隊、第三隊の騎士寮配属の使用人は良くやってくれていますが、彼女らのように適応する人が現れないんです。だから第四騎士隊寮配属の使用人は入れ替わりが激しい」

「辞める理由ってなんですか？」

騎士寮と言うからには屈託な騎士や兵隊達がいるだろう。憧れとは言ってもその中でひとり女子として働くのは確かに過酷だ。それも

年頃の乙女なら尚更のこと。

「あのね、その・・・はつきり言うとか、汗臭いのよ」
え？

「彼らは日々国のためにと鍛錬していますからね、それに第四騎士隊寮はドラゴンライダー専用の寮です。他の騎士達とは違う甲冑を着てドラゴンの背にのりますから、特にこの時期は蒸れるのですよ」
要するにそんなむさ苦しい寮の掃除をする仕事らしい。食堂やお風呂、各部屋やトイレ等は彼らが分担してやっているようだが、窓や床、談話室の掃除などはマダムのところから使用人が派遣されて掃除しているらしい。城ほど大きくないとは言ってもそれらの掃除を毎日鍛錬のある彼らで行うのは大変なのだろう。

「それは、ひとりでなくてはいけませんか？」

疑問だった。そんなに辛い仕事なら数人係でやった方がもっとマシなんじゃないかって。

「以前3人ほどでやらせた事があります。しかし1人の時よりも辞める日数が短いのです」

「ひとりが言い出すとほかも辞めてしまうの。そうなるこっちの手がいくつあっても足りなくなるわ」

ああ、ひとりが「ねえ、もうたえられないよ。辞めようよ」「え、でもせっかくお城に勤めることができたのに」「・・・実は私も限界だわ」「・・・そうね、やっぱり辞めたほうがいいのかもね」パターンか。相談する相手がいるほど結論は早く出る。しかしひとりとなると本当に辞めるかどうか葛藤する時間があるから日数が長くなるのだろう。・・・それって結局はどっちも辞めるんじゃないか。
「無理だと思ったら戻ってきててもかまいません。せっかく確保した人員を手放したくありませんからね。ただ次の配属者が決まるまでお願いしたいんです。急な事なので私達も戸惑ってるんですよ」
なんと、マダムが私にお願いをしている。

こう言われてしまえば断れないのが日本人の性というものか、それとも本当は自分はお人よしだったのか。いや実はドラゴンライダー

というものの存在が凄く気になっていた。以前空を飛んでいたのはドラゴンに乗っていた人間だ。もしかして彼らがそうなのかもしれない。そこに配属になればもしかしたらドラゴンを垣間見る事ができるのでは。実は自分以外のドラゴンに会ったことがないのだ。かなり興味がある。

汗臭いのはそりゃ私も気になる。だが彼らの洗濯が仕事内容に入っていないだけはマシだと思った。

だから私はマダムの言葉に、頷いた。

ってか私って緊急事態用の人材なんですかね？

隊長さんはわたがしふわふわ。おいしそう。

私は第四騎士隊寮に配属する事に決まりましたが、正式には第四騎士隊長の下配属になるそうです。しかもここの隊長さんはかなり変わった人らしい。

マダムから教えてもらった仕事スケジュールはこうだ。

朝早く起きて隊長さんを起こす。もうこの時点でおかしいだろ。侍女じゃあるまいしただの掃除係の使用人になんつうことをやらせてんだ。

だが隊長さんはかなり寝起きが悪く、私が起こし続けてかつ副隊長さんが起こしに来るとやっと起きるらしい。なんて面倒な人なんだ。そして隊長さんを見送った後隊長さんの部屋の掃除、隣にある副隊長さんの部屋の掃除も行う。彼らが朝食をとっている間にそれを済ませると、食堂に行って軽い朝ごはん。

後の掃除は全面的に私にまかせるのだそうだ。

廊下や窓拭き、談話室と装飾品の埃とり。ひとりでするにはかなり時間がかかるが、どんなに時間がかかってもいいとから言われている。

夜は暗くならないうちに部屋に戻るのは絶対らしい。夜はたまに酒盛りをするので女が居たら危ないのだそうだ。なんてスリリング。食べられる前に食ってやる。あ、そうならもう城にはいられないか、気をつけよう。

とにかく注意事項とやるべき事は聞いてきた。

そしてこれから出勤である。掃除道具は寮にあるから手ぶらだ。持っていくのは覚悟だけ。なんか私カッコイイ。

教えられたとおりに城内を歩き、寮を目指す。私がいつも働いているところより随分離れているせいか少し不安になるが、寮が見えてきた頃にはほっと安心した。

四つ寮があり、随分大きい。寮に使っている敷地は城より大きいんじゃないかと思う。やっぱり騎士さんたちだからかな。騎士と言っても私のように平民出もいるし、貴族出もいるらしい。

とにかく一番左の寮が第四騎士隊寮だ。寮の中央にでかでかと”四”とかいてあるのでわかる。

まだ眠っているのだろうかあたりはしんとしている。扉を開けると玄関ホールが現れた。その向こうは談話室になっているのか大きく開けた部屋がある。確か隊長さんは四階の角に住んでいるらしい。階段で四階まであがって突き当たりの部屋を目指す。二階と三階は他の騎士達が寝泊りしているらしい。一階は食堂や風呂などの公共施設。

隊長さんの部屋につくと預かった鍵をゆっくり差し込んでまわす。かちやりと音がして錠が外れた。少し緊張しながら扉をあけると、まず目の前に大きな机が現れた。辺りを見渡すと品の良いシンプルな仕事部屋だ。本棚にはたくさんの本が詰め込まれているし、机には書類がたくさん置かれている。散らかっているようで散らかっていない。なんだか不思議な空間だ。

寝室は右隣の部屋だ。ここは鍵が閉まっていないので簡単に開く事ができる。

怖い人だったらどうしよう。きもいおっさんだったらどうしようと（失礼）。ときどきする。

失礼しますと小さな声で寝室へ入り、扉を閉めた。

大きなベッドが部屋の中央に置かれていて、人の形にシートが盛り上がっていた。やはり眠っているのだろうか。本当に起こして良いものなのだろうか。

とりあえず天気がいいので窓をあけよう。ベッドを通り抜けてカーテンを開け金具を外して窓を開け放つ。どうやらここからバルコニーに出れるようだ。バルコニーからは何やら灰色の建物が見える。動物舎のような建物で嚴重に作られており警備もしてある。もしかしたらあそこにドラゴンがいるのだろうか？

凄く興味がある。

だが今は隊長さんを起こすのが先だ。

外の空気を吸い、意を決して隊長さんの寝ているベッドへと近づく。おそるおそる顔を覗きこむところを背けていて見えないが、落ちていた若草色の長い髪がシーツの上を流れている。

一瞬女の人かと思ったがこんな所に女性がいるわけないとそつと肩に手を伸ばす。

「隊長さん」

そう言えば急いでたからマダムから名前すら聞いてないな。ま、別に私は困らない。

ゆさゆさと肩を揺り動かすが、規則正しい寝息が聞こえるだけだ。

「隊長さん、隊長さん」

今度は思いつき強く揺らして見た。だが駄目だった。

どうやらマダムの言っていたことは本当だったようだ。

これは骨の折れる仕事だなあ。早く副隊長さんが来てくれるといいんだけど。

「隊長さん！ た、い、ちょ、う、さ、ん！・・・おい隊長さん！ 奇襲ですよ！」

あの手この手を使って見たが全く持って無駄だった。こりゃ使用人が辞めて言った原因にこの隊長さんも含まれてそうだ。

20分ほど起こし続けたが全く起きる気配の見せない隊長さんに呆れた私は休む事にした。勝手にベッドに座っても起きないのは実証済みだ。いいベッドだな。こんなふかふかのベッドで眠りたい。

それにしてもどうやって起きるんだろう？

「ドラゴンにでもなって踏み潰してやろうか」

そうすればさすがの隊長さんも起きるかもしれない。なんて馬鹿なことを呟いたときだった。

左腕が、何かに掴まれた。

——え？

のろのろとした動作で避けようと思えば避けられたのだろうが、私

は驚いて固まってしまっていた。

私の腕を掴んでいるは一体誰？

答えは簡単だ。ここには私と隊長さんしかない。

私の腕を掴んでいるのは紛れもなく隊長さんだ。

眼をさすりながらゆっくりと身体を持ち上げるとシーツが身体から滑り落ちて行く。ベッドの上に波打っている、ゆるいウェーブのなかった髪も動きに合わせて流れる。

長い前髪が目元を覆っておりその奥の瞳を見る事は出来なかったが、すっと通った鼻筋と輪郭、張りのあるミルク色の肌から思ったよりも年齢が若い事に気付いた。

隊長さんというぐらいだから中年のおじさんを想像していたのだがどうみても三十は超えてない。むしろ二十前半。

私の腕を掴んでいるその手も、男の人にしてはかなり女性的だ。しかしやはり鍛えているのか掌は硬かった。

そして私がなにより一番言いたかったことは。

———この人、すごくおいしそう。

もしドラゴンの姿だったらぱくりとそのまま食べていたかもしれない。考える暇も無く、本能で。

ふんわりと流れる若草色の髪から、足の爪の先まで、全部が魅力的で仕方がない。

まるで恋する乙女のようにどきどきと胸が高鳴っている。わかるだろうか、最高級食材を目の前にした時のあの高揚感。

今まで出会ってきたどんな人間よりもおいしそうで、私の理性を破壊しようとする。

自分でもわからない。どんな表現でこの気持ちを表したらいいかわからない。

ただ、ひとつだけ思う事は。

—— いつか ぜったい たべる 。

味わって食べる。ゆっくり食べる。でも一度で食べるのはもったいない。何日もかけて食べる。むしろ小分けして保存しておきたい。いややっぱりひと思いにぱくつと。いやいやいややっぱりもったいない。まず手足にかぶりついて次に胴体だ。それとも頭から最初に食べる？ 血の一滴すらもったいないから全部啜った後でもいいかもしれない。味わうために生かしておいてしばらくは血だけ吸うつてもアリだ。断然アリ。異議なし。

いかん、よだれが。

理性との格闘と本能に忠実な妄想をしていた私をよそに、隊長さんは背伸びをした、もちろん私の腕ごとだ。

「・・・？」

そこできるよう私の存在に気付いたのだろう、不思議そうな視線が、自分が掴んだ腕から私の方へと向く。そしてゆっくりと首を傾げた。そうだ。ここだ。ここで自己紹介をするんだ私。今を逃せばきつと不審者だと思われてしまう！

おいしそうだと思っていた事がばれるかもしれない。よだれ出てないよね？

左腕が宙にういたまままで変な格好だが焦らず慌てず私はお辞儀をした。

「・・・今日から第四騎士隊寮の配属になりました使用人のヴィン・ティエーヌと申します。不束者ですがどうぞよろしくお願い致します。

す」

言うと、隊長さんは腕を離してくれた。

「また変わったの」

全くもって興味の無さそうな声である。それもそうか、この第四騎士隊寮の使用人は入れ替わりが激しい。

隊長さんは欠伸をかみころしてベッドに座りこむ。まだ寝ぼけているのか動作はぎこちないが隣にある小さな引き出しから髪留めのようなものを三つ取り出す。長い髪を手櫛で整えると三つに分け、それを器用にもみつあみに編み込んでいく。

あ、この人みつあみの人だ。

私はようやく気付いた。時折城内で見かけるみつあみの人だよこの人、間違いない。

髪が長いし編み込んでいるし体格も細身だったから女の人と思っていたが、シフォンに聞くと「あの格好は騎士さんだから男のひとだよ」と言われた。よく観察してみれば確かに軍服のような真っ白い制服を着ていた。

城内で見つけてしまうと目が行ってしまうのだ。その理由はたぶんこの人の髪の毛にあると思う。みつあみを三つ、編みこんでいるのだ。

最初見かけたときは癖っ毛の強い短髪かと思ったが、よく見れば太ももまで届きそうなみつあみが両耳の後ろと後頭部に合計三つ、編みこんであるのだ。二つや一つのみつあみは見た事はあるが、三つのみつあみは見た事がなかったから物珍しさについて目が追っていたのかもしれない。

だから私はこの人を見かける度に心で”みつあみの人”と呟いていた。ここまで伸ばすのには相当な時間が必要だろう。女の人でもここまで長いのは見た事がないし、ましてや男の人だ。それも似合っているから不思議である。

そんなことを思い出しているうちに、隊長さんは器用にも寝てしまった。まだ眠たかったのだろうが、あみこんでいた両手はそのまま。どうしたものかとため息をつく。「隊長さん」と何度か呼んだがやはり起きてくれず。

こんなに無防備だと本当に食べてしまうぞこら。
仕方ないから肩を掴み揺さぶり起す。

「隊長さん隊長さん、みつあみ途中ですよ。良いんですか。ていうか手櫛だけじゃ痛みますよ。せっかく櫛あるのに・・・」

先程ちらりと小さな引き出しの中を見たが、女性が使っているような櫛が奥の方に入っていた。櫛は髪を梳かすためのものなのに使っていないとはもったいない！

しかも装飾がシンプルながら豪華だった。誰かからプレゼントされたものだろうか。

肩を揺さぶると隊長さんはようやく起きた。

安堵したのも束の間、引き出しの奥から櫛を取り出すと「ん、」と私に差し出す。しかも先程の髪留めごとだ。

・・・もしやこれは、私にやれと？ってかさっきの聞こえてたんだ。寝てたかと思ってたのに。

立ったままは辛いがやってやろうじゃないか。男の人の髪の毛に触るなんて初めてだ。櫛で長い髪を梳くと、どんな手入れしてんだ！と叫びたいほど梳きが良かった。ぶっちゃけ今の私の髪はごわごわである。そのためいつも二つ結びをして広がる髪を押さえている。

だから羨ましい。

しかしこの絹のような流れる髪は何なんだ。世の女性たちが見たら嫉妬ものだぞ。

あらかた髪を梳き終わるとみつつに分け、絡まないように編み込んでいく。長い髪は毛先の方で絡まりやすいのだ。それに頭の上半分の髪は耳が隠れるぐらいだが、短髪に見えるほど短く切っているため、それごと巻き込んで編み込んでしまうとのっぺりした髪型にな

って滑稽なものになってしまふ。注意しながら三本ともみつあみを終えると、我ながらいいんじゃないのできである。こんなに長いみつあみを編み込んだのは初めてだ。何やら不思議な達成感がある。「隊長さん、終わりましたよ」

また眠りこけていたのか頭が傾いている。それでも私が編み込んだみつあみをみて満足げに頷くとうとうやく立ち上がった。うひゃ、背、たか。

遠くからしか見た事がなかったが、これはかるく20cm差はあるんじゃないか。そもそもこの世界の男の人って背が高いよね。何でだろ。いつも女の人がいる職場でしか働かないからたまに男の人の隣に立つと本気でビビる。ロイさんは小さい方だったからそれほど驚かなかったけど。

隊長さんは着替えるのかクローゼットの方へ歩き出している。

私はどうすればいいんだ。

そうか、これは後ろから襲って下さいと言っているようなものなんですね、わかります。……ってなわけないか。

そんなくだらないことを考えていた時に、扉のノックになる。返事はないものだ知っているのかすぐに誰かが入ってきてクローゼットに手をかけた隊長さんの姿を見て驚いていた。

「ルー隊長がこの時間に起きているとは珍しい」

私は貴方に驚きましたよ。

もしかしてこの人が副隊長さんなのだろうか。一目見ただけで子供が泣きそうな容姿である。

扉すれすれの長身に顔負けの強面、悪く言えば今から10人殺してくるぜ！と言わんばかりの凶悪的な顔だ。声もどすの利いた低い声。しかし着ている服装は軍服で、腰に下げているのも紛れもない剣だ。副隊長さんは私の方をぎろりと睨みつけるように視線を向けた。実際睨みつけたわけじゃないんだろうが、私はそう感じた。怖かった。

「貴方が新しい人か？」

「はい。ヴィト・ティエーヌと申します」

「ヴィトさん、よければ聞きたいのだが。どうやってルー隊長を起こしたんだ？」

どうと言われても。普通に肩をゆすって起こしましたけどと言うと副隊長さんは「ふむ」と不思議そうに首をひねっていた。

「おかしいな。ルー隊長はめったなことがない限り起きないんだが」「めったなこと、ですか？」

「ああ、そうだな、戦の前や飛行訓練がある日は今日みたいに早く起きている」

今日がその飛行訓練の日では、と聞いたがどうやらスケジュールでは普通の訓練があるだけらしい。

「名乗るのが申し遅れてすまない。私は第四騎士隊副隊長のアドルフ・デュフォーだ」

私も改めて自己紹介をしなすと、副隊長さんはマダムと同じ仕事内容の事を説明してくれた。

そして最後に私の前任の子について言いにくそうにしていたから、安心させるように笑って言う。

「大丈夫です。全てマダムから聞いてますから。精一杯務めさせて頂きますのでよろしくお願い致します」

「そ、そうか。それは心強い。だが無理はしないでくれ。何も相談なしに突然辞めて行かれるのはこちらも困るものでな」

そりゃ困るな。しかし突然辞めるほど前任の子は追いつめられていたのだろう。そんなに辛い仕事なのか・・・覚悟を決めなくちゃいけないな。

副隊長さんはもういちどよろしくたのむと言った後に部屋から出て言った。

後ろでござそと隊長さんが着替えているが別段気にしなくていいらしい。いや私が気になるだろ、ほら一応仮にも乙女だし。

隊長さんは何事も無いいつもの軍服に着替え終わるとそのまま部屋を出て行った。

まだ眠たそうだった。

誰もいなくなった寝室を見渡す。特に散らかっているわけでもないしベッドメイキングをしてほり取るぐらいでいいだろう。仕事部屋はあまり扱うと書類がばらばらになってしまうからそれは避けて掃除を行った。

それが終わったら今度は副隊長さんの部屋だ。勝手に入っていいとのことが入って見ると、外見に似合わずしっかり整理整頓されていた。

私が片付けなくてもいいぐらい綺麗だった。が、仕事は仕事、ちゃんとやりましたよ。

隊長さんと副隊長さんの部屋の掃除が終わるとようやく朝ごはんの時間だ。廊下から窓の外を見るとそろそろと同じ服の男の人たちが寮からどこかに移動していた。きっと今から訓練なのだろう。と言う事はこの寮はからっぽだ。

一階の食堂に降りると、料理人さんが手招きしてくれた。おじいちゃんぐらいの歳の男の人だった。

「新しく来た子かい？」

「はい、ヴィト・ティエヌと申します。よろしくお願いします」

「わしはナツソと呼ばれておる。好きに呼んでくれ」

ナツソさんはもじゃもじゃの白い髭を撫でてにかっ、と笑った。笑顔が似合うおじいちゃんだ。

促されて着いた席には朝食が作られていた。焼きたてのパンに具だくさんのスープ、それにサラダとお肉だ。朝からお肉。たんぱく源は大切ですからね。少し量は多かったがとてもおいしかったので完食した。

「細っこい身体なのによく食べるのう」

「少しは遠慮した方が良かったですかね・・・」

だっておいしかったんだもん。おいしいものは全部食べる。これは私のポリシーだ。エネルギーにはならないけどね。

ナツソさんは豪快に笑って私の肩をばしと叩いた。少し痛い。

「たくさん食べるのはいい事じゃ！今までのじょうちゃん達は食が細くての、いつもはこの半分ぐらいしか食べておらんかった」

「え、そうなんですか」

そう言えばシフォンもアリアーデも私に比べたらあまり食べていなかったような気がする。もしかして私って大飯ぐらいなのだろうか。サウスほどじゃないんだけどなあ・・・。

「お前さんがどのくらいの量を食べるか見て今後出す量を決めようと思ってたがのう、この様子じゃあいつらと一緒に量を出してもじょうちゃんならぺろりと平らげてしまいそうじゃ」

それはさすがに無理ですよー、とは言ったが食べれそうな気がする自分が怖い。

騎士様たちはお暇なようで。

第四騎士隊寮に配属になって数日が経ちました。

今までここを辞めて行った子たちはおそらくこれが原因だったんだろうと初日で気付いたことがあった。

それはやはり匂いだ。男性特有の匂い。悪く言えば加齢臭なのだが、この寮にいる人はだいたい10代後半から40代の男性だから仕方の無いことだろう。それに彼らにとって訓練から帰ってきて汗だくのまま寮内をうろつくのは当たり前のことであり、自身自分の匂いなんて気にはしないだろうし。

だけど年頃の乙女には少々辛いものがある。皆は懂れているけど、こんなに大勢の男の中で一日中仕事をしなくてはならないのはある意味地獄だろう。むしろ恐怖を感じていたのではないか、と私は思う。

しかし毎日満員電車で鍛えられた私にはさほど気にはならなかった。（なんと私は学生だったらしい）シフォンから餞別に貰ったポプリ系の香りのついた袋を貰い、それをいつも首にかけているからものと気にならない。

男達に恐怖を感じるかと言えばそれも無い。私を誰だと思っている人間じゃないんだぞ。やろうと思えば彼らを踏みつぶしこの寮を破壊尽すことなんて容易いことだ！訓練された騎士達だからどこまで立ち向かえるかはわからないが、散々暴れまわったあげく逃げるにとぐらいはできるだろう。

その時はぜひ隊長さんをぱくりと食べていきたいものだ。
いかん、よだれが。

今日も今日とて掃除に勤しんでいた私だが、最近視線が痛くて困っている。

それも決まって廊下の窓掃除をしている時だ。談話室から丁度見える位置にいるためか、誰かの視線が刺さって仕事がしにくいつたりやありやしない。

今日も掃除をしているとまた突き刺さるような視線が背中に刺さる。目立たず何事も無く一日を過ごしたい私は自ら火の中に飛び込む真似はしない。だが気になって仕方がない。これではろくに掃除もできないのだ。

私はひとしきり窓を拭き終わると後ろを振り向いた。もちろん、視線を感じる方にだ。

そいつらは談話室のソファでゆったりと座っていた。訓練が終わり一息ついている時間帯だからだろうが、私と視線が合うとにやにやと笑いながら仲間同士で何か話している。そしてその中のひとりがソファから立ち上がると私の方へ近づいてきた。

うわ、振り返るんじゃないかった！

燃えるような赤毛の短髪のその人はすぐ目の前まで来た。やはり背が大きいせいで私は見上げる姿勢になってしまう。

釣り上った茶色い瞳はねっとりとした視線を寄こしてくる。気持ち悪い。ただのシャツなのに着崩した感が妙に色気を醸し出していて女の人と遊んでそうなイメージが拭えない。

「よお、あんたが新しく入った子だろう？俺様はステファノス・デユラン覚えて置いて損はないぜ？」

「はあ、」

「おいおい名乗ったんだからあんたも名乗ってくれよ。それとも俺に名乗る名なんてねえのか？」

なんだこのからかわれる感じは。へい！嬢ちゃん！一緒にお茶でもどうだい？OH！まだ子猫ちゃんじゃないかこりやまいったぜH A H A H A H A！！みたいにかからかわれてる感じ。

「ヴィト・ティエーヌです」

「ヴィトちゃんね、覚えた。あんたはいつまでもつか楽しみだ。せいぜい楽しませてくれよ?」

それはどういう事だろう。首をかしげて考えていると隣からまた別の声が聞こえてきた。

「ステファン、お前たちちよつかいをかけてるのか」

世のおばさんたちに好かれそうな好青年のお出ましである。マダムキラ―と呼んでも良いですか。

澄んだ水色の髪を後ろでひとつに束ねており、同じ色の瞳は呆れた様子でステファノスさんを見ていた。どちらも冷たい色にも見えがちだが、そんな事を思わせない優しい声を持っている。

ステファノスさんは面倒な奴が現れたと見るからに嫌そうに顔を歪めていた。もしや天敵ですか。

「今度は何日持つか仲間と賭けてんだよ。オジヨウサマたちはこの仕事随分お嫌いな様子だからな」

「それ本人に言ってしまったら賭けにならなくなります?」

思った事を素直に言くと、ステファノスさんはそれもそうだと笑った。

「ヴィトさんと言ったね。君もこいつの言う事は気にしないでいいから。気にするだけ時間が勿体ない」

ステファノスさんから私を庇うように前に立ってくれた。やっぱり背がたかいな。ステファノスさんほどじゃないがこの人も随分高い。んで二人ともおいしそう。・・・あちゃ、またドラゴン脳で考えちゃったよ。うん、仕方ないよ。ステファノスさんは火の精霊の加護を受けてそうだしマダムキラ―好青年は水の精霊の加護を存分に受けてそうだ。髪の色でどの精霊の加護を受けているかわかる人もいるって聞いたし。

ということは隊長さんは風か? いやでも風はもつと濃い深緑の人だったような。まあいいか、おいしそうなのに変わりはないんだ! なんてことを考えていた私ですが、二人は二人で小さな喧嘩をしていた様子です。なんかラウとシロ思ひ出すなあ。

「随分ひでえこと言いやがるなランス」

「だったら日々の態度と言動を良く考えて行動しろ」

「はいはいわかりましたよーじゃあまたなヴィトちゃん」

また会うんですか。まあここにいたら否応にも会うか。

ステファノスさんは悪態をつきながら談話室に戻って行った。

「あの、ありがとうございます」

「気にしないでいい。それよりすまない彼はいつもあんな感じなんだ。君にちょっかいをかけないよう再三注意しておくよ」

安心させるような微笑みは美形に入る部類で、私は直視できませんでした。なんだかんだ言ってステファノスさんも整った顔立ちをしていたし、隊長さんほどじゃないけどおいしそうだったし。……。いかん、また考えてしまった。ああもう考えないようにしてるのに。

「自己紹介が遅れたね、私はランス・ルクレール。第四騎士隊の第一小隊をまかされているものだ」

おお、小隊長という肩書きですね。かつこいいな。

この後はランスさんにこの騎士さんたちの扱いを教えて貰いました。好意をもって話しかけてくる人もいるらしいんだけど、さっきのステファノスさんのようにからかってくる人もいるらしい。女の人もないので襲ってくる人もいるから気を付けて、だって。大丈夫です。食べられる前に食べますから。

だってこの人達全員おいしそうなんだもの。

今日も朝から隊長さん起こしの日課です。

2日目に起こしにきた時は聞いていた通り隊長さんの寝起きはかなり悪くて全然起きてくれなかった、呆れた。

どうして1日目は起きてくれたんだろうとその日の再現を試みる

とあっさり起きてくれるからビックリだ。

あれから何度かためしたが、ようやく理由がわかった。

隊長さんが起きるのにはとあるキーワードがあったのだ。よく考えて見よう。隊長さんが朝早く起きるのは戦の前か飛行訓練がある日のみ。そして1日目私がとった行動を比べて見ると、ある共通点がひとつ浮かび上がる。

それは”ドラゴン”。

副隊長さんに聞いたところ隊長さんは大のドラゴン好きだそうで。

だから第四騎士隊に入団したそうだ。しかも実力もあってか若干22歳にして隊長である。若すぎだろ！

他の隊もそうなのかと思ったがそうでもないらしい。だいたい30、40代前後の人が隊長を勤めているようだ。そんなものかと思ったが、戦争と言うものは体力勝負だ。もちろん隊長さんたちも戦で戦うだろう。特に特攻隊のような役目の第四騎士隊では長年の経験よりも実力の方を優先しているらしい。だから他の隊に比べて血の気の若い人が多いんだそう。

と言うことはだよ。隊長さんてこの隊の中で一番強いって言うことだよ。

……全然見えません。むしろ副隊長さんの方が見た目的にも怖そうで強そうだよ。

”ドラゴン”と言うキーワードを言えば隊長さんは毎日起きてくれるようになりました。これは反射神経なんですかね？

そして毎朝私がみつあみを三つ、編みこむのも日課になってしまった。隊長さん、ただ自分でするのがめんどくさいからじゃないでしょうね。

私がいいつもおいしそうな目で貴方を見つめて———ごほん。ベッドメイキングをしている間に後ろで着替えているのにも随分慣れました。終わる頃には勝手に部屋を出るので静かにそれを見送るだけです。それまで部屋の整理整頓をします。

今日のナッソさんの朝ご飯は何かな、と考えながらシーツの皺を伸ばしていたら。

「ヴィト」

ふいに名前を呼ばれて、隊長さんは着替え途中なのにそのまま振り向いてしまった。だって名前を呼ばれたの初めてだ。

後ろには上着を羽織ってボタンに手をかけている隊長さん、ああ裸じゃなくてよかった。でも初日以来に目が合ったような気がする。もともと前髪でばっさり目隠れしているから見えないんだけど。

何色の瞳してるんだろう。やっぱり髪の色と同じ若草色かな。

低くもなく高くもない声色は心地よい。ランスさんのような優しい声色じゃないけれど、少し掠れたような隊長さんの声が私は好きだった。いつもは無口だし、あまり喋らないし。

だから私に声をかけるなんて珍しくて。つい身構えてしまう。もしかして毎朝おいしそうだなあと視線を送っていたのばれた？

「・・・ステファンに、ちよっかい出されて、ない？」

ステファノスさんの事ですか。よかった。

「あ、はい。もう大丈夫です。・・・あの、でもなぜそれを」

「ランスから、報告があつて」

わざわざ報告してくれたのか。ほんとうにランスさんは好青年な人だな。嬉しいけどそこまでする必要はあるだろうか。あれから時々ステファノスさんには会うが思いのほか平然と仕事を続けている私に驚いている様子で、それからちよっかいを出さなくなった。賭けに負けたぜ。とか言っていたが、ほとんどの人がすぐ辞めるに賭けていたんじゃないですかと返すと苦笑いをしていた。

「気にかけて頂いて、ありがとうございます」

確かにここに配属されているがもともと管轄が違うのだ。私ひとりを気に留めてくれた事は素直に嬉しい。

「んー・・・隊長としての、勤め？」

隊長さんもいろいろ考えてることあるんですね。いつもぼうっとしてるから何も考えてないと思っていましたごめんなさい。

だって隊長さんったら何も無いところで躓いたり、平気で何時間も空を見上げて立ってるんだよ。ここの人もそれが当たり前なのか気にも留めないし。

本当にどうしてこの人が隊長になれたんだろうと疑問だよ。実は羊のくせして狼なんですか？ そうなんですか？

とにかく、つかみどころの無いまるで雲のような人だ。

・・・訂正しよう、おいしそうだからわたがしみたい人だ。

「グイト、ドラゴン、好き？」

そして一体今までの話からどうなったらそうなるんだという質問をしてきた。

隊長さんの頭は何を考えているのか到底わからない。

「ええ、好きです」

だって自分の事だ。そりゃ大好きだ。頑丈な鱗は剣を通さず寒いときは火を吹いて焚き火ができる。何より空を自由に飛べるのは気分がいい。最近は飛べていないけど。

隊長さんは私の答えを聞いて嬉しそうにはにかむ。目元は見えないからわからないが口が弧を描いていたので嬉しいのだろう。

「ドラゴンの舎、案内してあげる」

——え？

アースドラゴンとヒトの歴史。

ドラゴン舎は危険を伴うためか、たくさんの警備の人が置かれていた。特に舎の中の人はそれぞれが警棒のような長い棒を持っている。これは魔法を使う事に長けていない人でも簡単に電撃が起こせるらしく、ドラゴンが暴れたときなどにこれで大人しくさせるらしい。人間に使うと丸こげになってしまうから要注意だ。

そう言えば今まで触れなかったけど、この世界では思っていたよりも魔法が発達していない。魔法を使うのに長けた人を魔法使いや術者と言うのだが、そういう人は魔力が強くないとだめで、また制御するのに難しいためあまり数はいないそう。ただそういう人たちが魔法具を開発して世に広めたりはするため、先ほどのような電撃棒がある。日常生活でかかせない私達にとって科学の文明が、彼らにとっては魔法に置き換えられているのだろう。

隊長さんに連れられてドラゴン舎の中に入ると狭くも広くも無い丁度良いスペースの小部屋に一匹ずつ収まっていた。まるで牛舎のようにつくりになっているが、お互いが見えないように頑丈な仕切りがしてある。

聞くところによると100匹以上はいるそうで、野生でつれてきたものもいれば、交配させて赤ちゃんから育てたものもいるらしい。ドラゴンはファイアドレークと言う種で火は吹かないが空は飛べるドラゴンだ。他のドラゴンに比べて知能が低いため躰さえきちんとすれば言うことは大抵聞いてくれる。

大きさは像くらいだろうか、ドラゴンのときの私よりも細身で一回り小さい。岩肌を思わせる凹凸のある鱗はどんよりとした鈍色の空色だった。真紅の目は細く、凶暴そうな顔をしている。例えるならワニの頭だろうか。歪にぎざぎざと並んだ歯は鋭い、噛まれたらひとたまりもないだろう。翼はコウモリと似ており翼の骨格には薄い

が丈夫そうな膜が張っていた。決して愛嬌のある顔とは言えないが、私以外の種のドラゴンと出会えて感動していた。

しかしやはりそれほど知能は無いためか言葉を交わすことは難しいらしい。

『眠い』『疲れた』『腹減った』『いらいら』『満足』

聞き取れる言葉はコレだけだ。主語もなければただの単語だけ。隊長さんの見ていないところで話しかけてみたが、何の反応も無い。残念だが話すのは諦めた方がいいかもしれない。

隊長さんはあるファイアドレークの小部屋に入ると、横たわっているドラゴンの頭を優しく撫でた。

ドラゴンも細い目をもっと細めている。もしかして隊長さんのドラゴンかな、と思って聞いてみたが副隊長さんのドラゴンらしい。

「俺に、特定のドラゴンはいない」

少し寂しそうな声色だった。

ドラゴンライダーには絆するパートナーとなるべきドラゴンがいるのでは？

後から聞いたのだが、隊長さんのパートナードラゴンは1年前の小規模な戦いで死んでしまったらしい。それ以来特定のドラゴンは作らず他の隊員のドラゴンや予備のドラゴンで戦に出ていると。

人間とドラゴンの間には絆が生まれるのだろうか。私は不思議に思っていたがここにきて変わった。自分のドラゴンに会いにきている隊員達や、たとえば言葉はわからなくてもドラゴンたちも彼らを受け入れているのがわかったからだ。人間とドラゴンは共存し合える存在なのだ。

——だがそれは私には当てはまらない。私は生きるために人間を食べるから。

そう考えると、少し彼らが羨ましくなる。

隊長さんとファイアドレークを見ていると、ふいにファイアドレークがぐるぐると唸る。

『痛い痛い、足、痛い』

他に比べたら随分か細い鳴き声だ。思わず心配になって。

「足怪我してるんですか？」

と聞くと隊長さんは少しばかり驚いた様子で私の方を見た。

「わかるの？」

ああしまった。

「えっと、随分弱ってるようなので、あの、それに足を庇っているような」ないような。なんとかごまかそうとありきたりの良い訳を言いつくろって見るが隊長さんは全く疑っていないのか「ヴィトは良いヒトだね」と口元でふんわり笑うだけだった。なんだか騙してる感が否めない。

ここには他にもワームという種やバジリクスなんてのもいるらしい。まあバジリクスにいたっては犬程度の大きさなので貴族に飼われている。一度会ってみたいな。

ドラゴンのことを話す隊長さんはきらきらしてて本当においしそ——見た事の無いほど輝いていました。

「ドラゴンにもたくさん種類がいるんですね」

「実際ヒトが手懐けられるのは、ごく僅か、だけど」

そうだ。隊長さんに聞いてみようか。そうしよう。

「隊長さん、”アースドラゴン”って知ってますか？」

そう言うと、隊長さんは今までで一番の笑みを口元に浮かべた。

「伝説の、ドラゴン。憧れる、よね」

何だこの輝きよう。まるで恋する乙女じゃないか隊長さん。なんだかこっちが恥ずかしくなってくるよ。

本当にドラゴンが好きなんだなあと思いつながらその横顔を見つめていると、隊長さんの向こうに副隊長さんの姿が見えた。

こちらに気づいたらしく近寄ってくる。

隊長さんはドラゴンの世話係りの人と話しを始めたので副隊長さんは私の方へ来た。

「もしかして隊長に連れられてきたのか？」

頷いて疑問に思った事を口にする。

「あの、私の前任の人たちもこういう、ドラゴン舎を案内してもらったことってあったんですか」

「・・・ないな。いや、何度かあったが、皆顔を青ざめて倒れたり逃げるように走り去ったっていたな。むしろ私が聞きたいんだがヴィトさんはドラゴンを見て怖いと感じないのか？」

え、私と違う思っていたような姿ではなかったけど、別段怖さは感じない。だって同じドラゴンの種だ。初めて会った同胞に感動さえ覚える。

しかしここは仮に年頃の乙女として怖がったほうがいいのだろうか。「本当はすごい怖いですきゃー」無理だ。すぐばれてしまうだろうからやめた。

「怖くはないです。むしろ獰猛だと聞いていたのでこんなに近くでドラゴンを見る事ができて感動してます」

「ふむ、珍しい人もいたもんだな。だが私達にとってはありがたい。第四騎士隊はドラゴンを扱うだけあって近づきにくいイメージがあるんだ。君みたいな人がいると嬉しいな」

「国の聖獣なのにですか？」

「そうか君は知らないのか・・・国の聖獣とされているドラゴンはこのファイアドレークではないんだ。我が国の歴史にドラゴンが関わっているのは知っているか？」

聞いたことなら、と言うと副隊長さんは丁寧に教えてくれた。

「というか副隊長さん、ご自身のドラゴンに会うためにここにきたんじゃないのかな。なんだか邪魔をしているようで悪い気がする。」

「始まりは約1200年前のダルモン王が従えたとされる雌竜だ。名をティアマトと言い、王の真つ赤に燃える赤毛のような緋色を纏っていたそうだ。その生涯を王と過ごし幾何度の戦に赴いて勝利を導いた。そして王が亡くなると同時にティアマトも眠るように死んだと言う。そのドラゴンを我々は”アースドラゴン”と呼んでいる」

ラウの言っていたことは本当だったのか。素直に驚く。

「アースドラゴンという種類のドラゴンは未だにその生態がわかっていないんだが、往來のドラゴンと違って鱗もあれば、空を飛び、火を吐く事もできるそうだ。そしてその身体は何色にも染まっていない純白なのだ。人間と契約した時だけその身体の色を変えるのだそうだ。契約した人間の色に合わせるといわれている。最後に確認されたのがもう100年も前になるから私達は見た事はないが、絵画では見た事がある。あんな美しいドラゴンを私は見た事がないに、体色が変わるだ。ならばぜひ黒に！目立たないから人間に気付かれないはず！・・・なんて人間と契約せにゃ無理か。ならいいや。」

「ティアマトの次に確認されたのが今から約900年前、ごく普通の田舎出身の女性が従えたヨルムンガルだ。このドラゴンなんだが、アースドラゴンの中でも最強の称号を持つドラゴンだったそう。そして女性は生涯をそのドラゴンと添いとげたとされている」
「もしかして異種間交際？人間とドラゴンが？アリですか？・・・ううむ。私のように人間になれるのならありえるのだろうか。少し興味深いが、私には関係ないだろう。」

「そして約300年前、魔法が発達してきた時代だったせいか研究で異世界から召喚された男性が従えたそう。今では召喚魔法自体は廃れているが、その時代は頻繁に行われていたらしい。ゴジ〇と言いういかつい名前だが桃色の可愛らしいアースドラゴンだったそう」

「その召喚者は日本人だ、間違いなく。もしくはゴ〇ラをしっている人間だ！私の世界から召喚されてた人いたのか、驚きだ。それにしてもゴジ〇って、・・・桃色の可愛らしいアースドラゴンにそれはないだろう！！」

「最後に確認されたのが約100年前のブルー・ベン・キルヴ、当時の国の王子が従えていたそうで、王子の瞳のように青色を纏ったドラゴンだったそう。この時代は戦が今より激しくてな、何度

も戦いの勝利をおさめたがある戦で深い傷を負い空から落ちて沼に沈んでしまった。王子はそれを嘆きその沼を『キルヴ』沼と名付け碑石を建てたんだ。その沼は丁度アルヴィナ国とアルヴィーナ街の間にある。今では沼というよりも湖といったほうが正しいな」

副隊長さんの話はとても興味深かった。この国がドラゴンと共に歩んできたという歴史は本当だったようだ。

そして彼らが大战のたびに現れているとなると、この国は本当にドラゴンに加護されているんだと思う。

しかしその戦長すぎないか。1000年以上も同じ国同士で争ってるってどんだけ仲悪いんだよ。

「隣国との戦、長引いているんですね・・・」

「随分昔から争っているからな。お互い大きな犠牲を伴っている。今更引くに引けん」

数年に何度か小規模な小競り合いが生じるそうだ。それほど国同士が仲良くないって一体昔に何があったんだろう。だがそれを知っているものはもういないし歴史にも残っていそうだ。

「実は最近になってまた関係が悪化してきた。近々歴代の大きな戦が起こるだろう。そうなれば向こうは大国、今度こそ負けてしまうやもしれん・・・だが我々はこの国のため、全力で戦う」

副隊長さんは、この国のため命を賭して闘う。例え負けても。そんな決意した表情をしていて、私は初めてその時戦争と言うものを身近に感じた。

平和な暮らしをしていたから全然気づかなかった。もしかして、この国が負けてしまえばここにいる私も危ないのだろうか。

——そうなれば、ここから逃げ出してまた別のところ・・・

「・・・だがアースドラゴンがまた現れて国を救ってくれるのではないかと、皆心のどこかで期待してるんだろう」

どきりとした。副隊長さんの強面の顔が憂いを帯びている。

「そう、ですね」

私の声は酷く弱々しくかすれていた。

副隊長さんの話を聞いて私は複雑な気持ちになった。

——正直、重い。想いが重い。

私は自分がなぜここに存在しているかなんて今まで考えなかったし考えても答えは見つからなかったから考えるのを放棄していた。私には関係ないと思っていたからだ。

人間を食べるのに人間と共生し合えるの？

今までの歴代のアースドラゴンは一体どうやっていたのだろう？

もし私がここににいる理由がそれならば、一体どうしたらいいんだろう。

契約する人間を探して戦をしろと？一体何のために？私にとってのメリットは？そもそも、私は一体何のために、生きてるの。ここに、いるの。

考えれば考えるほど頭が混乱してくる。まるで頭の中に蟲が巢食っているかのようにざわざわと蠢くのだ。鼓動も心なしかはやく、自分の呼吸音が体中に響き渡る。

・・・よく考えてみて。そうだよ。私はそのアースドラゴンという種だと決まったわけじゃない。それに酷似したただのドラゴンかもしれない。

変に気を負わなくて良いんだよ。きっとそうだ。私には関係ない。関係ないはずなんだ。だって、誰にも知られてない。誰にもわからない。私が、ドラゴンだなんて。

私は考えるのを、やめた。

そんな事で悩むのなんて時間の無駄だ。

使命なんてものは押し付けでしかない。私は生きたいように生きる。それが他の誰か、多くの人を犠牲にする事になったとしても私には関係ないと被りを振ろう。

今の私にはそれしかできないから。

人喰いドラゴンの討伐Ⅱ私の討伐。

「ルートリア！久しぶりだな。先日 of 戦ではまた功績をあげたと聞いたぞ！さすが私の幼馴染であり友人だ！」

考え込んでいると突然騒がしい人がやってきた。

私の思考は途中で切断され、良い意味で来てくれてありがたかった。だが悪い意味でうるさかった。

が、その人の服装を見て私は反射神経のように頭を下げる。

——この人、王子だ。

たまに城内ですれ違っていたが、こんなにはっきりと見たのは初めてだ。それも満面の笑みである。

彼の名前は レブランシュ・なんとか・アルヴィナ。なんとかの部分は何十個も名前が連なっていたので覚えているわけがない。覚えている人は凄いと思うよ。うん。

目がちかちかするほどの金髪を後ろで赤い紐で括っており、瞳は青い。どこぞの絵本から出てきましたというぐらいの白馬が似合う王子だ。服装も豪華な装飾があしらわれているが動きやすさを重視した普段着を着用。腰には短剣。もし売れば一般市民が数年は遊んで暮らせそうな額はいくと思うよ。

「レブランシュ、・・・」

「これは王子殿下」

隊長さんは少し会釈をしたただけだ。副隊長さんは私と同じようにお辞儀をするが、騎士独特の胸に手を当てる姿勢も含まれていた。なんだかっこいい。私も今度ひとりのときに真似してみようかな。アイアイサー！なんて。

「アドルフもいたのか！お前もご苦労だった」

「ありがたきお言葉、感謝いたします」

「ルートリア。お前に相談したい事があって来たんだ。そうだな、丁度良くアドルフも居るから手間が省けた」

しかし面倒な人がやってきたなあ。お偉いさんは苦手なのだ。恋沙汰などに巻き込まれそうになりそうになったからあまり良い思い出がない。しかも王子殿下だよ？もつと言えば王位継承者第一位の人。あまり係わり合いにはなりたくない人種だ。一緒にいるところを見られてしまうと貴族のお嬢様方にどんな嫌がらせをやられることやら・・・ああ頭が痛くなってきた。とりあえず私はもう用無しという事で退散していいですか？

副隊長さんの大きな影に上手い事隠れると目の前のファイアドレークを見つめている事にした。・・・案外可愛いかもしれない。何食べてるんだろう？やっぱり動物のお肉かな。これでベジタリアンだったら面白そうだ。

「ある任務に就いて欲しい」

「任務、・・・偵察とか？」

「それが違うんだ。少し事情があってな・・・それでお前に頼みたいことというのは」

あれ、そう言えばさつき隊長さんのことルートリアって王子言ってたよね。副隊長さんもいつもルー隊長って言ってるしもしかして隊長さんの名前ってルートリアさんって言うのかな？・・・自己紹介されてないからわからないよ。マダムにも結局聞いてないし。なんだか今更の気もする。もう隊長さんでいいや。面倒だし。

「ここより東にあるヴィザンヌ山に巣食う”人喰いドラゴン”を退治して欲しい」

んん？幼馴染とかも言ってたな。昔馴染みなのかな、呼び捨てにしてたし。どういうかんけ・・・・・・・・

は？

「人喰いドラゴンの噂は随分前からあった。念のため雇った傭兵を何度か討伐に向かわせたんだが全員帰ってこないんだ。その付近に住んでいる村人が、争った後や死体を発見している。きつと全員食

「い殺されたんだろう」

「……え？」

「さすがに手こずっていると思ったので先日第一騎士隊から数人討伐に向かわせた。だがやはり、全員生きて帰って来なかった。半分ほど、やられたよ……。危険を承知で言う。もう頼れるのはお前しかいないんだ。第四騎士隊長のお前ならドラゴンの扱い方は他のやつに比べたら知っているだろう？このままでは村人や国民が恐れたままだ、放っておけん」

「——ちよっ、今聞き捨てならぬものを聞きました！何ですと！？人喰いドラゴンの退治！？それって……。まさか……。わたし？」「人喰いドラゴン」……。私も聞いたことがあります。とてつもなく凶暴で山の三分の一程の巨体に血走った鋭い目は見てしまったら身体が麻痺してしまい、動くものは全て鋭いぎざぎざの牙で串刺しにして食べる、と」

どこかで聞いたことのある話だ……。しかもかなり脚色されてるよ。そんな怪物いたら私だって裸足で逃げ出す。

「もしやあのドラゴンかと思ったが、あまりにも知能の低い事をやっている。山の方で飛んだ姿も見られていないからきつとワームの群れが暴れているんだろう」

悪かったな知能が低くて。むっとしたが我慢我慢。

「討伐部隊はルートリアが決めてくれてかまわない。むしろ私も一緒に赴いてどんなドラゴンか見たかったんだが、用事がたてこんでいてな。後で土産話でも聞かせてくれ」

「……。了解」

二言三言言って王子は嵐のようにさって言った。しかもどうやら私の存在に気づいていたらしく、ウインクを投げてよこしやがった。鳥肌立ったよ。ええそれはものっそ。初めて男の人のウインクを見てしまった。外見王子でかっこいいが男のウインクだけはその、受け入れられそうにも無い。副隊長がしたら心臓麻痺るかも……。うひゃ、想像してしまった。

「アドルフ、その噂詳しく」

「私も詳しくは知りませんが、ふもとにティエーヌ村がある、この辺りで一番大きなヴィザンヌ山にいるそうです。時折鳴き声も聞こえるそうですから、間違いないでしょう」

「ティエーヌ村・・・ティエーヌ」

隊長さんが思い出したように私の方を向いた。

「確か、ヴィトってティエーヌ村、出身？」

名乗ったときの苗字にティエーヌと言ったのを覚えていたのか。驚きだ。副隊長さんも今思い出したような表情で「そういえば」と呟いた。

「ヴィトさんは何か知っているのか？」

私は戸惑う。”それ、自分です”なんて口が裂けてもいえない。二人を見比べてどうしようかと悩んだが、差し支えの無いことだけ話すことにした。

「はい、私の村でも数人山に入り行方不明になった者がいます。それ以来は皆恐れて山に入らなくなりました」

「誰かドラゴンを見たものはいないのか？」

「すみません、そこまでは・・・」

ティエーヌ村を出身にしたのはまづかったかもしれない。人喰いドラゴンで多少なりとも有名になっているようだ。

二人は私に幾つか質問をしたが詳しい話は知らないとだけ答えた。彼らもそれを信じてくれたのかそれ以上は聞いてこなかった。

ありがたい。

隊長さんたちは次の朝早くに出発した。

討伐隊のメンバーは隊長さんと副隊長さん、そしてランスさんとス

テファノスさんと残り数名の騎士さんたちで行くそうだ。しかもフアイアドレークに乗って行くためひとつ飛びである。

そのとき見送りをしたのだが、隊長さんのみつあみの髪がなんとも可愛らしい事になっていて、微笑ましかった。フアイアドレークに乗るために邪魔なみつあみが、収まりよく纏められていたのだ。もともと編みこみの髪量が少ないからそんなにかさばらないのだろう。編みこみのされてない髪の半分は短髪のように整えられていていつも激しく癖毛が波打っているし。

端からみたら貴族令嬢の凝った編みこみにも見えない事は無い。とても良く似合っていた。ってか可愛い。ちよっとドレス着てくれませんか？ ウエディングドレスなんて絶対似合いますよ！

朝から良いものが見れて私は断然仕事のやる気がでてきた。

どうせその山にはドラゴンはいないし心配することはない。なぜなら、そのドラゴンは今ここで掃除をしているからだ。

だから安心して送り出した。

「あれ・・・？」

今夜のナツソさんのご飯は何かと廊下の掃除をしていると、何かに小さな引っ掛かりがある。

何だろう。何が気になるんだろう。いろいろ思い出してみたけれどわからなかった。

———そういえば。

ふと昨日王子が言った事を思い出す。

”さすがに手こずっていると思ったので先日第一騎士隊から数人討伐に向かわせたんだ。だがやはり、全員は生きて帰って来なかった。半分ほど、やられたよ”

何か、違和感を感じないだろうか？ その時は少し焦っていたのか聞き流していた気がする。だが今冷静になってもう一度思い返してみるとやはりおかしい。

半分ほど、やられた？ では討伐隊の半分は生きて返ってこれたとい

う事になる。

私が相手にしてきた討伐隊は一人たりとも生きて返さなかったはず。先日とは一体どのくらいの前のことを指しているのかわからないが、私は人里に降りて随分月日が経っている。

そろそろおなかも空いてきた頃で遠くに飛んで魔力のある人間を食べようかと計画していた頃だ。

王子が言っていた先日というのは本当について先日なのでは？でも私はヴィザンヌ山には居ない。

・・・じゃあ、今あの山にいる”人喰いドラゴン”は。

考えてる暇なんて、ない。私の本能。

私は次の日仕事を休んでヴィザンヌ山へ飛んだ。

休みというか仮病だ。さらに言うなら私の上司である隊長さんがないから無断欠席だ。

とにかく私は急いだ。姿を見られないように高度を上げて素早く飛ぶ。体が白いからきつと雲と同化するだろうと考えて。

隊長さんたちはどこかに一泊してから討伐のために山に入るといつていたのでまだ間に合うかもしれない。

ドラゴンの姿のまま討伐隊に会ってしまったらどうする？それこそ退治されてしまう。

でも馬鹿だと言われても良い、飛んで火に入る夏の虫もといドラゴンでもいい！

だって、だって心配なんだ！！隊長さんが他のドラゴンに食べられてしまうなんてそんなの耐えられない！

——隊長さんは私が食べるんだから！

ただそれだけの理由で仕事を休みドラゴンの姿を見られる危険をおかしてでも山へと急ぐ私。自分でもどうしてこんなに執着してるのか不思議だよ。

でも、自分の大好物兼高級食材が目の前で誰かに掻っ攫われてしまうなんて考えられる？許せる？それこそ愚問だよ！

私は何があらうと、隊長さんを食べるとあの時誓ったんだ。

隊長さんのような人間はこの世界で私が生きている限りでもう出会いそうにないって、どこかで、感じ取ってたんだ。

この執着心が何を意味するのか、今の私には考えられなかった。

飛んで数時間する頃にヴィザンヌ山が見えてきた。彼らを探すために高度を下げて山や森の中に視線を向けるが、居ない。
が、意外なところに彼らは居た。

――・・・ティエーヌ村。

山のふもとにある村に、数体のファイアドレークの姿を見かけた。まだ出発していなかったのかと安堵したがどうやら違う。我先にと村から逃げていく村人の姿が見え、なにやら騒がしい。

もう少し高度を下げると、見たことの無いドラゴンの群れが村を襲っていた。

翼が退化しており空を飛ぶことのできないぷくらとした大きな胴体に、似合わない小さな頭。手足も小さく、トカゲのように腹を這って移動している。

大きさはファイアドレークより少し小さいが、何十匹もいる。

戦闘に入っているファイアドレークに乗った討伐隊の人たちは村人を守りながら倒しているが、数が何倍以上もいるため手こずっている様子だ。何人か犠牲になった村人もいるようで倒れている人もいる。

やはり、ヴィザンヌ山にいたのは他のドラゴンだった。あれがドラゴンか蛇かわからないが、私がこの山を去った後に巢食っていたみたいだ。なんてことだろう。

サウスをラウたちに同行させていてよかったと心から思う。

が、今はそんなことを考えている暇さえ惜しい。

これは手助けをした方がいいのだろうか？

隊長さんたちはさすがに戦慣れしているのか無駄のない動きだ。だが彼らが戦慣れしているのは人間の戦いで、ドラゴンの群れではない。ファイアドレークも相手がいつもと違うためか本領発揮できないようだ。そうこうしている内に何匹ものドラゴンが襲いかかる。

ちよ、ステファノスさんすっかりして！ランスさんは・・・副隊長さんと村人を逃がしてる、か。あー残りのドラゴンが隊長さんに！
ああ、もう！

——考えてる暇なんて、ない！

私は空気を吸い込みながら高度を下げた。2体のドラゴンを勢いよく踏み潰して地面に降りると群れに向かって思いっきり火を吐く。炎は数体のドラゴンを容赦なく焼き殺した。今度は反対の方の群れに火を吐く。あまり良い匂いはしないが一体ずつ相手にするよりも効率が良い。

間違ってファイアドレークを巻きこまないように気をつけながら何度も火を吐く。何軒かの屋根に火がうつってしまったがごめんなさいだ。だってまだ手加減がわからない。彼らを巻き込まないことだけを最優先に考えているからそこまで気が回らないんだ。

私の肺活量が続く限り、火を吐き続けた。あたりは炎で埋め尽くされるが、討伐隊の何人かが魔法を使えるのか急いで水を降らせ鎮火していた。ありがたい。そして申し訳ない。

ようやく最後一匹だけとなり、踏み潰していたドラゴンから降りるとその一匹が私に襲い掛かってきた。

攻撃される前に素早く首元を噛んで絶命させると、地面に落とす。

——ああ、これで安心だ。

隊長さんたちはどうなっただろうと視線を向けると。

「ブラッド、大人しくしろっ！」「落ち着いて！」「痛っ、こら暴れるな！」

ファイアドレークが突然現れた私に驚いて暴れているようだった。

騎士さんたちは放り投げ出され地面に転がっていた。痛そう。

こりゃ一喝してやらんといかな。火を吐く要領で空気を吸い込むと、喉元から絞り出すように咆哮をあげた。人間はただ私が叫んだように聞こえるが翻訳するところだ。

『大人しくしなさい！みつともないったらありやしない！』

どこぞの母ちゃんだよ。

しかしその一喝でファイアドレークはぴたりと暴れるのをやめ、代わりに怯えて縮こまった。今度はずるずると後退するファイアドレークをランスさんやステファノスさんが宥めていた。

少しきつく叫んじやったかも。ごめんよ。

——それより隊長さんの安否は・・・！

副隊長さんは遠く放りだされたのか近くにはいなかったが、隊長さんは私の近くに放り出されたようで、座り込んだまま、呆然と私を見上げていた。隊長さんだけじゃない、ファイアドレークが大人しくなり私の存在を思い出したのか誰もが私を見上げ驚愕の表情を浮かべていた。

もしかして私ってとんでもない事してしまった・・・？

いやでもそれは仕方ないわけで！だって隊長さんが他のドラゴンに食べられてしまうと思ったら、いてもたっても居られなくなっただよ。

まさか自分がこんなに感情的に動くななんて思いもしなかったさ！わけがわからないよ！

私は長い首を降ろして近くで隊長さんを見つめる。

——やっぱりおいしそう。それにドラゴンの姿だと、もっとおいしそうに見える。やばいくらい。押さえきれなくらい。

それにドラゴンの視点で隊長さんを見るのは初めてだ。いつも見上げていたのに今は見下ろしている、なんだか不思議だ。

落ち着いた若草色の髪も、男性にしては細身の体格も、しなやかな手の先、足の爪の先まで、ドラゴンの瞳を解して見る隊長さんは全体的で魅力的。今を逃せば機会は二度とこないような気がした。

——ああ駄目だ。抗えない。

それに丁度、おなかが減ってたんだよね。

ゆっくりと顔が近づく。近づけば近づくほど、ゆっくりと私の口が開く。その頭を、その腕を、その足を、その胴体を租借している様子を思い浮かべると、口の中で唾液が広がった。

隊長さんは動かなかった。それどころか逃げようもしない。頭で

纏めていた髪が解けたのか、いつもの姿で、三つのみつあみだけが風に揺れていた。

「ルー隊長!!」副隊長さんの叫ぶ声が聞こえたが、私の耳には入らなかった。

隊長さんも相変わらず動かずただ私を見上げている。表情は見えない。

ねえ、もういいよね？

こんなにおいしそうなんだもん。

戦争でいずれ誰かに殺される、もしくは殺されてしまう可能性があるなら、今ここで私に食べられたほうが、いいと思わない？

高鳴る鼓動、押さえ切れない欲。

私はこの時、本能に忠実な、ただの、”野獣”と化していた。

———もう、食べちゃえ。

私は、隊長さんの腕にがぶりと噛み付いた。

左腕と、黒。欲と、戸惑い。(前書き)

※グロテスク注意報。

左腕と、黒。欲と、戸惑い。

勢いあまって隊長さんの左腕に噛み付いたまま、以前住処だった洞穴まで飛んできた私です。

本当はその場で頭から喰べてしまおうかと思ひ牙を向けた。隊長さんぐらいの大きさだったら二口三口でいけるな、と考えながら大きく口を開けたのに、咄嗟に庇われて左腕だけをがぶりと噛んだ。仕方無しにそのまま口を開いて頭からかぶりつこうかとしたけど、腕から伝う口の中に広がった甘い甘い血に、少し思考回路が止まってしまったてんだ。

こんなに膨大な、質の良い魔力を持った人間は初めてだった。地の精霊の加護でも、水でも風でも火の精霊の加護でもない。初めての感覚だった。胸が高鳴って、抑えきれない程の高揚感。

だからその場でまる飲みにするのがもったいなくて気づいたら飛んでいた。

牙を腕から抜いて洞穴の奥の方へと転がすと、隊長さんはゆっくりとだが左腕を庇いながら起きあがってくる。抵抗される前に彼の身体にのしかかり身体を押さえつけた。

「っ……」

傷ついた左腕に乗ってしまったため、隊長さんは痛そうに小さく呻く。

まあ、いいや。どうせ食べるんだし。

どこから食べようか、腕？足？それともやはり頭から？よし、どうせならさっきの左腕からいこう。やばい、よだれがやばい。

私は血が垂れ流しである左腕を咥える。

先程深く噛みついたから左腕の神経や腱は切れて、動かすどころかもう使い物にはならないだろう。

だったらひと思いにと、肘より少し上から——噛みちぎった。躊躇いも無く、簡単に左腕は切断される。

口の中に血が溢れた。

「——うあ、ぐっ・・・!？」

声を堪えているのだろう、かみしめた歯が唇を切り口から血が垂れる。

生きながら腕を千切られる壮絶な痛みにびくりと身体を震わして顔を歪め、汗が、彼の肌をつたう。呼吸も荒い。

切断された左腕を胸に抱き肩を震わせている姿を赤い瞳でじっと見ながら、口の中に入れた左腕を咀嚼した。味わうように、血と肉を頬張る。

ごくんと喉に通ると、満たされる空腹感と心。何かが、溢れ出す。

——こんなに満たされる魔力は初めてだ。身体の内から優しくて力強い何かが湧きおこってくる。高揚感に、気持ちが高揚される。

この世界で食べたどんな人間よりも、満たされる。

そしてまだ右腕、両足、胴体、頭が残っていることに興奮してる。

自分でもはしたない。そして残酷だ。

だが、ただ本能に従ってこの欲を満たそうとしている私には、人間の理性なんてものは吹き飛んでしまっている。それ以上に食べたいという思いの方が強かった。

次はどこにしよう？ 右腕？ それとも逃げられないように足？ 情けから頭からにする？

ぐっ、と悶絶している隊長さんに顔を近づけ口に滴っている血を舐めとると、彼の身体がまた強張った。

今度は頭にしようか。そうしよう。

隊長さんの頭がすっぽり入るぐらいに口を開ける。開けて、——そのままの姿勢で私は止まってしまった。

さらりと、長い前髪が横に流れていて、いつもは見えない瞳が現れていた。

痛みに細められ涙で潤んでいるが、その瞳の奥深くの輝きの灯は曇っていない。

ラウ、以来だろうか。

——黒い、瞳。

黒を身に宿した生物を見るのは久しぶりだった。それも人間で黒を持った人は今まで見たことがなく、その黒が目のあることに私は嬉しくなると同時に戸惑った。

今から食べるのに。この瞳ごと食べるのに、食べたいのに、・・・その黒を失う事を恐れていた。

口を開いたまま躊躇していると、鼻先に隊長さんの右手が弱々しく乗せられる。

押し返すわけでも殴るわけでもなく、ただ乗せられただけだった。これは、ということだろう。

さすがの大人しい隊長さんでも暴れて抵抗するかと思った。怒りに身を任せて怒鳴るかと思った。または恐怖の表情を浮かべ泣き叫ぶかと、思った。

でも、それどころか、彼は私の鼻先に乗せた手で、優しく撫でたのだ。まるで子供をあやすように。

痛みに顔を歪め震えながらも、その手付きは酷く優しくかった。

ふ、と笑顔になる。嬉しそうな顔だった。

——何が、そんなに嬉しいんだろう。どうして、そんなに笑顔になれるんだろう。

だって、私は隊長さんを食べようとしているんだよ？左腕だって食べだし、これから頭から食べようとしている。

なのに。

どうしてそんな顔で笑えるの。

見た事がなかった。痛みで涙で瞳を濡らしながらも、この世で一番幸せそうな顔をして笑うのだ。

こんな表情、見た事がなかった。

思っていたより幼い表情で、思っていたより優しい瞳で、笑うのだ。控えめに笑ったり、はにかむことはあったけれど、こんな、こんな

――
「俺を食べて、いいよ」

彼は、黒曜石の、恋焦がれたぬばたまの瞳で私を見上げた。

曇りの無い、綺麗な瞳だった。

――今、彼は何と言った？

「でも、代わりに、お願い」

自分の身を投げ出してでも私にお願いしたい事――それは、何？

私は困惑して瞬きをした。

そっとのばされた右手が私の頬に触れる。やっぱり優しく撫でて、

暖かいその温もりに私は戸惑う。

彼は、笑った。

今まで見たことのない笑みで。そして彼にとってもきっと人生で一番の、笑顔だったかもしれない。

「君が、欲しい」

こんな――

卑怯だよ、隊長さん。

そんな顔をされたら食べられなくなる。目の前に最高級食材があるというのにみすみすそれを逃せて？

だけど、私はすっかり気分が変わって気付いたら身体を離していた。それでも食べたい衝動はあった。だけどその衝動よりも食べる事を何故か拒否している。

彼を食べず生かすことに気持ちが傾いている。どういうことだろう。だが噛みちぎって食べてしまった左腕は元には戻せない。それどころか血が大量に流出していつ大量出血で死んでもおかしくないだろう。

私は考えたすえに自分の頭に生えた大小四本のうちの小さな角を一本折り、それを咥えて隊長さんの左腕の切断面に突き刺す。

「あ、痛」と、かなり痛いはずなのに呑気な声が聞こえた。身体を押さえつけて固定すると、角ごとそのまま残りの腕を口に咥え込む。唾液を浸透させて、隊長さんの腕を思い浮かべる。

——私の一部なら、食べたものにきつと変化できるはず。それが他人にも通用するかどうかかわからないけど。

白くて華奢で、だけど鍛えている少し筋肉質な腕。

ずずっ、と私の口から出てきたそれは間違いなく人間の腕で、先程食べた隊長さんの腕そのものだった。上手く行ったらしい。

隊長さんは元に戻った左腕を目を見開いて、おそろおそろ動かししていた。

信じられないような表情だ。

私も上手くいったことに信じられない。

できるといいな、と思ってやったことだ。こうも上手くできると身体全部作れるんじゃないかとさえ思うよ。ちゃんと動いているから神経も通っているだろう。ドラゴンの身体ってなんでもありなんだ

な。今さらだけど凄いと思うよ。

しかしこれは人間の腕ではなくしょせんは私の身体の置き換え。ためしに私が牙で腕を傷つけると、傷が付く前に鱗が現れ牙を弾いた。鱗はすぐに消えたが、それを見て隊長さんはまた驚いた。私も驚いた。

「これ、・・・は」

角の一本、彼の命に比べたら全然惜しくない。

それにこうやって置き換えができるのなら、少しずつ食べるという手もある。その度隊長さんは生きながら自分の身体をもぎ取られるわけだが。・・・私の角も犠牲になるか。

取りあえず今日は気が削がれてしまった。

彼を食べるのはまたいつかにしよう。きっと今日はそんな日じゃないんだと自分を納得させる。

それまでは――ぐっ、と隊長さん顔の横に頭を持っていき、三本ある耳元のみつあみ髪を一本咥えて根元から千切る。

――ああ、やはり髪でも魔力が十分溢れてる。ぱさぱさして食べるにいくけど、髪留めごとつるつると麺のように口の中に入れて食べてしまう。

これクセになるな。

今度から人間を食べるときは髪の長い人にしようか。縄を食べている様な食感だがクセになる。

平らげると、私は洞窟から出て翼を広げた。

もう戻らないと、点呼に間に合わなくなる。そうならば同室のシフォンに迷惑をかける事になってしまう。

私は大きく羽ばたかせて、宙に浮かんだ。そしてそのままヴィザンヌ山から飛び去る。

左腕を食べる事ができただけでも大きな収穫だ。そう思いながら、気分良く高度を上げて優雅に飛ぶ。

・
・
・あれ、「欲しい」ってそう言えば何を？

隊長さんとマンツーマン。噂添え。

部屋でゆったりと過ごしていると、扉のノックがあった。どうぞ、と答えればアリアーデが現れる。

「ヴィト、少し良いかしら？」

私は中に入って、と部屋に招き入れる。シフォンは一日休暇をとって姉と一緒に城下町へ買い物にでかけているからこの部屋には私しかいなかった。

椅子もテーブルも無い部屋だから、向かいのシフォンのベッドに座ってもらった。

なんだかアリアーデの表情は暗い。

「どうしたの？浮かない顔して」

「今城の中で噂になってる事知ってる？」

城の中で噂と言えば恋沙汰や浮気や不倫などお貴族さまの噂しか聞かない。アリアーデが気になるような噂なんてあっただろうか。

「そっか、ヴィトはもう城内で働いていないから知らないのね・・・」

「

ああなるほど。確かに私は第四騎士隊寮の配属になって城の中をうろうろする事はなくなった。噂に疎くなったのはそのせいだろう。

「面白い話？」

「面白いというか・・・」人喰いドラゴン”が実は”アースドラゴン”だったという噂よ”
ほう。

「先日討伐隊が退治に出かけた際、他のドラゴンに襲われたのをそのアースドラゴンに助けて貰ったらしいの」
へえ。

「しかもひとり連れ去られたんだけど、生きて帰った、って」
ふうん。

「そしてその人が、アースドラゴンと契約したんじゃないかって噂

が広まってるわ」

えーなにそれ全然知らないー。・・・ちょ、まじで？え？ええ？
いつのまに隊長さんと私って契約したの？

そんなはずない！私はまだ真っ白な身体をしてるし、そもそもやり
方さえわからないんだよ。どう契約しろって。

「そ、そうなんだ」

隊長さんもあれから普通だし。・・・いや普通か？どこことなく足が
地についていないような感じもするが、まあとりあえずは普通のは
ずだ。

「それで妹の事なんだけど、・・・それを聞いてやっぱり妹は討伐
隊に襲われたんだと思っただわ。アースドラゴンなら人間を見境なく
食べるというし、妹が生きて帰ってこれたと言う事はきつとそう言
う事なんだろうって」

「でも討伐隊の人も生きて帰ってこれたんだよね」

「契約したのなら生きて帰れるはずだわ。それにそれ以前に山に入
った人はひとりも生きて帰ってこなかったって言うし。・・・きつ
と、そうなのよ」

その答えを出すのにかなり迷ったのだろう。アリアーデを悲しそ
うな顔をしていたが何かを決意した瞳をしている。

なんだか私のせいでアリアーデを振り回しているような気がして罪
悪感が湧き起こる。私さえいなければきっと妹さんも病に臥せるこ
ともなかっただろうに。

申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「そのことでヴィトには愚痴を言ってしまったから気を悪くしたん
じゃないかってあれからずっと気にしていたの。ごめんなさい」

「そんなことないよ！相談してくれて私は嬉しかった」

あれ以来仲良くなったし、心配はしていたけれど悪い気はしなかつ
た。それより相談してくれたことが嬉しかった。私の、せいだけど。

「だからヴィトも何かあったら私に相談してくれると、その、嬉し
いわ。迷惑もかけたし」

デレた。今確実にアリアーデがデレた！薄く頬を染める彼女はいつものクールな彼女ではなく、年頃の女の子と思わせる。いつもこうだったら言い寄る男はたくさんいるだろうな。それはそれで危ないか。シフォンなんか何度声をかけられたか。あの子なら玉の輿になれそうだ。じゃなくて。

なんだか笑顔になる。アリアーデの申し出は正直に嬉しかった。人里に降りて平然と暮らしているように見えるが、私にも内に秘めた葛藤が多少ともあるからだ。その悩みがアリアーデに言う事ができなくても、頼ってくれてもいいという友人がいるのは心強い嬉しい。私はひとりじゃないんだって錯覚でも思わせてくれる。

「ありがとう、アリアーデ」

「私の方こそありがとう」

それから普段の生活やささいな愚痴、とりとめのない話をして笑い合っていると、ふと気になった事を聞いてみる事にする。

「その契約したかもしれない人ってもしかして」

「第四騎士隊長・・・だったわね、たしか」
うぎゃあやっぱり。

アリアーデの話によると、アースドラゴンに出会った人間は老若男女食べられてしまう、しかし隊長さんはあろうことか連れ去られたと言うのに食べられずに生きて帰れたと。

「――え、食べましたが。左腕。」

だからもしかしたら契約したんじゃないかと城内では噂されているらしい。しかもいつのまにか城下町の方にもその噂は広まっており、本当に大変なことになってしまった。

やっぱり左腕だけじゃなく全部食べていればよかった！
面倒なことにならないればいいんだけど・・・。

面倒なことになりました。

隊長さんがキーワードもなしに早起きするようになってしまった。髪もみつあみ一本食べてしまったので量が少なくなり、今度はみつあみを二つ、まるで文学少女のように長いおさげを作ることになった。これはこれで似合うのだから不思議だ。あのちよつと眼鏡かけてみてくれませんか？ ぜひセーラー服も。絶対似合うよ。

ごほん、とにかく、隊長さんの様子がちよつとばかし変なんです。何か考え込んだり歩きながら壁にぶつかったり、話なんて聞いてないことも多々で心ここにあらず、っていう感じだ。

こんなんじゃない仕事にも影響が出るだろうと思っていたら本当に出ました。

「丁度良かったヴィトさん、隊長を知らないかな？」

談話室の掃除をしているとランスさんに声をかけられる。この時間帯は皆訓練に出ているはずだが、いないのだろうか。

知らないことを告げると「まいったね」とため息をついた。

「あれから最近隊長の様子が可笑しいんだよ。ヴィトさんなにか知らない？」

そりゃあれからならあれが原因でしょう。

「悪いんだが一緒に探してほしい。こうも仕事が滞ると困るんだ」

「あ、はいわかりました」

「私はドラゴン舎の方を探すよ。ヴィトさんは心辺りのある所を探してくれ。見つけたら私が探していたと寮へ連れてきてほしい」

「はい」

ランスさんは深くため息をつくと言いつつ出て行った。将来苦勞でハゲそうだなこの人。ここには問題児が他にもいるし。例えばステファノスさんとか。最近は多少丸くなったみたいけどま

だまだだ。この間なんかどこかの貴族令嬢と密会していたのを見かけてしまった。その前は違う女の人と中庭でいちゃこらしてたな。いつか修羅場が起きるんじゃないかとひやひやですよ。

そしてそれをランスさんに見られて怒られるのも、そう遠くはないだろう。ランスさんってステファノスさんのお母さんみたいだなあ。名前の響きも似てる気がするし。

それにしても一体あの人はどこで何をしているんだろうか。

談話室の清掃から隊長さん探しに切り替えた私は寮の中を探してみたがどこにもいなかった。ランスさんはドラゴン舎の方へ探しに行くと言っていたので城内を探してみようか。

「あ、ヴィトちゃん！」

シフォンだ。そういえばこの時間帯は窓ふきだっけ、他の見知った顔もちらほら居る。

つい数週間前にはこの中で働いていたのも懐かしく感じる。

「丁度良かったシフォン、隊長さんみなかった？」

「隊長さん？」

慌てて第四騎士隊のと付け加えるとシフォンは隊長さんが中庭を通って庭園の方へ向かったのを見たそうだ。

有力な情報を得た。でかしたぞシフォン！さあいざゆかん！

「ねえねえ、その隊長さんってあの隊長さんよね！」

うぐぐ。やはりシフォンもか。どこもその噂でもちきりだな！

他の掃除をしている同僚も話を聞きたいのかちらちらこちらを見ている。

「あ、後で話すよ。ありがとう！」

えー！と後ろで抗議の声を上げているが構わず歩き去る。面倒事は

ごめんだ。聞かれてついぼろつと関係ないことも話そうで怖い。
隊長さんが場所を変えないうちに早く庭園へ急ごう。

手入れのされた中庭を通ると色とりどりの花が咲いた庭園へと着いた。

ここではお茶会やデートコースなんかになっていて本来なら私のような使用人が入ってはいけけないのだが、人もいないし黙っていればばれないだろう。

しかし随分中を歩きまわったが、隊長さんは見つからなかった。もうどこかに行ってしまったのかと諦めて庭園から出ると。

あ、見つけた。

中庭を通り抜けようとしていると、草の茂みに隠れて隊長さんが寝転がっていた。庭園への道では丁度影になって見えなかったらしい。しかも草と同化していたのでよく観察してみてもないとわからない。髪の色が同じだもんなー。

「隊長さん、探しましたよ」

長い前髪がセンターわけのように真ん中から別れて、目元がはっきり見えていたからちよつと吃驚。それに相変わらず人形みたいな顔してる。

もう一度話しかけるとゆっくりと瞼が開いて黒い瞳が私を見上げる。
ああ、やっぱり黒はいいな。安心する。

「ヴィト？」

「はいそうです。一体誰だと思ったんです？」

膝を抱えて座りこむと、隊長さんはそんな私に左手を伸ばし栗色の前髪に触れた。

「誰だろう・・・ただ気配が、とても良く似てたから」

誰だとは聞かない。なんとなく予想はついてしまう。隊長さんって変な所で感が鋭いので大変困ったものだ。

こりゃ早々に寮の配属から離れないとばれてしまうかもしれない。ただどなんだかんだ言っただけで寮での仕事はやりがいがあるし、マダム

にはいつでも戻ってきて良いといわれているが離れるのは少し寂しい気もする。

寂しい、か。・・・どうして寂しいんだろう？毎朝隊長さんを起こさなくなるから？ドラゴン舎にもう行けなくなるから？副隊長さんと他愛も無い話ができなくなるから？ランスさんの苦労話を聞けなくなるから？ステファノスさんの女性関係を実は人事のように面白がっていたのとか？寮の人も結構優しい人ばかりだし。ナツソさんだっていつも食事を作って待っていてくれる。まるで自分のおじいちゃんみたいな存在だ。

・・・でもやっぱり私の心に引かかるのは――隊長さん、あなただよ。

ほんと、卑怯ですよ隊長さん。どうしてこんなに気になるんだろう。食べたいから？それもある。でもそれとは別に何か胸のなかで蟠っている何かがある。これはドラゴンとしてなのか人間としてなのかまだわからない。わからないからもしかしい。

当の本人は眠そうな目で私を見上げている。何を考えているんだか。「ランスさんが探してましたよ。私も仕事を中断してずっと探してたんですから」

「それは、ごめん」

「何してたんですか？」

「んー・・・考えごと？」

私に聞かないでくださいよ。と言うとそうだね、と苦笑した。隊長さんは上半身をゆったりと持ち上げる。

背中に草がついている。これで寮に戻るのは恥ずかしすぎる、そうならないように草を払ってやるとようやく立ち上がった。私も立ち上がるとやっぱり大きな、と改めて思う。あの時はあんなにちっぽけに見えたのに、人間は本当に色々なものを違う視点で見られるから新鮮だ。

それに気づいたのだが、人間の時だとおいしそうだとは思うがドラゴンの時のように本能で動いてしまうこともないみたいだ。

・・・隊長さんはあの時のことをどう思ってるんだろう。実は聞きたくてさっきからうずうずしている。

シフォンたちよりも、人喰いドラゴンの事を隊長さんに一番聞いたのは私なんかじゃないだろうか。

聞くだけならいいかな・・・？

「隊長さん」「なに？」「聞きたい事があるんですが」単なる私の好奇心です。

「アースドラゴンと遭遇したと噂されていますが、本当に契約なさったんですか？」

隊長さんはきよとした表情になったかと思うとくすくすと笑いだした。何が可笑しいんだろう。

「ヴィトはどう思う？」

「私、ですか・・・」

聞き返されるとは思わなかった。そもそも質問を質問で返されるのは初めてだ。

どう答えたらいいだろうか。

「そうですね・・・してない、ですか？」

「うん、してないよ」

あっさりと言いやがった。

「でも、そう言ったのはヴィトが初めてだ。皆”わからない”か”契約した”かの二択だから」

しまった墓穴掘ったか？少々焦ったが隊長さんは特に気にも留めていないらしい。空を見上げて背伸びをしている。頭にも草がついてるのに気付いて私は手を伸ばしてそれをとる。ふんわりとした髪の毛の感触が指に伝わった。この髪、クセになるんだよね。っは、いかな、よだれ出てない！？・・・よかった、出てない。

「帰ろうか」

立ち上がったことであの黒い瞳がもう見えなくなってしまった。残念だなと思いながらも私は「そうですね」と答え隊長さんの後をついて一緒に寮まで帰った。

途中でランスさんと遭遇して隊長さんは怒られてたけど、相変わらずぼうつとしていてランスさんの言葉なんて聞こえてないんじゃないかな
いかってぐらい上の空だった。

それに気付いたランスさんも途中で怒るのを止めて大きなため息をつき「さあ戻りましょう」と隊長さんを引っ張って行った。

私は仕事が残っているからそのまま寮へ戻ることになった。

手には、隊長さんの髪の感触が、まだ残っていた。

少しだけ、心があったかい。

なんだろうこれは。

番外編 Sideルートリア（前書き）

『考えてる暇なんて、ない。私の本能。』の隊長さん視点。

番外編 Sideルートリア

俺は、今まであのような崇高な美しさを持ったイキモノを見た事が無かった。

一目見た瞬間から心臓が高鳴り、全身に大量の血液が身体中をめぐり、頭为天辺から足の指先までじわじわ熱くなる感覚。

その姿に、俺は目を奪われた。

身体の三倍はあろうことだろう大きな翼を背に畳込み、ゆったりとした動作で長い首を曲げる。

鱗ひとつひとつが純白に輝き、動くたびに重なり合ったそれらが日光の光を反射してきらきらと光る。滑らかなカーブを描いた首に、引き締まった肢体に力強い骨格。足より幾分小さな手も鋭く長い爪が存在している。頭に生えた大小四本の角はユニコーンの角を思い起こさせる清さがあった。桃色づいた口元から見える四本の牙で人間をかみ殺すのだろうか、血に濡れた様を想像してぞくりと、背筋に例えようも無い恐怖と高揚感が駆け抜ける。

目元は赤く縁取りされており、白い睫毛のようなものに覆われている瞳は血の宝石でも埋めたかのような赤い瞳だった。

——伝説の存在。”アースドラゴン”

様々な種類のドラゴンがいるが、その中でも極めて稀なドラゴンの種類がいる。

それが”アースドラゴン”。

山深く住み、人里にいたりどころか見た事があるものは少数であり、しかもドラゴンの中でも特に気性が激しく人間を見ただけで襲い殺して食べてしまうとされている。

歴代に活躍した英雄たちはその”アースドラゴン”を手懐けて国を救ったとされているため、今でも伝説のドラゴンとして語り継が

れている。

そんな伝説の存在が目の前にいて、いや、伝説どころか不可思議なイキモノが目の前に、風のように突然現れて俺は好奇心を抑えきれなかった。

生態系は――身体の構造は――どうやって火を――次々と湧き上がっては目の前の存在に圧倒されて何も考えられなくなる。

それは俺だけではない。

俺と一緒に討伐に来た彼らだってそうだ。

首がこちらに向かって降りてくる。徐々に近づいてくる血のように赤い瞳に目を奪われていて俺は何も考えられず動けなかった。

気付いた誰かが俺の名前を叫んだが、遅かった。

――大きく開かれた口から覗く四本の鋭い牙。それが、俺に向かって、勢いよく、噛まれ。

「――！」

ようやくドラゴンが自分に何をしようとしているのかに気づき、咄嗟に頭を庇うように左腕で遮ると、左腕に激痛が走った。

腕から血が地面に滴り落ちて、口から腕を引き抜こうとしたが四本の牙のうち一本が掌を見事に貫通しており、二本が肘先の腕を食いこんでいたためできなかった。

「ルー隊長――！」

叫んでいたのはアドルフだったのか、後ろでは部下たちの悲鳴も聞こえる。

失念していた。

相手があの”アースドラゴン”となると一筋縄にはいかないだろう。しかも左腕は全く動かす事ができない。

――一体どうなるんだろうか。食べられてしまうんだろうか。・
・それも、いいかもしれない。こんなに美しくて、こんなに俺の心を乱す存在に出会えたのだ。それがたった一瞬だろうと、一生分

を生きた価値がある。ああでもできれば・・・

ぼんやりとそんな事を思っていると、左腕が引っ張られる激痛と共に身体が宙に浮く。

「・・・え？」

「た、隊長!!」

「ルー隊長!？」

ばさりと強い風が吹き、あっという間に地面から足が離れた。

正直、それからの記憶はあまり覚えていない。

——ああ、——でも、——できれば

”君が、欲しい。”

深刻な話とけしからん人。その名は。

何となく気になって休憩時間中にドラゴン舎を訪れた。最近頻りに訪れるから警備の人に顔を覚えてもらった、これでいちいち説明しなくても入る事ができる。

お目当てのファイアドレークがいる小部屋には先客がいるようで、その人も私に気付いて視線が合う。

うん、相変わらずの強面だ。

「怪我の具合はどうですか？」

「あまり良くないようだ。もしかしてそのためにここに来たのか？」

「はい」

「・・・本当に変わった人だな。ヴィトさんは」

副隊長さんが言うように、誰も好き好んで獰猛なドラゴンに会いにこないだろう。だが私は違う。

それにこのドラゴンはある時のドラゴンと違ってちゃんと人間と絆しているのがわかる。だから必要以上に暴れないし、彼らもパートナーの人間が好きなんだと見ていてわかる。

特に副隊長さんのファイアドレークはパートナー以外の人間でも慣れているようで、凄く大人しい。

副隊長さんと並ぶと凄い迫力だけど。

「レイナと言うんだ」

あ、雌だったんですね。本当ドラゴンといい動物って雌雄の見分けがつかない。単に私が疎いのか、それとも人間の記憶が邪魔をして見分けがつかないようになってしまったのか。それなら人間の見分け方もできないはずなんだけど。ややこしい。

「幼い頃から世話をしてきたんだ、もう私の一部だ。先日戦で怪我をしてしまったが、戦に出なくとも私のパートナーには変わりな

い」

レイナを見る副隊長さんはまるで我が子の様な視線で、見ていて微笑ましい。

そう言えば副隊長さんって結婚してるの？もういい年みたいだけど。確か38歳だよ。副隊長さんの子供かぁ・・・想像できないな。副隊長さんは、あかるい紺色の髪の毛のスポーツ刈りで瞳の色は薄茶。私より健康的な肌の色、そして筋肉美！と言わんばかりの体つきだ。強面の顔は言わずもがな。

子供が居るとしたら副隊長さんに瓜二つなのだろうか。気になるな。「そうだヴィト。近々ティルゾート国の使者を迎えることになっているんだがその迎えに同行することになった。また暫く部屋を開けることになるだろう」

「それって・・・戦争ですか？」

以前近いうちに大きな戦が起こるかもしれないと言っていたのを思い出す。副隊長さんは言いにくそうだったが答えてくれた。

「王子殿下はなるべく和平の方向で進めたいと思っているようだが、どうもむこうが曖昧な返事ばかりしているそう。実際の所どうなるかは誰にもわからない」

ティルゾート国の事はよく知らないが、あまり良い噂は聞かない。それにいつ大きな戦争が起こってもおかしくない状態で小規模な争いも頻繁にしていると聞いた。

今はこんなに平和なのに、戦争でたくさんの方が死ぬのだろうか。

この平和は、なくなってしまうのだろうか。

「あの、準備とかしないんですか」

「この事を知っているのはごくわずかだ。国民など他の者には必要以上に混乱させないよう、ただ使者を迎え入れるという事だけ伝えである」

「そんな秘密私に言っても良かったんですか？」

副隊長さんは笑うだけだった。え、本当に聞いてもよかったの？なんだか不安だよ。

「ティルゾート国は昔から卑怯な手ばかり使う。信用ならんがしあんな大国を見逃すわけにもいかないだろう。もともとあちらはこちらを飲み込みたいとずっと思っている。特に我々のドラゴンかなりの戦力になるからな、それを手に入れたいんだろう」

「アルヴィナ国を取り込んで・・・どうするつもりなんですかね」

「大陸を制覇しようとしてるんだろう。現に、北にあるワルテル国にも何か動きをみせている」

「大陸制覇、ですか」

制覇してどうするのだろう。大きな戦争をして沢山の人が生物がそれに巻き込まれて、それで最後に残るものって？ 栄光？ 富？ 名誉？ ・ ・ ・ 少なくとも私には戦争をしようと思う彼が理解できない。平和な日本で育った記憶があるためか、私の思いは戦争はしたくない方向に傾いている。

私にはわからない。

わかりたくもないとも、思う。

「その、・・・隊長さんも行くんですか？」

「ああ、ルー隊長と私はもう決まっている。向こうが名指ししてきたからな。あとは他の騎士隊が何人かと国の代表者が行くことになっている」

名指ししてそれって向こうが何かたくらんでいるんじゃないのか。ほら、契約してないけど噂あるし。今のうちに潰しておけーみたいな、・・・考え過ぎかな。それにこんな短期間で隣国まで噂が届くとも限らないし。てか私ってとんでもないところで迷惑かけてない？ アリアーデの件だってそうだったし。なんだか落ち込むよ。

「それってもちろんドラゴンも連れて行くんですよね」

「いいや、ドラゴンは連れていけない。ドラゴンを連れて行けば戦をするともみなされてしまうかもしれない。持っていくのは最低限でも剣のみになるだろう」

「大丈夫なんですか？ もし相手が――」

「そうならないことを祈るしかない」

副隊長さんは私の言葉を遮って言う。

もしこれが罠だとしても、王子が望む少しでも戦争をしない可能性があるならば、行かなければいけないのだろう。

副隊長さんはぎゅ、と拳を握りしめ目を伏せていた。

仕事があるらしい副隊長さんを見送り、私はレイナを見上げる。

赤い瞳がこちらを向いていた。

『悲しい？』

「うん、・・・少し」

なんだかよくわからない。ヴィザンヌ山にいたところは国同士の戦争なんて見向きもしなかったし、関係ないと思っていた。でも目の前に避けられないかもしれないそれが横たわっているのは複雑な気持ちだ。

戦争が起こった時、私は本当に全てを投げ捨ててひとりで逃げるこ
とができるのだろうか。

隊長さんの件もあるが、私は少々浮かれていたのかもしれない。誰にもとられたくないほど執着しているけど、隊長さんはこの国にとってはかけがえのない存在のひとりだ。私個人の欲でそんな大事な人を失ってしまうのは良くないんじゃないかって思ってしまう。それに今はこの国で過ごしているから尚更だ。他の人間は戸惑いなく食べてしまうのに、矛盾してるなあなんて、笑って。

私は、迷っていた。人間とドラゴン。どちらの思いも欲も強すぎてどちらを優先すればいいのかわからないのだ。特にドラゴンの時は本能が抑えきれず暴走してしまうこともある、と言う事がこの間わかった。人間として生きるのならばなるべくドラゴンの姿に戻るのは極力控えたほうがいいのかもしれない。

レイナは私の頬に擦りよせるように顔を寄せてきた。凹凸のある鱗

がひんやりと頬につたう。

小さい頃から人間の手で育てられたせいかな、野生のファイアドレークに比べて大人しく頭も良いみたいだ。しばらく彼女の元を通じていて気付いた。

彼女だけではなく、人の手で育てられたファイアドレークは個体差があるもののそうみたいだ。

『私、闘う。あなた、自由』

もし副隊長さんがレイナの言葉を聞く事ができたのなら、泣いて喜んだかもしれない。レイナは最後まで副隊長さんと一緒にいたいのだ。絆を感じさせる。

だが、私が自由という意味は何だろう。

『アースドラゴン』

驚いて私は顔を上げる。私を見下ろす細く赤い瞳は穏やかだった。

「どうしてそれを」

レイナは視線を隣のファイアドレークの小部屋へ向けた。そこへ行けというのだろうか。確か隣はステファノスさんのファイアドレークがいるはずだ。

レイナの言葉に後ろ髪ひかれるが彼女の言った通り隣の小部屋へ入ると、レイナよりも色の濃い鱗を持ったファイアドレークが待ち構えていたかのように私を迎えてくれた。

『村』

その単語だけで十分。私はこのファイアドレークにドラゴンの姿で会ったことがある。しかも暴れる彼らを怒鳴った覚えがある。ある意味良い思い出だ。

『驚く、気配、同じ』

動物の感というものだろうか、きっと私があの時のドラゴンだと知られていたようだ。しかも言葉も通じてるし。

きっとレイナはこのファイアドレークに私の事を聞いたのだろう。なるほど。

獰猛とばかり思っていたが良い子たちばかりじゃないか。うう、泣

けてくるよ。

「あの時は怒鳴ってごめんね」

手を伸ばし頬に触れると、気にしてないと言わんばかりに長くてぎらぎらしている舌で舐められた。うへ、手がべとべと。

でもなんだか嬉しい。意思疎通することができないとばかり思っていたから。

手がべとべとになりながらもなんだか心があったかくなって笑顔になる。

「ヴィトちゃん？」

後ろから聞いたことのある声が聞こえたと思ったらステファノスさんでした。あの時と同じくらい驚いた表情で私とファイアドレークを交互に見つめている。

「こんにちは。お邪魔させてもらってます」

「それはいいんだけどよ、……あんた怖くねえの？」

「ええっと、怖いですが……うひゃ、ちよっ」

ファイアドレークが後ろから私の首筋を舐める。この野郎、このパートナーにしてこのドラゴンだな！ペしっ、と頬に軽く平手をくらわせると不機嫌そうにぐるぐる唸った。

だが本気で噛みつこうとはせず、ただ私の髪に噛みついてだ液まみれにするだけだ。いやそれでも辛い。ただでさえごわごわな髪がもっとごわごわになるじゃないか！

必死に逃れようとするが体格差もあってなかなか離れてくれない。

「こらブラッド」

見かねたステファノスさんがファイアドレーク、ブラッドを引き離してくれた。

怒られてしょぼんとしている姿が何だか可愛らしく見えて微笑ましい。

「なにじゃれあってんだよ。そこは”きゃあステファノスさん助けて下さいー”だろ？」

「……何でそうなるんですか」

「大抵の女はそうなる」

そうですか。私はその大抵の女ではないので残念ですね。

「と言いかじゃれあってませんので」

「でもブラッドは楽しそうだったぜ？」

「この髪を見てもですか・・・」

ブラッドの唾液でべっとべとだ。早く帰って洗いたい。ステファノスさんはそれは悪かったと意地悪そうな顔で笑った。絶対悪いと思っ
てないなこの人。

それに比べてブラッドは申し訳ないといったげにくるくる喉を鳴らす。

『謝る』

「あ、気にしないでいいから」

「何喋ってんだ？」

うぎゃあ。やっぱりこうぽろつとでてしまうから気を付けなきゃいけないのに私はなんていつも気が緩んでるんだ！

「・・・あ、謝ってそうなの気がしたので」

「ふうん。ま、いいけど」

良かった。ステファノスさんで本当に良かった。この人本当に自分の興味のない事とはことん興味ないからね。女の人とか、女性とか、女の子とかにしか。

ブラッドは今度はステファノスさんに甘え始めている。要領がわかっているのか、軽くあしらいながらべとべとになることなく（ここ重要）首や額を撫でている。ファイアドレークの鱗ってごつごつしてるけど触り心地がいいんだよね。・・・ステファノスさんなんかべとべとになってしまえ！

「ドラゴン舎に出入りしてるってのは本当だったみたいだな」

隊長に聞いたぜと、言われる。隊長さんばらさないでくださいよ。特にステファノスさんには。

「肝が太い女だよなあ、ドラゴンを見て騒がねえ女を見たのは2人目だ」

1人目は誰ですかと聞いたら「姉さん」だそうです。お姉さん居たんですね。

しかもお姉さんもドラゴンライダーらしく、今はパートナーのドラゴンに乗って大陸中を旅しているそう。 「世界が私を待っている！！」なんて叫んで数年前に出て行ったきりだそう。なんて行動力のある人なんだ。 憧れる。それにしても女の人にもドラゴンライダーがいるなんて驚きだ。 そう言うと、第一騎士隊にも数人女の人がいるそう。それも副隊長にも。 吃驚だよ。

実力があれば女の人も騎士として認められるらしい。ここは私が思っているよりジェンダーの意識が薄いかもしれない。文化の違いという奴だろうか、かつてのアースドラゴンにも女の人が契約したって言うし。その影響もあるんじゃないかと思う。

「それより髪洗ってくるんじゃないか？」

そうだとすっかり忘れてた、べとべとになってしまった髪を洗いに行こう。

ステファノスさんはまだ暫くここにいらしいが、小部屋から出ようとしたら呼びとめられた。

「そうだヴィトちゃん」

「はい？」

にんまりと嫌な笑みを浮かべている。嫌な予感しかないぞ。

「今度同僚のあの子紹介してくんない？あの胸が大きな子」

「嫌です」

誰が友達を遊び人に差し出すか。私は即答して出て行った。

後ろで笑い声が聞こえてきたが無視した。

けしからん！ステファノスさんは本当にけしからん！

使用人四人娘。ただしマシュマロメロンス含む。

ナツソさんの夕飯を食べて自分の部屋へ戻りゆっくりしていると、マダムに呼びだされた。

マダムの呼びだしは、とんでもない失態をやらかした時に呼びだされるらしい。シフォンが力説してた。確かシフォンはあまり要領が良くなかったんだっけ。

それにしても今日もナツソさんの料理はおいしかった。だが騎士さんたち向けに作っているためか、こってり過ぎて胃もたれしそう。スープは毎度のことだが今日はパンプキンスープのような、黄色い野菜をすり潰して乳と混ぜたものだった。ちなみに食材は見た目から日本語変換されている。人参を見せて貰った時は少し赤みが強かったけど、形は人参だった。味も似ていた。新たに名前を覚えなくていいというのは楽だ。脳内変換よ、ありがとう。

主菜はやはり肉だが、毎日味が違うので楽しめる。今日はしょうがやきのようなものだったが、サイコロステーキだったり、肉団子にして旬の野菜とスープにしたり、肉を茹でてマリネにしたり。バリエーションが凄い。が、副菜は主菜よりも種類が多いと教えて貰った。食材の数だけ、組み合わせの数だけ、味付けの数だけ料理は作れるぞ！と言ったナツソさんに私は盛大な拍手を送った。素晴らしー！やはり食に勝るものはないと思ったよ。食万歳！！

そして是非いつの日か和風料理を作ってもらいたい。寿司とか磯辺揚げが食べたいのだよ。む、磯辺揚げだったらのりさえあれば作れるか・・・？だが私は食べる専門だ。人間のときもドラゴンの時もこれだけは譲れない。・・・人並みには、料理、できる、はず、だけど・・・たぶん。

人間を料理する事を考えないのか、とお思いだろう。だが考えるまでも無い。人間はまるごと食べるからいいんだ！ワイルドに食べる！これこそドラゴン・ライフ！・・・ほんと、ドラゴン脳に染まっ

てしまったな。

そんな事を考えながらマダムの所へと歩いていた私です。平然と澄ました顔で歩いています。が脳内ではこのように食べ物のことばかり考えてます。悪いですか。

それにしても私何かやらかしたか？普通に掃除していたし、あ、もしかして無断欠勤？ばれたの？こりややばい。

小さなため息と緊張、マダムの部屋の扉をノックすると、「どうぞ」声が聞こえて私は部屋へ入った。

「休んでいた所を呼びだしてごめんなさいね」

「いえ、大丈夫です」

問題ありません。シフォンとお菓子の話をしていただけですから。

「実は第四騎士隊寮の使用人の適任者が見つかったのです」

・・・いきなりですね。もしかして呼ばれたのってその事ですか？

「今まではあなたが戻ってくるために仮りの代わりの人を準備してましたが、思いのほか長く続いているように助かりました。ですが、先日働く条件にぴったりの子が志願してきたのですよ。貴方が望むのなら今のままでかまいませんが、もしこちらの仕事に戻りたいのであれば戻ってきてくれると助かります」
ほう。

「ぴったりの子と言うのは、どなたなんですか？」

「デュフォーさんの娘さんです。本来ならば彼女がするような仕事ではないのですが、父親と同じ職場で働きたいと申し出ていますね、彼女も父親がいれば安心して働けるでしょう。辛い仕事でもいなのでお願いしますと、大変意欲的な子でしたわ」

マダムが笑ってる。こりや相当良い子なんだろうな。・・・――あれ？副隊長さんの、むすめ？

やっぱりいたのか！それも娘さん！！

「どうしますか？」

私より適任者が現れたのなら、私は潔く引くしかないだろう。もとも次の配属者が決まるまでとマダムにも言われていたし。

それに副隊長さんの娘さんなら尚更のこと。私が引かない理由が思い当たらない。

でも、少し寂しいな。でも、丁度良いかもしれない。

私は頷いた。

「はい、お願いします」

あ、ナッソさんのご飯がもう食べられなくなるんじゃないか。しまった・・・！！

結局最後のあいさつにも行けなかった。マダムは「急な事なので第四騎士隊の人には私の方から言っておきます。あなたはすぐに元の仕事に戻ってかまいませんよ」と言っていたから大丈夫だとは思うけれど。

こういうのはちゃんとしたかったんだけどな。でももう向こうに行くような用事もないし。

ナッソさんのご飯も後ろ髪ひかれるが仕方ない。でも悔しいからこっそり行って食べさせてもらおう。毎日大量に作ってるから余ってるんだよね。

お、これを理由にあいさつに行けばいいんじゃない？ナッソさんのご飯ついでにあいさつってのもあれか。

我ながら食欲旺盛だなあ。

「ヴィトちゃん戻ってくるの？ほんと？うわあ、嬉しいな！また一緒にお仕事できるね！」

配属が元に戻ることを伝えると、シフォンが私事のように喜んでくれた。なんだか嬉しい。

「代わりの人が見つかったのかしら？」

アリアーデも部屋に遊びに来ていた。部屋の大半はベッドが占領しているのでもちろん座る場所はベッドの上だ。ちなみにアリアーデは私の隣に座っている。

「うん、副隊長さんの娘さんだって」

「副隊長・・・ああ、あの子、ね」

「知ってるの？」

アリアーデは眉間に皺を寄せて少し考えた素振りをしたが、「いいえ、何でもないわ」と頭を振る。

何か知っているのだろうか？ 気になるけれど言いにくい事なら無理に聞けない。

何だろ気になるな、と思っていると突然部屋の扉のノックがなる。誰だろう、同僚の子かな？ たまにおすそ分けにお菓子くれるから楽しみにしてるんだけど。でもどうやら違うらしい。

どうぞー、とシフォンが言うのとシフォンが出てきた。え、シフォン？

「シフォン？」

「え？」

シフォンは今日の前でベットに座ってる。でも扉が開いて出てきたのはシフォンだ。え、あれ？ シフォンが2人？

「あ、お姉ちゃん！」

お姉ちゃんだと？

シフォンと同じはちみつ色の髪だが、彼女は腰まで伸ばしている。瞳も同じ色だった。

そしてなにより第二のマシュマロメロンが現れました。だからなんでスケベオヤジ視点で見ってしまうんだろう。私実は人間の時はオヤジだったのでは？ それともあまりにも貧相な胸をしていたから羨ましいとか？・・・きつと後者か。

それよりも吃驚した。シフォンたちって・・・。

「双子だったの？」

「うん！ あれ、言ってなかった？」

言っていない。お姉ちゃんって言うぐらいだからもっと年上かと思えば、外見が瓜二つで吃驚した。

これはどうみても一卵性双生児だろう。だがシフォンよりもおいしそうな魅力を感じる。これは魔力が強いつてことなのかな。

しかし吃驚だ。ほんとうに、驚いた。アリアーデも驚いているのかばかんとした表情で2人を見比べている。髪の毛の長さが同じならばきつと間違えてしまうだろう。

そんな様子の私達にシフォンのお姉さんはふふと笑った。

「親でも間違えるのよ。だから昔名前を交換してよく遊んでたわよね。今でもシフォンって呼ばれると反応しちゃうわ」

「私もお城の中でよくお姉ちゃんと間違われたよ。説明するのが面倒だったんだからー!」

「あらごめんね。一応妹が来てるって伝えてるんだけど」

伝えていても間違えるとはそれほど似ていると言う事だろう。

シフォンは私髪もつと切ろうかなあ、なんて呟いていた。姉に間違われるのが嫌なのだろう。

「ヴィトにアリアーデよね。私の事は気軽にマドレーヌって呼んで!そんなに歳離れていないんだし、仲良くしたいわ」

親はきつとお菓子が好きなんだな。

後日聞く所によると他にも妹がひとり、弟がひとりいてそれぞれミルフィーユちゃんとショコラくんと言うらしい。

今度からお菓子(洋菓子)一家と呼ぼうか。そうしよう。

「そう言えば何か話してたんでしょう? 中断させてごめんなさい。何の話してたの?」

マドレーヌはシフォンの隣に座る。こうしてみると本当に見分けがつかないくらい瓜二つだ。声色も一緒だし。ただどちらかというとマドレーヌの方がはきはきした喋り方をするみたいだ。

「ヴィトちゃんの後任さんのお話! 副隊長さんの娘さんなんだって!」

第四騎士隊の、と私が付け加えると。あらまあ、とマドレーヌさん

は目を見開いた。

「もしかして入れ代わりの激しいあの寮に配属になったのって貴方だったの？」

「あ、うん」

「かなり長く続いてたから、私達もようやく適任者が現れたのねって喜んでたんだけど・・・また代わったのね」

「マダムは私よりも良い人が見つかったって」

「それが副隊長の娘さん？」

頷くとマドレーヌはさっきのアリアーデのように少し考える素振りを見せた。

「確かデュフォー副隊長の娘さんって・・・溺愛されてる、あの子よね」

ううむ。副隊長さんの娘さんってそんなに考えるほどの子なのか？ 凄く気になる。気になるけどやはりマドレーヌも何でもないわと言ったつきりすぐに他の話に変えた。・・・気になる。気になると言えども一つあった。

「マドレーヌっていつからここで働いてるの？」

あれからなんだかんだ言って一年経ったけどシフォンと同じ歳なら17歳のはずだし、第一騎士隊寮の使用人は長く続いていると聞いたから少なくとも1、2年以上は働いているはずだ。

「12歳からよ。養子に入ってからここで働き始めたの」

「養子？」

「私の名前はマドレーヌ・モランテ。モランテ家は一応貴族なんだけどねちよっと変わってるの。子供はいるんだけど後継者がいないらしくて、偶然私が城下町に家族で遊びに来ていた時に誘われたのよ」

「モランテ家って言えば代々国に仕える魔術師の家系じゃない」

アリアーデはさっきよりも驚いている。そんなに魔術師って珍しいのか。少ないとは聞いていたけれど実際に見た事はあんまりないからわからないな。

異世界召喚が流行っていた300年ぐらい前だったなら今より随分居たらしいけど。

「それって魔力が強いつてことかしら」

「うーん・・・実感湧かないんだけどね。どうもそうらしいわ」

じ、っと観察してみるとどうやら私の好物の地の精霊に好かれていようだ。最近では集中して見るとどの精霊の加護を受けているのか分かるようになったから便利だ。ちなみにアリアーデはやはり水の精霊の加護を受けていた。

「でもお世話になってるのも嫌だし、何か仕事がしたいって言ったからモランテ家の子供、一応義兄ね、お義兄ちゃんが第一騎士隊にいるからって今の仕事を紹介してくれたの」

お義兄さんはモランテ家の実子だが、魔力はあまり無いらしい。

ううむ。それにしても双子って神秘だ。人間の記憶で知り合いに双子がいるけれど二卵性双生児なためか、容姿も性格も違うからシフォンとマドレーヌを見ると新鮮だ。これこそまさに双子！だろう。

「双子だったらシフォンにも魔力があるんじゃないのかしら？」

「一応調べたんだけど、私はお姉ちゃんと違って魔力がないみたいなの」

もしやお腹に居るときにシフォンから根こそぎ魔力を持っていたんじゃないだろうか。確かにそこらへんの貴族よりおいしそうだし。魔力の有り無しをおいしそうで判断する私も私だけどさ・・・とにかくマドレーヌは将来魔術師になるために仕事の合間に勉強や訓練をしているらしい。こんなお姉ちゃんいたら絶対憧れるよ。欲しいな、お姉ちゃん。・・・と言う事は私には兄はいるが姉はいないのか。ちよつと残念。

「魔力を調べる方法あるんだ？」

「あら知らないの？片手で持てるくらいの小さなガラス玉なんだけど、知りたいなら今度持ってきてあげようか？」

いえ、いいです。気になるけど私ドラゴンですからとんでも無い結果が出てしまいそうなので遠慮しておきます。

断ると、そう？とマドレーヌが残念そうな顔をした。

ってか持ち出していいんですか。

「義父に言われてるのよ。私みたいにごく普通の人が魔力を持っている可能性もあるから、気になる人は調べておきなさいって。そして勧誘しなさいってね」

ああ、危なかった。

「私の直感って結構当たる方だからぜひヴィトには調べて欲しかったんだけど・・・無理強いはいしないわ。気が変わったらいつでも言うってちようだい！そうだ、アリアーデはどう？」

「私も、いい」

いつみてもクールだな、アリアーデは。でもたまにデレるときのギヤップが好きだ。

「うーん、ノリが悪いわねえ。ま、いいわ。ところで今度皆で休みをとって城下町に遊びにいきましょうよ！洋服とか小物とか可愛いお店知ってるの！ね、いいでしょ？」

そう言えば私はこの制服以外、普段着の服を持っていない。休みの日もずっとこの格好だし他の服に着替える事すら考えた事がなかった。お金もそこそこ貯まってるしこれは一、二枚ぐらいいは買つという方が便利かもしれない。それに女の子同士でこうして買い物計画をたてるのも久しぶりだ。お洒落には疎かったけれど、人並みに仲の良い友達と一緒に遊びにいったし。

懐かしい、そして嬉しいと思う気持ちがある。

今日はなんだか人間の時の記憶が良く思いだされるな。不思議だ。やっぱり人間として暮らしていると人間としての記憶も思いだしやすいようだ。

次の日、アリアーデとマドレーヌが良い淀んでいた理由がわかりました。

点呼係だったのでミレーナさんに報告をしに行った帰りだった。

「あなた、ヴィト・ティエーヌでしよう？」

「え？ あ、はい」

いきなり目の前に現れたのは可憐な女の子でした。

私より15cmぐらい背の低い、私と同じ服をきた女の子。同じ服なのに着こなし感が違う。なんだろう。ただの使用人の服なのにすごく似合ってるし、彼女が来ているとまるで普通の可愛い普段着だ。

どこかで見たことのある紺色の瞳に、艶のある桃色の長い髪を耳のすぐ上で、白いレースのリボンで二つ結んでいる。薄化粧をしているのだろうか、貴族令嬢ほど強いメイクはしていないが、零れおちそうなほど大きな瞳が印象的だ。唇にもグロスかなにか塗っているのか艶々としていた。思わずキスしたくなる唇だ。あ、私がじゃないよ。世の中の男の人を代弁して言ったただだからね。

とにかく、そのへんの着飾っている貴族令嬢よりも、可愛かった。

「ふうん。あなたがねえ」

頭の天辺から足のつま先までじろじろと見られたかと思うと可愛らしい顔の眉間に小さな皺が寄る。

「手入れの行き届いてないぱさついた髪に日焼けした肌、化粧も全くしてないスッピン。はあ、女として全然だめだわ。なってない」全然の所を強調して言われた気がする。

私は何て答えたら良いか分からずただ突っ立っていた。

「ま、いいわ。今度からは私が第四騎士隊寮の配属になるんですもの。」

もしかして副隊長さんの娘さんですか・・・？ え、全然似てない！

瞳の色は確かに副隊長さんだけど、全然似てない！何度も言うよ、全く似てない！

あの副隊長さんからどうやってこの娘さんができたんだろうと思うぐらい、可愛い。奥さん似なのかな。

「私の前任が長く続いてたと聞いたからどんな女かと思って来てみれば、これだものねえ。でももう見に来ないから、あー時間の無駄だったわ」

はあ、そうですか。時間をとらせてすみませんでした。

女の子は「ふん」と言って背を向け去って行った。

・・・え、やっぱりがさつですか？

一応女の子（雌）として少し気になっちゃいます。

今度アリアーデに相談してみようか。部屋に遊びに行くと化粧水とか置いてあったし、髪も艶々しててどんな手入れしてるんだろうってぐらい綺麗だし。

それと同時に人間の女の子の手入れて面倒だな、と思う私でした。

軽い余興と甘ったるい空気。とんでもない。

あれからこんなに平和でいいんですか？と言うぐらいに平和な日々が過ぎて行った。

ティルゾート国の使者を迎えに行くのももう少し先みたいだし、本当に平和だった。うん、やっぱり平和が一番だね。

「今日は月に一度の練習試合があるの！」

シフォンにつれられて騎士さんたちの訓練場へとやってきました。ちなみにお目当てはステファノスさんらしい。ちょ、シフォン駄目だよ。彼だけは絶対駄目だから。お母さんは許さないよ！

しかしきらきらと瞳を輝かせて「行こうよ！」と腕を引っ張る彼女を振り切る事が出来なくて、引きずられるように訓練場へと連れられた。ちなみに仕事の休憩時間だったのでアリアーデも誘っていたのだが、「興味ない」の一言ばっさりである。うーん、クールだ。私もクールに生きたい。

訓練場は騎士寮を少し歩いた所にあり、多くの人が集まっていた。ちょ、まって、これ全員女の人？服装から見るとメイドさんや使用人さん。しかも貴族令嬢さんまで城のバルコニーから観戦してる。あれ、一番上に居るのって王子じゃないですか？これって私が知らなかっただけで国公認だったんですか？そうなんですか？

そこで初めて私は練習試合というものを見ることになる。が。

なん だ この 空間 は ！！

まるで何かの旅一座が余興をするような賑わいである。

まあ、こうでもしないと騎士さんたちもむさ苦しい男の中で訓練の日々なんてやってられないのかもしれない。女性に見られているとなればはりきるからね、彼らは。一ヶ月に一度らしいし、ま、いいんじゃないの。というふうには私は自分に関係ない事には興味がな

い。あ、そこ。ステファノスさんみたいだとか思っただろ。

しかし、いつも騎士さんたちが訓練する時は、寮に居て掃除をしているからこうして見る機会はなかったし、まさかこんなに女の人が見にきてるなんて思いもしなかった。

やはり国を守る彼らは女子人気が凄いのか。

黄色い歓声があがった。前の練習試合が終わって新しい騎士さんたちが出てきたみたいだ。

「あ！みてみて、次は第四騎士隊の人よ！」
なんだと。

シフォンはそう言ってメイドさんたちや使用人の女の子の間を潜り抜ける。ちゃっかりと前を陣取ってしまったから驚いた。こういう時だけは要領いいんだよな、シフォンって。

私は見えにくいけど人の少ない遠く離れた木の下で見る事にした。ただでさえ彼女らより少し身長が高いのだ。シフォンのように小さければ前に立っても邪魔にならないが、私が前に立てば間違いなくブーイングがくるだろう。

それにここからでも訓練場に誰がいるかは、はっきりと見える。

——ええっと、次の試合は。

ステファノスさんと、隊長さんだった。——え？隊長さん？

「きゃーステファノス様あー！」

え？様？

「今日も凛々しい御姿ですわ！！頑張って下さい！！」

え？凛々しい？

「きゃあ！私の方を見たわ！」

「違うわ私よ！」

ちょ、ウインクすんなやステファノスさん。あんたは王子か。

なんだこの声援は。

茫然と彼女たちを見ていたが、どうやら隊長さんの声援もあるようだ。

「今日も可愛いお髪だわ！どうやって編み込んでらっしゃるの

!？」

自分でだそうですよ。

「膝枕させてください!!」

膝枕、だと？

「すべての肌に触らせて下さいーっ!」

・・・なんか願望になってきてないか？

「ぜひ私のドレスを着て下さいましーっ!!」

うん、それは同意。女装したら絶対可愛い。・・・え？ドレス？

「ルートリア様あ！頑張ってください!」

そうそう、応援といったらこれだよこれ。あれ、隊長さんってルートリア、あ、うん。そう言えば王子がルートリアって言ってたな。

また忘れてたよ私。隊長さんは隊長さんのイメージしかないもんな。それにしてもううむ、隊長さんも人気があったのか。・・・なんか複雑な気分だ。

やっぱり食べてしまえば良かった。なんて思ったりなかったり。それにしても一応私も応援しといた方がいいのだろうか。

応援するなら断然隊長さんですよ。だれが女たらしのステファノスさんを応援するのですか。隊長さんー!ぼっこぼこにしてやれー!と心の中で応援することにした。

あー久しぶりにナッソさんのご飯食べたいな・・・今度行ってみようかな。

ドラゴンライダーはリーチの長い槍や長剣をもつのが当たり前だが、今回は人間同士の勝負である。本来自分が得意とする武器を持つだろう。

ステファノスさんは細身の剣だった。隊長さんは短剣かなと思ったが、良く見れば両手に持っていたので双剣だろう。両ききだったんですね。初めて知りました。

両者が位置に付き、審判の騎士さんが真ん中へ来て準備完了の合図が出ると、すぐに試合は始まった。審判の始め！の前はしん、としていたが、とたんに黄色い歓声が爆発したように起こり、思わず耳を塞いでしまった。こんな中よく試合なんてできるな、と2人の動きを見ていたけれど、暫くすると引き込まれてしまった。

特に、ステファノスさんの力強い攻撃に比べて隊長さんは軽く、まるで体に羽でも生えているかのような身軽な動きに見惚れてしまった。女の子達がきゃあきゃあ言うのもわからなくはない。どの世界でもかっこいい男の人には黄色い声援が付きものだ。

——もう、あの瞳を近くで見える事はないのかな。

激しく動いたためか、時折あの瞳が前髪の奥から見えて、どきりとする。

髪だって、編み込むのは私の役目じゃなくなった。それに話すことさえ難しくなるだろう。こんな所を見せられると今まで話していたのが嘘のように思われる。

以前は何気なく接していたのに、今ではこんなにも遠い。

・・・なんだよこれ。まるで私恋する乙女じゃないか！違う違う。

私はただおいしそうだから——・・・

あー隊長さん遠い人になってしまったなあ、なんて考えながら見ていた、時だ。

ステファノスさんの剣が隊長さんの頭をかすり、纏めていた髪が解けた。しかも一本のみつあみの髪留めが外れたらしく、みつあみが解けていた。しかし隊長さんは解けた髪を気にせず先程の攻撃で無防備になったステファノスさんの胴体に剣を打ち込む。ステファノスさんは咄嗟に剣で胴体を庇ったけれど、隊長さんの撃ち込んだ力が強かったためか吹っ飛んだ。

おお、さすが。と感心していたが。

——え？ 吹っ飛んだ？

ステファノスさんは見事に吹っ飛んだ。ええ、ありえないぐらい吹っ飛びました。近くにいた人も何人か巻き込まれて吹っ飛んだし。

何メートルも先の城の壁に、ドガッ、と大きな音を立ててステファノスさんは叩きつけられた。運が悪かったら骨が折れてるだろうが、案外丈夫らしく、他の騎士さんたちに助け起こされながらも自分の足で立ち上がっていた。ざまあみろーと一瞬心の中で思ったのは内緒です。

3、4メートルぐらいなら頑張れば飛ぶかもしれないが、ゆうに10m以上は吹き飛んだと思うよ、あれ。

人間が出せるような力ではない。そこにいた全員がしんと静まり返っていた。

隊長さんも茫然と自分の左腕を見つめていて、何が起こったのか分からない様子だ。しかししきりに掌を開けたり閉めたりしているのに私は気がついた。

ああしまった・・・！あんな腕あげるんじゃないかった。

元は私の身体の一部だ。今の様な力が出せてもおかしくない。

私は人間らしく生きるために、人間の姿の時は筋力や体力、全てに関して人間並みに制限している。だから普通に人間の世界で生きて行くことができる。

だが隊長さんは自分の左腕をドラゴンに貰った腕と認識しているのだろう。だからあんな力が出せたのかもしれない。

周りの人もようやくざわめきだして「やっぱり契約を――」そんな声が無処からともなく聞こえてきて、ため息をつきたくなった。

契約なんてしてない。そもそもそんな面倒なことやりたくないし私にとっては重荷過ぎる。やめてくれ。

ふ、とそんなとき隊長さんがこちらを向く。完璧に目が合った。

隊長さんの目はいつものように見えなくなっていたけど、絶対これは目が合った。

何となく身構えてしまう。嫌な予感しかない。

隊長さんは首を傾げていたが、私だとわかると小さく手招きをする。え、なんで。

私に？この女性達を掻い潜って？そこへ行けど？そうおっしゃるんですか？

無理無理無理無理無理！！

そんな度胸私にはありません！ただでさえ女性関係に巻き込まれたくないのに！！今出て行けば絶対彼女らのブラックリストに入りますって！！

申し訳ないが、私は首を横に振って深くお辞儀をすると脱兎のごとくそこから逃げ去った。

隊長さんなら許してくれるだろう。もしくは許せ。そして私のことなんて早く忘れてくれる事を願おう。

それにしてもあの腕はやつかいだ。どうしよう。

本能のままに動いたあの時の自分をこの時ほど悔やんだ事はない。・

・・・おいしかったけど。

ぶつぶつと自分の行動の愚かさに愚痴を言っていると、あれ？

——ぐい、と右腕が後ろに引っ張られた。驚いて後ろを振り返ると。

「ヴィト、なんで逃げるの」

うひゃあ。いつの間に後ろに居たんですか！

私は驚いて腕を引っ張った隊長さんを見上げる。みつあみのひとつが解けているが、何日ぶりかに見る隊長さんだ。

追いかけてきたのか。まさかそこまでして追いかけてくるとは思わなくて、油断していた。

隊長さんはあの場から脱兎のごとく逃げ去った私に対して不思議そうな顔をしてる。まさか、わかってないの？

「ほらその、もう配属が違いますし」

「んー・・・あ、そうだったね」

忘れてたんかい。そして今思い出したかのように言うなや。

——本当に、鈍い人だ。

遠い人になってしまったなあーなんて考えていた私が馬鹿みたいだ。隊長さんはいつもと同じように普通に私に話しかけてくれるし、それにほっとしてる自分もいる。

何だか複雑だ。感情って難しい。

「私に何か用事があったんですか？」

「髪、解けたから」

もしやそれを編み込むために先程私を呼んだと？・・・そのぐらい自分でできるはずじゃないですか。

まあ、ここまで来たから人はいないし頼まれたのでやりますけど。隊長さんを近くの庭のベンチに座らせてその後ろに回り込み、髪留めを受け取る。

久しぶりに触れる隊長さんの髪はやっぱりふわふわで、口の中で唾液が——でないよ。でてないからね。・・・でてないってば。

そうだ、この機会だからあいさつのことも言っておこう。

「隊長さん、配属変更のごあいさつでもできずにすみませんでした」

「んー」

「行こうと思ってたんですけど、なかなか時間が取れなくて」

「んー」

「短い間でしたけれど、ありがとうございました」

なんだかんだ言って、楽しかったです。隊長さん毎朝起こすのも、髪を編み込むのも、ドラゴンの事を嬉しそうに話しているのを見るのも、副隊長さんと他愛のない話をするのも、レイナの怪我を心配するのも、ステファノスさんがまたやらかしてランスさんに怒られているのも、ナッソさんのご飯も。

楽しかったです。毎日が充実してました。

改めて思う、私は本当にあそこにいるのが好きだったんだなって。

とても居心地が良かった。

「んー・・・」

長いみつあみを編むのはもう慣れているものですぐに出来上がった。

「できましたよ」と言う。隊長さんは振り向いて私を見上げる。前髪に隠れてちらちらと黒い瞳が垣間見えた。

まるでいつかの時みたい。私の前髪に触れると、その指がするりと頬に流れ、撫でる。くすぐりたい。

「ヴィトは、何も言わないね」

「・・・何がですか？」

「俺の目のこと」

隊長さんは自分で前髪をすくい上げて見せた。突然現れる隊長さんの瞳は、心臓に悪い。

私の恋焦がれる黒、今まで出会ってきた人間の中でそれを持つものは、隊長さんしかない。

それが今、私の姿をうつしている。しかしそれは”私”の姿ではなく”私が食べた村娘の姿”だ。本当の自分の姿なんて、覚えてない。その瞳にうつった自分は偽りの自分で、その事に気づき少し落ち込んで、つい黙り込んでしまった。本当の私は、どこにいるんだろう。・・・それにしても何か言わなくちゃいけないのだろうか、私の言葉を待っているように黙っているし。

「えっと、綺麗、ですよ」

本当に、心臓に悪いくらい。懐かしくて、縋りたくなる色だ。

隊長さんは機嫌が良いのか、くすぐすと笑った。

きつとステファノスさんをふっ飛ばしたからですね。わかります。え、違うって？

「そんなこと言うの、ほんと、ヴィトぐらいだよ」

「え？ そうなんですか？」

なんだかデジャヴ。

「だって、黒は珍しいだろう？ だから、好奇心目で見られる。あまり良く思われない時も、ある」

だから隊長さんは前髪で隠してるのかな。視界が狭まっているのに動けるなんて凄い。たまにこけるけどさ。

でも・・・隊長さんも悩んでることあるんですね。何だか寂しそう

に笑うので隊長さんも人間なんだな、って思った。

「私は・・・好きですよ」

「——え？」

思っていた事が口に出て自分で驚いた。

え？え？ちょ、これ告白じゃないか！や！私はそんなつもりで言ったんじゃない！！ただ黒が好きで！好きすぎて！！

め、めがです！ひとみがです！くろがです！って訳のわからないことを叫んでしまった。

隊長さんはきよとんとさせていたけど、「ありがと」とふんわり優しく笑った。

ああ恥ずかしい。穴があったら入りたい！

なんですかこの甘ったるい空気は！私の赤い顔よ！静まれ！！なんて1人で慌てていたら。

「不思議。君の瞳は、とても似てるね」

じっと観察されていたらしい。

誰に似てるかなんて絶対聞けません！聞いたら終わりのような気がします。

配属を変えてよかったかもしれない。と切に思う私でした。

ああもう。

隊長さんと喋るといつも調子狂う。

なんなんだよ、これは。

変人と神巫様は紙一重。癒しの桃色。

私は壁に手をついて項垂れていた。

——食べすぎた。

そろそろお腹が空いたから遠くへ飛んで人間を食べに行ったんだけど、つい調子にのっていつもの倍、人間を6人ほど食べてしまった。しかもそこそこ魔力があったから満腹を通り越して吐きそうだ。だかもったいないから吐かない！

取りあえず動いてエネルギーを消費しようかとしていたら、誰かに声をかけられた。

「あら、ヴィトじゃない。そんな所でどうしたの？」
マドレーヌだった。

気分の悪そうな私に気付くと大丈夫？と駆け寄ってくる。優しい友人を持って私は幸せだよ・・・食いはある。ああ、間違えた、悔いは無い。

「うん、ちよつと人間を食べすぎて・・・」なんて言えるはずもなく、「ちよつと気分が悪くて」と誤魔化しておいた。

「部屋に戻った方がいいわ。手伝いましょうか？」

「ううん、・・・気にしないで。少し歩けば・・・良くなると思うし」

「そう？でも心配だわ」

「マドレーヌどうした？」

男の人の声が聞こえたと思ったら、そこにはいつぞやの王子殿下がいた。

今日もきらきらだな。なんつうか、この人もおいしそうなんだけど、観賞用のために作られた料理、という感じがしてあまり食べたいとは思わない。もっと分かりやすいのなら、宝石で飾り、香水をふられたキャビア。もともとが良いのになんか残念だ。残念だよ王子。よしこれから残念王子と呼ぼう。

もしかして一緒に歩いてたの？え？残念王子とマドレーヌってどういう関係？

マドレーヌが国お抱えのモランテ家というのに関係あるのかな。魔術師の卵とか言ってたし。

「レブランシュ王子、彼女を放っておけないので一緒に連れて行ってもかまいませんか？」

「かまわないぞ」

かまわんのかい！かまえよ！デートだったらどうするんだよ！私お邪魔虫じゃないか！

幸い周りには人がいないから誰にもじろじろ見られる事はなかったけど、・・・え、ここどこ？

私は改めて周りを見回した。

——ここはどこだ。そして私は誰だ。

いつも働いている場所より、随分豪華な装飾がされている廊下だ。
・ 確かここは私達の管轄ではない。初日にミレーナさんにここには無断で入ってはいけないと、ここはメイドさんたちが来るような所だと、言われた。・・・という事は、王族が住んでいる場所に近い所。

やばっ。

あまりの気持ち悪さに間違っ入りこんでしまったらしい。背筋がヒヤツとする。

危なかった・・・！見つかったらマダムの説教どころか下手したらクビになることだったよ。

あれ、でもまてよこれってもしかして見つかったんじゃない？

ちらりと残念王子を見たが、またウインクを投げてきやがった。やめて。今私弱ってるからそれやめて。

「私の事は気にするな。友人を大切にすることは何より大事だからな」
心からそう思っているらしく、笑顔も素敵だ。

・・・意外に優しいんですね。残念王子。今度からちゃんと王子って言います。

それにお辞儀もしない私に対して怒鳴るわけでもなく、たかが使用人のひとりのためにそんな言葉をかけてくれる。

私の中で王族というイメージは権力を誇示する暴君か、国を思いやる名君だったが、いずれも近づきにくい高貴な人というのには変わりなかった。

だが今日の前にしている、えっと、れぶ、れぶりや・・・レブランシュ王子は、なんか言っちゃ悪いけど庶民的な王子という感じがする。外見は白馬の王子様だが、性格が親しみやすいのだろうか、特に激しく緊張するわけでもないし友達のお兄さんという感じだ。というか2人でどこに行くつもりだったんだろう。

「ヴィト、今から神巫様の所へ行くんだけど一緒に行きましょう？神巫様ならきつと気分が悪いのも治してくれるわ」

神巫だと？

そんな人がこの国にいたのか！

「神巫様って・・・」

「国で唯一治癒魔法が使えるひとよ。預言者とも言われてるわ」

私ったら全然この世界とかこの国のこと知らないな。今度歴史書でも読もうか。ああでも教科書みたいなのは苦手だ。勉強は嫌いだったから成績もあんまり良くなかったし。

・・・そうか、歴史書なんかを読むより自ら神巫様に会いに行つて、どんな人かを見極めるのもいいかもしれない。

調べる手間も省けるじゃないか。私って頭良い。

意外と大丈夫なんじゃね？どうみてもただの使用人の少女だし。この気分の悪さをぱっと治してくれるのなら行こうじゃないか！

そんな事を思っていた時期が私にもありました。 part 2

そんな決断をしてしまうぐらい、私は気分が悪かった。

そして神巫様はそれはもう綺麗な方でした。

大理石で作られたような部屋で窓ひとつな、一番驚いたのは辺り一面が水浸しだった事だ。それも腰ぐらいの高さまで部屋は水に浸かっていた。

水が流れ込んでくる！と扉の前で身構えたが、王子とマドレーヌが何のためらいも無く部屋に入ったので驚いた。まるでそこに透明の壁があるように、水は廊下に流れてこなかったからだ。茫然と突っ立っている私に気付きアリアーデに手を引かれて部屋へ入ると、驚いたことに服が濡れていない。水は確かに腰の高さまであるのに、歩く時の抵抗感だって、感触だって水そのものだ。だが、服は少しも濡れていなかった。

なんじゃこりゃー！と両手で水をすくってはこぼし、すくってはこぼし、を繰り返しながら心の中で叫んでいたが、苦笑したマドレーヌにまた手を引かれて部屋の中央まで連れて行かれた。

ごめんよマドレーヌ。私の脳はこの状況に付いていけそうにも無いんだよ。許しておくれ。

部屋の中央はぽっかりとした丸い空間が開けていた。やはり見えないう壁でもあるように水は一切その空間に流れ込んでいない。そもそもこれは水なのだろうか？

神巫様はその空間の丸く縁取られた小さな泉に佇んでおり、絡まる事の知らない銀色の長い髪がその泉に向かって流れ落ちて、泉に髪が溶け込んでいた。

ただ髪が浸かっているだけかと思ったが、これは水と髪が同化してゐるんじゃないかと思う。

これじゃ動けないじゃんか。

後でマドレーヌに聞いたら、神巫様はここからやっぱり動けないらしい。動いたら死んでしまうとか。それどんな仕掛け？

私の胸元までの身長に、幼い顔立ち。若干幼すぎる気がしないこともないが。本当に生きてるの？と思わせるほど神秘的で、何より――男の子だった。

吃驚だよな。

え、神巫って普通女の子がなるものじゃないの？と言うのは私の先入観だったらしく、男の子だった。女の子と言えどもわからなくもないが、だって、その、胸がないんだもの！！白いワンピースを着ていたけど全く胸がない！断崖絶壁のまな板なのかなって思ったけど、声が変声期を過ぎた青年の声をした。

どこからそんな声を出している・・・！外見は幼いののに声が青年・・・不思議だ。

しかもこれで優に1000年は生きていらしい。あなた人間ですか？もちろん違いますよね？ね？

この国の生きた化石みたいな人にこんな簡単に会えるものなんですか！？と聞いたたら、会おうと思えば一般人でも手続きさえすれば会えるらしい。拍子抜けだ。

それも皆怖がってあまり会おうとは思わないとかで。だから今まで私の耳に入らなかったのか、納得。まあ1000年も生きていらしいし、近づきにくい存在だということは分らんことも無い。

「やあやあ、これは王子。今回はどう言ったご用件ですか？」

につこりと笑う女神の頬笑みならぬ男神巫の頬笑みだ。綺麗だけど綺麗過ぎて生きてる感じが全くしない。

「ティルゾート国の使者の件だ。お前知ってて言ってるな？」

「僕は人間同士がすると言う他愛も無い話をしたいのですよ。付き合ってくれても良いではないですか」

「お前の話に付き合うと最低でも三晩は必要だからな。またの機会にしてくれ」

「これは手厳しい。ふふふ、王子の言いたい事はわかってますとも。安心して下さい」

なんだかこの人と話すのは疲れそうだ。王子頑張れ。ファイト！！

「おやおや、これは魔術師の卵どの、今日も見目麗しい」

「お久しぶりです。神巫様」

「よろしければ今宵私の紡ぐ歌をあなたに贈り――」

「口説くな」

「・・・失敬ですね、王子。僕は美しいモノを愛でたいだけなのに。それとも嫉妬してるのですか？ふふふ、わかってます。僕は王子一途ですとも」

あの王子がため息をついた。誰かれ構わずウイंकを投げてよこす王子が、だ！誰にも苦手な人は存在するんだね。わかりますわかりますとも。

それよりもテイルゾート国の使者の件って言ってたよね？もしかしてその事を話に來たのかな。私ここに居て大丈夫？

「神巫様、その話の前に彼女を見てくださいますか？具合が悪いみたいなんです」

なんて考えてたらマドレーヌがそう言ってくれた。

もしかしてぱっぱと治して私帰りますフラグ？そして私が出て行った所で重要な話をするんだね。

どうやって治すのかわからないけどちゃっちゃと治してもらったらさっさとこの部屋を出て行けばいいんだよね？私空気読めるから大丈夫だよ。ぜひともそうしてくれ。

私はマドレーヌに背を押されて前へ進み出た。

——瞬間、だ。

「おや？」

神巫様は私を見て、意味あり気に含んだ笑みを見せる。

——ぞぞぞっと背筋に冷たいものが駆け抜けて、産毛が逆立つ。私は本能に赴くまま警戒心をむき出しにしてしまった。

そんな様子の私にまた笑みが深くなり、全てを見透かしているような銀色の瞳で、笑う。

・・・なんなんだ。一体、これは何？やばい。これはやばい！やばすぎる！！逃げたい今すぐ逃げたい！！ここから走り去りたい！

本能が危険だと私に警告していた。

まるで会うはずの無い捕食者に出会ったような気分だ。

「こちらへおいで」

細い手を差し伸べられる。私は微かに震える手をゆっくりと伸ばした。

この手をとらなくちゃいけない。でなければ後ろにいる王子とマドレーヌに怪しまれてしまう。

でも、行きたくない。行きたくない行きたくない行きたくない。得体の知れない感覚が沸き起こって先程よりもっと気分が悪い。冷や汗が出る。

だがマドレーヌに背を押されて、躓くように前へ進み出た。

そして躊躇している伸ばしかけた手を取られたかと思うとすつ、と顔が近づけられる。

至近距離の銀色の瞳に”私”が映っていた。息を、のむ。

――・・・その、”姿”は。

一瞬だけその瞳の中に垣間見た”私の姿”は、私がずっと探していた、”人間の私”だ。

黒い髪の毛、黒い眼の、黒い制服を着た、”私”だった。

だがそれは一瞬で消え、瞳の中の自分は今の私の姿に戻った。顔も、良く見えなかった。

でも間違いない。あれは”私”だった。

「ほう、これはめずらしいですね」

「――！」

「警戒しないでください。なにもとって食おうとはしないんですから」

”あなたみたいだね”、と言われて私の頭の中はありとあらゆる警報器が鳴り響いていた。

パトカーや救急車、消防車のサイレン、踏切の音、電車の改札機で引っかかってしまった音、家のチャイムや学校の予鈴、電話の鳴る音や携帯電話の着メロ、車のバック音、目覚まし時計の音。全て人間の記憶の音だ。

それが頭の中でけたたましく鳴り響いていた。

——この人は、知ってるの？私が、……ドラゴンだということ？

どうして？なんで？1000年生きてるから？なにそれなんの能力？

「もう100年も前になるんですね。時が流れるのは早い。しかし本当に不思議です。……あなた”だれ”なんですか？僕が詠んだ未来に”あなた”は存在しない。ですがこれもまた一興やもしれません。おもしろい事になりそうですね。ああ楽しみです。ですよ？ええそうです。」

掴まれた私の震える手を撫でる指は冷たい。

うつとりと笑顔を浮かべ、ひとりで喋ってひとりで完結している。

なんなんだこの人は。ノリツツコミができるピン芸人か。

「でも、そうですね。なるほど」

じつと瞳の中を覗きこまれる。

またあの全てを見透かすような銀色の瞳が、鼻先がくっつきそうなぐらい近づいて、私は身じろぎするどころか全身が石のように固まって動く事が出来なかった。

内緒話をしているように喋っているから、マドレーヌたちからは何を喋っているかなんてわからないんだろう。気付いて欲しいけど、気付いて欲しくない。

こんな事になるのならあんなに食べるんじゃないかった！

今更後悔したって遅い。

神巫様は笑みを消して言った。

「僕から言えることはたったひとつです。——あなたはいずれ、死ぬでしょう」

なんつうことを言いやがった！！あなたは私の死神か！本当は神巫様なんかじゃなくて死神なんだろ。そう言われても納得できる！

「そ、そりゃいつかは死にます。生物、ですから」

裏返ったがようやく声を出す事ができた。

「ふふふ、そう言う事じゃない。言葉が悪かったかもしれませんがね。」

あなたは死ぬか、生きるか、どちらかの道を辿ることになるでしょう。そう言いたかったんです」

全然内容が違うじゃないか！お茶目すぎないかこの神巫様！私の死活問題なんだぞ！

「どちらにも絶望が待ち受け、どちらにも希望が輝いている。どちらを選ぶかは、あなた次第ですよ」

だったらぜひとも生きる方を選ぶよ私は。というか言い方が曖昧すぎる。それに預言者とか言ってたけど、そんなこと誰にでも言える事だし、誰でも言える事だ。

「み、未来を詠み取れるのなら、この国の未来を詠み取って、戦争に、勝てばいいじゃないですか」

「そうですね。でも未来は変わって行くもの。僕が詠み取ったものも気休めでしかない。今までも何度も外れて来ましたし、ようするに」

「万能じゃないんですね」

天気予報士みたいに。

「まあそうですね、結局は未来なんてものは自分次第、ってことですよ」

神巫様は、僕に向かって万能じゃないだなんて見かけによらず厳しさを事いいますねえ、と苦笑した。

それって詠み取る意味ないじゃないですか。私の人生は私の選択肢で決まっている。それを改めて言われるのもなんだか妙な感じがする。

占い師に騙された感じだ。

ようするに自分次第。

ようするに自分の気持ち次第。

それって、助言にはなっていない。

「でも覚悟はできるでしょう？」

まあ、そうだけど。

ううむ、無理やり丸めこまれた感が否めない。

「ふふふ、大丈夫です。僕は”あなたたち”にはとても優しいんです」

あなた”たち”って誰だ。聞きたくない。聞きたくないけど気になる。そう言えばこの人は1000年も本当に生きているのなら、かつての彼らを知ってるんじゃないか？

少しの疑問が沸き起こるが、それを聞けば私はドラゴンと言うことを肯定してしまうことになる。そんなの嫌だ。

「彼らも自分自身の意思で決めていましたし、あなたはどうかわかりませんが後悔なさらないように」
最後に頬に軽くキスをされた。

「食ベすぎも、ほどほどに」

どうして私の気分が悪かった理由を知ってるんだ・・・！恥ずかしいすぎる！

頬の感触に心の中では悲鳴をあげていたが、不思議と気分の悪さがずっと良くなっている事に気付いて驚いた。

「知りたい事があればいつでも僕の所へおいでなさい」

顔が離れていく。体の硬直も抜けて行き、私は素早く後退ってその場から離れた。

もしこの事を王子に言われてしまったら、と心配していたが、神巫様はにっこりと笑って人差し指を口元まで持っていくと。

『誰にもいいませんよ』

と口をパクパクさせた。

・・・何が目的だ。何か裏があるようにしか思えん！賄賂か！？私はそのんなにお金持っていないぞ！

「ヴィト、もう大丈夫？」

「・・・うん」

気分は良くなったが精神的に疲れた。

だがそんな姿を見せまいと元気を出す。

「ありがとう。気分も良くなったし、帰るね。それに大切なお話しるんでしょう？私お邪魔みたいだから」

「いいのよ。それに話はすぐに終わるから、外で待っていてくれれば部屋まで送るわ」

まだ心配だわ、と言うマドレーヌに大丈夫だからと言って、濡れな水を掻い潜り部屋から出て行く。

「レブランシュ王子、お邪魔して申し訳ありませんでした」

「かまわん」

本音は、ここに居たくなかった。一秒でも早くこの部屋から出たかった。

マドレーヌの心配そうな視線が背中に感じたが、私は逃げるように部屋を出た。

神巫様という人は不思議な人だ。人かどうかさえもわからない。そして変人だ。疲れた。

私がドラゴンだということを知られているみたいだし、その事について『誰にもいいませんよ』とは言っていたが、どうなるかわかったものではない。私はそのことを心配をしながらビクビクと毎日を過ごさなければいけないのか？・・・とんでもない弱みを握られた気がする。

でも、待てよ。

私がドラゴンだとばれてもとぼければいいんじゃないか？

えーなにそれ知りません。私がドラゴン？あははそんなわけないじゃないですかー。みたいな。

いやいや神巫様の発言力がどれくらいのものかは知らないが、疑われる可能性はある。

・・・一体どうしたらいいんだ。

私はこれからの事を考えるとため息をつきたくなった。

・・・それに、神巫様はなんか、・・・食べる対象じゃなかったよ。むしろ私が食べられる対象だ。そんな感じがした。ああ怖い。

なんだか無性に隊長さんに会いたくなった。
なんでだろ。

部屋へ戻っていると前から誰かが歩いてくる。
副隊長さんの娘さんだ。

・・・どうしてだろう。神巫様に会った後だからどんな人でも癒される。桃色の髪って女の子らしくて可愛いよね。あんなに悪態言われたのに、彼女に出会って私の心は春一番の風のように清々している。

だが心なしか少し顔色が悪い気がする。彼女は私の姿を目に留めると嫌な顔をして通り過ぎて行った。

「あの」

声をかけると彼女は数歩歩いて立ち止まった。不機嫌そうな顔がこちらを向くが無視されないだけ良い。

「なによ。用事がないのなら話しかけないでちょうだい」

あるので話しかけたのですが、私は急いでポケットからピンク色の小さな袋を取り出す。口が絞ってある巾着袋だ。

私は今猛烈に誰かに優しくしたい気分なのだ。

「これ、どうぞ」

「・・・はあ？」

「香り袋です。これを首からかけるだけでも全然違いますので良かったらどうぞ」

きっと彼女の顔色が悪いのは第四騎士隊寮特有のあれだろう。特に今日は飛行訓練だったためか酷かったようだ。だが私は常にこれを見に付けていたから気にならなかった。むしろおいしそうな匂いを

してる人だったし・・・というのはドラゴン脳で。

それに最近では副隊長さんがすぐにシャワーを浴びないと衛生的にも悪いぞ、と働きかけてくれていたので前より酷くはないはずだ。私はもう使いませんからと彼女に差し出すが、手の甲で弾かれてしまった。

「知らないわ。誰があんたのおさがりなんか貰うものですか」

「そうですか？・・・でも顔色悪いですよ」

このままだと倒れてしまうかもしれない。少し心配だ。

副隊長さんは確か貴族出身だったからこの子もそこそこに良い暮らしをしていたのだろう。そもそも私達のような下の仕事ではなくメイドさんのようなどちらかというと目立つ仕事をする人なのだろうが。ただ父親の職場で働きたいという思いだけで、年頃の乙女には少しばかりきつい内容の仕事をするものなのだろうか。

ファザコンなのか、そうなのか。まあ副隊長さんが溺愛しているって言うし。気持ちもわからん事は無いぞ。すっごい可愛いもん。食べるのがもったいないくらい。

「・・・しつこいわね。わかったわよ」

未だ香り袋を掲げているのに痺れを切らしたのか、奪い取るように私の手から香り袋を引っ手繰って行った。

良かった。使うかどうかはわからないけど一応は受け取ってくれたみたいだ。

「もう話しかけないでちょうだい。迷惑だわ」

ふん、と鼻を鳴らして以前と同じように背を向け去っていく。

彼女こそ神巫様に会わせた方がいいんじゃないだろうか。気分悪そうなんだし。

・・・思い出して、身震いした。

出来ればもう二度と会いたくない。

皆が怖がって会いに行かない理由が良くわかったよ。

使用人四人娘＋α。ただしナイトs含む。

今日はマドレーヌたちと計画してた、四人で城下町に遊びに行くことになった。
だが。

どうしてこうなった。

私は制服しか持っていなかったので最初に来ていた臙脂色の服に着替えた。

村娘を食べた時に着ていた服はいつでも着替えれるようだ。やっぱり食べたからかな？まだその所はよく分かってないが、便利だから良い。ドラゴンから人間になる時も素っ裸にならないからありがたい。これも魔法なのだろうか。ううむ、万能すぎる。

アリアーデは水色のワンピースに薄手のショールを羽織っている。シフォンはフリルがたくさんついたオレンジ色の余所行きだ。

マドレーヌもシフォンと同じものを着ており、こうしてみると本当に双子だなー……。っで、なんで彼女らの隣にステファノスさんとランスさんが居るんですか。

特にステファノスさん。紺色のシャツに黄土色のズボン、ラフな格好だが、騎士の制服よりチャラけて見えるからどうみても胡散臭いお兄さんのイメージしかない。ナンパしてそう。

それに比べてランスさんは白いシャツに品の良い上着、灰色のズボン、どこからどうみても街の好青年だ！逆ナンパされてそう。

が、なぜ二人がここに居るのか。

四人で城下町に行こうとしていたら、偶然休暇中の彼らに出会った

のだ。偶然過ぎないか？怪しすぎないか？

これは前から知っていて、OH！！偶然だな？もしかして俺らって運命の赤い糸で結ばれてるんじゃないかね？作戦か。そうなのかステファノスさん。で、相手はシフォンなのか？

——あげませんよ！シフォンは絶対にあげません！渡すもんですか！

ステファノスさんをじとっ、とした目で見てみると意地の悪そうな笑みを向けられた。

「お姫様の護衛にはナイトが付き物だろう？」

「・・・すまない。私は止めようとしたんだが」
申し訳なさそうにランスさんが言う。

大丈夫ですわかってます。ランスさんもいつもごくろうさまです。そして見張りとして付き合っ下さってありがとうございます。

「ねえねえヴィトちゃん！ステファノス様に会えたのも何かの運命だと思うの！」

「う、運命？」

ちよ、まてやシフォン。早まっとはいけない！

が、私達の内緒話をちゃっかり盗み聞きしていたのか、ステファノスさんはにやにやしながらシフォンの横に立って彼女の腰を抱く。肩じゃなくて腰なのがなんともエロいよ。

「だよなーじゃあシフォンちゃん。俺と一緒にデートしようか？」

「えっ！？」

シフォンの顔がぼんっ、と真っ赤になった。

「ステファン・・・！」

「おお怖い。そんな顔で睨むなよ。綺麗な顔が台無しだぜ？ランス」
それはこっちの台詞だ。せっかくの綺麗な顔なのにそんなにやにやした顔をしないでくれ。黙ってればかっこいいんだから。たぶん。

「ステファノスさん、私も付いて行っいいかしら。それともお邪魔？」

マドレーヌはさっきから何かを考えている素振りを見せていたが、

もしかしてステファノスさんの事が好きなのか？

「いいぜ？愛でる花が増えるのは全く構わない」

にやにやすんなこのド変態女たらしが！

私の中でステファノスさんの株が大暴落だよ。

せっかく四人で楽しい一時を過ごせると思ってたのに。アリアーデもため息をついてるしとんだトラブルメーカーに捕まってしまった。落ち込んでいる私にマドレーヌはこそつと耳打ちする。

「ステファノスさんがいたらのんびり買い物もできないでしょ？あとで合流するから楽しんできてね！」

なんて優しい子なんだ・・・！もしかしてそのために自分も行きたいと名乗り出たのだろうか？自分を犠牲にしてまでも友人を第一に考えてくれるなんて、誰かに見習わせたいぐらいだ。

「私も行かせてもらおうよ」

「いいえ、ランスさんはヴィトとアリアーデに付いていてちょうだい。あなたまで来ればきつと喧嘩になって買い物どころじゃなくなってしまうわ。それに妹を守るのは姉の役目よ。大丈夫、私これでも男の人の扱いには慣れてるの。特に彼の様な人はね」

第一騎士隊寮で12歳の時から働いていると言ってたし、彼女の言う通り男の扱いはお手の物だろう。心強い。

「それとこれ、私のお勧めの店の場所に印つけておいたわ」

手に握らせてくれたのは四つ折りにされた城下町の地図だった。お礼を言うとマドレーヌはステファノスさんたちの所へ走って行った。かざりとそれを開くと、地図の至る所にまる印が付いてある。

これ、今日中に全部回るつもりだったのだろうか。

「それマドレーヌが？」

「うん、お勧めの店なんだって」

「印がたくさんついてるわ・・・本当に楽しみにしてたのね」

今日を楽しみにしてこのまる印を付けているマドレーヌを思い浮かべると、なんだかしんみりしてくる。ステファノスさんさえいなければ四人で楽しくこのまる印の場所を回ることができたのだろうに。

「・・・本当にすまない」

私は無言でランスさんのちょっと高い位置にある肩を叩いた。

「ちょっとヴィト、まさかそれを買うつもりじゃないでしょうね」
「え？だめ？」

「どうみても男物じゃない！女の子はズボンなんて履かないの」
手に持ったズボンを奪われてもとの場所に戻されてしまった。ああ私のズボン・・・ズボンはいいんだよ。どんな格好しても大丈夫なんだよ。万能なんだよズボンは。

いつもワンピースタイプのスカートばかりだからこう、下半身が心もとないんだよ。せめて短パンぐらいは下にはきたい。学生服の時もいつもはいてたし。

兄からは”スカートの下に短パンなんぞ許せん！”とかブーイングされてたけど・・・あれ、もしかして私の兄って変態・・・ま、まさかね。

「私が見立ててあげるから、そこにじっとしていて」

またズボンを見ようとしていたらため息をつかれて無理やり椅子に座らせられた。

ここはアリアーデ行き付けの洋服屋さんらしい。普段着に着るようなもののばかりが揃えられており、ドレスなどの優美な衣装は全く置かれていない。それはまた別の専門のお店にあるみたいだ。アリアーデも以前は小さなパーティ等に出ていたらしく、何着か持っているんだと。着飾ったアリアーデか凄く見たい。綺麗なんだろうな、今度着てくれないかな。

アリアーデが身繕って持ってきてくれたのは、やっぱり全部スカートだった。ズボンとは却下か、と落ち込んだけどせっかく持ってきてくれたのでその中から選ぶことにした。

「どう？私はこの黄色がいいと思うの。今の流行色だし明るい色あまり着た事がないでしょ？それにこんな派手な色、着れるのは今のうちよ」

「じゃあぜひともアリアーデが」

「私はいいの。今はヴィトの服を選んでもらうから、ほら選んで？」アリアーデが着ているのを見たい。と言おうとしたが遮られてしまった。

色で言うと、黄色、青色、紫色、白色、緑色の五種類だ。やはりこの世界の女性は上下が繋がっているワンピースタイプしか着ないようだ。形もそれぞれ似ているが、若干違う。リボンやフリル、レースや重ね色などワンピースタイプでも様々なバリエーションがあるようだ。

ううむ、こういうのには疎いから何を選んだら良いか迷う。

黄色、紫色は原色に近い色で派手なので遠慮したい。青色はどちらかというと地味な色だから良いな、とは思ったがいつも着ている使用人の制服にそっくりである。これじゃあ買う意味がない。

だったら白色と緑色どちらにしようかと悩む。

白はすぐ汚れるから止めておいた方がいいかもしれない。

消去法で残ったのは緑色だ。

——緑って、どうも隊長さんを思い出す。

とは言っても、この服の方が濃い深緑だから違う色と言えば違う。目立たず無難な色だと思うが、少しレースやフリルが多い様な気がする。

「ちょっとフリル多くない？」

「こんなものよ。他のはもっとすごいんだから」

今の流行りはフリルとレースがふんだんにあしらっているものだそう。確かにお城にいる令嬢さんたちはいつも凄いドレスを着てい

る。

ロココ調のようなお姫様ドレスと言うのだろうか。

友達にいたな、そんな趣味の子。写真撮影会するからと巻き込まれそうになった苦い思い出がある。私絶対似合わないって。

「うん、似合う」

「えーほんとう？」

「ですよ、ランスさん？」

なぜそこでランスさんに話をふる。

ランスさんと言うと落ち着かない様子で店内をうろろしていた。そりゃそうだ。ここは女性専用のお店なんだから普通男の人は入らないだろう。ただ外で待ってもらおうというのもなんだったので、一緒に中に入ってもらったのだ。

「あ、ああ凄く似合ってるよ」

なんか無理して言ってる？でもめんどくさいからこれにしよう。お値段も手ごろだし。

脱ぎようとしていたら、「どうせなら着て帰りましょうよ」とアリアーデに言われ、着て帰ることになった。着ていた服はもう一着買った袋に入れて貰いランスさんに持ってもらったことになった。

紳士だ！

誰かにランスさんの爪の垢を煎じて飲ませてやりたいよ。

露店と言うのもあるようで、歩いているとアリアーデが立ち止った。私も気になって覗き込むと、様々な色の髪飾りがたくさん並んでい

た。これ全部手作りなのかな、凄い。どうやって加工してるんだろう。

「あら、可愛い」

「お嬢さん、コレなんかどうだい？」

「少し派手すぎないかしら？」

「そんなことないさ。お嬢さんのブロンドの髪にきつと似合うはずさ！」

私はと言うとある一つの髪飾りに目が釘付けだった。それは白い造花に赤い石が埋め込まれているもので、手のひらよりも随分小さくて可愛い。

どこかで見た事あるな、と思いじっと見てみると、ランスさんがその髪飾りを手に取って。

「これください」

なんて言いやがった。

そしてマダムキラの頬笑みで買ったばかりの髪留めを私に差し出す。

「・・・あの？」

「今日のせめてもの償いだ。プレゼントさせてくれないか？」

それならアリアーデに、と言ったのだが。

「私はいいわ。せっかくだから貰えばいいじゃない」

珍しく満面の笑みでにっこり笑って言った。・・・何か企んでない？気のせい？

買ってもらうのも悪い気もしたが、せっかくなので受け取る事にした。

「ありがとうございます」

——あ、これ日の丸の国旗に似てる！どこかで見た事があると思ったらなんだ国旗か。

白いご飯に梅干しのイメージが強かったんで思い出せなかったよ。む、まてよ。よく見たら私の色じゃないか、それにこの可愛らしさサウスにも似てる。ちよっとひ弱そうな白いところとかシロにも似

てる。・・・懐かしい。

「よかったわね、せっかくだから今付けたら？」

今か、でも付けるとなると二つに纏めてある髪を解かなくてはいけなくなる。そんな事をしてしまえばライオンみたいに爆発した頭だとばれてしまう。恥ずかしすぎる。

「でも私の髪傷んでるし・・・」

「櫛持つてるからそのぐらい梳いてあげるわよ」

櫛ごときに私のこの髪はおさまらぬ！と心の中で叫んでいたが、リアーデが強引に私の二つ結びを解き梳き始めると、あんなにごわごわだった髪が梳いた所からそよ風でもそよぐさらさらの髪になっていて驚いた。

「この櫛、少し魔力が宿ってるの。魔法具って言うのかしら。昔お母さんに貰ってたね」

そんな便利なものがあるんだ。

梳き終わると、右耳の上のこめかみあたりに先ほどの髪飾りを付けてもらう。

「・・・似合いますかね」

「似合ってる」

お世辞でも嬉しいよランスさん。

今まで女の子らしいことに気を付けたことがないから恥ずかしい気持ちもあるが、少し新鮮で嬉しい気持ちもある。

でも結局私だけ貰うのは悪いと思い、シフォンとマドレーヌのぶんも買った。自分で買うつもりだったのだが、ランスさんが払ってくれた。

私の中でランスさんの株が急上昇中だ。

——でも将来苦勞でハゲないといいけど。

本気で心配する私だった。

続　ただし恋ばな好き含む。嵐の前のなんとやら。

三人に合流したのは暫くしてからだった。

近くの喫茶店のような所へ入り、六人で腰かける。この世界にもファミレスみたいな場所があるんだ。

「ヴィトちゃん凄く可愛い！」

「アリアーデが見立ててくれたんだ」

「センスいいわね。今度私の買い物にも付き合ってくれるかしら？」

「ええ、いいわよ」

シフォンたちもお店を回って買い物をしたらしく、それについての話で盛りあがる。

私？もちろん流行なんて知らないから話についていけなかったよ。

今は黄色が流行色なのとか、やっぱり美容にはレモンパックがいのとか、え、レモンパックって本当にいいの？実際ビタミンCは肌に浸透しないって聞いたけど・・・実際したことが無いし肌に気をつけたことがないからわからん。

他にもどこぞの占い屋が良くあたるのだとか、どこぞのお店にはかっこいい店員さんがいるのだとか、内容は女子高生かOLが話すような内容だ。

しかも次第に話が女の子の大好きな恋ばなに変わっていったため、私はもっとついていけなくなった。

人間の時は彼氏がいた記憶がないから、きっと彼氏いない歴年齢なんだろう。寂しい人生で何が悪い。

「お姉ちゃん、第三騎士隊の子って騎士隊の人と付き合ってるって聞いたけど本当なの？」

「イレネのこと？そうねえ、強ち間違っではないけど、・・・相思相愛なのになんか付かないのよね。見ていてじれったいもの」

しかもシフォンたちはランスさんたちが居る事をすっかり忘れて話に花を咲かせている。

ランスさんは無言で席を立つとステファノスさんを無理やり立たせた。

「ステファン、これは俺達が聞いていい話じゃない」
空気読め。とその目は語っていた。

「わかった、わかった。そんなに睨むなって」
さすがのステファノスさんも立ち上がって、二人は違う席へついたようだ。私はそれを見届けて話に加わる。

「マドレーヌ、大丈夫だった？その、変な事とかされなかった？」

「ステファノスさんのこと？・・・されたわね。隙あらばすぐに腰に手がまわってくるのよ」
なんだと！

「でも大丈夫よ。その度に手の甲つまんでやったから」

よくやったマドレーヌ。ぜひその瞬間を見て見たかった。

「シフォンはどうだったの？」

「やっぱりステファノス様はかっこよかったわ！それに優しいの」
シフォンよ、それはきつと仮の姿だ。狩りをするための仮の姿だ。
騙されるんじゃない！

なんて心の中で思っても言う事は出来ない。相手があれでもシフォンの顔を見れば恋をしているのは一目見てわかる。

好きな人の事を罵倒されるなんてされたくないだろうし、結局私は黙っていることしかできないんだなこれが。

「ねえ、ねえ、ヴィトちゃんとアリアーデちゃんは誰か好きな人はいないの？気になる人とか！」

「え？」

「は？」

まさかその話をふってくるとは思っておらず、私とアリアーデは頓狂な声を出してしまった。

気になる人？それはライクで？ラブで？

ライクならたくさんいるが、あいにくドラゴンの私は人間に対してのラブは感じないようだ。きっとラブを感じる前に食欲の方が勝っているからだろう。

私にとって人間は生きていくための糧であり、だがそれと同時に友人でもある。このような奇妙な関係が成り立っているのも、ひとえに私がドラゴンでありながら人間の記憶を持っているからだろう。人間を食べるのに罪悪感湧かないの、と言われれば多少はある。それに友人になったアリアーデやマドレーヌをおいしそうとは思っても、失うのが怖いから実際に食べたりはしない。

まあ例外として隊長さんがいるけど。あの人は仕方がない。

私はどうせ自分勝手な生き物だ、なんて開き直ったりする。

それにしても、そもそも恋をするということ事態経験がないため、シフォンの問いかけにどう切り返せばいいものかわからない。

「・・・私は男に興味はないわ」

「えー？ そうなの？ じゃあヴィトちゃんは？」

きらきらと期待された瞳で見つめられ、私は言葉に詰まった。

「少しだけ第四騎士隊寮にいたんだもん。気になる人とかいなかったの？ えーと、ほら！ ランスさんとか！」

「それはたぶん、ない」

かっこいいと思うけど、それは異性としてではなく客観的に見て、だ。それにどちらかと言うと私が捕食者として食べたい気持ちがある。食欲的な意味で。

ただそれだけだ。

「その髪飾りプレゼントされたのに？」

なぜそこで言うアリアーデよ。なにやら笑顔ではないか。さっきから何を考えているのかわからないな・・・。

「えー！？ ほんと！？」

「・・・シフォンたちにも貰ってあるよ」

お揃いの髪飾りを二人に渡すと、あからさまにがっかりされた。何で。

「面白くないわね。・・・そう言えばヴィトってルートリアさんと親しくなかったかしら？」

なぜそこでそうなる！恋ばなって怖いな！誰かと必ずくっつけようとしたがる！女の子の脳内は一体どんな風にできているか知りたいよ！

私はしどろもどろになりながら話をマドレーヌにふって逃げた。

「マ、マドレーヌはどうなの？気になる人とか」

「私はいるわよ。彼」

えええええ！？

衝撃的な告白だ。これにはアリアーデも驚いていた。今までそんな話一言もしなかったからな・・・そっか、いるのか・・・なんだか娘に彼氏がいると発覚したような気分だよ。

「第一騎士隊の人でね、母性本能がくすぐられるというか、とにかくまってあげたい人なの。お義兄ちゃんは反対するんだけど・・・今度紹介するわね！」

マドレーヌは頬を染めながら彼の話をしている。こっちが恥ずかしくなるぐらい惚気ている。そうか恋をしたらあんな顔になるんだな、――可愛すぎる。

ちよっと考えて見てくれ。マドレーヌが上目使いで頬を染めはにかんだ可愛らしい顔で、す、好きなの！とか告白でもされてみる。男なんていちころだ。私もいちころだ。

「お義兄ちゃん、お姉ちゃんのこと大好きだもんねー」

「過剰すぎるのよ。最近なんて二人きりになるだけで邪魔しに来るし。もううんざりだわ。早く彼女作って大人しくならないかしら」シスコンか。わかる、わかるぞその気持ち・・・と言う事は、だ。やっぱり私の兄は変態らしい。人間に戻りたいと考えたことはあるけど変態の兄は遠慮したい。

「そうだ、お義兄ちゃんはどうか？顔は結構いいのよ、もてるし。性格さえ我慢したら大丈夫と思うんだけど」

だからなぜそこで私にふる！なぜくっつけたがる！

お店を出てそろそろお城に帰ろうか、と言っていたが、アリアーデがどうしても行きたいところがあるからとまだまだ元気なシフォンやアリアーデ、ステファノスさんと一緒に行ってしまった。すぐ戻るからとは行っていたが、女の子の買い物は長い。暗くならないうちに帰ってくると良いんだけど。

因みに私は人ごみに疲れて近くの公園でランスさんと一緒に待ちぼうけだ。人が多いところってどうしても目が回ってしまうから苦手である。

「そういえばお二人そろって休暇だなんて珍しいですね」

「今日は第四騎士隊全員が休日なんだ」

なるほど、そういうことか。

寮で働いていたときに何度か騎士さんたちの休暇のようなものに遭遇したのを思い出した。騎士さんたちが朝から晩までずっと寮にいるから私は掃除ができずに、結局私も副隊長さんとお茶でも飲みながらまったりしてたんだっけ。そういう日を見計らって、城下町でナンパに出かけるといふ計画なのか。

「隊長たちも今日は休暇中だな。たしか用事で副隊長と一緒に城下町に降りてきているはずだ。会って行くかい？」

「そうなんですか？・・・でも、いいです。お邪魔になるかもしれないので」

用事って一体何だろう。買出し、とかかな。

あれ以来寮には行っていない。自分の部屋とは距離が離れているし、行く時間がないというのが正確だ。ナツソさんのご飯も食べられて

ないし悔しい。

そう言えば副隊長さんの娘さん大丈夫かな。あれから会わないけどまさか倒れたりしてないよね。心配だ。

今度副隊長さんに会ったら聞いてみよう。

「噂をすれば影がさす。ヴィトさん、前を見てごらん」

ランスさんに促されて前方を見ると、ミロのヴィーナスみたいな女性性の石像が何体も飾ってある、見事な装飾がされた噴水の縁に腰掛けている人がいた。

誰だろう？

「隊長だよ」

うそーまたまたそんな嘘ついて。こんなにタイミングよく現れるわけじゃないじゃないか、ステファノスさんじゃあるまいし。

だけどその若草色の髪と、私のおいしそうセンサーが反応している。まさか、と目を凝らして見たが、どうやら間違いなく隊長さんのようだ。いつもの白い制服を着ていないし髪型も違うから疑ってしまった。

「どうやら副隊長を待っているようだね」

「わかるんですか？」

「この公園は待ち合わせ場所として良く使われるんだ」

ハチ公みたいなものか。そういやこの世界には携帯電話なんて便利なものがないから、必然的に待ち合わせするときはこんな目立つ噴水のある公園になってしまいうんだろうな。

誰か携帯もどきでいいから作って欲しい。アリアーデあたりに言ったらもしかしたら作ってくれるんじゃないかな。でもまだ卵だから無理かな、もう少し先を楽しみにしよう。うん。

「行ってみたらどうだい。最近会ってないだろう？」

それはそうだけど、すごく会いたいとは思っていない。寮を離れて以来少し心にひっかかりがあるが、普通に喋れるとわかっては些細なことであまり悩まなくなった。むしろ会うたびに正体ばれてんじゃないかとひやひやしてる。感が鋭いからちよつとでも口を滑らせ

てしまえば大変なことになってしまう。

ただどランスさんにそう言われたら会ってみたい気もする。

「では少しだけ、すぐ帰ってきますね」

ランスさんはいつてらっしゃいと笑顔で見送ってくれた。

男の人を一人残しておくのもなんだからすぐに戻ることにしよう。

近くに行くと、やっぱり隊長さんだった。

「隊長さん、奇遇ですね」

しかも今日はポニーテールだ。なにこれ可愛すぎる。

編みこむのが面倒だったのだろうが、ポニーテールになってしまうと余計に女の人しか見えなくなってしまった。胸が無いのと声でぎりぎり男の人だとわかるぐらいだ。

今日は良いものを見た。うん、しっかりと目に焼き付けておこう。

隊長さんは私の格好をじっと見ると、自分の髪を掴んではにかんだ。

「おそろい？」

そ、そんなつもりで服を選んだんじゃないですから！か、勘違いしないでくださいよ！なんていえばツンデレと言われてしまうので素直に頷いておいた。

「みたいです」

私って可愛くない。たんぱくすぎる。

隣に失礼しますね、と言って隊長さんの隣の噴水の縁に腰掛ける。水に近いから、涼しい。

「買い物？」

「そんなところです。隊長さんは？」

「今度の任務の準備のようなもの、かな。何日もかかるだろうから」旅の準備、か。ファイアドレークでいけばひとつ飛びだろうが、徒歩で行くと聞いた。三日か四日ほどかかるらしい。往復で一週間前後だ。

結構な距離を歩く事になるのでそれ相応の準備が必要なんだろう。

確かランスさんも行くとか言ってなかったっけ、でもあの人はしっかりしてるからちゃんと準備してるんだろうな。

「それって、ティルゾート国の使者のお出迎えですよ。副隊長さんに聞きました。・・・名指し、されたんですよ」

「そうみたいだね」

私のせいだ。私があんな行動を取ってしまったから、迷惑をかけてしまっている。もしあんな事をしなければ名指しされる事は無かったかもしれないなかったのに。

どうして人間というものは噂に翻弄されるんだろう。真実かわからない明確にもされていないあやふやな事を信じるなんて、不思議でたまらない。

そりゃ私も噂で左右されることはあるよ。でも本当に信じているかと言われたら、本気で信じたりはしないと。私は自分の目で見たものしか信じないから。

「でもその噂は・・・」

「うん、ただの噂。でも俺はそれでもいいと、思ってる」
何がいいか私にはわからない。

「少しでもあのドラゴンと繋がりがあんなら、それが噂でも、かまわない。いや、たったそれだけでも、かまわない」

「・・・契約したいとは思わないんですか」

「どうして？」

隊長さんは至極不思議だと言わんばかりに首をかしげる。

「だって、国の英雄になれるかもしれないですよ？それって名誉な事じゃないんですか？」

色々な事をよく耳にする。

自分がもし契約したのなら、契約できたのなら、どんなに素晴らしき事だろうって。国を救うことができその武勇伝は語り継がれ歴史に名が残される。

誰もが憧れるはずだ。憧れないはずがない。

「名誉、か。確かに名誉な事かもしれない」

でも、と隊長さんは続けた。

「名誉どうこうじゃなくて、そんな噂が立つのは、それほど皆が国に勝って欲しいと、心から願っているからじゃないかな」

今までの大戦で勝利に導いてきた伝説のドラゴンが味方しているとすれば、誰もが勝利を確信し未来に希望が見えてくるだろう。

契約者は誰だっていい。名誉云々を考えている人だっているだろう。でも本当に心から願っている事は、平和で暮らすために自分たちの国が勝ってほしい。

ただ純粹にそれだけなんだと、そう、言うのだろうか。

「・・・本当に、行くんですか」

行って何の意味があるというのだろうか。

「俺は行くよ」

「罨、かもしれないとしてもですか？」

「俺はレブランシュを信じてる。・・・でも、もしもの事が起こったら、ドラゴン舎のファイアドレークたちを、よろしく。彼らはヴィトが好きみたいだから」

相変わらず瞳が隠れていて何を考えているのかわからない。何を思っているのかな。言葉を言っているのかわからない。

「後の事は丸投げなんですね」

「そうとも、言うね」

笑わないでよ。

現実で考えてみて、ドラゴン舎のファイアドレークは100匹以上はいるんだよ。その全部の面倒をみるなんて無理だ。

隊長さんもそのつもりで言ったのではないんだと思う、だけど清々しいほど丸投げしてくるから冗談なのか本気なのか、わからない。どっちに転んでも良いような言葉じゃないか。

「・・・戻ってこれないかもしれないのに、ですか」

「死なないよ。まだやりたい事残ってるから。でも何が起こるか、分からないだろう？」

「・・・そう言うの嫌いです」

はつきりしない。曖昧にごまかされてるような気がする。

わからない事だらけで理解できない事だらけで頭がパンクしそうだ。

「自分の命を軽いと思ってませんか」

「そんな事は、無い」

「じゃあどうしてそんな冷静に考えられるんですか。討伐の時も、アースドラゴンが助けに来なかったら死んでいたのかもしれないですよ。それだけじゃない、もしかしたらその人喰いドラゴンに食べられて死んでたかもしれない。戦争だって、もうすぐ大きな戦争が起きるかもしれないって聞きました・・・！」

焦っているような早口で、声を荒げてしまった。自分でもおかしいと思った。

隊長さんはいつもより硬い声色で言う。

「・・・ヴィト、俺は騎士だ。国を守るための、存在。死にたくないとかと言う個人の意思で、任務を変える事はできないよ。誰かが行かなくちゃいけない、その誰かは俺達だ。それから逃げる事は、できない」

私は顔を見れなくて、俯いたままぎゅっ、と拳を握りしめた。

「今までも死にかけた事はたくさんある。俺のファイアドレークも、その犠牲になった。怖くないと言ったら嘘になる。でも今更そんな理由で逃げてしまったら、今までを否定するようで、俺は嫌だ」

「わかりません・・・私には、わかりません」

わかりたくなかった。

私は馬鹿だ。大馬鹿ものだ。騎士は何のために居る？そんなの国を守るための存在に決まっているじゃないか。それが仕事だ。他の騎士さんたちだって、きっとそう。例外なんてない、私の一個人の意思なんて図々しいだけだ。

なのに納得できなくて駄々をこねる子供のように言い張って、迷惑をかけているだけだ。私はなんて失礼な生物なんだろう。

未だ俯いている私に、優しい声が降ってくる。

「・・・ごめん」

「なんで、謝るんですか」

謝らなくちゃいけないのは私の方なのに。

隊長さんに非はないのに、これじゃあ達の悪い八つ当たりじゃないか。

私は最悪だ。何でこんなに感情的になってしまっているんだろう。

「ヴィト」

隊長さんの細い手が俯いた私の栗色の前髪に触れる。

私は初めて、その手を振り払った。

「……すみません。言い過ぎました。シフォンたちが待っていますので、これで失礼します」

後ろで名前を呼ばれたが、私は逃げるように踵を返してその場から早足で去った。

きつと今の私の顔は、酷い。見せられるようなものじゃないほど歪んでる。

死ぬかもしれない、戻ってこれないかもしれない可能性があるということを知っていて、どうして冷静になれるんだろう。

私だったら逃げてる。でもそれは私が部外者だからだ。この国にとっても、大陸にとっても、世界にとっても。

でも隊長さんは違う。この国で生まれて、この国とともに育った。私とは違う。わかってる、わかってるよ。

……わかってる。本当はわかってるんだ。

隊長さんの思いに、私が介入できるはずなんてない。口を挟むことなんてできるはずがない。

今までそうやって生きてきたんだろう。死ぬかもしれない瀬戸際も何度も経験してきたんだろう。死も、何度も見てきたんだろう。

だから今回も最終的には自分の意思で決めたんだと思う。でも認めたくなかった。

なんで。どうして。自分の気持ちがわからない。

私はただ隊長さんが生きていてくれさえすればいいはずだ。

理由は食べたいから、ただそれだけだ。

だから死んで欲しくないし、危険のある所は避けて欲しい。今回の使者の件だって、どこか胸騒ぎがして・・・本当は行って欲しくない。

でもそんな事言えるはずが無い。言える資格なんて私には無い。

私だって、隊長さんを殺そうとしているという事に何ら変わらないんだから。

隣国の使者に怒髪天を衝く。聖獣。

副隊長さんが言っていたティルゾート国の使者のお出迎えは数日経ってのことだった。

アルヴィーナ街より北のティルゾート国寄りの街道まで迎えにくそうだ。それもドラゴンを使えないため徒歩で何日もかかる。

迎えに行くに当たって第一騎士隊の隊長さんと第四騎士隊の隊長さん、それぞれの副隊長さんと彼らが選抜した部下たち、そして何と言っても驚いたのが王子も同行しているとのこと。危ないからそこまでしなくていいんじゃないかと思うのだが、王子は自分の身をわざと危険にさらすことで戦の意思はないということを示したいらしい。

それがどこまで通用するかわからないし、この事はごく限られた人しか知られていないので何かあったらお終いである。

それを盗み聞きしたというナツソさんに聞いて私はなんだか胸騒ぎがした。ちなみにナツソさんのご飯を久しぶりに食べるに来た時に聞いた。というかもナツソさんにもうこの話漏れてるぞ。大丈夫なのか。それに王子は少し馬鹿正直すぎる気がする。何も自分から行かなくていいじゃないか。危険すぎる。

ティルゾート国はこれまでに何度も卑怯な手を使っていると聞いた、もしかしてこの使者の件も罠だったら？ 使者と言って突然攻撃されたらどうする？

全員、それに隊長さんも殺されてしまうかもしれない。しかも、対抗するにもいつものようにファイアドレークもいないのだ。全滅だってありえる。

胸騒ぎが、止まらない。

ナツソさんのご飯？ それはもうおいしかったよ！

1日目は神巫様のことで頭がいっぱいだった。あれから何も起きないからきつと王子には言っていないのだろう。安心したが弱みを握られている感じがして心もとない。

2日目は隊長さん達が心配になったが、杞憂だろうと大人しく過ごした。そういえばあのとき私が一方的に怒って帰ってしまったから、あれから何となく気まずくて話してない・・・今思うとあの時の私はどうかしてた、失礼なことをしてしまったと謝りたくても、なかなか機会がなくて謝れないんだ。もどかしい。

3日目になって胸騒ぎが酷くなり、いてもたってもいられなくなつて、また仮病を使つてすぐさま飛んだ。
嫌な予感がする。

討伐隊の件だつてそうだったし、こんな時の私の感はよく当たる。

「本当に大丈夫なの？」

2人には仮病を心配してもらつて大変申し訳ない。

「私は寝ていれば治るから大丈夫、そんなことより早く行かないと点呼に間に合わないよ？」

「・・・ちゃんと大人しく寝ておきなさいね。ほら、シフォン行くわよ」

「う、うん。お大事にね！ヴィトちゃん」

これで夕方までは大丈夫だろう。

昼の休憩時間にシフォンたちが戻ってくるかもしれないが、トイレか何かの用事ですれ違ったと誤魔化せばいい。

ドラゴンなら数時間も経たないうちに着くだろう。

またデジャヴを感じながら飛んでいたが、目的の場所について街道に降りた。

私はただ知りたいだけだ。これが罠じゃなかったら万々歳ですぐ

に帰ればいいし、罠だったらもちろん助けに・・・入るの、か？

・・・どうだろう、わからない。討伐の件は突然のことで、ただ隊長さんしか頭になかった。だから助けに入ることができた。

でも今回は一歩間違えたら国同士の争いになるかもしれない。それに私が介入してしまえばもつと大変なことになるかもしれない。私のせいでそんなことになって良いんだろうか。・・・多分、駄目だ。そんな事許されるはずがない。誰に許されるかわからないが、たったひとつの生物の思いで国同士が争い始めるなんてあってはならない。

だけども見逃すことはできなかった。

人間の姿になって辺りを見渡すけれど、街道の他は森しかなくまだ来ていないようだ。どこか森の中に身をひそめる場所はないだろうかと探していると、森の奥に人がいることに気付いた。

木に隠れて様子を見ると、男が三人、その中央には何やら白い動物が横たわっていた。

——何をやってるんだろう？動物がいるみたいだけど。

「つたく、もう使い物にならねえじゃないか。本当に使い捨てかよ」腹立たしそうに動物を足で蹴っている。その動物は怪我をして血を流しているのか、白い身体が赤く染まっていた。

——もしかして、虐待？うそ、こんなところで？

「せっかくの聖獣なのによ」

「おいその辺りにしとけ時間の無駄だ。もう少しで到着する」

「わかったよ」

三人は動物をそこに置き去りにしどこかへ去って行った。私は急いで近づくと、息をのんだ。

まだ子供だ。それも、子馬。

小さな翼が背中から生えて珍しいと思ったが、この世界では珍しくないのかもしれない。

それよりも、輝くような純白の毛並みに所々見られる怪我が酷く、赤く染まっている。苦しいのだろう細い鳴き声で母を呼んでいた。

こんな事をするなんて、なんて酷い人間だろう！

私はエプロンを破って傷口を押さえ止血する。

子馬の瞼が開いて、涙で潤んだ金色の瞳が私を見上げた。

『おかあさん・・・？』

「お母さんじゃなくてごめんね・・・傷む？」

『いたい、・・・よお』

ぼろぼろと涙を流し続ける子馬を優しく抱き起すと、どこか手当のする場所はないか辺りを探した。

かなり弱ってるし体温も低くなってるから、このままだと死んでしまう。

そう言えば飛んでいる時に近くに家らしきものを見たような気がする。小さな家だが、誰か住んでいることを祈って私は走り出した。人間は酷い事を平然とやってのける。全員が全員そうではないとわかってるし、動物だってそうだ。

でも、彼らだけは絶対に許せなかった。かみ殺してやりたいほど腸が煮えくり返っていた。

でも今はこの子を助けなくちゃいけない！あんなやつらに構っている暇なんてない・・・！

子馬を抱いたまま暫く走っていると家が見えてきて安堵する。

——よかった！見間違いないじゃなかった！！

私は急いで扉をノックすると、小さな女の子が出てきた。暗い色のローブに身を包んだ可愛い少女だった。

「あの、突然すみませんっ。この子の手当てをしたいんです」

息が切れながらも必死に訴えると、女の子は私の腕の中の動物を見てアメジストの瞳を大きく見開かせた。

「ユニコーンの子供じゃないの、いったいどうして・・・いやそれよりも早く入って、手当をしましょう」

随分大人びた喋り方をする女の子だとは思ったが、家に入り女の子に指定されたテーブルの上に子馬をゆっくりと横たわらせた。

女の子は身を乗り出して容体を見ているのか眉間に皺をよせなが

らぶつぶつと呟いていた。

「これは酷いわね、何度も殴られた痕だわ。そこから清潔なタオルを取ってくれる？」

棚の中からタオルを何枚か取り出して女の子に渡すと、いつのまに持っていたのか小さな小瓶に入った液体を一滴、傷口に垂らしていた。

きらきらとした雫に触れた傷口は、あっという間に塞がってしまった。

今、何が起こったの？

驚いている暇も無く、水を、と言われたので台所らしき所から水を汲んできた。この部屋も不思議だが、台所も不思議だった。小さな鍋から大きな鍋までたくさんあって、棚が壁になっており、そこには透明な瓶に入った得体のしれないものがぎっしりと並んでいた。液体や、固体、色もカラフルで、まるで理科室のホルマリン漬けを思わせるが、中に入っているものはそれらしいものはなかった。気持ち悪くは無かった。しかし先ほどの部屋も不思議な部屋だ。大よそ女の子が住むような家ではない。壁には包丁がむき出しにかけられていたし髑髏なんかも置いてあった。まるで黒魔術をするような部屋だ。

そんな家に首をかしげながらも水を汲んで部屋へと戻る。その頃にはもう先程の行為は終わったらしく、子馬は清潔なタオルにくるまれていた。

「傷は治ったわ。でも出血が激しいから暫くは安静にしないと駄目ね」

汲んできた水にタオルを濡らし、血を拭きとる。

私も手伝いながら子馬の容態が安定したのを見てほんと安心した。でもさっきの液体は何だったんだらう。一瞬にして傷口がふさがっていたけど。

「あの、さっきのは」

「魔法よ。今の時代はそれほど珍しくないでしょう？」

「・・・いえ、十分珍しかったです」

そもそも回復魔法なんてあまり見た事が無い。神巫様も使えただと、一瞬であり実感わかなかったし。

それに回復魔法は高等魔法で、使える人間は世界に一握りしかない聞いた。

それを使ったこの女の子は、一体何者だろうか。

「あらそう?・・・ところでこの子、どうしてこんな傷を?」

私が今さっき見てきたことを言うと、女の子は納得した様子で頷く。

「なるほどね。そいつらはきっとティルゾート国のやつらだわ。昔からユニコーンを自分の国の聖獣だなんて言って、無理やり従わせてるのよ。こんな子供を人質にとってね。本来なら純潔の乙女しか触れることができないのに、たくさん人間に見せものにされて触られて・・・可哀そうだわ」

助けることができたらいいのだけれど、と呟く。

そんな事情があったのか。どうりであの人達のこの子に対する扱いが酷いはずだ。

そうしたらこの子の母親が近くにいる、もしくはあの人達とまだ一緒にいるんじゃないだろうか。あの人達が使者ならば、きっと王子達も会う事になるだろう。

これは、罠なのか? 国の聖獣を連れてきてまでやりたい事って一体何だろう?

「ユニコーンは何か凄い力を持っているんですか?」

「凄い力ねえ。まあ凄いと云えば凄いわ。少しの時間だけど相手の時間を止めたり、光の魔法に似た攻撃することができるものね」

それってかなりやばいんじゃない。時間を止めて攻撃されて、それで王子が死んでしまったりしたらそれこそ国が大混乱する。もしかしてそれを狙ってユニコーンを連れて来ているのだろうか? 聖獣ならば和平を結ぼうと思う国にとって手を出すことのできない生物だ。

なんか嫌な予感がする。

「それより貴方人間、なのかしら。少し異なったものを持ってるわね」

「え？」

「ふふ、私は魔女だからわかるのよ。もう何百年も引きこもってるから世間知らずなのはご愛嬌ね。500歳を超えた頃からめんどくさくなって数えるのも止めてしまったもの」

「なんだかとてもないことをカミングアウトされた気がする。魔女？ひきこもり？500歳越え？ああもう考え過ぎて頭がぐるぐるしてきた。まるであの人みたいじゃないか。思いだしただけでも産毛が逆立ってくる。」

「あたしはそうね、なんだったかしら・・・ティモテア、そう、ティモと呼んでちょうだい。敬称はなしよ、そういうの嫌いな。あなたは？」

「ヴィトです。アルヴィナ国で使用人をやってます」

「苗字は名乗らなくていいだろう。この人にはそう言うのは意味なさそうだし。それにしても何故か敬語になってしまう。これも魔女パワーか。」

「それで？本当の正体は？」

「——う。なんだか嘘がつかない。」

「・・・ドラゴンです」

「あらまあドラゴン！だったらあなたアースドラゴンね！何百年ぶりかしら、久しぶりだわ！」

「きらきらと瞳が輝いている。大人びてはいるが、嬉しそうに笑った顔は幼い女の子の表情そのものだ。」

「どうしてアースドラゴンってわかるんですか？」

「だって何かに化けることができるのは、ドラゴンの中でもアースドラゴンだけよ。あなた自覚ないの？」

「無いと言うか、少し複雑で」

「話していいのかどうなのか、でもティモさん・・・ティモには全

てを話してしまう何かがある。

それが彼女が魔女であることと起因しているかどうか分からないが、私はこの世界に来て初めて全てを人に話した。

始まりがヴィザンヌ山だったこと、討伐隊にうんざりして人里を降りたこと、人間を食べること、知り合った人間のこと、全てだ。会って数十分も経たない見た目が幼い女の子にこんなことを話すなんて自分でも驚いている。普通は警戒するか話をはぐらかすか、するはずなのに。

もしかしたら、もういろいろと考え過ぎて疲れていたのかもしれない。それでも私、悪い意味で内面ナイーブなんだよ。

ティモは私の話を黙って聞いてくれた。時折頷きながら・・・だからだろうか、全部、話してしまった。

「ふうん。人間の記憶ねえ」

ティモは少し考えた素振りを見せたが、わからないわ。と言う。

「興味深いけれど残念ながら私にはわからないわ。でも世界はひとつじゃないんだからそう言う事がおきてもおかしくないんじゃないの？」

「そう、なんでしようか」

世界がひとつじゃないってのは初耳だ。やっぱりたくさん世界があるのかな。誰が論じたか忘れたけど、平行世界とか、世界線とか、そう言うの。

「そうよ。それにどうして自分がそうなってしまったのか、それ理由や原因なんて誰にもわからないわ。偶然そうなってしまったから、今のあなたがいる。だったら理由は自分でみつければいいのよ。何でもいいの。偶然を必然に変えることのできる、自分が存在するに値する理由さえ見つけてしまえば生き物って安心するでしょ？ あたしもそうだもの。あたしはあたしのやりたい事があるからここで研究をしている」

こんな人が寄り付きそうに無い所で、研究をしてるのか。

「世界なんてそんなものよ。あなた、アースドラゴンとして国を助

けなくちゃいけないって少しでも悩んでるんでしょう？」

「・・・わかりません。そもそも私はそのアースドラゴンだっていう自覚も、あまりないんです」

「自覚したくないのねその気持ちはわかるわ。国を救うなんて重荷過ぎる。英雄じゃあるまいし」

「・・・私は一体、どうすればいいと、思いますか？」

「それを私に聞く？」

「あ、すみません。そうですね。自分のことは自分で考えなくちゃいけませんよね」

「貴方って、本当に真面目ね」

ふふとティモはおかしそうに笑った。

「真面目だからそんなに考え込んでしまう。自分に少しでも関係のある事に、持たなくていい責任を持つてしまう。でもね、そんなに深く考えなくていいのよ。アースドラゴンと言う種は確かにアルヴィナ国が危機に迫ったときに現れるとされている。でも、以前はそうでも、これからはどうなるか誰にもわからないでしょ？先入観に囚われないであなたがやりたいようにやればいい。あなたを縛り付けるものなんて何もないんだから」

「でも以前のアースドラゴンは、契約して国を救ったんですよね？」

「だからそうやって惑わされないで。あの子たちは使命なんかじゃなく、自分の意思で契約して国を守ったの」

そう言えば神巫様もそんなふうに言っていたような気がする。

「その使命をあなたに押し付ける事は誰にもできないわ。使命は、自分の意思で決めてからこそ意味があるものになる。私はそう思っている。あなたもどこかでそう思っているんじゃない？だったら深く考えずに自分のやりたい事をやればいい。したい事をすればいい。そしてそれを自分の存在理由にしちゃいなさい。それが相手を傷つける結果になったとしてもね」

ティモは安心させるような微笑を向けた。

「今は素直に私の言葉を受け取っておきなさい。まだ貴方は若いん

だから失敗しても取り戻せるわ」

そういえばティモは500歳越えだっけ、そう考えるとなんだがおかしくなる。見た目は幼い女の子なのに、中身はおばあちゃんをかなり過ぎた歳だ。そんな彼女に人生のアドバイスを貰うなんて。不思議だけど、少し嬉しかった。

———そっか、深く考えなくていいのか。考えても何も起こらない。考えても目の前の現実が変わらない。変わるのは自分の気持ちだけだ。憂鬱になったり、悦喜したり、ただそれだけだ。考えて答えがでないのなら、考えなければいい。自分のしたいことをすればいい。後悔はそれからでもできる。何かの失敗を怖れて、誰かに失望されるの怖れて、私は私自身の思いに押しつぶされそうになっていたのかもしれない。

深く考えても仕方がない、全てを理解することなんてできないんだから、それに一々敏感になっていたのは私だ。

私が何のために人間の記憶をもったドラゴンになってしまったのか、そんなこと考えてもわかりっこないだろう。答えは私の脳にはないんだから。

だったら考えなくていい。

私が伝説のアースドラゴンだとしてもだ。アルヴィナ国を守る存在として崇められていようと、それは彼らが勝手に決めた事で私には関係ない。国にも愛着があるし人間としての罪悪感もある、私の判断でたくさんの人が死ぬかもしれないとも思ってる、でも最終的に決めるのは他の誰でもない、私自身だ。

誰かに罵られようと、罵倒されて石を投げられたとしても、私は、後悔しないであろう道を歩んで生きたい。

人生なんていつも自分勝手だ。自分を第一に行動しようとするのは生物の本能だと思う。

だから私は、私自身の意志で、自分勝手なドラゴン・ライフを生きていく。

———そう、決めた。

考え込んでしまっていたのか、気付いたら瞼を閉じてぎゅっと膝の上でスカートを握っていた。

瞼を開けると目の前にはティモが存在している。瞳のアメジスト色と同じ肩までの髪を揺らして、微笑んでいた。

その笑顔を見るだけであったかい気持ちになる。

「ありがとうございます。なんだ自分の気持ちに整理が付きました」「お礼はいいわ。私の言葉で貴方の助けになるのならいくらでも言うてあげる」

そして本当に優しい人だ。

ティモに言われて気付くなんて、もしかして私は誰かにきつかけを貰いたかったのかもしれないな、と苦笑する。

しかしいつまでもここにいるわけにはいかない。長居しすぎてしまった。結構話したし。

もしかしたらもう王子達はティルゾート国と対面してるかもしれない。

どうして私がここまで全速力で飛んできたのか、すっかり忘れてたよ。危ない危ない。

ユニコーンの子供を見ると小さな寝息が聞こえてきてほっとした。この子はティモに預けておけば安心だ。

「・・・私、行かなくてはいけない所があるんです」

「そうみたいね。この子はあたしが預かっておくわ。母親に迎えにくるように言っておこうだい」

「よろしくおねがいします」

「それと、また迷ったらいらっしやい。あたしが力になってあげる」少女には似合わない大人びた顔でティモは見送ってくれた。

ティモは本当に不思議な人だ。そりゃ魔女だからだろうけど。今までずっと悩んでいた事をすっぱり答えてくれた。私が知りたかった答えはくれなかったけれど、答えまでの道しるべを教えてくれた。

なんでこんなことで悩んでたんだろうと思うぐらい今の自分は清

々しい気持ちだ。

だからだろうか、余計に腹立たしいんだ。
ユニコーンの子供に怪我をさせた、あの人達が。

我を立て、見定め、是非を分かつ。(前書き)

※少グロ注意。

我を立て、見定め、是非を分かつ。

許せない。

私はあの人達を許せない。

まだ幼いユニコーンの子供に傷を負わせたあの人達を。

そして騙そうとしているあの人達を。

私の足は先程の街道へと向かっていた。

街道につくと、彼らがいた。彼らというのはもちろんアルヴィナ国王一行とティルゾート国の使者たちだ。使者たちは間違いなくユニコーンに酷い目にあわせた人達だった。明らかに人数が多く、アルヴィナ国一行が十数人程度に大して、三十人以上はいる。そして彼らの隣には大人のユニコーンが居た。

なんて神々しいのだろう。天使のような翼を持った、天かける馬。だが私の目からは少し曇って見えるような気がした。やはりティモの言う通り、本来ならば触れてはいけないものがユニコーンの傍にいるせいだろうか。

そのユニコーンの表情はどこか思いつめた様子で憂いを帯びていた。子供の心配をしているのだろうか。

私は一足遅かったようだ。もうすでに王子一行はティルゾート国の使者に命令されたユニコーンに襲われ、皆が地面に伏せている。光の攻撃というものがどんなものかわからないが、服が焼け焦げている人もいた。使者の人たちも武器を片手に今にも襲い掛かろうとしている。

「なぜだっ・・・」

王子は悔しそうに顔を歪めていた。

「まさか一国の王子ともあろうお方が素直にのこのこと出てくるとは思わなかったぜ。人間を疑わないくらい甘やかされて育ってきた

のかよ？っは、笑えるな！！」

リーダーらしき男は蹲った王子に向かい、抜いた剣を振り下ろす。

「レブランシュ・・・っ！」

「ルートリア！？」

咄嗟に庇った隊長さんが右肩を切り付けられ、膝について崩れ落ちる。

——ちよつとそこの男！！隊長さんに何してやがってくれ！！

「くそ、お前ちゃんと時間止めとけよな！」

今度は大人のユニコーンを殴った。それかなり力強く殴ったのかユニコーンはよろけていた。

「おいやめとけ。大きな傷でも付いたら陛下に怒られるだろうが。ただでさえ・・・」

「うるせえなわかつてる！こいつらの首さえ持って帰れば遊んで暮らせるほどの地位と褒美をくれるんだろ？案外ちよろい任務だぜ」子供だけに飽き足らず、大人のユニコーンにも暴力をふるうなんて。酷すぎる。

この人達は本当にユニコーンを国の聖獣として崇めているのだろうか。ティモが言った通り、ただ利用されているだけなのだと、思わずにはいれない。

・・・ユニコーンや、皆も見殺しにはできない。それにこの怒りを何処かにぶつきたい。ただ不思議なぐらい冷静に怒っている。ここで感情を爆発させて暴れるのも良いかもしれない。でもそうすれば王子達にも被害が加わってしまうだろう。

私はやりたい事をやるだけだ。そう、したい事をする。

それだけの自分勝手な、ドラゴンだよ。

たとえば、自分の居場所がなくなろうとも、もう城に入られなくなるうとも、友人も、その全てを棒に振ってでも、私は進み出なくちゃいけない。

いや、進み出たいんだ。私の意思で。誰だって、曲げたくないものがある。天秤にかけるまでも無い。

だってこのままじゃ、皆死んじゃう。王子も、副隊長さんも、第一騎士隊さんたちも、ランスさんも、ステファノスさんも、寮で見かけた騎士さんたちも——隊長さんも。

そんなの嫌だ。絶対嫌だ。

私が食べたいからだとか、そんな単純な気持ちじゃない。食べたのならいくらでも機会やチャンスはあった、それを職を失いたくないからや、国の問題を理由にして私は食べなかった。暴走することもあったけれど、でも食べようと思えばいつでも食べれたんだ。そしてこの国から逃げて他の所へ逃げることもできた。

それをしなかったのは、ただ、——彼らを失いたくなかったから。

他の人間は食うくせに、彼らは食わないのか、情が移ったのか。情が移ってなにが悪い。それが人間の良いところだろう。

彼らを殺して食べて生きているけれど、私にとって人間はただの餌ではない。矛盾してるけど、彼らはかけがえのない大切な存在なんだ。

私は、前に進み出た。

数人の倒れた騎士さんたちの間を跳ねるように通り抜け、倒れている副隊長さんの隣も通り過ぎる。

「どうしてヴィトさんがここに・・・!？」

副隊長さんと一瞬視線が合う。

城にいるはずの私がなぜここに？ 答えは簡単だ。飛んできたから。でも私がドラゴンだと言う事は誰も知らないし説明するのも面倒。後ろからいろんな視線が突き刺さるけど、申し訳ないが無視することにした。

私は今日の前の事でいっぱいいいっぱいなのだ。

王子に支えられた隊長さんの目の前まで歩くと、視線を合わせるように屈む。

「お前、なぜここに・・・」

王子も隊長さんもいきなり現れた私に驚いていた。

そりゃ私も驚くよ、とことん隊長さんってヒロイン気質ですよ。女の子に守られるってどんな気持ちですか。・・・でもいいです。そこを含めて全部、好きですから。

「ヴィト・・・？」

視線が肩から滴る血に釘付けになり、誘惑されるよう自然と手が伸びる。人差し指と中指が赤い血に濡れ、私はそれを口元へ持っていき、舐めた。

甘い。でも今はおいしそうだと、貪りたいほど食べたいとは思わない。

また手を伸ばし今度はそつと長い前髪を掬い上げる。見開かれた黒い瞳と目が合う。とても心地よい視線だ。

隊長さんは何かを言いたげに口を開いたが、何かを言う前に私は言葉を遮った。

「あなたは、私が死なせません——絶対に」

何度危険な目にあっても、絶対に死なせない。死なせたくない。

私はゆっくりと立ち上がり前に向き直った。

二、三歩歩き、ティルゾート国の使者達と対峙すると、彼らは突然出てきた私に少し顔をしかめただけだった。ただの小娘だと思っているのだろう。

だが一応は警戒している様子で何も言っただけだった。私は彼らを見つめてユニコーンへ視線を向けた。

「ねえ、貴方は誰の意思で従ってるの？」

私は目の前のユニコーンに問う。ユニコーンは突然話しかけてきた私に驚いていたが、低い声色で嘶いた。

『それが我らの使命だから』

「そんな事を聞いてるんじゃない。私は貴方の意思を聞きたいんだ。使命だって？義務だって？そんなもの昔の誰かが勝手に作って勝手に

に押し付けてるもんでしょ。私は貴方が不思議でならないよ。私のように飛べる翼があるのに、見えない鎖に自分から絡まってる。はむかうことのできる鋭い角もあるのに、それを振りかざさずただ人間に従い続けている」

『・・・そなたに、我らの事などわからないだろう？何故そのような事が言える』

「わからないさ。だから聞いてるんだよ。それが貴方の意思なら私はこうやって何も言わないし、こんなことだって言う資格さえない。でもね、私は、貴方をこんなふうに扱う彼らに腹が立って仕方がないんだ。それだけはわかって」

ユニコーンは黙り込んでしまった。

いけない、これじゃあ八つ当たりだ。これこそ押し付けになってしまふ。私は自分を落ち着かせるために一度深呼吸をする。

「おい小娘、お前さっきから何言ってるんだ？頭でもいかれてんのかよ？」

はたから見れば独り言を言ってるようにしか見えないんだろうけど、男の言葉は私にとって雑音でしかない。

「うるさいな。私は今貴方と喋っている暇なんてないんだよ」

「こいつ・・・!？」

ぶっきらぼうに言うのと、男が顔を真っ赤にさせて剣を抜き、私に振りかぶる。最初見た時から思っていたが、あまりにも短気すぎる。使者って言うものは、もっと冷静に判断できる人なんじゃないのか。こんな人を寄こしたと言う事は、やはり最初から話し合いという選択肢はなかったんだろう。そう考えると王子が不憫だ。

——仕方ない、できるかどうかかわからないけど。

私は少しの間だけ喉をドラゴンの形に作りかえると、大きく息を吸いこんで、思いの限り咆哮をあげる。

ドラゴンの時よりも小さな首なためか、いつもより少し高い声色だったが上手くいったようだ。

大地を、空気を、全てを震わせるような力強いものだった。

まさかその小娘の喉元からドラゴンの声、それも雄叫びが出るとは思わなかったのだろう。男は剣を落として腰をぬかしていた。もちろん、後ろにいた使者の彼らもだ。

後ろは怖くて見てない。が、これで少しは黙ってくれるだろう。耳がきんきんするほど叫んだし。邪魔はもういない。

『そなたは、もしかして・・・』

「私の事は気にしないで」

すぐに喉を人間のものに作り戻し、話を再開させた。

「聖獣ユニコーンと呼ばれている貴方達一族が、こんなくらだない人間のために傷つく必要なんてない。彼らは、貴方の子供さえ傷つけたというのに」

金色の瞳が揺れた。

『まさか』

「子供を人質にとられてたんでしょう？・・・この人たちに暴行をうけて森の中に倒れてた」

「なっ、お前どうしてそれを!!」

ユニコーンは明らかに動揺していた。白い翼を震わせて、瞳を大きく見開かせている。

そして彼らも、誰も知りえない事を知っていた私に驚いて焦っていた。

『それは、本当・・・なのか』

「残念ながら。でもあの子は大丈夫、手当して安全な場所に居るから」

「くそっ、俺の質問に答えろ!!」

また男が怒鳴りあげてきたのもう一度咆哮をあげておいた。これ喉が少し痛くなるからあんまりしたくないんだけど。

ユニコーンは何かを考えるように黙っていたが、一歩前に進み出て私を真正面に見る。

『そうか、・・・あの子は、何か言っていたか?』

「貴方をしきりに恋しがっていた。早く行ってあげて」

場所を告げるとユニコーンは『すまない』そして『ありがとう』
といい人間の手を振りほどいて走り去って行った。やろうと思えば
いつでも振りほどけたんだろう、でも子供を人質にとられていたか
らできなかった。それにきつと彼女も心のどこかで人間に不信感が
あったんだ、でなければ素直に私の言葉を信じてくれなかった。

「おい！追え！！」

何人かユニコーンを追って行ったが、彼女の早さではきっと撒か
れてしまうだろうし、ティモがいれば追手のひとりやふたり、数人
は簡単に追い払ってくれそうだ。

「その小娘！何をしやがった！！」

「それはこっちの台詞だ。あなたたちこそ彼女に何て事をしてくれ
たの。純潔ではない、しかも乙女ですらないあなたたちがユニコー
ンに触れることは禁忌なのに。あろうことか暴力まで振るって」

「なんだとっ？偉そうに何言ってやがる！！ユニコーンは俺達のも
のだ！」

思いっきり睨みつけてやったが小娘の睨みのひとつとしか感
じられてない。ああだからこういうとき人間の身体は嫌なんだ。

「どうする、数少ない大人のユニコーンが逃げたんだぞ！陛下に何
て言われるか・・・！！」

「知るか！こいつらの首を持って帰ればそれでいいだろ！！」

「だが・・・！！」

「ここでは俺がリーダーだ！俺の言うことを聞け！！」

今度は仲間割れか。団結力ないな。ま、明らかに下っ端の下っ端
と言う風貌だし、服装だって一応は正装のようなものをしているが
それは油断させるためであるんだろう、似合っていない。大国なん
だからもっとマシな使者を送って欲しい。それとも下っ端の下っ端
でも事足りると思ってるんだろうか。そうだったら腹が立つ。

「仲間割れは醜いよ」

「たかが小娘の分際でごちゃごちゃ口をはさむんじゃねえ！気色の
悪い声出しやがって・・・！！お前から先に殺してやる！！」

「貴方に私は殺せないと思うけど」

「だからうるせえんだよ！黙れ！！！」

顔を真っ赤にさせた男が今度こそ剣を私に向かって振りかぶる。後ろから私の名を呼ぶ声が聞こえた。

私は避けなかった。

頭から腰にかけて、斜めに切りつけられる。勢いがついていたら上体が後ろにそれて数歩下がってしまったが倒れはしなかった。顔に手で触れてみるが、血は出ていない。それどころか切られた肌の所が鱗に変わっており、ぴしぴしと人間の肌へと戻って行く。

「痛いなあ・・・」

切られてはいないが衝撃が凄かった。皮膚は鱗で守られていたが、中身は人間のままだ、思いつき殴られた衝撃だ。

死んでもおかしくない程の傷を受けたのに、無傷な私を見て男は顔を歪め後退する。衣服も切られてしまったが、胸元から腰にかけて少し切られたぐらいだから問題ない。痛みも少し我慢すればいいぐらいだ。

「なっ・・・なんだおまえっ・・・！？」

「だって私、人間じゃないから」

人間だけど人間じゃない。ドラゴンだけどドラゴンじゃない。私だけど、この姿は私の姿じゃない。

とても曖昧な存在。

それでも私は確実にここにいて、自分のしたい事をやろうとしてる。

「だから人間である貴方たちのやる事なんて理解できないし理解したくない。ましてや国同士の戦争だなんて、私には関係ない。私がここで何をしようと、その結果戦争が起きてしまおうと、関係ない」
我儘だろうと、無責任だろうと、何と言われても良い。

私は大きく息を吸い込み長く吐きだした。そろそろ話すのも疲れた。さっきから小娘小娘ってうるさいんだよ。そんなに小娘が好きなら、小娘みたいな可愛らしい顔で笑ってやろうじゃないか。

「どうして欲しい？ 噛み殺してやろうか？ それとも火あぶりにしてほしい？ ああ、踏みつぶしてしまうのも良いかもしれない。どちらにしろ、食べるのは遠慮しておくよ。貴方達は、——とてもまずそうだから」

私って腹黒属性付いてんじゃないかって、この時ほど思った事は無いよ。

「生きて帰れると、思わないで」

ドラゴンの姿になるときはあまり見られたくない。あんまり気分の良いものじゃないからだ。例えるなら人前で着替えをするような。だが今はそんなこと考えている暇なんて無かった。

私は、怒っているからだ。

ただ、腹立たしかった。

あまりにも彼らが身勝手だからだ。

こんなに怒りにまかせて行動するのは、これが初めてかもしれない。

私は目を瞑る。身体が徐々に熱くなっていき、身体が変化していくのがわかる。大きくなっていく体、肌は純白の鱗に変わり、背からは翼が生え、頭からは三本になってしまった角が生えてくる。ありがたいことに全身が眩い光で包まれているからそんなにグロくない。ただ白いシルエツトが大きくなっていくだけだ。まるで魔女っこの変身シーンのようだが、私は魔女っこではなくドラゴンだ。

「ど、ドラゴン!？」

「くそっ！ 契約したというのは本当だったのか!!」

誰かが叫ぶ。

契約云々は今はどうでもいいよ。勝手にどうとも思ったらいい。ドラゴンの姿になるのは一瞬だ。

私は息を吸い込んで、容赦なく火を吐いた。悲鳴が聞こえ一瞬にして目の前にいた数人の男が黒焦げになる。果敢にも私に挑もうとする人間も数人いたが、そんなちっぽけな剣では私の鱗は通さない。

頭から噛み付いて放り投げる。

逃げ惑う彼らを踏み潰してその上からもっと遠くまで逃げてしまった彼らに向かって火を吐く。人間の焼ける匂いは嫌いだ。自分でも残酷だと思うから。

「こ、この化け物！」

どこからかそう叫ぶ声が聞こえた。むかついたのでその方向に向かってもうひとつ火をお見舞いしてやると声は聞こえなくなった。確かに化け物だ。食べたものに化けることのできる生き物だし、躊躇なく人間を殺す。でもこれでも年頃の女の子（雌）なんだぞ。化け物と言われれば少し傷ついてしまうじゃないか。

なんて今更私に言えた義理じゃないか。それほどの行為をしてきてるのは事実なんだし。

噛みついて放り投げ、踏みつぶしては火を吐いてを繰り返していると、生きているものはいなくなり、突然静かになった。

数人逃がしてしまったけれど、街道には黒焦げと、血と、血にまみれた人間の死体がごろごろと転がっていた。

戦争なんてものはもっと凄惨なものかもしれないが、これはこれで酷い光景だ。誰がこれを片付けるんだろう。暴れたからお腹は減ったけど、食べようとは思わない。

我ながらとんでもない事をしてしまった気がする。

これからの先のことを考えると頭が痛くなりそうな事だ。でも。

——ああ、すごくすっきりした。

私の居場所。其々の思惑。かみ合わない歯車。

問題。

私にとってこの世界はなに？

答え。

たまたま迷い込んだ不思議の世界のようなもの。そもそも人間の記憶の世界だってもしかして私の妄想なんじゃないかって思うくらい曖昧で、ただ、頬を抓ると痛いからきつと夢ではないと思う。

問題。

私はどうしてドラゴンとして生きているの？

答え。

たまたま。偶然。何がどうなってこうなったのかわからないけど、そうなってしまったから仕方が無い。人間の私がドラゴンに入ってしまったのか、それとも私の前世が違う世界の人間だったのか。答えは私の脳にはないからその考えは放棄させてもらう。

問題。

もし人間としての自分で元の世界に戻ることができたらどうする？

答え。

そんなものなってみなければわからない。だから今は考えない。．．
・人間の私ってなんだ？ドラゴンじゃない人間の私って、私なんだろう。わからん。

問題。

私にとって人間とはなに？

答え。

私の生きる糧でもある。大切な食でもあり、友人でもある。．．
矛盾してるけど、それが答え。

問題。

もし戦争が起こったらどうする？

答え。

関係ない。・・・が、そうは言ったが少しは気になる。だから私は私の大切なものを失いたくないためなら、きっとそれに関わってしまいうこともあるだろうが、後悔はしたくない。

問題。

私にとって隊長さんとはどう言う存在？

答え。

最高級食材並みのおいしそうな人間。

そして、——失いたくない人。

ドラゴンから人間の姿になると、隊長さんの元へと駆け寄る。先程は王子に支えられていたが、今はもう支えられておらずただ地面に座り込んでいるだけだ。ユニコーンの時間を止めるという能力が消えたのだろう、他の騎士さんたちも負傷していながらも自分の足で立ち上がっていた。

子供の元へと行ったユニコーンの彼女も気になるが、今は隊長さんが一番気になる。倒れてる人は他にもいるのに隊長さん目掛けて一直線とか、本当に私ってば隊長さんの事しか考えてないんだなと改めて思う。

「隊長さん、生きてますか」

肩の出血は激しいが傷は思ったより酷くないみたいだ。顔色がよく見えないので前髪を手ですくいあげると、黒い瞳が現れた。

どきりと、する。

やっぱり隊長さんは笑ってた。

——なにその顔。心配、してるのに。

隊長さんは前髪をすくい上げた私の手を優しく掴んだ。掴まれた手はするりと頬まで流れ落ちる。掌に口付けるように猫みたいに顔をすり寄せてきたから、私はピシリと固まってしまった。かまわず隊長さんは私の腰に手をかけ抱き寄せると、首筋に頭を埋めてくすぐすと笑う。

癖っ毛の強い落ち着いた若草色の髪が首筋にあたってくすぐったい。

それよりも、首に吐息がかかり何が何だかわからなくなって、石化状態から抜けられなかった。

——え？これどういうこと？私、隊長さんの怪我心配してたんだけど。あわよくばもったいないからその血をまた舐め取らせて下さいとか思ってたんだけど。私よりでかいんだから、抱きこまれると動けないんだよ。い、いったいどうしたらいいんだ。

予想外の反応にわたわたと慌てている私をよそに、隊長さんは耳元でぼつりと呟いた。

「——見つけた」

何が。

・・・ああ、そうか。そういうことか。怒りに身を任せていたからすっかり忘れてた。私、隊長さんたちの目の前でドラゴンになったんだった。

どうしよう。

覚悟はしていたが、もう城にもいれなくなることを考えると寂しい気持ちもする。シフォンたちにはちゃんとしたお別れも言っていないし内緒で抜け出てきたから今頃心配してるかもしれない。それに他の国へ行ってもまた職探しになるんだろう。こんな条件の良い

職場は中々ないと思うんだけどな。自業自得だから仕方ない。それともまたドラゴンの生活に戻るといふ選択肢も有る。場所を探すのに大変そうだが、それも手だろう。

あらためて冷静に考えるとなんて事をしてしまったんだと頭を抱えたくなった。

でもああしてなければきっと皆殺されてた。そんなの嫌だ。後悔はしないはず。

とりあえず私は隊長さんの腕の中からの脱出を試みる。だが無理だった。

——なぜだ！なぜ離してくれない！！

色々と言いつと謝罪を彼らに言わなければならないのに、隊長さんは離すどころかやっぱり猫みたいにすり寄ってきて強い力で腕の中に私を閉じ込めている。

きつと、掻き抱くと言うのはこう言う事なんだろう。恋愛経験のない私でも強い抱擁だとわかる。

そんな抱擁をされてどきどきと胸が高鳴らない女が居ようか、いや居ない。ドラマなんかで全身での愛情表現に熱烈な抱擁が使われているのに、今更ながら納得する。

だって、・・・居心地が良すぎる。ずっと腕の中に居たいって、ずっとこの温もりを感じていたいって、そしてなによりこのまま時間が止まってしまえばいい、なんて思ってしまう。

考える事を放棄してただただ全身で相手を感じる。思わず手が隊長さんの背に伸びかけて、踏みとどまった。

いつまでも夢心地に浸っている場合ではない。私は謝罪せねばならんだ！！

仕方ないからその姿勢のまま言う事にした。ちよつと声が潰れた。

「隊長さん、それに王子様、皆さんも。・・・ずっと黙っていて申

し訳有りませんでした。私はこの通り人間ではありません、もう、城にはいられないと思います」

あ、でも討伐とかはやめて下さいね。なるべく遠くに引っ越しま
すし迷惑はかけませんので。そう言うと、それぞれ個人差はあるが
ぼかんとした呆けた表情で私を見ていた。

そんなに私がドラゴンだって事が信じられないんだろうか。私も
未だに信じられないが、そこまで驚かなくてもいいんじゃないかと
思う。副隊長さんにいたっては口が開きっぱなしである。

「ヴィト、なんで？」

ようやく隊長さんと私の身体の間隙間ができた。これでちゃん
と息ができる。

「なんでって……だって私、人喰いドラゴンですよ？隊長さんの、
その、左腕も食べてしまいましたし、全部食べようかとも思ってい
ましたし、……本音を言うと、今でも少し食べたいと思ってい
ます」

「うん、おいしそうに食べてた。それに、ヴィトが食べたいなら、
食べればいい」

——なんですかその眩しい笑顔は！そして顔が近い！額がごっ
つんこしちゃってるんですよ！吐息がかかるんですよ！ちよつと隊
長さんあなた正気ですかこの格好どこからどうみてもバカップルの
格好ですよ隊長さん！……落ち着かなくてはいけないのは私の
方か。

そもそも隊長さん変なんだよ。以前もそうだったけど、どうして
自分を食べて良いなんか、さらっと言えるんだろう。おいしそうに
食べてたとか人事のようだ。普通の人だったら絶対言わない。いく
らドラゴンが大好きだからって、食べられてもいいほど好きなんて
ありえない。ましてや暫く傍にいた使用人の私がドラゴンだと知っ
てなぜ驚かない。順応が早すぎる。私の考えていた一歩先を行って
る反応で私が戸惑っている。

「食べたなら死んじゃいますよ」

「そうだね」

「・・・だから、死んじゃいますよ」

「・・・うん？」

わかってないぞ隊長さん！！死んじゃったならそこでお終いじゃないか！

「だって、それでヴィトが嬉しい気持ちになるなら、俺も嬉しい」
私が嬉しいからか！！死んだら嬉しいという気持ちさえ無いんだぞ！！・・・そしてそろそろ突っ込むのも疲れて来た！！

「そんな事言うのでしたら！さっきからずっと気になってた傷の血、全部吸ってしまいますよ！吸血鬼みたいに！私暴れて少しお腹空いてるんですから！」

「どうぞ？」

隊長さんはただ、ふんわりと、いつもの笑顔で笑うだけだ。こっちはこんなに必死なのになんだか軽くあしらわれている様で癪だ。

ええい、ドラゴンは何度胸！隊長さんの許可も頂いた事だし暴れまくったので本当に少しお腹がすいている。丁度良い。それと隊長さんと話して突っ込むのももう疲れた。今更駄目だなんて言わないでよ。

恐る恐る肩に顔を寄せると、口を這わして傷口を探り当てる。血で湿った服が邪魔だったが仕方ない、少しでも破けた服の隙間に傷を見つけ、切り傷だったためか血を吸うことはあまりできなかったので舐めることにした。間違っても歯があたり噛みちぎってしまわないように、まあドラゴンの姿じゃないからソコの所制御できてるから大丈夫だ。たぶん。

舌を這わせ、とろりと口の中に入ってきた暖かい血は極上そのもので、喉を通るたびに得も知れぬ感覚が身体中を支配する。

——大丈夫、前みたいには暴走しない。

隊長さんは相変わらず心地のよいぬくもりで私を抱きしめ、頭を撫でていた。まるであの時撫でられたように、優しく、暖かい温もりが伝わる。

私は乳飲み子ならぬ血飲み子か。

だがほっと安心する、それと似たような温もりだ。

——ちよつとまてよ、私。隊長さん負傷者じゃん。なに負傷者から血貰ってんの！駄目じゃん！そして血を舐めるなんて変態すぎる！それでもって極めつけに周りには皆居るんだよ！恥ずかしすぎる！！

目の前の血の誘惑に惑わされ正気を失っていたのかもしれない。慌てた私は素早く傷から顔を離すと、相変わらず優しく笑っている隊長さんの顔が至近距離に存在していて驚いた。

「もう、いいの？」

「あのですね、隊長さんは怪我人なんですよ。これ以上貰えば本当に死んじゃいますって」

そう？と呟いて頭を撫でていた手が流れるように私の唇についた血を拭う。そして指についたままの自分の血を何を思ったのか、舐めた。

「・・・鉄の味」

私は頭が爆発しそうだ。

何してるんだこの人は！？クリームついてるよ？え？どこどこ？ほらここ！あーほんとだ！って食べないでよー！！みたいなバカップルじゃないかこれは！！

顔が真っ赤になった私を見て隊長さんはくすくす笑う。さっきから笑ってばかりだ。からかわれている感じがして悔しい。

「・・・そろそろ離して下さい」

「嫌だ」

「駄々こねる子供みたいなこと言わないでください・・・」

もう私が限界なんだ。空気を読め！空気を！そして周りを見ろ！啞然とした顔だらけじゃないか！！

「ルートリア、気持ちはわかるが、離してやったらどうだ？私も彼女の話を聞きたい」

見かねた王子が話しかけてくれたよ。ありがとう王子。と言うか今の見られてたんだよね、・・・恥ずかしすぎる。や、やってしまった私も私だけどさ。ほらお腹がすいて誘惑に負けたんだから仕方ないって事にしといてよ。・・・ところで、気持ちはわかるが、ってどういう意味？それはきっと隊長さんがドラゴン好きだからだよね？きっとそうだよ？他に理由なんてないよね？よね？

王子に言われ隊長さんは渋々と離れる。私は立ち上がってようやく王子たちの方を向く事ができた、が、後ろから腰に回る腕の存在にびくりと身体を震わせた。今度は後ろから抱き込む形で私の髪に顔を埋めている。あまりにも自然にやられたから抵抗する暇も無かった。

「た、隊長さん？」

「なに？」

「・・・いえ、なんでもありません」

まさかこんなセクハラ魔とは思わなかった。いちいち反応してたら王子と話せないのだから一切無視することに決めた。

王子を見ると苦笑していた。笑ったな！この残念王子！！

「お前には礼を言わねばならない。・・・すまない、助かった」

「こちらこそ出過ぎたまねをしてしまい申し訳ありません。数人逃がしたとは言えほぼ全員、・・・殺してしまったんですから」

もしかしたら罪のない人もいたかもしれないのに、私は躊躇なく殺してしまった。そんな自分が、少し怖い。私はどこかおかしいのだろうか、彼らにも家族がいて、友人がいる。死んで悲しむ人もいる。そう思っている、殺してしまった。脅して追い払う事だけでもできるのにそれをしなかったのは、心の底から腹がたっていたから、なんて言い訳。

人間としては失格だ。

「やらなければこちらがやられていただろう、気にしないでくれ。それにこうなることは薄々感ずいていた」

「・・・だったら。どうしてファイアドレークを連れてこなかった

んですか」

王子は顔を曇らせる。こんな事になることがわかっていたのなら、一匹でもファイアドレークを連れてくるか、あるいはもっと人数を増やせばこうなることは避けられたかもしれない。

感ずいていながらそれをしなかったのは、相手を馬鹿正直に信じていたから？ 私は王子の考えている事が全く理解できない。

「そもそも一国の王子であるあなたが使者の出迎えに？ そんな危険な事誰が許したんですか！」

「臣下たちには黙って来ている・・・お前の言うとおりこれは私の判断ミスだ。すまない」

「一介の使用人である私に謝らないでください」

そんなに素直に謝られても困る。それに謝る対象は他にいる筈だ。王子はそうだな、と苦笑して負傷した騎士さんたちの方を向く。

「すまない。私の誤まった判断でこんな事に巻き込んでしまった。

許してくれ」

そんな王子に騎士さんがひとり歩み出た。

「王子、頭を上げて下さい。どんなに危険だろうと王子についていくのが私達の役目です。危険は元から承知です。それにそのようなことで謝まられてはきりがありません」

はつきりものを言うのは、第一騎士隊長さんだ。名前は忘れた。ただ真っ白い短髪に日に焼けた肌がとても良く似合ってるから彼が第一騎士隊長さんと言うことは覚えていた。その言葉に、他の騎士さんたちもそれぞれ頷いたり、何か言っている。王子は少し生真面目で、正義感が強くて、なにより馬鹿正直なんだろう。討伐隊の時も自分も行きたかったが、と言っていたし、きっと自分から行動しないと気が済まない人なんだろう。そのようなことで謝られては、とも言っていたから、こんなことは何度もあったのかもしれない。そう考えると巻き込まれる騎士さん達に同情するよ。だが、そこが王子の良い所なのかもしれない。友人思いで、他人を思いやる事ができる人間だ。

王子は私に向き直る。

「本当に助かった。以前の討伐隊の件も、まさか・・・お前がアースドラゴンだとは思ひもなかったが」

小娘で悪かったな。

「もういいんです。私の事は気にしないでください」

「だが――」

王子は言葉を濁す。その先は言われなくても考えればわかった。

良い気分だったのに、その視線はずるいよ。だって、さっきから騎士さんたちの視線が痛い。これは好奇の視線と期待の眼差し。大人の大人がこんなちっぽけな小娘にそんな視線向けるなよ。

私はため息をついて王子に言った。

「・・・契約をしろって？」

「それは・・・」

「確かに貴方達からすれば私はその”伝説のアースドラゴン”かもしれない。契約をして戦争を勝利に導くのが貴方達でいう私の役目かもしれない。でも、私の人生は、私が決める。人里に降りて人間に交じり暮らしました、国に未練がないといえは嘘になります。でも・・・ただの小娘に、そんな期待しないでください。押し付けないでください。重すぎます」

はつきりそう言うと、王子は黙ってしまった。

他の人も困惑した表情だが何も言わなかった。彼らの間でアースドラゴンがどのような存在だと語り告がれているか知らないし、どんな信仰があるのかもわからない。そしてそれを私がぶち壊しているのも承知している。だって、重すぎる。これぐらいはつきりと拒絶しておかないと、後々丸め込まれそうだから怖いんだ。私は少し流されてしまうところがあるから、言いたいことは言っておいたほうがいい。

・・・でも少し言い過ぎたかもしれない。彼らだって国のためを思っていることだろう。それを私個人が壊してるんだから感じない罪悪感は少しも無い。

「ヴィト」

私にしか聞こえない声で隊長さんは私の耳元で囁いた。心臓に悪い声だ。

「重いのなら、背負わなくていい。全部、俺に預けて」

「・・・そんなことしたら潰れちゃいますよ」

「潰れない。ヴィトはただ、ここに居てくれるだけでいい」

私は首を捻って後ろを振り返る。吐息がかかるほど近くに隊長さんの顔はあった。

「ここって、どこ」

「ここ」

ぎゅっ、と長い腕でいっそうに抱きしめられる。背中から隊長さんの温もりが伝わる。肩を怪我しているはずなのに痛がる素振りは見せず、それどころか微笑んでいた。

見上げているせいか、長い前髪の奥の黒い瞳がはっきりと見えていた。その瞳に全部吸い込まれてしまったら、どんなに楽だろう。何も悩む事無く、考える事無く、自分の恋焦がれる色に染まれるのだ。どんなに幸せだろう。

「・・・ほんと、隊長さんだけです。そう言ってくれるのは」

王子たちみたいに、私に期待なんてしていない、居るだけでいいと。国の騎士としてそれはどうかと思うけど、それが私にとってどんなに嬉しいか。

「先日は、酷い事言っすみませんでした」

「うん、気にしてない」

「本当ですか？」

「本当。だから、ここに居て」

そんな瞳で見られたら断れない。振り切ることができない。まるで捨てられた子犬に見つめられているみたいで、黒い瞳が愛おしい。それだけじゃない。私がドラゴンだと知っても拒まないでいてくれる、桜色付いた唇から発せられる少し掠れた囁く声色も、力強いけ

れども優しい温もりを与えてくれる抱擁も、全てが、——きつと、好きなんだ。

私は小さなため息をついた。

「・・・わかりました。暫くはお城にいます」

そう言うのと、隊長さんは嬉しそうな表情になる。

王子の表情はあきらかに輝いていたけど。

やっぱりやめときゃよかったかな。とも思ったが、今だけはこの温もりに浸っていたい。

それぐらいは、許されてもいいはず。

束の間の安らぎと絶えられない風評。

私は飛んでお城に戻ろうと思っていたが、ユニコーンの彼女のことを思い出してティモの家へと訪れることにした。

王子たちは負傷者がいるので近くの街まで戻って手当ををし、それから城に帰ることになった。何人かなら私の背中に乗せて飛ぶ事もできるけど、そんな事をすれば変な期待をされてしまうかもしれないので止めておいた。

優しさだけじゃ世の中渡っていけないと思う。突き放すことも重要だ。

「で、何で隊長さんまで来るんですか」

そう、何故か隊長さんまで付いてきてる。私の横をにこやかな顔で歩いてる。足の長さが違うせいかな普通に歩いている私に比べてゆったりとした歩き方だ。コンパスの違いが悔しい。だが私の歩調に合わせてくれているのがわかる。

「ヴィトをひとりにはできない」

一匹の間違いじゃないか。

「生憎ですが、心配はご無用です。私は――」

「ドラゴンでも、俺が心配」

そこをアースドラゴンと言わずにドラゴンと言う総称を使うのは卑怯だと思う。

私が、変な期待をしてしまうじゃないか。

そもそも隊長さんだって負傷者なのに応急手当をただけで、こんなに呑気にしていて良いのだろうか。

「ヴィト」

「はい？」

「ん」

——なんだこの手は。お手か、お手なのか、私にお手をしなさいと言っているのか！？私はドラゴンだけど隊長さんのペットにはなったつもりはこれっぽっちも無いんだけど！！

じとー、つとした目で見てみると、苦笑されて左手を掴まれた。

もしかして強制的にお手をさせるつもりなのか！？と身構えていたが、どうやら私の勘違いだったようだ。

私の左手は隊長さんの右掌に重ねられ、優しく握られる。茫然として繋がれた手を凝視していると、そのまま手を引かれてまた森の中を歩きはじめた。私の思考回路は付いていけない。これは俗に言う”手を繋いで仲良く歩く”という行為なのだろうか。シフォンや女の子の同僚にもされた事があるし抵抗はなかったが、男の人にされたのは初めてで、その、戸惑う。私より幾分大きな手が優しく私の手を包み込んでいる。緊張してしまっているのが自分でもわかる。恋人繋ぎじゃないだけまだマシだ。もしそうならきつと心臓がもたない。

私は文句を言わずに「仕方ありませんね」とため息をついてそのまま一緒に歩く。

でもね、本当は、左手から伝わるぬくもりが心地良くて、嬉しかったんだ。

サブタイトル。私ツンデレ属性ないですから。か、勘違いしないでよね！

何だかツンデレまがいな事をしてしまった気がする。私にツンデ

レ属性などないのだよ。あるのはきつと食欲旺盛属性か今回発覚した腹黒属性だ。戦隊もので例えらるゝならば黄色の役割が良いな。王道展開物語で言うゝと脇役が一番楽だからそれで頼む。なんて、現実頼む人もいなければ神もない。捨てる神あれば拾う神あり、八百万の神様がいるとも言うけれど、この世界にそんなものがあるかどうかとも怪しい。人間は神を崇め神を創った。ならば動物達を加護していると言う大樹という存在は何だろう。今まで考えてこなかったがまさかその大樹さんが何かしら私の存在に関わっているんじゃないかって最近思う。ラウは世界の均衡を保つために存在してるとも言ってたし。暇ができたら探してみようかな。何かわかるかもしれない。

歩いていると、ティモの家が見えてきたので繋いだ手を離す。隊長さんは不服そうだったけど無理矢理離れた。こんな姿ティモに見られてからかわれるのは嫌だ。

扉をノックすると、暫くしてアメジスト色の髪と瞳を持った女の子が出てくる。

「あら、いらっしやい」

どうみても10歳は過ぎていない女の子だ。この世界は神巫様ばかり長生きすると見た目が若返ってしまうのだろうか。

「ユニコーンのことね？彼女達はちゃんと保護してるわ・・・ところで、そっちの彼は？アルヴィナ国の騎士だろうけど」

ティモは私の隣に居る隊長さんをじろじろと見ると、首をかしげる。服装からアルヴィナ国の騎士だとは推測できたみたいだが、何処の誰とまではさすがに自称魔女でもわからないみたいだ。

こういうのは私の方から自己紹介した方がいいのかな、と考えていると、隊長さんは自分から名乗ってくれたので助かった。

「アルヴィナ国第四騎士隊長のルートリア・ベアリーニです」

数百年生きている魔女と言っておいたから、隊長さんも敬語になっってしまうだろう。というか隊長さんの本名をはじめて知った。

今更すぎる。

ルートリア・ベアリーニさんか。覚えておこう。どこかの王子とは違って覚えやすい名前だ。

「貴方があのドラゴンライダー？」

「あの？」

ティモは目を見開き、驚いた様子で小さな口に手を当てている。

あのって何だ。ぽかんとしているとティモに呆れられた。

「やだ、もしかして知らないの？アルヴィナ国第四騎士隊長って言ったら”有翼飛竜”って呼ばれる人じゃないの。こんな地に住んでいる私の耳にでも届くんだから、有名も何も、その辺りの小さな子でも知ってるわよ」

なんじゃそりゃ。そんな通り名があったのか。そんな恥ずかしい名前私なら謹んで辞退する。人喰いドラゴンで十分だ。というか隊長さんってそんなに凄い人だったのか。確かに剣の腕前とかファイアドレークの扱い方とか凄いけど、そこまで有名な人とは知らなかった。素直に驚く。

ティモは何か面白いものでも見つけたかのように瞳をきらきらとさせていたが、ふと不思議そうな顔になる。

「でもそうね、数年前からその噂はぱたりとなくなってしまったけど」

「・・・俺のファイアドレークが、死んでしまった事が原因、かと」

これ、地雷踏んだんじゃないの。

隊長さんを見ると表情が少し陰っていた。あまり思いだしたくない事なのだろうか。

「なるほどね。ドラゴンライダーは絆のあるドラゴンじゃないと本来の力は出せないものね。・・・でももう十分じゃないの？喪に服さず、そろそろ新しいドラゴンを見つけたらどうかしら」

そこでどうして私を見るんだティモよ。

隊長さんのファイアドレークってどんな子だったんだろう。確か1，2年前の小規模な戦争で亡くなったんだよね。気にならないと

言ったら嘘になる。それに、本来の力を発揮できないと言う事はこれからの事に影響を受けるんじゃないだろうか。副隊長さんのレイナも足に怪我をしてしまっている。戦力となるトップ2人がいない状態とほぼ同じだ。・・・できれば戦ってほしくないけど。

「ふふ、立ち話もなんだし、中に入って」

考え込んでいたのか、ティモにそう言われてはつとずする。

おじゃましますと、家の中に入るとそこにはユニコーンがいた。

その大きさでよくこの家に入ったな。扉は大きい方だとは思うけどかなり無理して入ろうとしなければ入らないんじゃないかな。子供はまだ眠っているのかテーブルの上ですやすやと寝息を立てていた。ユニコーンはこちらに気づくと、近づいてきて小さく嚙く。

『そなたは我が子の命の恩人だ。感謝する』

「いえ私はそんな、実際治したのはティモだから」

私はただ子供をここに連れてきたただけだ。

『だがそなたが見つけてくれなければ、我が子は今頃・・・』
ユニコーンの視線が子供に向く。その眼差しはあたたかく、まさに我が子を見守る母の姿だ。

あの人達は使い捨て、と言っていた。それがどういう意味なのか気にはなるが今は彼女たちが無事で心底安心だ。

「暫くはこの子たちを預からせてもらうわ。ここなら安全だし、追っ手が来てもあたしが追っ払ってあげる」

「ありがとうございます」

そう言えばユニコーンを追ってきたあの人達はどうしたんだろう。もしかして森の中で迷ってるんじゃないかな。私はヴィザンヌ山のふもとの森で慣れているからちゃんどこまでたどり着けるが、森に不慣れな人間ならありえる。

「そうだ、聞きたいことがあったんです。アルヴィナ国の神巫様を知ってますか？」

数百年も生きているというのなら知っていてもおかしくないんじゃないかと聞いてみたのだが、ティモの顔が明らかに嫌悪の表情に

変わるのを見てしまった。

「・・・あいつね、あいつの事よね、思いだしたくもないわ!」

「な、何かあったんですか」

何か嫌な思い出でもあるのだろうか、突然髪を乱し凄いい剣幕で喋り始めた。

「もう何百年も前よ、あいつがまだあの場所に縛り付けられていない頃だったわ。あたしが丹精込めて作った魔力の結晶をあるうことか飲み込みやがったのよ!!一飲みよ!? やつと魔力の結晶化に成功したと思ったのに!酷いと思わない!? あれができるまで100年はかかったのに!? 絶対に許さないんだから!!」

100年も費やして作ったものを一瞬にしてパアにされたら誰だって怒るだろう。ティモに深く同情するよ。それにしても怒ると怖い。大声でユニコーンの子供が起きないか心配したが大丈夫だったようだ。

神巫様があの場所に縛り付けられていない頃ということは、以前は動きまわることができたのだろうか。どうしてそうなってしまったのか気になるが、なんだか聞いてはいけないような気がして聞けなかった。

「・・・と言いたいところなんだけど、丁度良いわ、あいつに言付けを頼んでもいいかしら?」

急に噴火した火山がおさまるように、ティモはいつもの調子に戻る。

私が頷くと、今度は真剣な表情になって言った。

「――貴方達の敵は他にいるかもしれないって」

「敵、ですか?」

アルヴィナ国にとっての敵といえばティルゾート国だ。それとも敵になりうる他国のことだろうか。そう言うと、ティモは首を横に振った。

「この先はあたしも推測なの。だからどうなるかわからないし、・・・ただひとつ言えることは、いずれこの大陸中を混乱させるような

事件が起きるかもしれないってことよ」

「それは戦争ですよね」

「戦争ではないわ。強ち間違っていないけど、国同士のような戦争ではないもつと禍々しくて複雑なものよ。貴方達の話聞く限り、そのこととティルゾート国が戦争を急いでも他国を吸収しようとしていることが何かしら関係しているんじゃないかって、あたしは考えてるの。ま、今は考えても仕方がないからこの話は止めましょう」禍々しくて複雑なものって何だろう。ティルゾート国とアルヴィナ国の戦争よりもつと酷い事が起きるというのだろうか。副隊長さんは、ティルゾート国は大陸を制覇しようとしているかもしれない、と言っていた。その事と関係している事。全くわからない。

「辛気臭い話はここまで、おいしいお菓子があるからお茶にしない？それに貴方達のことにも良く聞きたいし」

おいしいお菓子だと？食べる食べる！是非食べたい！

今まで考えていた事をころつと変え、私の頭の中はもうお菓子でいっぱいだった。

現金なやつだと言われても良い。お菓子は最高だ。

それからティモに色々詮索されたけど隊長さんの事は誤魔化したつもりだ。ほら、食べちゃったこととか。でももしかしたらばれたたかもしれない。しきりに隊長さんの左腕見てたし、意味あり気な顔で「ふうん、そうなの」とか言われたら嘘なんて付けない！！結局根掘り葉掘り聞かれたわけだ。そして答えてしまったわけだ。ティモは満足そうにしていたけどこっちはげっそりだよ。女の子ってお話が好きなんですわね。こんな所に住んでいるから話相手も居ないのだろうけど。

ついでに隊長さんの怪我も治してくれた。実はさっきから気になつて仕方がなかったのでも助かった。もう血の誘惑に負けんぞ！

そろそろ日も暮れ始めたので帰る事になると、ティモは「いつでも来て、歓迎するわ」と言ってくれた。外に出るとやっぱり日が傾いていたが、歩いて城に戻るには時間がかかりすぎるし野宿なんてしたくない。

だったら答えは一つだけだ。

だが私は良いとして隊長さんはどうしよう。ここから街までは結構な距離はあるし、王子と別行動してまでも付いて来てくれたのにここで突き放すのも私の良心が痛む。

だったらやっぱり答えは一つだけ、だ。

私ってば隊長さんには甘いな。

「隊長さん、乗っていきますか？」

しまった主語を忘れていた。

隊長さんはきょとんとしていたがドラゴンの姿になった私を見ると目を輝かして「乗る」と即答。

上体を低く下げると、軽い身のこなしで私の背中に乗った。フアイアドレークのように乗鞍のようなものや手綱がないから飛ぶのに気をつけなくては落ちてしまうかもしれない。人を背に乗せるのは初めてだから緊張して心配だったが、ゆっくりと飛んだので大丈夫だった。飛び立つ瞬間が一番ひやひやしたけど、隊長さんはしっかりと私の背に掴まっていてくれたのでそれで落ちる事もなかった。

それに背に人間ひとり分の重みがあると言うのも少し気分が良い。いつもはひとりで飛んでいるからか、この視線を他の誰かと共有できる事がこんなに嬉しいものだとは思いつかなかった。

天気の良い澄み渡った空に太陽の光を浴びて、飛ぶ。とても清々しくて嫌な事全部忘れそうな気分になった。

下の方は小さな村や街が点々と見え、国も山の向こうに見える。私が普段見ているいろんなものを見て欲しくて、つい高度を上げてしまう。雲の上まで飛ぶ事もできるが、酸素が薄いので今回は止めておいた。唯でさえ生身で高い所を飛んでいるんだ、呼吸がしにくいのは当たり前なのに雲の上まで飛んでしまえば隊長さんが気絶

してしまうかもしれない。

考えて恐ろしくなったので、今度は気持ち低めに飛び続ける事にした。安定しない飛び方に後ろから苦笑が聞こえる。こっちは必死なのに。

お城の手前の人気のない場所に降り立つと隊長さんを降ろして人間の姿になる。

隊長さんの前だと普通にドラゴンになったり人間になったりするのに抵抗ないから不思議だ。

「大丈夫でしたか？」

「ファイアドレークより高く飛べて、早くて、驚いた」
「そうなんですか？」

珍しく興奮気味だ。飛んでいる時はゆっくりだが結構なスピードを出していたため喋ることができなかったのだろう、隊長さんにしては早口だった。

「また、乗せてくれる？」

風で乱れた髪も気にせずそう言うものだから、本当にドラゴンが大好きなんだな、と思った。

私は背の高い隊長さんの髪を背伸びをして手櫛で整えながら言う。
「機会がありましたら、ね」

その後、隊長さんは王子がまだ着いていないので迎えを出すためにようやく私と別れた。凄く名残惜しそうだったけど、ちゃんとやるべき仕事はやるようで安心した。いや、尊敬した。これでゆっくりベッドで眠れる、シフォン達心配してるかな、神巫様に言付けは後でいいか、と思いつながら部屋へと戻っていたら、どこから広がったのか、私がアースドラゴンと言うことがばれていた。

—
—
な
ん
で
。

ドラゴン、諦めが肝心だ。そう、潔く。

事の発端は、部屋に戻ろうと城の中を歩いていると、後ろ指を差されたりこそそこそと内緒話をされているのに気付いた事だ。最初の内はまた城中で噂になるような貴族の恋沙汰話でもしてるのかな、と考えてたんだ。でもちらちらとこちらをチラ見したり覗き見したりするものだから、これはおかしいぞ、と聞き耳をたてると、案の定違う話でそれも私のことだった。

『ほら、あれが噂の』

『まだ子供じゃない』

『でも人間を食べるんでしょ？怖いわ』

『実は化け物なんじゃないか？』

『これで国は安泰だ』

『契約者はやっぱり？』

『あれがドラゴンになるのか、見て見たいものだ』

『おっかねえ』

それらを聞いた瞬間、私は全身がひやっと冷たくなるのを感じた。
——なぜ、ばれてる？・・・どうして！？何があった！

情報網が早すぎる。まだ王子は帰って来ていないし、帰ってきたら忘れていた口止めをしようとしていたのに。

隊長さんはいええない。あの人がこんな短時間で、それも人に言いふらすなんて事は絶対しないはずだ。

じゃあ一体誰なんだ！！

『本当にあの子なの？』

『王子から送られた伝書バトに書いてあったらしいわ』

『また助けられたんだって』

『でも野蠻だわ』

王子あんたか！！口止めをすっかり忘れてた私も私だが、そんな

大事なこと伝書バトに書くなよ！！やっぱりあんたは残念王子だよ！！残念すぎる！

もしかして別れた後すぐに出したのか？いやハトなんて居なかったから街に付いてからか、ティモの家に何時間も居たから、その間に城中に広まったんだらう。なんて失態！

ふ、と気付くと目の前に見知った姿が佇んでいる。

色の濃いブロンドのポニーテールが揺れている。もしかして私の姿を見つけて走って来たのだろうか、彼女は息を切らしながらもゆっくりと私に近づくと、困惑した表情で私を見ている。

——アリアーデ、だ。

いつも一緒にいるシフォンはいなかったが、その顔を見る限り彼女もその噂を耳にしているのだと確信した。まるで他人を見ているような視線で、私を見つめている。その瞳に、少しの恐怖が含まれているのに私は気付いた。

全身から冷や汗が出て、手が震える。

何の心構えもなく仲の良い友人に知られたくない秘密がばれていて、それも少なからずドラゴンの私に関わっているアリアーデに、なんて、最悪なタイミングで会ってしまうんだらう。

「・・・ヴィト」

彼女の低い声が響く。

やっぱり城に戻るんじゃないかった。

あのまま去っていれば、こんなことにはならなかった。どんな形にしろアリアーデには私がドラゴンと言うことが伝わってしまうだろう。だが、それを私が目の当たりにすることはなかった。こんなに動揺して、言いたい事も言えなくなって、ただ茫然と突っ立っていることしかできない。

「その・・・噂」

私は続きを聞きたくなくて、踵を返し逃げるようにそこから走り去った。

王子たちに口止めし私の正体を秘密にしておいて、また城での暮らしをしようとしていた私は甘かったのだろう。部屋に戻る事もできず、私は周りの好きな視線、なにより、アリアーデのあの瞳に耐えられなくて、私は城から逃げ出した。

どこに。

そんなのヴィザンヌ山に決まってる。

ひとつ、ユメ。

「もし自分が自分でない存在になってとてつもない使命を背負ったらどうする?」

「なにそれ、またお兄ちゃんの妄想? そんなだからいつまでたっても彼女いないんだよ」

「妄想とは失敬な。いいから真面目に答えてくれ。それと俺に彼女がいないのは関係ない」

「そんなのなってみなければわかんないよ。だけど、もしなれば私は逃げると思う」

「逃げるのか？」

「だって自分じゃなくなるんでしょう？怖くなって逃げるよ。それに使命なんてものも背負わされるのも嫌だ。自分の命に関係ないことは関係したくない」

「お前らしい答えだな。だが、もし大切な人を守るためにその使命を背負わなければいけなくなったらどうする？これは家族じゃないぞ」

「・・・そんな人、私にはできないよ」

「なぜだ？それこそ、なってみなければわからないんじゃないか？お前はすぐあきらめてしまったら逃げ出したりする癖があるしな」

「殻に閉じこもってばかりで悪いね」

「悪いとは言っていない。利己的なのは自分を守る上で一番の防御反応だ。ただお前はちょっと悪い意味で強すぎる。気にしなくて言いことまで気にして考え込む癖がある」

「そう、かもね。でも性格はなかなかおせないものだよ」

「うむ。それでもいい。だが覚えておいてくれ、***には俺たちがいることを！！」

「・・・お兄ちゃん、なんだか変わったよね。前みたいにあんまり妄想ネタ言わなくなったし、久しぶりに言ってきたかと思ったら真面目な話になるし。そして最後はオペラ歌手みたいに野太い声で歌

わなくていい。近所迷惑。気持ちだけ受け取っておくから。ありがとう」

「お、惚れたか？」

「惚れるか」

「惚れてもいいぞ！わが最愛の妹よ！」

「**！お兄ちゃんの相手してやって」

「え、やだよ」

**

私はいつもの洞窟の奥に膝を抱えて頭を埋めていた。どのくらいの時間が経ったか覚えていない。ただ、太陽の光が登った事は覚えていたので、一晩は経っているだろう。

考えることは決まってる。

平和を求めて城に留まらず、どこかに飛び去った方が良かったんだ。

『でも人間を食べるんでしょ？怖いわ』

そりゃ怖いだろう。私自身だってたまに自分が怖くなる。

『実は化け物なんじゃないか？』

化け物で何が悪い。化け物のどこが悪い。

『これで国は安泰だ』

『契約者はやっぱり？』

だから、そんな期待は、いらない。

『あれがドラゴンになるのか、見て見たいものだ』

好奇心な視線も、いらない。

『おっかねえ』

恐怖の視線も、いらない。

いらない。全部、いらない。

あんなに視線が痛いものだと、噂話が心に突き刺さるものだとは思わなかった。好き勝手噂されるのは苦手だ。あんな行動をしてしまった私が悪いし自業自得だってわかってる。

後悔はしないはず。――でも、正直、辛いんだ。

私はきつと考えが甘かった。アリアーデにも仲の良い友人にも、私がドラゴンだと知られてしまった後のことを考えなかった。いや考えようとしなかった。私があのドラゴンだと知って、アリアーデはどんな気持ちなんだろう。裏切られた？騙された？

ぐるぐると嫌な事ばかりが頭の中でめぐる。

「もう、嫌だ」

声はかすれていた。

もっと気持ちを強くもたなくちゃいけない。でなければきつとこれからも生きていけない。それはわかっているのに身体に力が入らないんだ。

あの時の威勢はどうしたんだ！

でもそれは知らない赤の他人であって、知人ではない。知った人ではない、同じ国の人ではない。だからあんなにはっきりと言う事ができたんだ。ずっと暮らしているお城の、私の居場所でもある場

所で、私がアースドラゴンだと、人を喰う化け物だと恐れられている。国が安泰だと勝手に決め付ける人もいる。

そんなの耐えられない。そんな所にはもう居たくない。私はただしがらみなく自由に生きたいだけなんだ。それだけなのに。

人間をやめなくなる。そもそも人間ではないけど。人間というのは面倒な生き物だ。人間って何だろう。食べ物。そう言えばお腹減ったな。でも食べにいくのも億劫だ。肉、骨、内臓、血。おいしい。何を考えているのかもわからなくなってくる。変な夢だって見たし。あんな夢、今まで見た事がなかった。人間の時の記憶がリアルに再現されて、でも人物の顔や名前は霧がかかったように確認できない。内容もうろ覚えだ。あれは本物の記憶なんだろうか、私はあの体験をした事があるの。ああもう。私って一体なに？どうして人間食べるの？どうしてドラゴンになったの？どうしてこの世界にいるの？どうして、違う世界の人間との記憶があるの。人間の記憶さえなければ私はこうして人里において悩む事も無かっただろう。人喰いドラゴンとして討伐されるか、捕まえられて無理矢理契約させられて戦争に駆り出されたかもしれない。

人間の私って何だろう。・・・そんなの、考えても仕方のない事だ。今までも何度も考えてもわからなかった。だから考える事を放棄していたし、ティモにも言われて、少し気持ちに整理が付いたはずだ。

でも私は答えを知りたがってる。

もし人間の世界が私の本当の世界と言うのなら、———還りたいよ。

「見つけた」

膝を抱えてすっかり考え込んでいたため、誰かがこんな至近距離に近づいていたかなんて気付かなかった。

驚いて顔を上げると、隊長さんがそこにいた。

いつもの姿で、いつもの声色で、いつもの雰囲気です。私とは大違いだ。

どうしてここに。ファイアドレークで飛んできたのだろうか、それにしても私がここに居るということは何故知ってるのだろうか、この場所は誰も知らないはず、・・・でも思い出せば隊長さんは一度ここに来てる。それでも、私が城から逃げたこととこの場所をどうして結び付けられるんだろう。

若草色のみつあみが揺れていた。一本私が食べちゃったから二本になってしまってるけど。やっぱりおいしそうだな、なんて。そんな顔をしていたからか、いきなり。

「食べる？」

なんて聞きやがった。私がぼかんとした表情で見ていると私の視線にあわせるようにしゃがみこんで、そんなにもの欲しそうに見えるのか、みつあみの髪を一本差し出してきた。

ああ、そうですか、身体じゃなくそちらですか、ですよね。以前も食べましたもんね。

私はこの時思考回路がおかしくなっていたのだろう。くれるなら貰いますよ、ともしゃもしゃ先っぽだけ咥えて頬張る。よだれでべとべとにしてやる！と軽く食んでいたが、口に入れただけでも心地よい何かが身体に浸透するのを感じ、気づいたら一心不乱に頬張っていた。上手く食べれないから歯を鋭く変化させて口の中で引きちぎるように。かなりの時間がかかったが、一本まるまる食べてしまった。ああお腹いっぱい。腹が減っては戦は出来ぬと似たようなも

ので、満たされると気持ちもだいぶ落ち着いていた。が、とうとう隊長さんのみつあみは右の耳元からあみこんでいる一本だけになっ
てしまった。ごめん、食べるつもりはなかったんだけど、つい。

自分のしてしまった事に気づいて慌てて隊長さんの顔を窺うが、
いつもと同じだ。

「・・・気持ち悪くないんですか」

髪を食べる小娘なんて気持ち悪くないはずがない。私だったら自
分の髪を目の前で食べられたら、間違いなくひく。次はお前を食べ
るぞ、と遠まわしに言われているようなものだ。

でも隊長さんは不思議そうな顔をして横に首を振った。

「どうして？」

「・・・冷静になってもう一度考えて見てください。凶暴な人喰い
ドラゴンになる小娘ですよ、それも左腕をだって、髪だって食べて
しまいました。ドラゴン好きな隊長さんと言っても、さすがに気味
が悪いと思うはずですよ」

「それはこの間も言ってたね」

だから、どうして、彼らと反応が違うんだ。

どうして、そんなに素直に受け入れられるの。

「どうして、そんなに冷静でいられるんですか・・・」

「冷静じゃない」

「どこが冷静じゃないんですか・・・！」

いつもと変わらない。態度だって、少しおかしい所はあるけれど
以前とそんなに変わらない。

叫んでしまった私を安心させるように、優しい声色で隊長さんは
言う。

「気になっている女の子と、懂れるドラゴンが同じ生物だってわか
ったら、冷静にはなれない」

——気になっている女の子？

全く検討外れな答えが変化球でかえってきて戸惑う。

それは人間としての私の事だろうか。隊長さんと過ごしたのは寮

に配属された期間だけだ。

「・・・冗談ですか」

「冗談じゃない」

隊長さんは私の手を取ると、自分の左胸まで持っていく。突然の事で身体が前のめりになったが、左胸に押し当てた私の掌から伝わる鼓動は、心なしか少しはやいような気がする。その振動がとても心地よくて、生きているんだと実感させられる。あの時食べなくてよかった、とも。

——でも、そんなの、信じられないよ。

「ヴィト、何があった？」

顔をうつむかせた私に、どうしていきなり消えてしまったんだと、聞いてくる。

理由を言ってしまうえば笑われるだろうか、それともあきれられるだろうか。どちらしろなんだからもうどうでもよくなっている。

「・・・私がドラゴンだという事がいつのまにか城内で知れていて、色々な噂が流れているみたいで、それで少し落ち込んでたんです」
落ち込んでひきこもるとか笑えない。

「レブランシュは俺から言っておく。きっとヴィトの事で、平然にはなれなかったんだろう。それに、一国の王子という責任を負っているせいか、焦ると少し冷静さが欠ける所があるんだ。・・・あまり、攻めないでやって欲しい」

王子が原因だという事は知っていたようだ。

隊長さん、私も王子のフォローも上手いですね。大人だな。こんなにぐじぐじと悩んでいる私がなんだか子供みたいで惨めに思えてくるよ。

そうだよ。王子だって”伝説のアースドラゴン”が本当に存在したと知ったなら、それは国にとって喜ぶべき事柄だ。冷静になれないだろう。また残念王子と言ってごめんよ、王子。

それに城の人のあの反応は当たり前なんだ。だからそれで一々傷

ついてへこんで悩んでいたらそれこそきりが無い。答えがでないものを考えても仕方がないってティモも言ってたじゃないか。たかが噂のひとつやふたつ。そんなもので気持ちが左右されていてはダメだ。もう、止めよう。考えれば考えるほど気持ちが沈むのなら、その考えを放棄しよう。何かを放棄することは私の得意分野じゃないか。

「わかりました、もうその事はいいです。それにすみません、こんな所にまで来てもらって・・・迷惑をかけてますね」

「迷惑じゃなくて、心配」

だからなんでそんなに優しい事ばかり言うのかな。

そういえば、隊長さんおいしかったな。そんな目で見てみると、また「食べる？」なんて聞きやがった。今度はどこを食えと。最後のみつあみ一本か。それとも右腕か、でも置き換えは面倒だ。それに私の角も犠牲にしないでならない。生えてこないんだよ、これでも、それよりも。

「隊長さんってね、すごくおいしいんです。今まで食べてきた人間の中で、一番魔力が豊富で、全部食べるのがもったいないくらいで驚きました。もったいないから、少しずつ食べようとも思ってた。でも、・・・今は食べたくないんです」

討伐の件は素直に隊長さんを食いたいから他のやつらには渡せない気持ちで助けた。でも、今は失いたくない。食べたいという思いよりも生きて欲しいという思いのほうが強いからだ。ドラゴンの姿で隊長さんと対峙しても、暴走しないのはそんな気持ちがあるから。「いいよ。食べたいときに食べればいい」

二つ返事でOKでたよ。こっちは真面目に話してるのに。

「あのですね、隊長さん。貴方言いましたよね。国を守る騎士だって、だったら私に食べられている暇なんてないんじゃないですか」

「そんなことも言ったね」

なんだか隊長さんと話していると拍子抜けだ。

「・・・私、本当に酷いこと言っちゃって落ち込んでたんですから」
「ごめん」

「だからなんで隊長さんが謝るんですか、ここは私が謝らなければいけないんです。だから、——ごめんなさい」

秘儀！ジャパニーズ土下座！！なんてことはできなくて、ただ小さく頭を下げただけだ。隊長さんに迷惑をかけているのは本当だ。私がいなければ左腕も失うことはなかっただろう、二度も命の危険に曝されることもなかった。全部、私が蒔いた種だ。私がいなければもっと平和な時を過ごせたかもしれない。

でも、私は隊長さんに出会えて良かった、最初に会ったときから、ずっとそう思っていた。今も思ってる。

こんなに私の心を掻き乱して感情的に行動させる、そんな存在に出会えた事をとっても、嬉しく思う。そんな自分がいる。心があったかくなるんだ。

隊長さんは私の頭を一度撫でると、手を差し出す。

「帰ろう」

戸惑うようにその手に自分の手を重ねると立ち上がらせてくれた。ずっと座りっぱなしだったので足元が覚束ず倒れそうになったが腰に手を回して支えてくれた。

隊長さんは相変わらず、優しく微笑んでくれていた。

胸が高鳴ったのは——気のせいじゃないと思う。

私の頬は絶賛紅葉中。桃色彼女とランデヴー！

隊長さんに連れ帰られた私です。

初めてファイアドレークに乗った。正直、怖かった。飛ぶのは好きだが、飛ばされるのは苦手と言う事が判明。隊長さんの腰に必死にしがみついていたら笑われた。

このう！男のくせになんでそんなに腰細いんだよ！隊長さんなんかドレス着て何も知らない男に求婚されてしまえばいいんだ！！

・・・やっぱそれは嫌だ。

だがもつと大変な出来事が起きてしまった。

部屋に戻る勇気がなかったためとりあえず寮に行く事になったが、着いて早々、可愛い女の子から平手打ちをくらってしまった。

目の前で顔を真っ赤にさせて怒りの表情を私に向けているのは、副隊長さんの娘さん。咄嗟に肌を変化させようかと思ったが、女の子の手だと固い鱗は痛いと思ったのでそのまま平手を一発くらった。なので私の片頬は絶賛紅葉中。女の子に平手をされたのは初めてだ。叩かれた衝撃と、精神的な衝撃もあって呆然としてしまう。

副隊長さんも居合わせているのだが、まさか溺愛している娘がそんな事をするとは思ってもみなかったのか、私と同じく呆けていた。彼女はヒステリックに叫ぶ。

「気に食わないのよ！私からランス様を奪っておいで、ひ、人喰いドラゴンですって！？」

ランス様を奪った？

人喰いドラゴンについては身に余るほど覚えがあるが、ランスさんを奪った覚えは無い。そもそも付き合ってすらないし——これはもしや。

「もしかして、ランスさんの事・・・好きなんですか？」

「う、うるさいわね!!」

赤い顔がもっと赤くなり、もう一度平手打ちをくらいそうになったので数歩下がった。

彼女の反応からして凶星らしい。表情は怒っているものの、その瞳は恋する乙女の瞳だ。

「私はランスさんとは何もないですよ」

「嘘よ!だって髪飾りを貰ってたじゃない!」

「・・・ああ、あれは特別な意味で貰ったのではないので安心してください。それにシフォンやマドレーヌも貰ってます」

どこでそれを知ったのかわからないが、ここの情報網侮ることなかれ。それに今度から男の人にものをもらう時は気をつけよう。女の嫉妬は怖い。今絶賛体験中。

「そんなの信じないわ!どうしてあんたが・・・化け物、・・・そうよ!!化け物よ!!人を食らうなんて化け物の他に無いわ!!きつと油断させて皆を食べようと思ってるんでしょう!？」

うわあ、こう直球にくるとかなり落ち込む。以前も化け物とは何度か言われた事があるが、可愛い女の子から言われるのは落ち込み加減が違う。だが面と向かって言ってくれるぶん、こそこそと内緒話をされるより随分マシかもしれない。対処の仕様があるからだ。

そうだよ。皆も何か言いたい事があるのならこそこそと話さず私に言えば良いんだ。そうすれば何か解決策が出るかもしれない。・・・なんてドラゴンと話そうなんてもの好きはそういいないか。

「だいたいドラゴンなんて気持ちが悪いのよ!!兇暴で恐ろしくて、――」

「マリベル!!」

名前はマリベルさんと言うらしい。なんて可憐で可愛い名前だ。・・・現実逃避している場合じゃないぞ、私。

彼女の剣幕が凄くて止めに入ることができなかったらしいが、よ

うやく副隊長さんが止めに入った。私達の間はその大きな巨体をすべりこませ、マリベルさんを見下ろしている。

「お、お父様・・・？」

副隊長さんはマリベルさんに負けることないむしろ恐ろしい剣幕で、それこそ鬼も裸足で逃げだすような怖い表情とどすの利いた低い声で言う。

「言っている事と悪い事がある」

「でもっ・・・！！」

「何も知ろうとせず、自分の気持ちだけを押し付けるのはいけないことだ。言いたい事があるのならまずヴィトさんを知ってからにしない。それにドラゴンはこの国にとって無くてはならない存在だ。それを侮辱する事はたとえお前でも許さないぞ」

一気に捲し立てられ、マリベルさんはすっかり大人しくなった。大きな瞳に涙を浮かべ小さな身体を震わせている。

「・・・ごめんなさい」

しゅん、と落ち込んだ姿が可哀そうで、私のせいで彼女が怒られている気がして気分が悪い。慌てて彼らの間に割って入ると、副隊長さんにぎらりと睨みつけられたので少し怖かった。いやかなり怖かった。だがこれは私のせいなんだ。彼女は悪くない。

「副隊長さん、彼女は悪くありません。私が人喰いドラゴンなのがいけないんです」

「すまないがヴィトさん、これは我々の問題だ。口をは挟まないでくれないか」

「いいえ、私がいなければ彼女はこんなに脅えることはなかった。私の責任です」

勘違いする事もこうやって怒りにまかせて怒鳴る事も、父親から叱られる事もなかったはずだ。

私はマリベルさんに向き直って頭を下げた。

「ごめんなさい、マリベルさん。私はいずれ出て行きますから、それまで我慢してくれませんか？」

マリベルさんは唇を噛みしめると、涙を浮かべた瞳できつ、と私を睨みつけ背中を向けて部屋から出て行った。その後ろ姿を見て、副隊長さんが小さなため息をつく。

「・・・本当にすまない」

「私は、気にしてませんから」

本音はかなり気にしてる。やっぱり私は人間にとって化け物なんだと改めて思い知らされたからだ。こう化け物化け物と言われていると感覚が麻痺してきて化け物でも良いんじゃないかって思ってくる。それに悲しいけど、マリベルさんのような人だっているのは当たり前なんだ。むしろあれが人間として正解の反応だと私は思う。この国の聖獣がアースドラゴンだからと言っても、最後に確認されたのは100年程前だ。本当にそんな存在がいて国を助けてくれるのかと疑っている人だってたくさん居るだろう。それはそれで私にとっては都合がいいけど、なんだか複雑な気分だ。

落ち込んでいる態度が出ていたのか、副隊長さんはもう一度謝った。

「謝らないください。私が、全て悪いんですから」

「・・・本当はマリベルも本心ではドラゴンを嫌ってはいないんだ」
まさか。私に対する態度からしてドラゴンを毛嫌いしているように見えた。

「昔は、レイナと一緒に遊ぶぐらい仲が良かったんだ。でもある日突然遊ぶのを止めてしまった。それどころかドラゴン自体に近寄らなくなってしまうてな。・・・きつと同じ年頃の娘がドラゴンと遊ばないのを知ったんだろう。あの子はああ見えて周りにとっても敏感だから」

「そうだったんですか・・・」

意外だ。でも父親の副隊長さんがそう言うのなら間違いないのだろう。

もしかしてマリベルさんは誤解されているのかもしれない。アリアーデもマドレーヌもあまり良い顔はしなかったし、私も第一印象

はあまり良いとは思えなかった。でもそれは彼女の心が繊細で傷つきやすく、自分を守るためにわざと高飛車な態度をとっているとしたら、あまりにも報われない。

副隊長さんは「話してくる」とマリベルさんの後を追って部屋を出ていってしまった。

そう言えば隊長さんも居たんだっけ。マリベルさんの態度に少なからず驚いていたみたいだから、口を挟むタイミングが掴めなかったのだろう。

隊長さんは赤くなった私の頬を優しく撫でた。赤くはなっているがそれほど痛くはない。心配してくれているのだろうか。

「大丈夫？」

「私は平気です。でも、彼女が心配です」

そう言うのと、隊長さんにしては珍しい小さなため息が聞こえてきた。

「ヴィトは、自分のせいにしすぎだ」

「・・・どういう事ですか」

「何でもかんでも、自分の思考に取り込んで悩んでる。持たなくていい責任をも背負う。そして一番悪いのが、考え過ぎなところ。いつもここに皺寄ってる」

人差し指で眉と眉の間、眉間を押さえられる。

「・・・気付きませんでした。もしかしていつも、ですか？」

「考えてる時はいつも。だから何か悩んでたらずぐわかるよ」

それは恥ずかしい。もしかして毎朝おいしそうだなーと思いがら見つめていたのもばれていたんじゃないだろうか。こんな癖があるなんて自分でも知らなかった。

「でもですね。マリベルさんの勘違いは私の行動にも原因がありましたし」

「そうだね。でも考えてみて、彼女は、国の聖獣である君に暴力をふるったんだ。それ相応の罰を受けてもおかしくはない」

そのような言葉がまさか隊長さんの口から出るとは思わなくて、背筋に冷たいものが走る。

国の聖獣を傷つけると言う事は、そこまで罰せられなければいけない事なのだろうか。なにその生類憐みの令。怖すぎる。自分を傷つけた人間が罪もなく罰せられるなんて考えた事もない。私は私だ。それに、なんでそんな事を隊長さんが言うの？今までそんな事一度たりとも言った事がなかったのに、やっぱり私は、隊長さんに期待し過ぎて――

一瞬にして警戒心をむき出しにした私に苦笑した声が聞こえた。「冗談。そんなことしないよ」

――なんだよそれ。灯台もと暗しが如く、もしかして隊長さんが王子側の人間だったらどうしようって、たった数秒の間にいろんな事を考えてしまった。物凄い勢いで冷や汗かいたしきつと顔が真っ青になってると思う。まるでドッキリにあったような気分だ。

お茶目はやめて。神巫様だけで十分だ。寿命が縮む。

「でも、国にとってはそれぐらいの価値が君にあると言う事は、知っておいて。誰もが俺みたいなお考え持つてわけじゃないから」

何も考えていないように見えて、人一倍考えてる。相手の事だっ
て見ていないようで、よく見てる。フォローだって上手い。論し方も、巧みで説得力がある。今更ながらだがどうして隊長さんが第四騎士隊長さんなのか納得できる。

「だからもっと自分を大切にして」

――ちよつとまって。そこは譲れない。

「それはこっちの台詞です。今まで何度危険な目にあったらすむんですか、その度に私が何度助けたと思うんですか。そして自分を食べて良いなんて軽々しく言わないでください隊長さんこそ、・・・自分を大切にして下さい」

そうだよ。王子を庇って怪我もしたし、隊長さんこそ自分を大切にすべきだ！

そう言うと、何が嬉しいのか満面の笑みを向ける。

そして、その笑みは一瞬にして崩れた。

「それと、出て行くって言うの許さないから」

「はい？」

ほんわかムードが漂っていたと言うのに、突然表情が一変した事に驚いて、頓狂な声が出る。

隊長さんが前髪をかきあげると、奥に隠れていた黒い瞳が現れる。自らその瞳を曝すのは二度目だ。その時はあまり良く思われない時もあると言っていたのに、自分から曝す事にもう抵抗は無いのだろうか。

「た、隊長さん・・・？」

恋焦がれる黒を拝めることは嬉しい。ずっと見ていたい。だが、珍しくその瞳が据わってらっしゃるような気がする。いつもと違う隊長さんの雰囲気戸惑って、思わず一步、二歩下がってしまったが、それに合わせて隊長さんも一步、二歩近づく。

——何だ、何なんだ！何がしたいんだ！何で近づいてくるんだ！逃げるから近づくのか！？よしじゃあ立ち止ま——っても、隊長さんは歩みを止めなかった。じりじりと、結局壁際まで後退してしまった私は逃げる術無し。背中に壁が付いてしまった。背中どころか後頭部を強かに壁に打ち付けて心の中で痛みに呻いていると、いつの間にか距離を縮められており、隊長さんの顔がすぐそこまで近づいて、耳元に低い声で囁かれた。

「——」君が、欲しい”って」

身体中にぞわっ、と何かが駆けめぐる。冷たいものじゃない、でもあたたかいものでもない。足が床に付いていないような不思議な感覚。心臓は破裂しそうなほど鳴り響いている。

そんな事も、あった。確か左腕を食べてしまった時だ。あの直後

はすっかり忘れてしまっていたけど。今思いだした。今思いだすなよ！

隊長さんは俯いたままの平手打ちされて未だ赤くなっている私の片頬を撫でていたが、そのまま下へおりて顎を捕えると、有無を言わせない力で上を向かせられる。首が少し痛かった。

やっぱり目が据わってらっしゃる。人形みたいで怖い。

どうした私。相手は隊長さんだぞ！怖がる要素なんてこれっぽちもないはず！

なのに、なんだかいつもと違って、とても居心地が悪い。

「そ、それはどういう意味ですか」

「・・・わからない」

わからないのかよ。

よし、これを機に巻き返すんだ。押されたままなんてドラゴンの名が廢る！

「た、隊長さんはただ、好奇心旺盛なんですよ。無類のドラゴン好きでしょう？きっと、私がアースドラゴンだから珍しいだけです。

それだけです。だから――」

「それを決めるのは俺だ。ヴィトじゃない」

きっぱりはっきり言われてしまい口を噤む。

――じゃあ何なんだよ。私は隊長さんにとって、どんな存在なんだよ。

・・・隊長さんにとって私はムツゴロウさんの感情だと思うんだ。だからスキンシップも激しくなった。人間じゃなくて動物だから。私だって可愛いらしい兎がいればもふもふする。ひ弱な狼がいれば抱きついて撫でまくる。それは動物が好きだからだ。でも人間相手にはそんな事は出来ない。

ただの、愛玩動物だ。

うう、自分で考えて自分で落ち込むってどうよ。愛でられるぶんは嬉しいんだけど、しよせんは動物だ。人間とは違う。

何だか周りがごちゃごちゃしてきたな。城がざわついているのも、マリベルさんの事も、隊長さんの事も、・・・アリアーデの事も。私がここに居る事で、歯車が狂ってしまうのなら、早々に出て行った方がいいんじゃないか、とさえやっぱ思う。

少しずつ、何かが狂っていく。

それはたぶん、私のせいだ。

いやきつと、私のせいだ。

・・・こんな事を考えているのが、隊長さんは駄目だと言うのかな。

「駄目だ」

はあ、やっぱり駄目か。

「え？」

「だから、そんなに悩むのは駄目」

口に出ていたのだろうか、怒った様子の隊長さんは額をくっ付けて私の瞳を覗きこんでいる。吐息がかかる距離。視界いっぱい黒が映り、心の荒波が静まるように強張っていた肩の力が抜けていく。何時の間にこんなに黒に依存してしまっているんだろう。生きていく黒というのはこんなにも魅力的で心が安らぐ。

——ああ、そういえばラウは全身真っ黒だからもっと魅力的なのかな。

「今、——誰の事考えた？」

ラウの事を思い出していると、突然隊長さんの顔がもっと近づいてきて驚いた。ちょっとこれはやばい。心の臓がやばい。何だか今日の隊長さんはおかしいぞ。いつもおかしいけど、押しが強すぎる気がする。

「な、何の事ですか？」

「俺がいるのに、他の誰かの事考えた」

「え、そうですか？」

大きな鳥を一羽、考えていた。それは認めよう。だがなぜそれがわかる！？

「誰？」

「・・・友人の事を少し」

「大切？」

「ええ、大切です。今は南の方へ旅に出ているので、会えませんが」「そう」

なんだこれは。まるで浮気をばれて奥さんに尋問されている亭主のような会話じゃないか！だが私は浮気なんてしてないし第一結婚すらしてない恋愛歴無しの女だ。なんでこんなに問い詰められなければいけないのか意味がわからない。

それつきり隊長さんは黙り込んでしまつて、何を考えているのかわからない表情でただ私を見下ろしている。

もう限界だ。視線に耐えられない。

誰か、助けてくれ。

あれから何とか言いくるめ、会議に出かけるという隊長さんを見送った。あの姿勢から普通の立ち姿勢に戻るまでどんなに苦労したことか！

考え込んでいると誰かが扉をノックしたようで、「どうぞ」と言ううと先程部屋から出て行ったはずのマリベルさんが入って来て驚い

た。

「・・・今、いいかしら」

泣いたのだろうか、目元が赤くなって少し腫れている。マリベルさんは私の前まで歩くと、視線を泳がしながら何か言いたげに口を開いたり閉じたりしている。

そして意を決したのか、真正面似私を捕えると口を開いた。

「さっきは、・・・その、・・・ごめんなさい」

私は目を瞬かせる。正直また文句でも言われるのかと身構えていたので拍子抜けだ。

「こちらこそ迷惑をかけてしまってすみません」

「お、お父様に謝ってきなさいって言われたから来たんだからね！か、勘違いしないでよね！」

ツンデレ、だと？

こんなに純粋なツンデレを初めて見た。感動だ。が、そんな事を考えている場合じゃない。

せっかくマリベルさんが会いに来てくれたのだ、ちゃんと話を聞かなくては失礼だ。

「・・・お父様に言われたの。貴方は人間を食べるかもしれないけど、考えたら、お父様達を、二度も助けてくれたのよね。貴方がいなければ、きつと・・・」

きつと死んでいたかもしれない。でもそれは何度も言うが私の蒔いた種だ。

「そんなことを言われる義理はありません。・・・討伐の件はもと私がああ山に巢食っていたのが原因なんですから、それに使者の件も、契約云々の噂がなければ副隊長さんまで駆り出されることはありませんでした」

「そ、それはそうだけど」

「・・・だから私が感謝される覚えはないんです」

そう言うと、マリベルさんは身体を震わせながら両手の拳を握りしめて私を睨みつける。今度こそ何か文句を言われるかと身構えた

が、違った。

「どうして貴方ってそんなに謙虚すぎるの！？原因とかそんなこと
どうでもいいわ、貴方は私の大切な人を助けたのよ！それで充分じ
ゃない！？だから私は貴方に感謝をしたいのよ！！」

突然声を張り出したマリベルさんに驚いて私は何も言う事ができ
ずただ茫然と彼女を見つめていた。さっきの剣幕とは違う、彼女な
りの必死さが伝わってくる。

「香り袋だって、おかげで随分仕事がしやすくなったわ！それも感
謝してるの！！さっきだって頭が混乱して言いすぎたと反省してる
わ！！私がこう言ってるんだから、ちゃんと受け取りなさいよ！！」

「え、あ、・・・はい？」

勢いに負けて頷いた。マリベルさんは顔を真っ赤にさせて息を切
らせている。

そして自分が何を言ったのか我に返ると、林檎のように真っ赤な
顔をもっと真っ赤にさせて「か、勘違いしないでよね！」を連発。

———なんだか、可愛いなあ。

「ちょっと、なに笑ってるのよ！」

必死に手で扇子頬の火照りを冷ましている。そんな仕草も可愛ら
しくて微笑ましい。

「いえ、何でもないです」

やっぱりマリベルさんは根は良い女の子なんだ。ただ自分の本当
の気持ちを伝えるのが少し苦手で、つい高飛車な態度を取ってしま
うんじゃないだろうか。そう考えたら何だか仲良くなれそうな気が
してきた。

「その、ランス様のことも、本当なの・・・？」

何もありませんよ、と言うと彼女はほっと安心した顔をさせる。

「・・・だったらいいわ。」

「私の方も誤解をさせてごめんなさい」

今度から男の人から物を貰うときは気をつけよう。女の嫉妬は怖
い。やはり恋敵というものは許せないのだろうか、女の子って恋す

るとこんなに必死になるんだな。シフォンしかり、相手の男の人が羨ましい。特にマリベルさんに好かれているランスさんが羨ましが。2人って実はお似合いなんじゃないだろうか。

「・・・その敬語、やめなさいよ」

「え？あ、・・・うん？」

それでいいわ。と満足そうに頷く。

「それと、ヴィトは暫く私の部屋に泊まってもらうことになったわ」「ええ？」

「まさか元に部屋に戻るつもり？貴方がどんな噂されてるのかわかっているの？」

ぎゃあ。忘れてた。

「是非ともお願いします。泊まらせてください」

「だから敬語はやめる！」

「ごめんごめん」

「だから何で笑うのよっ！！」

マリベルの部屋は寮に近い城の中に位置しており、女の子だなあ、という可愛い部屋だった。天蓋ベットだし、カーテンはフリルたっぷりだし、クローゼットやドレッサーなんかも可愛らしく装飾されている。

そして四人は余裕で眠れるベッドで一緒に寝るらしい。私は床でいいと言ったんだけど、美容に悪いわ！とかいいながらベッド引きずり込まれてしまった。

なんだかどきどきする。誰かと一緒にベッドで寝る事なんてなかったから、まるで修学旅行の夜みたいに眠れない。

ちなみに寝巻はもとの部屋に置いてきているので借りることにした。マリベルは桃色の髪を解いて、ピンクの可愛いネグリジェ

に着替えている。どこぞのお姫様だよ！可愛くて困る。もし私が男だったら即結婚を前提に交際を申し込んでいるかもしれない。そして私が着ているのもピンク色のネグリジェ。マリベルに比べたらフルは少なくシンプルだが、まさか私がピンク色の服を着る日が来るとは思いもしなかった。絶対似合わない、がせつかく用意してくれたので着た。でも心もとないので地味な色のナイトガウンを借りて羽織ることにした。

「ね、本当に誰とも契約してないの？」

「してないよ。どうして？」

ベッドに潜りこんだマリベルの大きな瞳がきらきらと輝いている。これは、女の子特有の世間話好きが発動したか。

「だってロマンチックじゃない？人間とドラゴンの異種間交際よ。昔の契約者も添い遂げた人もいたし、しかもその人達の子孫がこの大陸のどこかにいると言われてるわ」

子孫がいるのは初めて聞いたな。へえ、人間とドラゴンでも子供できるんだ。初耳。

それにしてもロマンチックって、女の子の考えそうな事だな。でも実際ロマンチックどころか私の身に起きているのは常にスプラッタグロテスク系だ。だがそれをマリベルに言っただけでひかれるのは嫌なので言わなかった。そもそも彼女は私が人喰いドラゴンという事を覚えているのだろうか。何だかあれから普通に接してきてるし、それはそれで嬉しいが一体彼女の中で何が起こったのだろう。

「じゃあ契約したいと思う人間はいないの？」

なぜそうなる。これは女の子同士で好きな人を聞くのと同じ要領で聞いているな。こう言う恋バナ的なノリの話は苦手だ。マドレーヌ達で十分こりごりだ。このまま彼女の話に付き合っていると面倒な事になりそうなので、話を逸らす事にした。ランスさんの話にふろうと思ったが、ふと副隊長さんが言っていた事が気になったので聞いてみる事にした。

「そう言えば副隊長さんからレイナの事を聞いたんだけど・・・」

さっ、とマリベルの顔が曇る。

「・・・レイナは今でも好きよ。でもドラゴンに会いに行く女の子って、普通じゃないじゃない？この寮で働くことになったら、もしかしたらレイナにも会えるんじゃないかと思ってたわ。・・・でも実際まだ会ってないの」

なんだ。だったら話は早い。

「だったら、行こうよ。私も付いて行くから」

「え？」

「大丈夫。顔パスだし、それにドラゴンがドラゴン舎に行くのっておかしい？」

マリベルはきょとんとしていたが、「それもそうね」と笑う。

「でも貴方ったら全然ドラゴンらしくないんですもの」

なるほど。私はドラゴンらしくないのか。だったら普通に話ができるのも頷ける。

「褒め言葉としてとっておくよ」

それにしても、やっぱりドラゴンに会いに行く女の子って普通なのか。以前の私はかなり浮いてたんだろうな。

そりゃステファノスさんが驚くわけだ。

ありがとう。それしか、言えない。

次の日、マリベルの昼休みを利用してドラゴン舎に行くことになった。

ちなみに私は疲れていたのか昼まで寝ていた。本来の仕事も今の状況じゃできないだろうし、久しぶりにぐっすり寝たので清々しく朝じゃないが昼をむかえる事が出来てすっきりだ。生物ってそれぞれ睡眠時間が違うと聞いた事がある。かの皇帝ナポレオンは一日三時間、それに比べて相対性理論で著名なアインシュタインは一日十時間寝ていたという話は有名だ。

私はきつとアインシュタイン寄りなんだろうな。惰眠を貪っていたドラゴン生活が恋しい。

「ちょっと待ちなさいよ！」

なかなか足の進まないマリベルをおいてドラゴン舎に向かっていると、急に走って来た彼女が私の腕を掴んでひきとめる。

上目使いが可愛い。

「こそこそしてるから目立つんだって。ほら早く、レイナに会いたいんでしょ？」

「それはそうだけど・・・」

「じゃあ行こう」

渋々とマリベルが私の後を付いて来るのを確認して、また歩き始めた。

入り口付近に居る警備の人は私の顔を見るとさっと顔を青ざめる。きつとここまで噂が行き届いているのだろう。挨拶するぐらい仲良かったんだけどな、こうも露骨に態度が出ると寂しい。しかも、マリベルに睨まれてもっと縮こまってしまっていた。

「マリベル・・・」

「噂で左右される人、嫌いよ」

「それをマリベルが言うか」

「・・・うるさいわね」

でも、ありがとう。と言うとマリベルは恥ずかしそうにそっぽを向いてしまった。本当に素直なんだか素直じゃないんだか。

お目当てのドラゴンの小部屋に着こうとしていたが、まだ踏ん切りが付かないのか彼女は立ち止まってしまっていた。が、暫くすると意を決したように進み出る。

小部屋を覗き込むと、レイナは寝そべってこちらに視線を向けていた。

「レイナ・・・？」

小さく呟いた彼女の声はレイナの耳に入ったらしい、下げていた首を上げてマリベルを見つめている。

「私よ、マリベルよ。もう何年も前になるから覚えてないかもしれないけど。・・・一緒に遊んだの、覚えてるかしら？」

見ているこちらがどきどきする。

暫く見守っていたが、レイナは何の反応も見せなかった。やはり覚えていなかったのだろうか。落胆してマリベルは顔を伏せてしまった。

「そうよね、覚えているはずが――」

『マリベル、マリベル、久しい、嬉しい』

レイナは顔を近づけて頬ずりをし、くるくると喉を鳴らした。

どうやら覚えていたようだ。数年前から会っていないというからもしかしたらレイナの方も少し戸惑っていたのかもしれない。最後に会ったのは小さな女の子の姿だし、当時のマリベルと一致するまで時間がかかったようだ。嬉しそうに頬ずりをする彼女を見てこちらも幸せな気分になる。

「れ、レイナ？」

「レイナはマリベルの事覚えているみたいだよ」

「わかるの？」

「ドラゴンだから」

「そう言えばそうだったわね」

思っただけどき、やっぱり私そんなにドラゴンらしくないのかな。マリベルも嬉しそうにレイナの頭を撫でたり抱きついたりしている。これをステファノスさんが見たらきつと、ドラゴンを見て驚かない女を見たのは3人目だぜ、とか何とか言うんだろうな。そう言えばマリベルって何で第四騎士隊寮で働きたいと思ったんだろう。やっぱり父親の副隊長さんがいるから？それとも好きな人の近くに少しでも居たいから？レイナに会いたいから？・・・全部、なのかもね。目の前のマリベルを見るとそう思わずにはいられない。ちょっと取っつき難い所があってプライドが高いけど、本当は優しい女の子なんだと思う。

それに噂で翻弄されている所が私に似てる気がする。だからこんなに親近感が湧くのだろうか。

「レイナ、突然会いにこなくてごめんなさい。これからは会いに来るわ！ヴィトも一緒よ！」

「え、私も？」

「当り前よ！ドラゴン舎に女の子1人で入るなんて怪しまれるわ」

・・・以前の私は怪しかったのか。かなりの頻度で行っていたぞ。

「返事は？」

「りょーかい」

気の抜けた返事をしないでちょうだい、と怒られてしまった。

「また来るわね」

『嬉しい』

マリベルはレイナの頬にキスをする。見ているこっちが恥ずかしい、が羨ましいな。人間とドラゴンの絆、か。私が思っているよりも深くて優しく、切ってもなかなか切れるようなものではないんだろう。

レイナの小部屋を離れて寮へ戻ろうとしていると、入口付近に見

慣れた姿が見える。

瞬間、先日の事が思いだされて背中がひやりとした。

背が高くて色の濃いブロンドのポニーテールに、マシュマロメロンの持ち主。胸で判断するのもどうかと思うけど、あれは間違いない。彼女たちは私に気付くと、歩み寄って来た。

「ヴィト、ちゃん？」

「・・・」

シフォン、そしてアリアーデだ。私とマリベルが一緒にいるのを見て戸惑っているようだ。顔が強張っている。いや、実際はもっと他の理由があるのだろう。

噂の事とか、ここがドラゴン舎で周りがドラゴンだらけなのに緊張しているのとか、色々。

「えっと、ヴィトちゃんが此処に居るって聞いて」

「ヴィト、噂の事なんだけど、・・・本当なの？」

シフォンに比べてアリアーデは直球に聞いてきた。そこが好きだが、変化球なしストレート過ぎてこちらがもごもごしてしまう。いつもより低くて小さな声。そしてまるで初対面の人と話すかのような雰囲気居た堪れない。具合が悪いから休んでいると言ったのに、あのまま居なくなってしまったから2人にはとても迷惑をかけた。それに城で私が一番仲が良かった友人はシフォンとアリアーデだ。きつと噂の事で同僚から何か言われたんじゃないかな。そう考えるととても申し訳ない。

特にアリアーデには、突然逃げだすと言うとても失礼な事をしてしまった。怒鳴られる覚悟は、できている。

「・・・黙っててごめん」

私の謝罪に2人は視線を伏せる。

どうしたらいいのかわからない。もともと城には戻る気はなかったから、彼女たちのこともこれっきりだと覚悟していた。きつと事実を知れば拒絶されるだろうと思っていたから。もしそうになったら怖くて真正面から受け止められない。だからあの時、逃げた。だが

実際はこうして城に戻るようになって、また会ってしまう事だって覚悟していたはずだ。避けられない。でも、どうしたらいいのかわからない。謝れば、いいのだろうか。それとも開き直ってしまえばいいのだろうか。

黙り込んでしまった私達に痺れを切らしたのか、マリベルは私の腕を掴んで胸に抱きこむと、引っ張る。彼女が彼氏にする腕の組み方だ。突然引っ張られてこけそうになったが、何とか足を踏ん張らせると、そのまま急ぎ足ですたすたと歩きだす。目の前にアリアーデが立ちはだかるとマリベルは眉尻を上げて挑戦的な表情を見せた。まるで私と初めて会った時のような高飛車な態度だ。

「あんた達、何の用？もう用がないのならそこをどいてちょうだい。邪魔よ」

「マリベル、私は」

「いいでしょ？お昼休みも残り少ないんだから、早くナツソさんの所に食べに行きましょう」

ナツソさん！！食べたい！ぜひとも食べたいが・・・！！

食欲に負けそうになるが、今はそんな事考えている場合ではない。「ちよっと待ちなさいよ。私達はヴィトに用事があるの、勝手に連れて行かないでくれない？」

アリアーデの冷たい視線がマリベルに向けられる。

「こっちはあんた達に用はないの。だいたいあんたヴィトの何なの？」

「あなたこそヴィトの何よ」

「何って・・・と、友達よ！」

「あらそう。私たちは親友よ、それもあなたよりずっと前からね。それもシフォンなんてルームメイトよ」

「それが何よ！私なんて一緒のベッドに寝てるんだから！」

「な、・・・わ、私はヴィトに服を選んであげたわ！とっても可愛らしかったんだから！見れないのが残念ね！」

「フリル付きの私のネグリジェを着たヴィトには負けるわ!!」

「そ、それは見たかったわ・・・じゃなくて、――!!」

「うっ・・・私だっていずれ――!!」

やめてー私のために争わないでー!!・・・これ一度言ってみたかったんだよね。というか私男に産まれて来たかったなーそうしたらハーレム状態だよ。・・・ふざけてる場合じゃないか。ごめん。目の前の事態から現実逃避したかったのだよ。だって怖い、怖すぎる。今なら修羅場の男性の気持ちかわかる。内容は嬉し恥ずかしいんだけど、大声で言わないでほしい。・・・何かもう嫌だ。自分のせいで友達が喧嘩するのは見たくないのに、怒鳴り合うように言い合う2人が怖くてなかなか止めに入れない。

小さなため息をついていたら、近くで鼻のすする音が聞こえると思えばシフォンの方を見ると、ぎよっとした。

「ちよと、2人とも落ち着いて、シフォンが泣いてる」

彼女たちの剣幕や怒鳴り声が怖かったのだろうか。慌てて近寄っておろおろしていると、嗚咽を漏らしながらも彼女は言う。

「・・・喧嘩は、やだよー・・・ヴィ、ヴィトちゃんも突然いなくなつて、どらごんとか噂が流れてて、私どうすればいいかもわからないよお・・・」

「シフォン、泣かないで」

その言葉に胸が締め付けられながらも、ポケットからハンカチを取り出すとはちみつ色の瞳からぼろぼろと零れる涙を拭う。

「う、えっ、ヴィトちゃん」

「ほら、鼻かんでいいからずぴー」

「ありが、とお」

しまった、ハンカチがもうない。未だぼろぼろと流れる涙を拭うものが無くなつて慌てていると、ずっと淡い色のハンカチがシフォンの目元を抑えた。

「・・・ごめんなさいね、少しかつとなっちゃったわ。許して」

「うつ、うつ・・・」

今度はアリアーデが涙を拭いて鼻をかんであげていた。こう見るとお母さんみたいだ。面倒見が良いのは相変わらずだな。

暫くするとどうやら涙は止まったようで、二人も睨み合うのを止めていたから助かった。

冷静になったのか、アリアーデは落ち着いた少し悲しそうな表情で私の方を向いた。

「私はただ噂が本当かどうか、知りたかったの。だから会いに来た。貴方が・・・あの、ドラゴンだって本当は信じられないし、もしそうだとしたら・・・正直、怖いわ」

そうだろう。今まで友達だと思っていた人があろうことか人間を食べるドラゴンだなんて誰が思う？とても信じられるものじゃないし、今までの関係が一瞬にして崩壊するのは目に見えている。

「でも今、貴方に会って気付いたの、悩んでたのが馬鹿らしいって」拍子抜けも良い所よ、と。

「噂を聞いてね、・・・ヴィトが変わってしまったんじゃないかって、恐ろしい生物になってるんじゃないかって、凄く怖かったの。でも噂に左右されて貴方に対する態度が変わってしまったのは私の方だったわ。この間は、ごめんなさい。私があんな態度をとってしまったから、ヴィトは、――」

逃げた。

そうだ。アリアーデのあの瞳に耐えられなくて、周りの好奇心な視線にも耐えられなくて私は城から逃げ出した。

「教えてヴィト、あなたは妹を”助けて”くれたのでしょ？」
妹さんを助けた？

アリアーデの妹さんの話は随分前に聞いている。それについて彼女が悩んでいたのも知っている。そして私が関わっているのも。だが妹さんを助けた話は言っていない。

どうして行き成りそんな話になるのかわからず、私は目を瞬かせ

た。

「その後、妹の調子が良い時にもう一度聞いてみたの、そうしたら笑顔で言うのよ『ドラゴンが、助けてくれた』って。今までと違う言葉に驚いたわ。それにあんな笑顔久しぶりに見た」

「でも、それは」

「妹がそう言うんだもの、本当の事に違いないわ。私は妹を信じる。そして、――貴方も信じたいの」

アリアーデはいつもの笑顔で笑う。

「・・・貴方は相変わらず何を考えているのかわからなくて、でも嘘を付くのが案外下手で、誰にでも優しくして、親身になって相談にも乗ってくれた。妹も助けてくれた。それに、人一倍シフォンには甘いもの。ヴィトは私の知ってるヴィトで、ドラゴンでも、人間でもそれは変わらないんだってね、気付いたの」

いかん、不覚にもうるっとくる。

「今思えば少し常識外れな所とかあったものの、ドラゴンだろうと、他の生物だろうと、おかしくないわよね。それなのに私達が態度を変えるのもおかしい、貴方を傷つけてしまうわ。だからこれからも今まで通りだと、・・・その、嬉しい」

「アリアーデ・・・ありがとう」

私は素晴らしい友達を持つことができて幸せだ。こんなに幸せな事はない。虐げられてもおかしくないのに、受けて入れくれる。拒絶されてもおかしくないのに、優しく笑いかけてくれる。

きつとアリアーデもたくさん悩んだんだ。そして本当かどうか見極めようと私に会いに来た。それだけでも嬉しいのに、今まで通りと言ってくれる。こんなに嬉しい事は無い。

・・・いかん、泣きそう。でももうハンカチは無いんだ。

するとすつと横からピンク色のフリルがたくさん付いたハンカチが差し出される。マリベルがそっぽを向きながらハンカチを私に差し出していた。その好意が嬉しくてもっと泣きそうになった。

「でも二人には、迷惑をかけると思う」

「同僚の子とかね？確かにこの数日でいろんな人が聞いてきたわ。でもそんな事でヴィトと縁を切るつもりはこれっぽっちもないわ」「私も平気だよ！ヴィトちゃんとまた一緒にお仕事したいもん！」仕事は無理だと思う。でもその気持ちが嬉しかった。

「それにヴィトったら全然ドラゴンらしくないんだもの」

アリアーデは笑いながらマリベルと同じことを言う。そんなにドラゴンらしくない？嬉しいのやら嬉しくないのやら。でも今はとても嬉しかった。

「ヴィトちゃんは、私を、た、食べちゃったりしないよね？」

「食べないよ。皆、食べない」

食べるものか。頼まれても食べない。絶対に！

シフォンは安心したように笑った。もしかして食べるとか食べないとかその辺りを気にしていたのかな。確かに人喰いドラゴンとは言われてるけどさ、大事な友人は食べたりはしない。正直その事で矛盾だらけの自分にいつもため息をつきたくなるけど、私はこうやってしか生きていけないんだ。今更それでよく悩んでも答えなんてないんだから。

「それと、つかかってしまっでごめんなさい」

アリアーデがマリベルに視線を向ける。シフォンが「嫉妬してたんだよね」と言うときアリアーデは顔を赤くさせた。こんな私でも、愛されると、思っても良いのかな。

「・・・ふん、もう別にいいわよ」

マリベルは何だか不服そうだ。しかし先程の言い合いで本音が聞けたような気がするし、ハンカチだってかしてくれた。今度洗って返そう。

彼女はもう一度私の腕を掴むと、ぐいぐい引っ張る。

「用事が済んだのならもう行くわよ。昼休み過ぎちゃうじゃない」
ナッソさんのご飯！それは譲れない！が、2人とここで別れてし

まうのも寂しい気がする。そんな私に気付いたのか、マリベルは私とアリアーデ、シフォンの顔を見て大きなため息をついた。

「・・・別に、あんた達も付いてきてもいいとか、私は絶対言わないからね！」

ツンデレですね、わかります。

ひとりですんずんと歩き出したマリベルの後姿が微笑ましい。

「彼女も案外良い子なのね。本当、噂は当てにならないわ」

アリアーデの言葉に私も笑いながら頷いた。

神巫様と一緒に。三百年前の日本人。召喚の所以。

ティモの言付けの事をすっかり忘れていた。

だが神巫様に会うためには手続きとやらしなければいけない。どうすればいいんだと悩んでいたら、その本人から呼び出しがかかりタイミングが良すぎるのに気味が悪くなる。

それにまたあの変な部屋に入るのは気が引ける。いつ入ってもなぜ服が濡れないのか不思議でならない。

日も沈んだ時間、私は神巫様の部屋に訪れた。相変わらず部屋の中央に佇んでおり、本当に髪の毛がどうなってるのか知りたい。いつ見ても血の通っていない真っ白な顔。綺麗だがどこか冷たい笑顔で私を出迎えてくれた。

「よく来ましたね」

「・・・呼んだのは神巫様ですけど」

おいでおいで、と手招きをされたので渋々近くに寄った。二メートルこれが限界の距離だ。これ以上近づけは私の脳内の危険信号が赤になる。ちなみに今は黄色だ。警戒心むき出しの私に、仕方ありませんねえ、と笑う。

「城内は貴方の話でもちきりだそうです。正体を自ら明かすなんて思いきった事をしましたねえ、ああ、悪いと言っているんじゃないんです。ただ貴方にしては珍しいと思っただけです。ですよ。ですよ。そうですね。」

相変わらずの自己完結。何が珍しいんですか、と聞けば意味深な笑みを浮かべた。

「”人間の時の貴方”はいかにして目立たず空気のように生きるか

を主義にしている人みたいですから、ふふふ」

「・・・どうして、そんなことわかるんですか・・・！」

心臓をわしずかみにされた気分だ。思わず声を荒げてしまう。

私は神巫様に何も言っていない。ドラゴンのことも、ましてや人間の記憶のことだってティモにしか言っていないはずだ。なぜそれを知っている。私にもあまり思いだせない曖昧な記憶なのに、・・・どうしてそれを、知ってるの？

「いけませんねえ、僕はどうやら他人を警戒させてしまう癖があるようです。ただ本当の事を言っているだけなのに。そう思いませんか？でも貴方にとっては予想外だったようですね、驚かせてすみません。・・・もしかして人間の記憶はとても曖昧なのでは？」

何も言う事ができなかった。全て、何もかも見透かされているように居心地が悪い。

やっぱり会いに来るんじゃないかった！

神巫様は私の言葉なんて待っていない様子で、ひとりで喋り続ける。

「肯定とおとりします。そうですか、でしたら混乱するのも無理はない、ですが領けます。不思議に思っていたのですよ。人間の記憶を持ちながらドラゴンとして何故生きていけるのかと。きっと人間の記憶が曖昧だからなんですね、でなければ貴方はきっと今頃――狂って死んでしまっているでしょうから」

「狂、う？」

「そうですよ。違う生物の記憶が二つ交じり合う事は普通ありえませんが。そんなことが本当に起きてしまえば、思考やモラルの矛盾だらけで何を信じたら良いか分からず果てには発狂してしまいます。だから貴方の存在はとても不思議でした」

確かに矛盾している所はたくさんある。それについて悩んだり考えたりもしてきた。でも発狂するほどわからなくなってしまうことはなかったはずだ。それは、人間の記憶が曖昧だから？もし曖昧ではなくドラゴンとして自我があったのなら、私は今頃発狂して死ん

でいたと言うのだろうか。

信じられない、考えられない。考えたくも無い。

「そう考えれば、人間の記憶を全て思いだした時、それが貴方の”終わり”だと思ってもいいでしょう」

死刑を宣告された気分だ。

終わって私の人生が終わってしまうと言う事だろうか、それとも違う意味での終わりなのだろうか。わからない。

神巫様と会うといつもこうだ。わからない事だらけで気分が悪くなる。

「大丈夫ですよ。そんなに深刻に悩まないでください。貴方は僕にとってイレギュラーな存在ですから何が起こってもおかしくはない。そうですね、貴方方で言うチートやテンプレのようなものですかね、なんとかなるんじゃないですか？そうですね、ええ、きっとそうです」

メタ発言したぞこの神巫様。そしていつもの如く投げやりすぎる。にっこりと笑った顔なんてお茶目すぎる。

「それは、物語上の事ですし実際あるなんて、・・・ないでしょう。そもそもどうして神巫様がそのような単語を知ってるんですか」

「僕は知識の媒体となる何かがあれば何でも知ることができるんです。今回で言う媒体は貴方、・・・と言いたい所なんです、以前教えてもらったのですよ」

以前ってなんだ。

「それに火のない所では煙は立ちません。この国では以前召喚魔法が行われていましたし。その方々は知識を国に貢献したものも居れば、戦争に手助けしてくれた英雄も居ます。家族を持った人も、普通に平和に暮らし元の世界へ帰った方もいます。きっとその方が貴方の世界で物語でも書いたのでしょう。それに召喚された方の中で王族と結ばれた方や騎士になった方もいます。そう言う物語、貴方の世界であったのではないですか？」

ある。特に兄がとても好きだった記憶がある。妄想ネタを発言す

るぐらい。

しかしなんだか胡散臭い。が、召喚魔法が行われていたのは本当らしいし、神巫様の言う事は強ち嘘ではないのかもしれない。だがそんな事そう簡単に信じられるはずはない。それを証明する人間は、もう既にいないのだから。

「そうですね、貴方は確か日本人でしたね。以前桃色のアースドラゴンに従えた英雄も日本人の青年でした。戦争に勝利を導いた後元の世界へ戻られてしまいました。とても勇敢な人で、面白い方でしたよ」

もう300年ほど前になると言うのに、つい先日 of 事のような顔で言うものだから、本当にこの人は長い年月を生きているんだと思わせる。綺麗だけど冷たい表情が少しだけ穏やかな笑顔になっていくのに気付いて、その人が何かしら神巫様にとって影響も与えたのだらうとも。

それにしてもこちらは何も言わないのによくペラペラと喋るものだ。お喋り好きな生きる歴史だ。

「その方に、教えてもらったんですね」

「ええ、それに彼はアースドラゴンの契約者として戦争に勝利を導くのにまさにふさわしい適任者でしたよ」

召還されて国の聖獣であるアースドラゴンと契約をして国を救い、潔く自分の世界に還るなんて、それはどこのテンプレ勇者だ。それにそんな言葉を知っているなんてただものじゃないな。私は兄からの受け売りで知っているが、ごく普通の一般人だったのなら知らないだろう。

・・・ちょっと待てよ。元の世界に戻ったという事は、契約したアースドラゴンはどうしたのだろう。

「そのアースドラゴンはどうしたんですか？」

「猫の姿になって青年と一緒に付いて行きましたよ」

忠犬ならぬ忠ドラゴンだな。自分の住んでいた世界を捨ててまで

もその人間に付いていったのか。

返還魔法があるのならば、もしかしたら人間の世界に帰れるかもしれない。だが自分がどの誰かもわからないし、今の私はドラゴンだ。帰ろうと思っても帰れないだろう。

「ふふふ、もしかや召還魔法に興味がおありですか？そうですよ、もしかしたら貴方は何かに巻き込まれてこの世界に落とされたのかもしれない。人間の記憶だけ、というのは過去に例がなくとても珍しいですから。しかし、こう言うのも心がとても痛むのですが、残念ながら解決策はありません」

そんななにこやかに言われても困る。そして全然痛そうに見えないぞ。

「その召還魔法、300年程前に行われていたのなら、今でもされていてもおかしくはないと思うんですけど」

流行か何かだったのだろうか。だが流行だからといってそうぽんぽんと召還されても困りものだ。

「頻繁に行われていようとされていますが、誰もができるわけではありません。ある本が必要なのです」

「それが無くなったから召還魔法自体が廃れた、と？無くなったって・・・それって大変なことなんじゃないですか」

それを悪用する人間が手に入れたのなら、その本の力がどこまでのものかは知らないが、たくさん人間を召還してそれこそ大陸中を混乱に陥れるようなことになるんじゃないか。

「そうですね、でも使い方を知っているのは私とごく数人。それもその本はその英雄が元の世界に戻ったのと同じ時期に無くなりましたから、もしかやその方が持っていたのかもしれないですね」

全然興味がなさそうだ。その本をもしその英雄が持ち帰ったというのならもう召還魔法は使えないだろう。

その人は何のためにその本を持ち帰ったのか、そんなの私が知る由も無い。

でも、繋がりを見つけた。

私の世界はこの世界しかない、人間の記憶の世界も異世界のものだと感じていたが、それがこのものか、本当の記憶なのかわからなかった。だけど私と同じ日本人が召喚されていると言うのなら、私のこの人間の記憶もその世界の記憶なんじゃないかと考えずにはられない。

少しずつ、答えが見えてきそうな気がするんだ。

悩んでも考えてもわからなかったから放棄していたのに、今になって何かが少しずつ見えてくる。知りたいけど、少し怖い気もする。そして、戸惑っている。

そんなとき、後ろから凜とした可愛らしい女の子の声が聞こえてきた。

「神巫様、そろそろお浄めのお時間です」

「おや、もうそんな時間ですか？」

いつのまに背後にいたのだろうか、それともずっと後ろにいたのだろうか、神巫様と同じ色の髪を持った少女が後ろで佇んでいた。露出の少ない一枚布でできたシンプルな衣装を着ており、髪飾りや腕輪などの類をたくさんつけている。一見踊り子とも見えるが、清楚な感じからしてこの少女の方が神巫様ならぬ巫女様だ。

「彼女は僕の後継者兼世話係ですよ。僕はここから動く事ができませんからね、大抵のことは彼女にしてもらってるんです」

「は、はじめましてヴィト様。私はリイヤと申します」

外界の穢れを知らないような純粹無垢な笑顔に、思わず見惚れてしまっていた。

そんな私に神巫様はこそつと耳打ちをする。

「リイヤはこの城から出た事がないのですよ。それも生まれてすぐに私の後継者と言うことが決まっていますね、同い年だそうですから仲良くしてやってくれませんか」

神巫様が箱入り娘を気遣う親のような事を言ってきた。これこそ天変地異の前触れだろうか、そう考えていると全てお見通しなのか

「酷いですねえ」と呟く。

女の子は小走りで私に近づくと、頬を赤く染めながら言う。

「あ、あの、お噂は耳にしております。お話も神巫様から聞いております。・・・そ、尊敬してます！握手してください！」

「え？」

なんだこの子は。

大物スターに会ったようなノリで私に握手を求めてくる。雪のように真っ白な手だ。きらきらと期待に満ちた彼女の気持ちを無碍にする事はできなくて、小さく握手をすると「えへへ」と彼女は笑う。なにこれ可愛い。マリベルが華やかな可愛らしさでシフォンが素朴で純粋な可愛さだとすると、彼女は愛くるしい可愛さだ。可愛にもいろんな可愛いがあるんだな、と私は悟ったよ。

それにしても、神巫様があることないことを言っていないか心配だ。「リイヤ、先に準備の方にとりかかっているってください。僕はもう少し話すことがありますので」

「は、はい！」

どじっこ属性とみた。服に足を躓かせながらも部屋から出て行った。ちらちらこちらを振り返りながらはにかんで頭を下げていたのが可愛かった。

「お浄めって何をしてるんですか？」

「僕をここに縛り付ける楔を強化するようなものですよ。最近では楔の力が弱まっていて死にそうなんです」

「・・・まさか」

こんなに元氣ぴんぴんなのに。

「もともと僕は死んでも同然なんですけどね」

「死んでいるのなら、今こうして話すことはできないじゃないですか」

「禁断の魔術を使って不老の身を得ているんです。死んでも同然。でなければただの人間が1000年以上も生きているはずがないで

しょう？ふふふ、驚きました？」

「・・・それはそうですね」

「そしてこの世でそれを使ったのは僕と魔女、恐らく近い未来で起こる事件の元凶になるもうひとり、です」

もうひとり？もしかして神巫様は何か未来を詠んだのだろうか。

「魔女と言え、ふふふ、すっかり忘れていましたが、ティモテアノリスは何と言っていましたか？」

聞いた事のない名前だが、もしかしたらティモの事だろうか。彼女もティモテアと呟いていたし、自分の名前すら忘れていたとかそんなこと・・・ありえるかも。

「その様子だと知ってるように思えますけど」

「まさか。まあ大体の察しは付きますけどね。僕は万能じゃないですからお聞きしたいのですよ」

まだそれを引きずっているのか。万能じゃないと言われたのが余程気に障ったらしい。神巫様のくせに心狭いぞー！

「敵は他に居るかもしれない、いずれ大陸中を大混乱に陥れる何かが起こるかもしれない、と」

「ふむ、・・・やはりそうですね」

やはりなら聞くなよ。と言いたところだが、珍しく神巫様は神妙な面持ちで悩んでいる様子だ。銀色の瞳は閉じられていて、こうしてみれば一体の人形に見えなくもない。人間とは思えないほどの美しさ、そしてどこか儂い雰囲気漂わせている。・・・この性格じゃなければ。

「そろそろ潮時なんですよね・・・」

あんなに何も聞いていないのにぺらぺらと喋っていたのが嘘のように、黙ってしまった。だいたい、話相手がいないのかわからないけど、神巫様って喋りすぎだと思う。そのくせして曖昧にしか答えてくれない所があるから、いつも空気を掴んでいるような気分だ。捕虜とかになったら簡単に味方の弱点教えちゃいそうだよ。まるでイタリアの兵隊だ。

大陸中を大混乱に陥れる何か、か。大陸中を巻き込んだ大戦争みたなものが勃発するのだろうか。

神巫様は暫く考え込んでいたが、「まあいいでしょう」と小さく呟いていつもの胡散臭い表情に戻った。そして2メートルは離れているというのに、何も履いていない足を泉から出してぺたりと床につける。そのまま数歩歩いて、呆然としている私の腕を掴んだ。

——え？

その場所から動けないと思い込んでいたからそれは卑怯だ。吃驚した。少しだけなら動けるのか、不覚だ。

そしてにんまりと笑う。

「では最後に、貴方に契約の仕方を教えて差し上げましょう」

「いりません！・・・それにもう時間じゃなかったんですか？」

行き成りなにを言いだすんだこの人は！

神巫様は即答した私が面白かったのか笑っている。私は至極真面目なんだけど。

「まだ時間は大丈夫ですよ、それに知っていても、いいと思うのですよ」

「ですが、私には関係ないと——」

「本当にそう思ってますか？心の底から、本当にそう思ってるんですか？」

そう言われれば嘘になる。契約の事を考えた事がない事はない。考えないようにしていると言うのが本音だ。

神巫様はぐぐつと顔を近づけてくる。銀色の瞳に私が映っている。人間の私の姿は現れず、村娘の姿がそこに居るだけだ。

「少しでもこの国を守りたいと言う思いがあるのなら、僕たちにとっては喜ばしいことです。そうですね？そうですよ。喜ばしいことではないわけがありません」

私の脳内では危険信号が点滅中。

小さい子供のくせして、掴まれた腕は成人男性のような力強いものだった。いや、そんなものじゃない。力の限りその手に抗おうと

しても、びくりとも動かない。
うぐぐ。

「・・・わかりました。聞いておくだけ聞いておきます」
でも絶対しないから！！

「懸命な判断です」

にっこりと笑う神巫様に私はため息をつくばかりだ。

本当に、神巫様と話すのは精神的に疲れる。

あの不思議な部屋を早々に抜け出して私は廊下を歩いていた。時間帯が夜だから人はいないから助かる。こんな状態で後ろ指さされこそそそと内緒話をされるのは勘弁だ。

神巫様が時間帯を指定したのは、人が少ないのを見計らっていたからだろうか。案外優しい所もあるんだな、と思いかけて慌てて首を振る。

いやいやいや、そんなわけがない、はやくマリベルの所へ戻ろう。そもそもあの人はからかうのが好きだし一方通行に喋ってばっかりだし迷惑をか——・・・え？

——頭に、大きな衝撃。

突然、目の前が真っ暗になった。

鮮明な夢の最中拉致事件勃発。私の繋がり。（前書き）

※メタ発言注意報。

鮮明な夢の最中拉致事件勃発。私の繋がり。

ふたつ、ユメ。

「異世界トリップと言うものは主人公が危険な状況に陥ると起こるのだよ」

「それでの行動か」

「今まさに実践しようとして取りあえず窓から飛び降りてみようと思ったのだが・・・やはり、無理か？」

「無理だ」

「では王道パターンの大型トラックにひかれるのなんてどうだろうか。うむ、これならいける気がする」

「だから死ぬ気か！そこまでして異世界に行きたいの？」

「行きたいとも！異世界にいれば不思議な力が無償で手に入り可愛い女の子からは無条件にモテモテだぞ？はたまた世界を救うという大役を背負い、平凡な自分にはそんな無謀だと葛藤しながら周りとの信頼・愛をはぐくんでいく・・・ああ、素晴らしいぞ異世界よ！俺も連れて行ってくれ！！」

「それはただの逃げだ。都合の良い世界に逃げ込んでいるにすぎないよ」

「ううむ。夢をばっさりと切りおったな・・・クールなやつめ」

「まあでも、逃げて自分が満足するのであれば、それはそれで私は良いと思うけどね」

「ん？」

「無理して嫌な事に向き合う必要なんてないと思うよ。嫌だったらそれから逃げればいいし、避けて通ればいい。克服なんてしなくていい」

「ああ、お前はあれか。偽善者でも許せるタイプか」

「偽善者か・・・そうかもね。それがたとえ嘘でも、それで誰かが救えるのなら私はそれでいいと思う。無理して現実を突きつけて、その人を不幸にするよりも、夢のぬるま湯につかって幸せでいる方が良い。見ている方も、本人もほっと安心するからね」

「肯定されるとむずかゆいな、熱でもあるのか」

「失礼な。お兄ちゃんの恥ずかしい妄想ネタにちゃんと答えてあげてるんだから、そんな事言うとプリン全部食べるよ」

「***！俺のプリンまた勝手に食べてるのか！」

「プリンごときで泣くな」

「ごときとは何だごときとは！プリンは俺にとって日々の生活を潤すための食べ物なんだぞ！」

「はいはい、じゃあ食べかけだけど返すよ」

「た、食べかけだど？ま、まさかこれが俗に言う間接ちゅー・・・」

「やっぱりお兄ちゃんはダメ。***、変わりに食べる？」

「ええー、姉ちゃんの食べかけ？」

「・・・可愛くない」

「姉ちゃんこそ、その長ったらしい前髪切ったら？それにコンタクトに変えれば少しは可愛くなると思うぞ？顔はおれに似てるんだし」

「***こそ中学生なんだから金髪は止めなさい。校則違反。あとナルシスト」

「成績良いから何も言われないんだよ。同じ姉弟なのにどうしてこうもできが悪いのかおれもさっぱり不思議だ」

「私の頭の良さは全部***が持っていたんじゃないの。それで、プリンいるの？いないの？」

「いる」

「妹弟たちよ！俺は目にいれても痛くない程お前たちを可愛いと思うぞ！！」

「お兄ちゃんは黙って」「兄ちゃんは黙ってて」

「・・・いたっ」

油断してた。

思いつきり後頭部を殴られたらしく、頭に鈍い鈍痛がする。それに体中が軋む。

それにしても、また夢を見た。最近変な夢ばかり見る。私には兄と弟が居て、兄の妄想ネタに付きあったり、プリンのお話をしたり他愛も無い話をしている夢。もしかしたら人間の記憶かもしれない。だがこうもはっきりと夢で見ると不思議だ。何だか懐かしくも感じ、その記憶に新鮮さも覚える。名前の部分はノイズが入ったように聞こえなかったし、容姿もおぼろげでもう思いだせない。――お兄ちゃん、私は貴方の夢見る異世界なんちゃらと言うやつに陥っているのかもしれない。羨ましいと思うなよ。私は毎日必死で生きているんだから。

――駄目だ。人間の記憶を思い出すのは一瞬、それ以降は雲がかったかのように奥に引っ込んでしまう。

まるで何かがこれ以上思いたしてはいけないと、制御しているかのようなのだ。

仕方ないので辺りを見渡すことにする。

「ここ、は」

鉄格子が周りを囲んでいた。立ち上がると頭すれすれに天井がある。どうやら私は檻の中に閉じ込められているようだ。それも鳥の籠のような、悪趣味の装飾も施されてる。まるで見せものにされている鳥の気分だ。それも豪華な装飾のされた部屋のためか、観賞用の珍しい鳥。見せものじゃないんだけど。

「おお、目覚めたか？」

部屋に居たのか、中年の男が近寄って来た。髪は辛うじてあるがでっぷりとした腹にどれだけお金をつぎ込んでいるんだと思わせる服装に指輪やネックレスの数々。典型的な私腹を肥やしたお貴族様という感じがする。中年の男の後ろにはフードを被った男たちが数人見張っているように佇んでいる。まるでこれから黒魔術の儀式をするかのような格好だ。まさか私生贄？なわけないよね。・・・ないよね？

「二日も目覚めないから死んでるかと思ったぞ」

二日も気を失っていたのか、そりゃ体中が軋むわな。なんでそんなに眠ってたんだろう、打ちどころが悪かった、とか？夢見たのもそのせいかな。

「・・・誰、ですか？」

「私の名はトマーゾ・ソメル、アルヴィナ国の中枢を担うひとりだ。ソメル家は王に対して発言力があるんだぞ、凄いだろう」

そう言えば王様にはまだ会っていない。私なんかが会えるわけないと思うけどさ。確か病に臥せているんだったかな。だからあの王子が色々と指揮を取っているんだと、聞いた。

それにしてもアルヴィナ国の中枢を担う人か、側近と言う事かな。だがそんな人が一体何の用だろう。

「少々手荒なまねをしてしまったが、こうでもしないと素直に話をしてくれないと思ってね」

うん、頭が痛い。かなり痛い。

「私と契約をしてくれ」

契約してないんだろう？と何処で聞いたのかわからないが自信たっぷりに言われた。

・・・まさかそのために私を誘拐監禁していると言うのか。ふぎけるなよ。こんなに頭が痛い思いをしてそれか！まさか、欲しいのは富と名声？・・・こう言う人もいるのか。最近は優しい友人にしか会っていないからこんな人もいると言う事をすっかり忘れていた。世の中やっぱり甘くないんだな・・・肝に銘じよう。

だが富と名声を手に入れるために私を利用するのは腹立たしい。それに、この国の人ならアースドラゴンと契約したら何をしなければいけないのかわかっているはずだ。剣も持った事のない、まめも知らない手で、戦争に行けると言うのか。自分ことしか考えていない、そんな気がする。と言うのを、戦争も知らない、自分の事しか考えていない私が言うのもなんだけど。

少し試してみよう。

「貴方は国のために戦う覚悟がありますか？」

「は？」

質問をしてくるとは思わなかったのだろう、男は頓狂な声を出す。駄目だな、これは。

「私と共に戦地に赴き、数多の人間を殺し、英雄になる覚悟がありますか？」

「そ、それはもちろんだ！」

本当に？声が裏返っているけど。

「では、——死ぬ覚悟は、おありですか？」

男はぐっと押し黙った。

戦うという事は多少なりともわかっていたようだが、死ぬという事は想定外だったようだ。

「戦争に行くと言う事は死ぬ覚悟、国のために命をかける覚悟がなければなりません。あなたみたいな毎日を不自由なく暮らし、富と名誉しか考えていない人には、私の相手は務まりません」

もともと誰かと契約する気なんてこれっぽっちもない。

「残念ですが、不合格です」

「な、なんだと・・・」

話になりませんね、と鼻で笑うと男の顔が茹でタコみたいになっ赤になっっていく。

調子に乗って言いすぎたかもしれない。ごめんよおじさん、頭が痛くてつい。

というかこれはお決まりの拉致パターンだね。それで誰が助けにきてくれるの？え？だってこう言うのって大抵ヒーローが助けに来てくれてそこから恋が発展するんだよね。わかります。・・・とは言ったものの、言っちゃ悪いがこんな小さな檻、簡単に破壊することができる。私を誰だと思っているんだ。ヒーローに恋焦がれて泣いて待つほど私はヒロイン気質じゃないのだよ。

私が檻に手を伸ばすと、男は怒鳴った。

「止めておいた方が良いぞ！！それは魔法で高圧な電流が流れているからな！そう簡単に逃がしは——」

男が言い終わる前に私は鉄格子を両手で掴む。びりびりと電流が体中に流れるが肌を鱗に全部変化させて体中には入ってこれないようにする。そして思いっきり力を込めてぐにやりと鉄格子を曲げた。私って何だか勇ましい。

よいしょ、と檻の中から出ると、男は目をこれでもかと言うぐらいにかつと見開いて口を金魚みたいになくばくとさせていた。

「これ、改良した方がいですよ」

私を捕まえるのならもっと考えた方が良い。にっこり笑って言う
と男は顔を真っ赤にさせて叫んだ。

「と、捕えろ！！絶対に逃がすんじゃない！！」

——え、うそ。

傍に控えていたフードを被った男達が一斉に私に飛びかかってくる。が、その前にローブを着た数人の男達が、仲間の数人を攻撃し

始めたのに気付いて仲間割れかと思っていたがどうやら違うらしい。
「お前達！何をやっておるんだ！！」

何が起こっているのか私も理解できず、でもこの機会に逃げたら良いんじゃないかと隙を見計らっていると、突然中年男が怒鳴り出した。

「ええい！もういい私がやる！！」

痺れを切らして床に転がった剣を取って私に近寄ってくる。

——え、まって。やるって殺すってこと？ま、まてまて！
殺しちゃったら契約どころじゃなくなるよ！何考えてるのこの人！
冷静な判断を取る事ができないのか、中年男は剣を振りかぶる。

・・・だが、その剣は一向に私に振り下ろされることはなかった。
どす、と鈍い音がして男は私の前で力尽きるように倒れた。一瞬
白目向いたからマジでビビったよ。怖い。

男の後ろにはフードを被った先程の男集のひとりが剣の柄の部分
をこちらに向けて立っていた。どうやら切らずにみね打ちのような
ものをしたらしい。

そしてその人は何のためらいも無く男の上を踏み歩いてくる。一
応この人お偉いさんらしいんだけど、大丈夫なの。

「ヴィト」

こちらに歩いて来ながらフードを外したその顔は、とても見知った顔だった。

「隊長さん・・・」

隊長さんは私の前で止まらず、ぶつかるときにぎゅっ、と私を抱きしめる。とても力強く息ができない。服の上からでも早い鼓動が伝わる。さっき他の男たちを相手にしていたからか、少し息も切れているようだ。耳元に吐息がかかってくすぐったい。

「危ない事しないで、・・・心配した」

「電流の事ですか？大丈夫です」

「その事もだけど」

うん、一体他の危ない事って何だろう。思いつかないや。他には中年の男と言いつつ合ったのとか鉄格子曲げたのとかしかない。

さてよ、この格好で中年男の後ろに居たってことは、まさかずっと見られてた？・・・恥ずかしすぎる。

「でも、良かった」

隊長さんはふわりと笑う。

私は良くない！最初から居たのなら言ってくれば良かったのになんて。きつとタイミングを伺ってたんだろうな。私は檻の中にいたし、高圧な電流が流れていたらそりゃ手は出せないだろう。

暫くすると周りにはもう片が付いたのか、男達は取り押さえられていた。ローブを取り去った、これまた見知った顔を見て驚く。

「もしかしてランスさんたちですか？」

隊長さんは頷く。

「出よう」

「わっ・・・」

軽々と私を抱き上げると、歩きだす。意外と力持ちで驚いた、どころか突然の事に固まってしまった。

——ちょっと待って下さい。私は助け出す専門なんです！特に隊長さんを助け出す専門なんです！そこは譲れない！！それに今までもヴィザンヌ山に居た時もひとりの時でも何とかできてたから、こうやって他人を頼りにするとか、助け出されるのも初めてで、何と言うか、抱き上げるとか女の子らしい扱いをされるのも初めてで。

正直、戸惑っていた。

どうにかおろしてもらおうと、あたふたする。もしかしてまだ危ないと思っているのだろうか。

「隊長さん、大丈夫ですから。私を誰だと思ってるんですか」

——このくらいなら1人でも乗りきって見せる自信があ——

「俺の大事な、女の子」

・

・

・

なんですと！？

それはもう火が噴くほど顔が真っ赤になった。恥ずかしくて、真っ赤になった顔を見られたくなくて隊長さんの肩に顔を埋める。顔が熱い。

「・・・それ、卑怯です」

隊長さんは何時ものようにくすくすと笑うだけだ。

ドラゴンでもなく、人間でもなく。女の子として扱ってくれるのは嬉しい。が、恥ずかしい。

というか隊長さんって私の事ドラゴンだから好きなんじゃないの？
そうだよ？ そうだと言ってよ！

隊長さんと部屋で気まぐれ待機していると、片がついたのかランズさんとステファノスさんが戻ってきた。副隊長さんは今回の事を報告しに行っている。隊長さんじゃなくていいのかと思ったが、こ

う言うのは大抵副隊長さんが行くそうだと。まあ、少し無口な所があるから、適材適所と言うやつだろう。

今回の事件は、どうやら臣下のひとり那不自然な動きをしてたらしく、見張っていると行方不明になってた私が捕まえられていたらしい。

二日も行方不明って、人間だったら耐えられないかもしれない、私で良かった。・・・のかどうかはわからないが。取りあえず無事に帰れて良かったよ。それに二日も捕えられていたらしいが、實際目が覚めてからすぐに事件の事が終わってしまったため、実感がわからない。

そして私はどこからともなく現れたシフォンが抱きつかれている。胸が邪魔で抱きつきにくそうだと。だが私の胸はまな板なので丁度いいだろう。いかん、またスケベ親父みたいな思考になっていた。ちなみにアリアーデもいる。

「ヴィトちゃん、うゑ、どこ行つてたのお・・・！」

また泣かせてしまった。

私はぐっすり夢の中に居たらしく気付かなかったんだ。ごめん。「心配したのよ。あなた意外とデリケートな所があるからまた何か悩んで居なくなつたんじゃないかって」

「ご、ごめん」

本当に申し訳ない。謝るしか今の私にはできない。

そんなとき、扉が勢いよく開かれて誰かが入つて来た。

「ヴィト！！あなたとだけ私を心配させれば――！！！」

突然部屋に流れ込むように入つて来たのはマリベルだ。私の所まで大股で歩くと、釣り上つた瞳で睨みつけられる。心なしか、その瞳が潤んでるような気がする。心配してくれたのだろうか。しかし部屋にランスさんが居るのに気付いたのか、はっ、とした表情にな

って急に大人しくなった。恋する乙女は健在だ。

「と、とにかく。何かあったのならちゃんと言いなさいよ!」

言うどころか監禁されてたんだよ。と言えはそんなの知らないわよ!と返されてしまった。そんな。

あの男の人が私が目覚めてから話しかけてくれたからいいもの、強制手段をとるような人間だったら今頃とんでもない事になっていたかもしれないし、遠くの地に売り飛ばされていたっておかしうはなかったはずだ。本当に話をする人で良かった。

「マリベルさんはヴィトさんが居ない事にいち早く気付いてくれたんだ」

ランスさんに微笑まれ、マリベルは顔を真っ赤にさせている。ほほう。確かに今の私はマリベルの部屋に居候の身だ。遅く帰らない私に気づいて副隊長さんあたりに言ってくれたのだろう。

「そうだったんだ・・・マリベルありがとう」

「ふ、ふん。別に良いわよ」

顔が赤い。マリベルは褒められ慣れて無いのか、感謝をすると恥ずかしそうにすぐそっぽを向く。そこが可愛くてついちよっかいをかけたくなる。・・・今なら可愛い女の子にちよっかいをかけるステファノスさんの気持ちがかかるかもなんて思っていると、笑いを堪えているのに耐えられなかったのか、近くから豪快な笑い声が聞こえてきた。

「こいつ、面白れえぞ。こんな太い鉄格子を素手でこじ開けたんだからな。笑うしかねえって!」

遠慮なく腹を抱えて笑っているのはそのステファノスさんだった。蹴り飛ばしたい。

止めてほしい。そんな事笑って言うものじゃないだろう。私は抜け出そうと必死だったんだ。というか見てたんなら直に止めて欲しかった。助けに来てた意味ないじゃないか!

ランスさんも最初は咎めていたが、諦めたのか私に「すまない」と言って頭を抱えていた。

「そんな危ないことしたのっ!？」

ステファノスさんの態度に不貞腐れていると、アリアーデが目を見開いて私の肩を掴む。いきなりだったから驚いた。

「え、あ、ほら私人間じゃないし。鉄格子ぐらい簡単に・・・」

「そんなの関係ないでしょ! 女の子なんだから!」

アリアーデに窘められてしまった。

「でも私に人間の女の子を期待されても、無理かと」

人間と言うか、この世界の人間の女の子だ。皆私と比べてお上品な言葉を使うし、お洒落も流行もわからない。それに私は、ズボンをはきたいんだ! と訴えたい。だがそんな事を言えばまたアリアーデから怒られてしまうから黙っておいた。

「だったら私が教えてあげる。だいたいヴィットったら少しがさつな所があるのよ。この機会になおしてあげるわ。服とかもつと可愛くて似合うの貸してあげるから」

「ちょっと待ちなさいよ。今ヴィットは私の部屋に居るんだから、私が教えるわ!」

ぐい、とマリベルに腕を引っ張られたと思うと、アリアーデに食ってかかる。

「あら、でもあなたの持っている服じゃサイズが合わないと思うわよ」

「っ、だったら買いに行くわ!」

せっかく仲良くなったと思っただけど、こういうのを犬猿の仲というのだろうか、それとも喧嘩するほど仲がいいんだか悪いんだか。

「2人とも止めてよ・・・!」

うん、やめたげて。せっかく涙が止まったのにまたシフォンが泣いちゃう。私のために争わないでー! うん、やっぱりこれ良いね。

二人の言い合いにステファノスさんがもつと笑って、ランスさんは苦笑して、シフォンは必死に言い合いを止めようとしている。

もし私がここにいなければ、彼らのこんな姿を見る事はできなかった

っただろう。

そう考えると、なんだか面白くて、自然と笑顔になる。

「隊長さん」

私の呼びかけに、隣にいた隊長さんはこちらに視線を向ける。

「私、愛されてると思うても、良いんでしょうか」

心配してくれる誰かが居るということは、こんなにも嬉しくて心があったかくなるんだって。

私はドラゴンであって彼らと同じ人間ではない、でも、私と彼らの間には見えない何かしらの繋がりができていると、思ってもいいのだろうか。

隊長さんは、相変わらずの優しい笑顔で私の頭を撫でる。

「愛されてるよ」

なんだか、嬉しくて泣きたくなった。

いつの間にか目尻に溜まった涙を手で拭うと、もっと涙が出てきて慌てて両手で顔を覆う。

——お、おかしいな。私こんなに涙腺弱くないんだけど。

止まらない涙に焦っていると突然両手が顔から引き剥がされる。

そのまま何かが顔にぼすんと当たって、じんわりと涙を奪っていく。

私の後頭部には隊長さんの手が添えられて、制服が濡れるのもおかまいなしに、胸に突っ伏すような形の私を抱きしめていた。

本当に、隊長さんは優しすぎる。

ぐずらないだけ良かった。嗚咽もでないただ静かに涙だけがぼろぼろと瞳から出続ける。これでぐずったらみっともないだけだ。そんなみっともない姿は見せたくない。

これは、私の意地。

隊長さんには私の弱い所を何度か見られてるんだ。もう、見せたくない。

それにここには皆もいるんだ。

まだアリアーデとマリベルは言い合ってるのか、落ち着いた声と甲高い声が聞こえる。

なんだかそれが可笑しくて、目に涙を浮かべながら笑っていると、ぼつり、私にしか聞こえない囁きが、聞こえた。

「ヴィトは愛されてる、愛してる」

———はい？

涙なんて引っ込んだよ。

なんだか怖くて、結局最後まで隊長さんの方を向けなかった。

アルヴィナ国の裏事情と偽吸血鬼行為。反省はしてる。(前書き)

※吸血行為注意報。

アルヴィナ国の裏事情と偽吸血鬼行為。反省はしてる。

最近では城内のみならず、城下町の方も慌ただしい。

使者の件から一週間以上が経つが、とうとうティルゾート国から宣戦布告をされたらしい。その事について、やはり私も関与しているためか、お偉いさん達の会議に出なければならなくなった。正直出たくない、だが私にも多少責任があると少し反省はしている。

王子に呼び出され指定された部屋へ行くと、ずらっと国のお偉いさんが長机を取り囲んで座っていた。王子を含め6人だ。その何とも言えないぴりぴりとした空気と威圧感に立ち尽くしていると、「そこへ」と促され王子の真正面に立つ形になる。まるで証言台に立つような緊張感だ。立った事ないけど。

「ようやく来たか」

王子の一言でざわざわと辺りがざわつく。ざわ・・・ざわ・・・です。そうですね。わかります。

「こんな小娘が？」

「何かの間違いだろう」

「・・・いやしかし本当なら、この戦は」

「以前のアースドラゴンも他の生物に化けていたが」

聞こえてるよ、おじちゃん達。内緒話をするならもつとこそそそとして欲しい。確かに私はドラゴンらしくないとマリベルやアリアーデのお墨付きまで貰っている。それが誇らしいことかどうかかわからないが小娘という単語は嫌いなんだ。嫌な事を思い出す。

「ヴィト、すまないな。彼らがどうしても言うもので断り切れなかったのだ」

王子は申し訳なさそうに言った。

すまないと思うのなら呼び出さないでください。今日はマリベル

とレイナに会う約束をしていたのに、断りを入れるのにどんなに変だったか、「ヴィトなんてもう知らない！」と怒らせてしまったよ。それに、もしや私がアースドラゴンかどうか見定めるために呼び出ただけだったりするのかな？私は使者の件についての事ばかりだと思っていたので、拍子抜けだ。なんだよそれ。ただの好奇心じゃないか。

「お前は本当にドラゴンなのか？」

「しかし信じられんな。これがあのアースドラゴンというのか」

「証拠を見せてくれ」

ぎらぎらとした視線が突き刺さる。

そんなに一度に喋らないでほしい。私は聖徳太子じゃないんだから一度にたくさん言葉を聞きとることはできない。それにしても彼らはそれぞれ髪の色や体格、声や顔だって違うと言うのに見わけが付かない。見わけというか、悪い例のバズセツシヨンのように自分の言いたい事だけを発言しており、5人もいるためか誰が何の言葉を発しているのかさえわからない。名前もわからないので適当に聞き流す事にする。

王子の方をちらりと見ると、頭を抱えていた。王子とは言えどまだ若輩者だ。床に臥せっている王の代わりのためか、彼らの方が発言力があるのだろう。それに使者の件での失態もあるためか、面目丸潰れなんじゃないかな。馬鹿正直で友人思い。でも私は、それでも良いと思うけど。

しかし先程から証拠、証拠と言われ続けているのに我慢がならず、小さなため息をついて私は口開いた。

「証拠、ですか。それを出して私にメリットはあるんですか？」

緊張はしていたが、声は震えなかったので良かった。なるべく強気でかかろう。なんだか丸めこまれてしまいそうなので、喧嘩ごしの態度で挑んだ方が丁度いいかもしれない。お偉いさんだか何だか知らないが無礼な事をして捕まるのはもう嫌なので、いざとなれば逃げる事も考えておこう。丁度良く大きな窓があるのでそこから破

り外に出る事ができるだろう。

「・・・どういことだ」

「貴方方は私がアースドラゴンと言う事を前提にお話していると思われます。そして私がそのアースドラゴンならば、どう利用するか考えるでしょう、それは――」

「それがどうした。アースドラゴンはこの国の聖獣だ。この国のために従うのが役目だ」

私の言葉なんて関心がないように言葉を遮られる。人の話は最後までちゃんと聞くというのがマナーと言うものだろうに。それに。私が一番聞きたくない台詞が出てきた。役目？そんなもの勝手に貴方達が決めつけたものだろう。

堪忍袋の緒が切れそうになり、慌てて冷静になるよう他の事を考える。ほら、マリベルにどう謝ろうかとか。ここで感情的になって怒鳴ってしまえば城に居られなくなるかもしれないんだ。それこそドラゴンになって踏みつぶしたい気持ちはある。だがそんな事をしてしまえば、終わりだ。

悶々とそんな事を考えていた私と比べて、彼らは以前として喋り続けていた。

「契約をしてないと言っていたな、どうだ、この中から選ぶというのは？」

「それはいい！わしはこの通り老体だが息子に任せよう」

「だったら私だ。私の家は国に一番忠誠を誓っている」

「いや、それを言うなら我らだ」

私が黙っているのを良い事に証拠の次は契約について言い合っている。

契約、契約、契約、契約、契約、契約、契約、契約、契約、契約、契約、契約。

もううんざりだ。私が契約を頑なに拒否をしている理由に、契約に執着している貴方達のような人間がいるからだということがわか

らないのだろうか。プレッシャーと重すぎる期待。私はただ平和に暮らしたいだけ、そのためにわざわざ人里に下りてきてこうして暮らしているのに。

もともと私が彼らの前でドラゴンの姿になったのがいけなかったんだけど、今更それを悔やんでも仕方がない。こんなに周りの重圧が重いのなら、ここから逃げ出してしまうのも手かもしれない。誰も私の知らない所へ飛んで、いちからまたやり直すのだ。

・・・だが、それをするには私はこの城に未練を多く残しすぎた。後ろ指を指されようと、ここに私の居場所があるのなら、居続けたい。それが今の私の願いだ。

黙っていると彼らは、私が、いや私が、私の方こそ、と激しく言い争う。

王子は言い合いを止められないのか今度はため息をついていた。

王子に期待しても無理そうだ。自分でなんとかするしかない。

私はまた喉の作りを変えて喉が痛くなるほどの咆哮をあげた。今の私の想いをこめて、力の限りの叫びを轟かせる。空気が、部屋自体が振動し、天井にぶら下がっているシャンデリアや窓ガラスも揺れる。机に置かれていたティーカップにピシッとひびの入る音もした。きっと城中に響き渡っていることだろう。

叫んで少しすっきりしたが、喉が痛い。何度か咳払いをして彼らの方を向くと目をこれでもかと思開いて私を見ていた。それは驚きや畏怖、期待の眼差しもあった。

「今のが証拠です。・・・ですが、申し訳ありませんが、私は契約を拒否させて貰います」

背筋を伸ばして顎を引き彼らを見据え、私は自分の気持ちをはっきりと言った。彼らがこの国でどれ程偉いか知らないが、この気持ちだけは曲げたくない。貴方達の契約事に付き合っていられるほど、広い心を持ってはいない。

私の言葉に彼らは眉を顰める。

「契約をしたくないと・・・？」

「そんな馬鹿な！」

「どういう事だ。国の聖獣が——！！！」

「待ってくれないか」

怒鳴られると身構えていると、言い合いに加わっていなかったひとりが初めて口を開いた。白髪に皺の刻まれた顔、随分お歳を召しているのだと思われるが、その碧眼は若者のそれに劣らないぐらいはつきりと輝いている。その瞳が、私の方を向いた。

「ヴィトさん。こちらの無礼を許してくれ」

「オルランド、なぜ止めるんだ！我が国の聖獣ならば役目は決まっておろう」

オルランドさんは他の人とは少し違うようだ。それに他の彼らより発言力があるのかオルランドさんが話す時は誰もが黙っているが、ひとりだけ突っかかる人がいた。

「確かに我らの国ではアースドラゴンを聖獣としている。歴代の戦争も彼らの手助けなくては勝てなかっただろう。・・・失礼だが、歳を聞いてもよろしいかな？」

「16です」

たぶん。正確な所はわからないが客観的に考えてそのぐらいだと思う。人間の記憶の弟は中学生、ならば私はそれより年上。高校生か、大学生。だが精神年齢的に考えてどうも高校生ぐらいの年齢だと思う。頑固な所や自分勝手な所、まだ子供っぽい所もあると、自分でもわかってるから。

オルランドさんは優しい瞳で「そうか」と私を見つめる。

「16と言えば我らの子供や孫の歳にあたる。考えてみてくれないか？役目だからと、まだ幼い自分の子供や孫、それも女子を戦争に無理やり駆り出せるだろうか？」

「だがしかし、人間とドラゴンでは——！」

「人間もドラゴンも同じだ。生きていることにかわりはせん」

他の彼らは不服そうに眉に皺を寄せている。

「先日 of トマーズ・ソメル of の件もそうだ。私利私欲しか考えておらぬ奴が行動した結果、彼女にとて怖い思いをさせてしまった。未だこの城に留まってもらっているだけで我らにとつては十分なはず。それ以上の期待をするというのは傲慢だ」

なんだろう、オルランドさんに惚れそうだ。そんな事を言ってくれる人がいるなんて。

「あれはトマーズ・ソメルひとりの責任だ！それに然るべき罰も受けさせた。それと私達とは無関係だろう」

一番若い、とは言つても還暦を過ぎたぐらいのこの人は先程からオルランドさんによく突っかかっている。オルランドさんが鋭い視線をその人に向けると、たじろいだのか口を噤む。

「お前はもう忘れたのか？以前我らは契約を強制させてしまい、一体のアースドラゴンを殺してしまったではないか！」

「・・・それは事故として片付けられたはずだ」

「事故と言うにはあまりにも我らに落ち度がありすぎた、そうだろう？」

それ以上、オルランドさんにくつてかかるものは誰もいない。私もその言葉に驚いてしまつていた。衝撃的な事実 to 息をのむ。

「――アースドラゴンを殺した？事故として片付けられた？我らに落ち度がありすぎた？」

「・・・それはどういふ事ですか」

思わず聞いてしまつていた。オルランドさんは悲しそうな瞳を私に向ける。

私以外のドラゴンが以前ここに居て、それを事故か何かで殺してしまつた、と言ふ事だろうか。

「・・・これは我らしか知らない事だが、話そう」

「それは国家機密ですぞ」

「この子には知る権利がある」

ぐっ、と彼らは押し黙る。

それは、私が同じアースドラゴンだからだろうか。彼らしか知りえないそれを私が聞いても良いんだろうか。でも、知りたい気持ちの方が強くて私は黙っていた。

誰も何も発言しないのを確認して、オルランドさんは話し始めた。「もう20年も前になる。ここよりずっと離れた森の奥でアースドラゴンの子供が見つかったのだ。子供だったためかさほど兇暴ではなく、簡単に保護する事ができた。そして秘密に育てられた。もちろんその時から契約者も決まっていた。アースドラゴンと言う種は他のドラゴンと違って人間に近い思考を持っていたのには驚いた。大人になった頃には人間に化ける事もできた。そしてようやく契約をする頃になって、・・・そのアースドラゴンは我らに反抗したのだ」

親は居なかったのだろうか。いや、そもそも家族というものが無いのかもしれない。アースドラゴンは突然現れると聞いているし、もしかしたらアルヴィナ国が危機に襲われた時に現れるようになっていたとか、そんな国にとって都合の良いシステムがこの世界にはあるんだとか、・・・そんなの信じたくないし信じられない。

「焦った私達は無理矢理契約をさせてしまった。そして、死んでしまった・・・契約者も犠牲になり死んだ」

オルランドさんは悲しそうに目を伏せた。彼らも嫌な出来事だったんだろうか、顔を伏せている人もいた。

——死んで、しまった。もしそうなら私は・・・その子の代わり、なのだろうか。20年前とは言えど、もし生きていればティルゾート国との戦争にも加わる事ができただろう。そのアースドラゴンがいなくなったから、代わりに私が現れた。・・・そんな出来過ぎた話。

「その時初めて知ったのだ。契約と言うのは契約者と強い絆で結ばれていなければ、成り立たないものだ。だから我らは君に契約を

強制することはできない」

強制してしまえば、死んでしまうから。・・・そんなこと、私だって初めて知った。

死ぬ、か。思えば私は自分が死ぬという事をあまり考えた事がなかった。ドラゴンのせいもあるか、まさか自分は死にはしないだろうと高をくくっていた所もある。人間はドラゴンと違って弱い生き物だ、そんな人間を相手にして私が死ぬ事なんてないと思っていた。でも、もしかしたら死ぬかもしれない。

それにずっと不思議に思っていたんだ。彼らがやろうと思えば私を牢屋にでも閉じ込められたんじゃないかって、そして無理矢理契約をさせて戦に駆り出せばいい。だがそれをしなかったのは、こう言う背景があったからなのからだ、今気付いた。本当は彼らは私を檻に閉じ込めてもこの国に繋ぎ止めたいはずだ。それに方法はいくらでもあるはず、絆させる人間をどうにかして作らせればいい、でもそれをしてないのは彼らがその死んでしまったアースドラゴンに少しでも罪悪感を持っているからだろう。

「できれば私もこの国に住まう人間として力を貸してほしいと思う。だが、契約はアースドラゴンにとっても人間にとっても、一生付きまとうものだ。良く考えて、行動してほしい」

オルランドさんが口を噤むと、しんとした静けさが部屋に訪れた。私はその話が信じられなくてただ突っ立っていた。あんなに言い合っていたのに彼らは大人しくなっており、王子も目を伏せている。

私は私の意思でこの城に居るのであって、国のためじゃない。

でも王子は自分の国のためと、たとえ馬鹿正直で罫にかかろうともその必死さは見えていてわかる。本当にこの国が好きなんだなってオルランドさん達、この城にいる人やアルヴィナ国に住んでいる噂を聞いた人だって、本当は私に少しでも期待しているはずだ。それを振り切って契約をしないと決めたのは紛れもない私自身。たとえ誰かに迷惑をかけても、誰かを傷つけようとそう決めたのに。

——だから、少し考えたんだ。

私は、どうして契約したくないんだろう、って。

縛られるのが嫌だから、国の役目を継ぎたくないから、期待が重すぎるから、全部自分の気持ちだ。もしかしたら、頑なに契約したくないというのは、本当は私の意地なんじゃないだろうか。周りに流されたくなくて、歴代のアースドラゴンのように敷かれたレールを歩くのは嫌だと、思春期の子供のような考えを持っている。自分だけは違うんだとそれこそ天邪鬼のように。

だからだろうか、オルランドさんの話を聞いて、何だか自分の気持ちが変わらなくなってきた。

だって、契約して本当に国を救えるかなんて私にはわからない。だから期待されても困るんだ。

——全てを投げ出して飛び去りたいよ。

結局それ以降話合うことは何もなかった。話し合おうとしても、すぐに黙り込んでしまう。それほど、彼らにとって死んでしまったアースドラゴンが心残りなんだろう。

もう帰ってもいいと言う事で、私はひとり逃げるような形でその

部屋から出た。

扉を閉めて立ち尽くしていると人の気配に気付き隣を向けば、何故か隊長さんが壁にもたれかかっていた。私が部屋から出てきたのを確認すると寄りかかっていた壁から離れて私の真正面に立つ。

迎えに来てくれたのかな。

・・・何でだろう。隊長さんが近くにいただけで心が安らぐんだ。相変わらずおいしそうだとは思いうけれど、最近はそう言う気持ちにはならない。

「契約って、なんですか」

気付いたら、口に出していた。

「契約したら、私はどうなってしまうんですか」

「・・・歴代のアースドラゴンは大変な力を手に入れた。契約者も、膨大な魔力と力を手に入れたと聞く」

「それで戦争に勝ったんですね」

隊長さんは私の頬に手をやると、俯いたままの私の顔を上に向かせる。心配そうな色を宿した瞳が見え隠れしている。

「何を考えてるの？」

「だから契約の事です。もし私がこの国の誰か、例えば王子様と契約したとしましょう。私も王子様も大きな力を手に入れて戦争に勝ちました。では勝った後は？ 契約者と離れることができないと言います。だから私は王子様と離れる事はできません。そうしたら、それからどう生きていけばいいんでしょう」

契約に絆が必要なのは、もしかしたら契約後もその人間と生きていかなければならないことを考慮しているのかもしれない。なんてできたルールだ。しかし一歩間違えればアースドラゴンも人間も死んでしまう。危ない橋を渡るのは間違いない。

「レブランシュと契約したい？」

「いいえ、それはいいです・・・？ なんで怒ってるんですか」

「怒ってないよ。ただ、ヴィトがしたいようにすればいい」

嘘だ。心なしか表情が硬いし、声も低い。

もしかして王子と契約云々が嫌なのかな。幼馴染らしいし、なんだ、王子を私にとられたくないだけか。

「じゃあ副隊長さんとか、ランスさん」

「・・・考えたくない」

眉間に皺がよる。じゃあ誰だったらいいんだと思わず笑ってしまう。なんだか隊長さんと話していると気が楽になるから、傍にいただけでほんと安心する。

本当に、どうして優しいんだろう。最近はそればかり思う。

「隊長さん、どうしてあなたは私に甘いんでしょう」

「好きだから」

「そうですか、——え？」

思いもしなかった返答が帰ってきて声が裏返ってしまった。

えーと、それはラブではなく当然ライクだよね。

何が楽しいのか口は孤を描いていている。やっぱり私をからかってるんですね、わかります。

だけど、隊長さんはとても優しい声で言うんだ。

「好きだから、甘い、好きだから、優しくしたい、好きだから、傍に居てほしい」

きっと私の顔は林檎みたいに真っ赤に染まっている事だろう。

——そそそ、そんな好き好き連呼するな！最近の隊長さんは変だ。おかしい、ネジがひとつどころかたくさん外れてるんじゃないかってくらい言動と行動がおかしい！そしてそれに反応してしまう自分がいることにも戸惑う。

隊長さんがこんなに押しが強くなったのは私がドラゴンだと発覚した後からだ。もし人間と認識されていたところがまだ続いていたとしたらこんな関係にはならなかったと思う。ただの気になっている女の子で終わってる。気になるのは当たり前。この世界の人たちの様に黒やドラゴンに偏見がないから。そんな人がいたら誰だって気になるだろう。だから私は素直に隊長さんの言葉を受け入れること

ができない。私は、この世界の人間とは違うから。期待しては駄目。「だ、駄目なんです。優しくされたら、頼ってしまうじゃないですか。依存してしまいます」

「その方が嬉しい」

私は良くないぞ！

誰かに依存して頼ってしまうと言う事は、自分が弱くなってしまふみたいで嫌なんだ。

ひとりじゃ生きていけない、助け合う他の人がいるからこそ生きていける。そこが人間の良い所なんだけど、生憎私はドラゴンだ。今まで何とかひとりの力で生きてきたし、様々な火種も対処してきた。むしろ頼りたい気持ちの方が大きい。男らしいと言われようと、頼られてるってことは私が必要だと思われてると、目に見えてわかるから。

——ああ、私はここに存在していいんだなって。そう思える。

何だか2人して黙ってしまい気まずくしていると「帰ろう」と隊長さんは言ってくれた。やっぱり私を迎えに来てくれたようだった。素直に嬉しい。部屋は城の奥の方にあるから正直帰れるかどうか、実は心配だったんだ。

マリベルの部屋まで送ってもらったが、送ってもらうだけなのも悪いのでお茶を出すことにした。お茶って高いものなんじゃないかと最初は思っていたけど、一般人でも安く手に入るものもあるようだから一概に手に入れないというものではないようだ。マリベルは香りの付いたお茶、というよりも紅茶に近いものの方が好きみたいで、棚には様々な種類の紅茶が並べられている。好きに飲んでいいと言っていたのでここから拝借しよう。しかもお菓子付きだ。このお菓子すっごいおいしいんだよね。クッキー生地に飴玉のようなものが入ってて食感がたまらん。ちなみにマリベルはお仕事中。最近の私は二トトな感じが否めない。仕事に戻りたい気持ちもあるが、

どうすればいいのかわからないので現状維持だ。こんな私のできる事ってなんだろう。

一応マダムに入れ方を教えてもらっておいで良かった。テーブルの上にそれらを置いてゆったりした時間を過ごしていると、張りつめていた気が緩和される。

・・・が、お腹減ったな。人間としての腹減りではなく、ドラゴンとしての腹減りだ。そういえば最近はいろんな事がありすぎて人間を食べてない。でも今の状態じゃ食べにいけないと思うし、――
―だったら一番身近な人間にしようか。

「隊長さん、お腹減りました」

冗談でそう言うと、優雅な仕草で紅茶に口を付けていた隊長さんが無言で右腕を出してきたから笑ってしまった。と言うか紅茶飲む姿も様になるな。まるで絵画の一枚の絵のよう。

冗談です、と言うと「本当に？」と心配されてしまった。半分本気だった事は心の中で留めておこう。

すると、どのくらいの頻度で人間を食べているのかを聞かれて驚いた。普通そんなこと聞く？女の子にいつもどのくらいの量のご飯を食べているのかと聞くようなものだが、隊長さんは無類のドラゴン好きだから好奇心から聞いているのだろう。素直に答えておいた。
「一ヶ月に3人程度ですかね、魔力が豊富だったら1、2人でも足ります」

むしろ隊長さんなら左腕でかなり満たされたからきつと少しでも事足りると思うんだけどな。

それにしても、主食の人間を目の前にして人間をどれだけ食べてるかの話をするなんてこれまた滑稽だ。

「今月に入って食べた？」

「・・・いえ、隊長さんの血と髪ぐらいですかね」

「だったら」

だから右腕出さないで！以前の私なら目を輝かせて食らいついたかもしれないけど、今の私はそんな気分じゃないんだ。食べたいけ

ど、それ以上に罪悪感が湧き出る。それに――失いたくない人だと、私は思ってる。それがたとえ腕の一本だろうと、今の私は食べる事はできない。全く、どういう心境の変化なのか私にもわけがわからないよ。

それでも右腕を引つ込めない隊長さんにため息をついて、でもその好意は嬉しかった。

だから、私は笑う。

「人間って手足がないと生きていけないでしょう、それに置き換えるのも面倒ですし、もしくれるのでしたら、肉の代わりに――血をくれませんか」

血だったら時間が経てばまた増えるだろうし、血は身体のエネルギー源と言っても過言ではない。この間貰った時も結構満たされた。そう言う、今度は制服の襟元を肌蹴させる。男性にしては白くて細い首筋だが、ちゃんと喉仏がある。・・・なんかエロい。

・・・あれ？ちよつとまって。え？ま、まさか、首から貰えと言うのか？ななななにその吸血鬼。――あのですね、八重歯ありますけどね、そのですね、私吸血鬼ではなくて、ドラゴンで、決して必ず首から吸わなければならないとか、そんなのないですから！私はただ腕をちよつと切りつけてそこから貰ったりグラスに注いで貰おうかと思ってただけなのに。

いつの間にか立っている隊長さんに腕を掴まれ、椅子から立ち上がるが、身長差約20cm。

「高いから無理です」

ああ良かった。これで心おきなく腕から貰える。が、今度は腕を引かれてベッドまで歩く、隊長さんはそこに座り、隣をぼんぼんと叩いた。・・・ここに座れ、という意味だろう。

確かに座ると言うか、膝立ちしたら届くかもしれないけど。・・・これは他の場所から血を貰うのは諦めた方がいいのかもしれない。隊長さんこう見えて頑固な所とかあるし。

渋々隣に膝立ちをして、恐る恐るその首に手を掛ける。

本人が良いって言ってるんだ。それに今更恥ずかしがるわけないだろうし・・・！たぶん。

「・・・首、噛み切ってしまうかもしれないよ」

「いいよ」

——ああもうわかりましたよ。貰います。貰わせて下さい。

首にかかった癖っ毛の強い若草色の髪を手ではらい、ゆっくりと顔を近づける。

本当に良いんだろうかと躊躇していると、後頭部に添えられた手によっていつそう首元に近づけられる。八重歯を鋭く変化させて、その白い肌につぶり、と歯を勢いよくたてた。動脈血の方が栄養分あるから好きなんだけど、人体の構造がどうなっているかわからないから、取りあえず溢れた血を口に入れる。

うぐぐ、首って凄く飲みにくい。やっぱり腕の方が良かったよ。吸血鬼って凄いんだな。

血は溢れるが、5mm程度の二つの穴だ。すぐに塞がってしまう。傷口の周りを唇で隙間なく密着させて、それこそ乳飲子のように、破いた血管から必死に血を吸わなくてはならない。首筋から流れて服を汚さないようにしながら、私は満足がいくまで血を飲み続ける。濃厚な鉄の味。だが私にとっては甘く、喉を通るたびに身体中に心地よいものが溢れ浸透する。

——満たされる。

隊長さんは、私の髪を優しく撫で続けていた。

最近、髪ばかり撫でられるから、やっぱり私は愛玩動物なんじゃないかって思うよ。

きつと、ペットのヒルに餌をやってる気分なんじゃないかな。

と考えてひとりで落ち込んだのは言うまでもない。

戦前の心理。不明瞭な真理。

みつつ、ユメ。

「姉ちゃん、またいじけてんの？」

「放っておいて」

「……ったくなー、そんなことで一々傷ついたって、どうにもならねえーだろ」

「だって、自分を否定されてるようで、嫌なんだよ」

「痛っ。だからっておれにあたるなよ。地味に痛い」

「＊＊にはわからないよ」

「わからないから聞いてんのー」

「そりゃそうだ、結局私と＊＊は他人だもん」

「他人と書いてホカノニンゲンと呼ぶってやつか……不貞腐れ過ぎだろ姉ちゃん」

「放っておいて」

「はい、振り出しに戻る……でも、どうしてもって言う時には、

今度からおれを呼べよ、ちゃんと助けてやつから」

「弟のくせして生意気だー。それになにそれ、お兄ちゃんのマネ？」

「テレパシーで助けを呼べ！迎えに行つてやる！ーってか」

「・・・」

「あ、ちょっと無視しないで！お願い無視しないで！おれ超恥ずかしいじゃん！ー！」

「恥ずかしいならやらないでよ」

「お、やっと笑った」

「・・・むう」

「いつまでも辛気臭い顔してるからうじうじすんだよ、もっと笑え。笑う門には福来る！ーって言うだろ」

「その廊下の角にはお兄ちゃんが張りついてこっちを見てるけど」

「うおっ！？兄ちゃん何やってんだよ！」

「お、おう！ははは！奇遇だな！」

「奇遇じゃない」「奇遇じゃねえ」

瞼を開くと見慣れた天井もとい天蓋。身体を起こすとカーテンの隙間から朝だと告げる太陽の光が入ってきていた。

最近は頻繁に人間の頃の夢を見る。

神巫様は「人間の記憶を全て思いだした時が終わり」とかなんとか言っていたけど、このままのペースで夢を見続けるといつか全て思い出すんじゃないかなんだか怖い気もする。

終わるって何が終わるんだらう。

「・・・一体私に何をして欲しいんだ」

誰かが意図的に夢を見せている気がしてならない。以前はこんなこと全くなかったのに。

ため息について汗で額に張り付いた前髪をかきあげると隣から安らかな寝息が聞こえ、そちらに目を向けるとマリベルが寝ていた。

こちらに顔を向けて猫のように丸まっている。その可愛らしさに強張った顔が緩む。

スッピンの方が可愛いと思うのは私だけかな。

彼女の小さな口から、ヴィトだいすき、と寝言がこぼれ、嬉しさと恥ずかしさのあまり顔が赤くなった。

今までの憂鬱な気分が一掃してあったかい気持ちになる。

今度は、レイナそれ食べちゃ駄目よ・・・お腹壊すわ、とむにやむにや呟く。

「どんな夢見てるんだ」
笑ってしまった。

不気味なほど城の中は静かだった。

窓の外から見える城下町も、いつもはたくさんの人で賑わっているのに人の気配すらしない。

——戦争がはじまるんだ。

あんなに平和だった日々がまるで夢だったかのように、どこかしこも空気がぴりぴりと張りつめている。

マリベルの部屋の近くの廊下、城下町が一望できる窓際で外の様子を見ていると足音が聞こえてきた。

視線を向けるとマドレーヌがそこにいた。彼女は私の前で歩みを止めると、にっこりと笑う。

「久しぶりね、ヴィト。何週間ぶりかしら」

「・・・久しぶり、マドレーヌ」

シフォンと同じはちみつ色の長い髪は後ろでお団子にされており、いつもの使用人の制服ではなく薄紫を基調とした複雑な形の見慣れない衣装に身を包んでいる。所々金色の刺繍で模様が施されており、一目見るだけで魔術師だとわかる。

その微笑はいつものマドレーヌのものだが、どこか緊張している面持ちがある。それはもうすぐ戦争がはじまるからか、それとも私のせいかな。

私が出方を伺っていると、くすりと笑われた。

「私は大丈夫よ。貴方がドラゴンだからって虐げたりしないわ。それにあなたはこの国の聖獣なの、もっと誇らしくするべきよ」

国の聖獣。それをマドレーヌの口から聞きたくはなかったが、彼女の家の事を思うとしかたあるまい。

「王様があなたを呼んでるわ。・・・と言いたいところなんだと、貴方に変なプレッシャーをかけるだけだから断っておいたの、その報告だけ」

とうとう王様直々に呼び出しかと身構えたが、その言葉に拍子抜けた。

「そんなことできるの？お、王様なんだよね」

「私を誰だと思ってるのよ、モランテ家次期当主よ！まあ私はまだひよっこだから、もちろんお父様に頼んで断らせただけだね」

義父をも牛耳るのか。本当にシフォンと双子なのかと疑問に思うぐらい、マドレーヌは英才で頭の回転も速い。そのぶん、敵に回したら怖そうだ。しかしモランテ家ってそんなに発言力のある家柄なのか。普通にマドレーヌと接しているが、実はそこらへんの貴族令嬢よりも位の高いお嬢様なんじゃないか。

「王様は間違いなく王子側の人間よ。貴方をどうにかして戦場に駆り出させようとしている」

「私を戦に出したいんだね・・・」

王様は国を思ってる事だろう、それは王子やご老人達だってそう。私情が少しあるとしても、国が滅べば自分の居場所はなくなる。だから国を守るためなら何を犠牲にしても必死になるだろう。

「私からは以上、じゃあ、準備があるからまたね」

本当に報告だけだった。マドレーヌは私に背を向けて去っていく。以前は廊下で会うたびに世間話をして盛り上がっていたのにと、少し寂しく思う。

——それに、本当にこれでいいの？

ただの傍観者でいいの？

私はあのと時人間のする戦争なんて関係ないと思っていた。いや、思いたかった。そもそもアルヴィナ国の出身でもないし完全な人間としての記憶もない私が人間に肩入れするなんてありえないと思った事もある。でも、いよいよ戦争にはいるというこの時期に今更だけど、思うんだ。

私はどうしてそんなに彼らを拒絶しているんだろう？

アースドラゴンとしてのここにいる存在意義や役目が彼らの期待する事ならば、それこそ喜んで戦争に赴き戦えばいい。多くの人間を蹴散らすぐらいの力も自信もある。たくさんの人間を殺して、後世に語り継がれる英雄になればいい。そうすれば一番スムーズに事が進む。

でも、それに反して戦争は嫌だと思う自分がいる。

ヴィザンヌ山に引きこもってた頃、一度戦争というものを目の当たりにした事がある。私とは違う、今こそあれがファイアドレークだとわかるが、人が乗ったドラゴンが珍しくて好奇心に勝てず付いて行ったんだ。戦争とは言っても小規模な戦いだった。それでも、凄まじいものだったのを覚えている。私が、怖いと思うぐらい。

——そう、私はきつと、戦争が怖いんだ。

もう何人もの人間を殺しているドラゴンなのに、我ながら聞いて呆れる。でも戦争というのは今までのとは比にならないぐらいの人間が死ぬ。だから戦争をしようとする彼らに賛同ができなかった。どうしてわざわざそんな事をしなければいけないのって。

私が戦争を勝利に導くなんて、信じられなかった。

ただの、傍観者でいたかった。

私には関係ないと頭を振って、今まで通り目を瞑ればいい。それだけでもいいんだ。

・・・でも私は目を瞑り過ぎたのかもしれない。

もう傍観者ではいられないとどこかで気づいてる。こんなに足を突

っ込んでしまったんだ。

私と言う存在がどれだけこの国に影響を与えた？そして彼らに迷惑をかけた？数えてもきりが無い。

・・・それにあまりにもタイミングが良すぎる。まるで何か目に見えない力が働いて、私という存在ができたみたいだ。その見えな何かは20年前のアースドラゴンが死んでしまうという予想外の出来事が起きたため、他の何かを用意した。そして急いで創ったから人間とドラゴンがごっちゃになった存在が出来上がった。

そんな気がしてならない。

でも、それでも。私が第三者によってここに存在することになったとしても。

もう、逃げてばかりじゃ駄目だと思うんだ。

この、世界から。

「待って・・・！マドレーヌ！」

去っていく背中に呼びかけ、立ち止まってこちらを振り返った彼女の元まで走る。そんなに距離は開いてなかったから時間はかからなかった。

私は一度深呼吸をして、マドレーヌを真正面からはっきりと見据える。

「――私も、連れて行って」

瞬間、マドレーヌの眉に皺が寄る。あまり良くは思っていないみたいで小さなため息をついていた。

「私はあまりお勧めはしないわ。貴方が戦地に赴くということは戦争に加わる意思があると周りから見なされる。たとえ貴方がそう思っていないともね、だからあまり軽はずみな行動はとって欲しくないの」

「それでもいい」

彼女は驚き目を見開く。

「どう言う心境の変化かわからないけど、・・・本当にそれでいいの？」

私はただ、はちみつ色の彼女の瞳を見つめ続けた。彼女は私が何を思っているのか感じ取ろうとしているらしく真剣な表情で私の瞳の奥を覗き込んでいる。

暫く見詰め合っていたが、マドレーヌが苦笑して沈黙は破られた。
「・・・ってね、友達としては言いたいところなんだけど、モランテ家次期当主としては是非来てほしいっていうのが本音ね」

そうだろう。マドレーヌだって家族が居て守りたいものがたくさんある。

私がどれほどの戦力になるかはわからないが、私が戦地に赴いて国に本当に勝利を導くのなら彼女にとってそんな嬉しいことはないだろう。

「ヴィトはもう知ってるわよね？ 私達の国は貴方達アースドラゴンにとても甘い。以前契約を強制して死なせてしまったせいか、今度こそ死なせないように大切に扱おうって、本人の意思を尊重しようという思いがあるの・・・それはあなたにとってはとても都合のいい事ね」

もしそのアースドラゴンを知らなければ、私はこうやって自分の意思で決める事すらできなかったかもしれない。

「私なんて、最終的には自分の意思でモランテ家に養子として入った事になるけど、本当に魔術師になりたいのか、と今言われても正直の所わからないわ。だから、まだ選択肢のあるあなたが羨ましい・・・焦って今決めなくてもいいのよ？ それとも、本当に行きたいの？」

悲しそうに微笑んで、彼女は言う。私達と戦争に赴くか、それとも城で留まり戦争の行末を見守るだけか、と。城に留まり戦の行末を見守るのが私だって一番良い方法だと思う。城の中で襲撃に怖れながらも、自分の身は安全だからだ。それとも、この国を捨ててど

こかへ逃げ去るか。・・・最初はそう考えていた。でも、もうそれは今更すぎる。

私は静かに頷いた。

「本当にそれでいいの？本当にあなたは行きたいの？」

ため息をついてマドレーヌはもう一度問う。

でも私の気持ちはもう決まっていた。

「私は、・・・自分とは関係ないってずっと思ってたんだ。周りの期待の重さが絶えれなくて反抗してた所もあった。自分がよければ良いだなんていつも思ってた」

「それでいいのよ、生物として当然。特に貴方は人間じゃないんだから、本能として自分の身を一番に考えるのは当たり前よ」

人間じゃない。でも完璧にドラゴンと言うわけでもない。それが私を苦しめる。

「でも、このまま見過ごせない」

「それは同情心として？そうだとしたら命を賭して戦おうとしている私達にとっては、好まれない考えよ」

ぴりぴりとしているのか、いつもより言葉がストレートに出ている。

「・・・かもしれない。でも私だって彼らと同じだ。この国には多くの未練が残ってる。それを投げ出して逃げるなんて事はしたくない。・・・戦争がどんな酷いものか、どれだけの人間が死んで、自分が臆さずに戦場に立てるかもわからない・・・でも、その未練を守りたいんだ。それがたとえ綺麗事といわれようとも、逃げて罪悪感に苛まれるよりはまだマシだよ」

結局自分が罪悪感に苛まれたくないからだなんて、なんて不純な動機なんだろう。それに、今まであんなに頑なに拒絶してきたのにコロッと意見を変えるなんて、なんて優柔不断なヤツなんだと思われているかもしれない。自分だってそう思う。

でも、ここにあるもの全てを失うのが怖いんだ。何よりも、それが怖いんだよ。

「お願いマドレーヌ、私も連れて行って」

準備と言っていたから、きっとマドレーヌも行くのだろう。彼女だって、卵とは言えこの国の魔術師だ。

鋭い視線が私に突き刺さる。ここでひいてしまえば自分の気持ちはわかってもらえない。そんな私に彼女は仕方ないわね、とに大きなため息をついた。

「・・・わかったわ。あなたの気持ちはよくわかった。でも、これだけは覚えておいて」

そして今までにないぐらい真剣な表情になる。

「貴方がいなくなったら悲しむ人はたくさんいるんだってこと」

私が死んだら、悲しんでくれる人間がいるのだろうか。少なくとも、そう言ってくれるマドレーヌは悲しんでくれるのだろうか。

私は小さく頷いた。

「うん、わかった。でもそれはマドレーヌも同じだよ」

「そう言われたら何も言い返せないわね」

今までのピリピリとした雰囲気が消え、彼女はいつものように優しく微笑んだ。

「お互いそうならない事を祈りましょう。だから――、――わ」

「・・・え？なに？」

マドレーヌが何かを言っているのだが、聞こえにくい。耳がおかしくなったのかと焦ってもう一度聞き返すが、今度は全く聞き取れなかった。それどころかテレビの砂嵐の画面のように視界が荒くぶれはじめた。

「――、――！」

「な、なにこれ」

不思議そうなマドレーヌの顔が砂嵐に埋め尽くされて消えてしまった。終いには真っ暗になり、自分がそこに立っているかさえわからなくなる。

まるで突然宇宙に投げ出されたかのような気持ち悪い感覚。

何も、見えない。何も、感じない。何も、何も。

——ぷつん、と砂嵐からチャンネルが変わったかのように今度は急に視界がクリアになる。

瞬きを何度かすると、目の前にいたはずのマドレーヌが居ない事に気付いて慌てて周りを見渡す。だが彼女どころか、そこは今まで居たはずの場所でもなかった。

「……ど、こ？」

一瞬にして自分の居る場所が変わった、らしい。らしいと言う曖昧な言い方は、私自身何が起こったのか理解できていないからだ。わりと小さな部屋の壁際、窓がある隣にあるベッドに私は座り込んでいた。テレビ、本棚、机、クローゼット、見覚えのある部屋の光景だと言うのに違和感を感じる。視界の端にちらちらと黒いものが見えるので手で引っ張って見てみると、それは黒い髪だった。肩よりも少し長めのセミロング。

「黒い、……なんで？」

今度は手を見ると、夏休みに入り家に引きこもりっぱなしのせいか、日本人にしては比較的白い手が目に入る。身体に視線を移すとオレンジ色チェック柄のパジャマを着ていた。私の外見は、茶色い目に、日に焼けたもっと健康的な肌。そして使用人の紺色の服だったはずだ。この姿に違和感があるはずなのに、違和感がない。

何時だったか、こんな感覚を以前感じた事がある。

——あれは確か、私がドラゴンに……いやドラゴンが私に？あれ？え？なにこれ。

記憶が渾沌として何から思いだしたら良いのか全く分からない。自分の身に一体何が起こったのか混乱していると、急にノックの音がして部屋端にあった扉が開く。

「姉ちゃんそろそろ起き……あれ、珍しいな」

金髪の知らない少年が部屋へ入って来た。

可愛らしいピンク色のエプロンを着て、手にはお玉を持っている。どこの新婚妻だ。

「起きてるのなら早く下へ降りてこいよ。兄ちゃんはどう食って会社に出て行ったぞ。姉ちゃんが早く食ってくれないと片付けらんねえんだよ」

私にお玉を突きつけて文句を言っている。

急に新婚妻の少年が出てきて、ただでさえ混乱している頭がもっと混乱する。

「・・・姉ちゃん？どうした？」

姉ちゃん。

そうだ。

私は、姉。

この少年の、姉。

——ちよっと、待って。これ、どういう事？

あんなに身近に感じていたドラゴンの記憶が脳の奥に引っ込んでいて、かわりに表に人間の記憶が出ている。いつもとは違う感覚に戸惑った。この少年とこの家で過ごした幼いころからの記憶が、ある。それどころか人間として家族と過ごした記憶がはっきりと鮮明に思いだされる。むしろ昨日の夜の出来事までついさっきのように思いだす事ができる。作り過ぎたハンバーグを誰が食べるか争った。結局じゃんけんをしてお兄ちゃんが食べたんだけど。

「姉ちゃん？」

何も喋らない私を具合が悪いと思ったのか、少年もとい弟は心配そうな顔つきになる。先週夏風邪をひいたので、そのせいもあるだろう。

「え、あ、・・・や、何でもない」

「そうか？だったら良いけど。無理すんなよ。あと早く下に降りてこいよー冷めてもレンジでチンしてやんねえから」

「う、うん」

からからと笑って少年は部屋から出て行った。

あれは、夢だったのかな。

自分がドラゴンになってる夢。国や戦争に巻き込まれて人間とド

ラゴンの記憶に挟まれて情緒不安定にもなりながら生きていく夢。

「ふぁんたじい」

——・・・だよねー、やっぱり夢だよねー、あんなファンタジーすぎるの夢じゃないとありえない。あー・・・すっごいリアルな夢見たなあ、今度お兄ちゃんに自慢してやろう。

ほっと安心してベッドから立ち上がる。朝ごはんを食べる前に着替えようとクローゼットに手を掛けたとたん、またあの砂嵐が視界を襲う。

「う、っそ・・・、ちょ、待ってよ」

視界がモノクロになってザァーザァーと砂嵐で埋め尽くされる。立っていられなくて床に倒れ込むと、弟が出て行った扉から入れ替わるように何かが入って来た。

何でもいい、助けてと、何かに縋るように伸ばした手が、柔らかいものに触れる。ふわふわしている毛玉。

それは”にゃあ”と鳴いた。

——あ、ハナのご飯忘れてた。

「・・・——ヴィト!!」

「うわっ、は、はい!?!」

砂嵐が消え視界がクリアになった瞬間、自分の名前を耳元近くで大声で叫ばれ身体が跳ねあがる。

マドレーヌは私の両肩を掴んで揺さぶっていたらしく、軽く酔った気分だ。一体何が起こったんだろう。

「ど、どうしたの？」

彼女の呆れた視線が突き刺さる。

「どうしたのはこっちの台詞よ！行き成り死んだように突っ立ってどうしたの？何度呼んでも無反応だったんだから吃驚するじゃない！もう少しで神巫様を呼ぶ所だったわ！」

それは勘弁してほしい。

「死んだように・・・？」

「目に光がなかったわ・・・何か呪いの類の魔法をかけられたんじゃないかとも思って心配したじゃない」

目に光がないとか私は死んだ魚か。

「の、呪いって大げさな」

「隣国の同業者がそう言う魔法をかけてくる時もあるのよ」

それは怖い。丑の刻参り並みの怖さだ。

「ごめん、ちょっと考えごととしてて」

「・・・本当に？」

今起こった事は自分でも理解ができない。人間の自分に戻って、しかもその世界に行って弟と話してきたなんて、自分でも信じられない。それどころかもう靄がかかったように思いだせない部分もあるんだ。夢のように時間が経つにつれないようが曖昧になって行く。少し、怖くなる。夢だと思っていた人間の記憶が、現実になろうとしているかもしれないという事に。

マドレーヌは心配そうに、でも探りを入れるような視線で私を見ている。

「私に嘘なんてつかないで・・・顔色悪いわよ」

「本当に、大丈夫だから」

慌てて笑顔を作る。

「・・・わかったわ。今回はそう言う事にしておいてあげる」

それ以上マドレーヌは何も言ってはこなかったが、煮え切らない

態度の私を怪しいと思っているようだ。

きっと何かを隠していると言う事はばれているだろう。でも自分でもどう説明したらいいかわからないんだ。

言って混乱するだけなら、初めから言わない方が良い。

白昼夢を見たと思う。

班模様の記憶は混乱要素。

マドレーヌは、余程の実力がないかぎり女性が戦地に行く事は無いと言う。そりゃそうだ。使用人の服を着た女が戦地に居るなんておかしい話。

その事についてどうするか考えた結果、私はマドレーヌと同じ格好をして行く事になった。魔法っぽい魔法なんて使ったことないんだけど着て大丈夫なのと聞くと、適当に誤魔化せば大丈夫よと笑う。

・・・本当に大丈夫かな。

取りあえず着てみる事にした。

「これよ」

渡されたものは紫を基調とした服。複雑な構造になっていて着方がわからないので、教えて貰いながらだが何とか着る事ができた。なんとなくマイヤさんが着ていた服と形が似ているような気がする。彼女のはシンプルだったが、これは大きなフードや重ね着をしなければならなかったりでややこし過ぎる。だがなによりズボンを穿く事ができて嬉しい。幾らでも胡坐をかいたり大腿で歩いたり逆立ちしたりもできる。なんて素晴らしいんだズボンよ。

だがひとつだけ欠点がある。

「似合わないな・・・」

マドレーヌの部屋の姿見で自分の姿を確認しても、服に着られている感が否めない。サイズはぎりぎり大丈夫だったのだが。

「あらそう？結構似合ってるわよ。紫色の服とか着た事ないから変だと思っただけよ」

「そんなものかな」

「そんなものよ」

不貞腐れていると、マドレーヌは笑う。

同じ服を着ているというのにこの違いは何だろう。魔術師としてのオーラと言うべきか、雰囲気からしてもう負けてる気がする。

「じゃあ私は少し報告に行ってくるから、ここで待っててね。取りあえず貴方の事はお義父様に相談してみようと思うの、いいかしら？」

「うん、よろしく」

部屋から出て行くマドレーヌを見送り、私はもう一度姿見を見る。何度見ても似合っていない。角度を変えても魔術師っぽいポーズをしてみても駄目だった。やっぱりこの顔には最初に着ていた臙脂色の服が一番似合うと思う。こんな豪華な衣装よりも、素朴で可愛らしい服の方が似合うのだ。

思えばこの子を食べたのが全てのはじまりだったのかもしれない。でなければきつとこの姿でここに居ることはなかっただろう。他の姿か、もしくはこの城にさえいなかった。この子の人間としての生涯を奪ってしまったことに今更ながらだが、罪悪感はある。でも彼女は血や肉となって私と一緒に生きていると思うんだ。私の勝手な思いだけど、他の人間も同じ。これは、立派な食物連鎖。

「そう言えばこの子、なんて名前だったん———いたっ」

もっと可愛らしい名前があったのではと思った瞬間、突然頭に太い針が刺さるような激痛が走った。その痛みに立っていられなくて座り込むと、今度は視界が揺れ出した。

「これっ、て・・・!？」

あの時白昼夢を見る前もこんな感覚に襲われた覚えがある。今のように痛みはなかったが、見るもの全てが色あせ白黒に変わり、最終的には砂嵐になって何も見えなくなる。

そして———ぷつんと切り替わるように私の視界は変わった。

私にとって、夢は二パターンある。

”ここはどこだろう”

私がそれを夢と認識した時と、認識していない時のパターンだ。他にも色が付いていたり怖い夢や楽しい夢など様々の種類があるが、私にとって重要なのは認識しているか否かである。それによって夢の内容が全く異なってくるからだ。

夢だと認識している場合にも二つに分かれる。見ている夢が怖い、恐ろしいものの場合、どうにか目覚めようと試行錯誤を繰り返し手当たりしだいに目を覚ます方法を探している。しかも怖い夢に限ってこれは夢なんだと自覚している事が多く、何とも不思議だ。目覚めろ、目覚めろ、目覚めろ、どうしたら目が覚める！？そればかりを考えて、恐ろしいものから逃げているのである。見ている夢が楽しい、嬉しいものの場合、ああ夢ってなんて素晴らしいんだろ！ずっと覚めなければいいのに！と夢の中を好き勝手に動き回っている。

二つ目に、夢だと認識していない場合はその夢の中のストーリーに流されてしまうのがほとんどである。たとえば私がそのストーリーの主人公だとする。しかし不思議なことに、主人公であるはずなのに客観的に見ているようにさえ錯覚する事がある。分かり難いが、例えていうのなら私の視点がふよふよと浮いている感じ。もっと分かりやすくいうのならゲームの主人公を動かしている時のあの上から視点だ。

そして奇怪な事に、私が見ている”ドラゴンになった私”はその二つのどちらにも当てはまらない。

認識しているはずなのに認識していない。

客観的なのに主観的。

「・・・また、か」

瞼を開くと部屋の床に倒れていた。起きあがって身体を確認して

も紛れもない人間の私だ。夢の姿見で見たあの子じゃない。

扉は開けっ放しだったので閉めてからベッドに座りこむ。倒れてからどのくらいの時間が経ったのだろうか、壁にかけられている時計の時刻を見るとまだ朝なのでそう時間は経っていないと思う。

「これじゃあ、どっちが夢か現実かわからないよ」

今の私は確実にこちらの方が現実だと言える、だが夢の中のドラゴンの私は夢の中が現実だと思っている。

どっちが本物で、どっちが偽物なのかわからない。

ああ、頭が混乱する。

頭を抱えて唸っていると、枕元から携帯のけたたましいアラームが鳴り響く。目覚まし時計はあるのだが、ひとつでは起きないから携帯にもアラームをかけているのだ。こんな時間になると言うことはスヌーズ機能が働いているのだろう。ベッドに寝そべりながら急いで止めるとメールが来ている事に気付いた。受信したのは数分前で、差出人はお兄ちゃんからだった。また返信に面倒な内容かもしれないとため息をつきながらメールを開くと、題名は「アイラブハナ」。

『ハナのご飯忘れてないか！今日はお前の当番だったよな。それと今日も見送りの「おにいたんいつてらっしゃい。はあと」がなかったから寂しかったぞ！たまには早起きして俺がお前達にお揃いで買ってやったふりふりエプロンを着てフライパンとお玉の奏でる音で起こしに来てくれ！添い寝オプションも頼み———』

「朝ごはん・・・忘れてた」

何か忘れてると思っていたらハナの朝ご飯だ。我が家では週変えの当番でハナの世話をしている。ほとんどお兄ちゃんが可愛がっているけど、家族全員で世話をする決まりだ。

後半のどうでもいい話は無視して了解とだけ返信を送り、今度こそ着替えようと座っていたベッドから立ち上がる。

「あれ？」

だが、突然の立ちくらみにまたベッドに逆戻りどころか倒れ込ん

でしうのと同時に、視界が真っ暗になった。
——ぷっん。

金属のぶつかり合う音、爆発音のような音、そして人間の雄叫びと悲鳴が微かにだが、遠くから聞こえる。城とは違う殺伐とした空気が居心地が悪い。

気付いたら、私は天幕のような中に立っていた。隣にはマドレーヌも居て、目の前には2人の男の人がいる。ひとりは30歳は過ぎているおじさん。もうひとりは若い男の人だ。

「マドレーヌ、何かあったらすぐに呼びなさい」

彼らは天幕から出て行く。

「お気を付けて、お義父様」

お義父様だと。と言う事はもう一人の男の人はまさかマドレーヌのお義兄さん？・・・ちょ、っと待って。日に焼けた肌に白髪の短髪が似合っている男の人と言ったら、第一騎士隊の、隊長さんじゃないか！

「・・・お兄様はないのか」

「お元気で、お義兄様」

「義はいらな——」

「はやく出て行く」

「・・・」

哀愁を漂わせながらマドレーヌのお義兄さんは天幕から去って行った。

「全く、早く妹離れして欲しいわ」

私は、混乱している。

冷静になってみても、これはおかしい。この状況は頭が付いていない。

一体、何が起きた？

記憶が、ない。

マドレーヌと同じ服に着替えていた所までは覚えている。だがそれからここに到るまでの経緯がわからない。マドレーヌのお義父さんとお義兄さんがなぜ私達の居る天幕に訪れて、どんな話をしたかさえ覚えていない。外の様子からして戦地に近い所だと言う事はわかる。だが、私が戦地に赴くまではまだ数日時間があつたはずだ。だが実際には、マドレーヌの部屋で意識が途切れ白昼夢を見たと思えばいつの間にか戦地に来ていた。

こんな記憶の抜け方って、ある？

「そんなに緊張しないで、今回は準備期間も短いから相手も様子見のはずよ。本格的な戦争はきっとまだだろうから」

「・・・う、うん」

顔が強張ってしまったんだろう、マドレーヌは安心させるように笑いかけてくれた。しかし緊張どころか理解不能な出来事が起きて私の頭はショートしそうだ。

だが冷静になって考えてみると、なんとなく覚えている部分もあることに気付いた。あの後、アリアーデやシフォン、マリベルに戦に行くことがばれて喧嘩をしながらも何とか説得をしたこと。私が行くと言うことは取りあえず他の人には黙っているようにしたこと。期待されても困るからだ。が、重役には言うべきだと、またあのおじさんたちと王子に会って報告をしたこと。喧嘩ごしに会話をしそうになって必死に冷静になっていたこと。おぼろげにだが、覚えている部分もある。でもそれは本当に私が経験したと言う事かどうかははっきりしない。情報と知っているだけで現実味がないからだ。

マドレーヌは先程から何かを話しているが、全く私の耳には入ら

ず視線も泳いでいた。

「ちよつとヴィト聞いているの？」

「ごめん、もう一回」

呆れられた。

「仕方ないわね。もう一度言うからちゃんと聞いて」

しょうがないんだよマドレーヌ、私は一体自分の身に何が起こったのか不思議で、不安でならないんだ。

話が終わりテントから出て外の空気を吸う。冷静になると抜けた記憶も戻ってきた。先程のマドレーヌのお義父さんとお義兄さんもただ挨拶に來ただけで、特に重要な話をした覚えはない。お義父さんの方には何故か誘われてしまったけど、断っておいた。研究云々を熱く語られたがマドレーヌが止めてくれたから助かった。ちなみにお義兄さんは毒舌な人だった。マドレーヌにはすごく甘かったけど。

この辺り一帯は陣営、と言うのだろうか、忙しそうな行きかう人々でいっぱいだ。その様子をぼーと眺めていると、隣から足音が聞こえてそちらに顔を向けた。視線が合ってお互い驚いた表情になる。「・・・何でお前がここに居るんだよ」

さっそく見つかってしまった。私は咄嗟にフードを被ったが振り向いた顔をぼちり見られていただろう。

「お久しぶりです、ステファノスさん」

面倒な人に会ってしまった。

ステファノスさんの隣には見慣れない女性がいる。彼よりも真っ赤に燃える髪を持っており、筋肉質だがスレンダーな体格は一見して男性にも見えるが、胸の膨らみから女性だということが判別できる。だが、着ているものは第四騎士隊特有のドラゴンライダー専用の甲冑だ。

「これはこれは可愛いらしい魔術師さん。私はミネット・デュランと言う。名前を聞かせてもらってもかまわないかな？」

「ヴィト・ティエースです」

「ヴィトと呼んでも？ 私の事は気軽にミネットと呼んでくれ」

「あ、はい。ミネット・・・さん」

ミネットさんは私に近づいてきて握手を求めるように手を差し出してきた。挨拶の握手だろうかと自分の手を置くと、引っ張られて手の甲に軽くキスをされた。驚いて手をひっこめると「可愛いね」と女性特有の柔らかい笑みを見せる。悪い意味でのフェミニストなステファノスさんよりも紳士的な雰囲気がある。男らしい女の人。ついお姉様って呼びたくなるほど、かっこいい人だ。と言うか手の甲にキスする人なんてはじめて見たよ。

「姉さん、何やってんだよ」

引き剥がすように私たちの間に割って入ってきたステファノスさんは、ミネットさんを呆れた表情で見ている。

もしかしてこの人が”世界が私を待っている！！”と出て行っただけのお姉さんなのかな。どことなく似ているし姉さんとも言っているし。

「ステファンも抜け目のない奴だな。こんな可愛らしい子と知り合いだなんて、どうして私に紹介してくれないんだ」

「音信不通だったんだから連絡のしようがねえだろ」

「おお、そうだったな。すまん」

やっぱりステファノスさんのお姉さんだ。間違いない。

「それより、なんでお前がここに居るんだ？ 俺らは何も聞いてねえぞ」

やっぱり聞かれた。知り合いの一人ぐらいには会ってしまうかな、と覚悟はしていたが、こうも早く出会ってしまうとは出鼻をくじかれてしまった感じだ。

「知らないのは当たり前です。私が戦地に居ると混乱してしまうかもしれないでしょう？ だから黙って貰っているんです」

「いやだから俺が聞きたいのは、お前がここに居るのは誰の意思なのかって事だ」

ステファノスさんは珍しくため息をついた。そしていつもとは違う真面目で真剣な瞳。城と戦地、場所が違うだけで、こうも人は変わってしまうものなんだろうか。

「・・・私の意志です」

「そうか、だったら俺は何にも言わねえよ。精々死なないようになあっさりだ。」

「もしかして心配してくれてるんですか」

「んなわけねえだろ。お前に何かあったら俺が隊長に八つ当たりされんだよ。全く良い迷惑だぜ」

なんだそれ。

「ストレス発散か何かしらねえが、身体を動かしたいからと勝負挑まれんの。副隊長あたりにやらせりゃいいのに、なんで俺なんだよ。しかも最近では人間じゃねえような技を仕掛けてくるんだぜ!? おかげで全身傷だらけだ!・・・まさかお前、隊長に何かしたんじゃないだろうな?」

心当たりがあり過ぎて視線を泳がすと、デコピンをされてしまった。地味に痛くて額を押さえているとミネツトさんが庇うように前に立ってくれた。

「ステファン、か弱い女の子になんて事をするんだ」

「こいつか弱くねえし。火を吐いたり人間踏み潰したり食べたりこんな太い鉄格子曲げたりするんだぜ?どこがか弱いんだよ!」

確かにそうだけど、一応は女の子(雌)なんだから大きな声では言わないで欲しい。まるで野蠻で暴食な生き物じゃないか。

「・・・おお!?まさか君があのアースドラゴンか!」

「そう、みたいです」

ステファノスさんの言葉から私がドラゴンだとイコールで繋がったらしい。頭の回転速いなど関心していると、がしつ、と両手を掴まれきらきらとした瞳で見つめられる。

「素晴らしい!私と友人になってくれないか!なんならそれ以上の関係でも大歓迎だ!」

それ以上の関係って何だ。

「姉さん止める恥ずかしいだろ！」

「ナニが恥ずかしいんだ。可愛い女の子を独り占めするのは良くないから私にも寄越せと言っていただろう」

「だからそれが恥ずかしいんだって言ってんだ！女じゃなくて男に興味を持って！」

「あんなむさ苦しい生き物のどこに興味を見出せと？そんなのよりも可愛くて柔らかくて花のような可愛い女の子の方が良いに決まってるじゃないか」

「そんなんだから26にもなっても嫁の貰い手がつかねえんだろ
うが」

「女の子のような男なら考えてやらなくもない」

男の娘ですね。わかります。だがそんな子がこの世界にいるかどうか、ミネットさんには悪いけどいいような気がする。

それに、珍しくステファノスさんが振り回されている。笑うと、またデコピンをされてしまった。

小さなその痛みは皮膚から頭の中に響いて、急に視界が揺れ始めた。

「うそ、・・・ま、た？」

目の前にいる二人の姿が、墨汁を零してしまったように黒く視界が塗りつぶされ見えなくなる。また言い合いをはじめた二人の声も聞こえなくなつて、宙に浮いた感覚が私を襲った。

そして——ぷつんと、切り替わる。

——デコピンのせいかな・・・！？

憎むぞ、ステファノスさん。

風雲急を告げる由々しきあり様と私事情。

手に暖かくて湿った物が触れている。

重たい瞼を開いて視線を向けると、茶色い毛玉が私の手を舐めていた。

「あー・・・ハナ？」

にゃあ、と鳴いた茶色い毛玉もとい我が家のペットハナは、私が目を覚ました事に気付くと擦り寄ってきた。微笑ましくて喉を撫でるところごろ気持ち良さそうな声を出す。

「あれも、夢なのかな」

夢の中に居る時はそれが夢だと思う時もある。色だって付いたり感覚だって時々ある。だが、夢にしてはやっぱりリアルすぎる。それに夢の中の自分もこの現実を白昼夢だと思っているのは不思議だ。これが一度だけならばただの夢で済んだはず。だがこう何度も意識を失ってはこちらの現実を白昼夢として見ていると言う事をくり返しているため、一概に夢と決めつけることはできない感じがしてならない。

「まさか睡眠障害かそれとも夢遊病か。・・・私はハイジじゃないぞ」

きつと、昨夜お兄ちゃんの妄想ネタに付き合わされたからこんな夢をみるんだ。そう思いたい。

そんな時、某魔法少女の着メロが盛大になりだしてベッドに寝そべったまま慌てて携帯を取る。こんな恥ずかしい着メロは私の趣味じゃない、気付いたらお兄ちゃんに勝手に設定されていたんだ。変えても変えても執拗に設定するからもう諦めた。学校では恥ずかしくすぎるからマナーモードにしている。ちなみに弟のメールは火サスで両親は暴れん坊將軍だ。センスが悪いのは自分でも思う。でもインパクトがあって好きなんだ。

メールの題名は「プリーズ ラブ」。本分を見なくても内容はだ

いたいわかるので開かずにそのまま携帯を閉じる。それにいつまでも寝転がったままでもいられない。上体をおこすとハナは私の膝に乗って来た。かりかりと足をひっかいて何かを催促し、首をこてんと傾げて私を見上げた。可愛すぎる。

「あ、そうだった。朝ご飯だね、ごめんね着替えたらすぐに――」

立ち上がりうとして急な眩暈に襲われ床に倒れ込む。顔面を床に殴打してしまい痛みには堪えているとハナが心配そうに私の頬にすりよってきたが、そのまま――ぷつんと、意識が途切れた。

またか。

＊＊

今度は天幕ではなく戦地に立っていた。隣には神妙な面持ちをしたマドレーヌがいる。

「相手の様子がおかしいわね。どういうことかしら」

私は私がおかしい。どういうことだろう。

記憶が途切れ途切れで早送りをしては再生している感覚。そしてあの時と同じ白昼夢のようなもので何度も見る。どっちが夢でどっちが現実かわからない。

一体、私の身に何が起きているんだろう。人間の記憶は私のもの？それとも白昼夢の彼女のもの？私と彼女は同一人物なの？全く、わからない。ただ、白昼夢の私はシンプルに人間の記憶だけで、私

のようにドラゴンとしての混在した意識なんて無いと言う事だ。もしドラゴンの私がいなくなったら、彼女になるんじゃないか、そう思わずにはいられない。だったら私の存在というのほもともと彼女無しではありえなかった？時間軸もわからない。彼女が存在しているのはどの世界で、その時間で、私より前なのか後なのか、それとも平行しているのか——わからない。取りあえず今は考えるのは止めよう。今は目の前の事に集中しなくてはいけないんだ。深呼吸をしてここに來た経緯までの記憶を探る。確か、敵の様子がおかしいからマドレーヌと一緒に前線に赴いたんだった。

よし、覚えてる。大丈夫だ。

「おかしいって、普通に見えるけど」

遠目で見ても、大地では人間たちの戦が、空にはファイアドレークが飛び交い、後方では数少ない魔術師たちが支援している。ドラゴンさえいないもの、それは敵国だって同じだ。ファイアドレークを射ち落すためか、弓や魔法のようなもので攻撃を行っている。

「良く見て、統率がまるつきり取れてないわ」

言われてみれば、確かにティルゾート国の兵士たちはばらばらに散って戦っており数も思ったよりも少ない気がする。現状で言うにあきらかにアルヴィナ国の方が優勢であると見える。

「おかしいわ、あのティルゾート国がこんな戦い方するはずはないのに。そうねまるで……彼らは、捨て駒のよう……！？」

——どん、と、空気が震える大きな振動。

衝撃波のようなものを全身に受けて倒れそうになるが、なんとか足を踏ん張って堪えた。

「これは、ユニコーンの……！？」

マドレーヌは上空を見上げて驚いている。私もつられて見上げると、金色に光る細いものが何十、何百、何千と降ってきていた。眩い光があたりを埋め尽くし目を開けられなくなりそれを確認する事

はもうできなくなったが、その間にも大きな振動と空気の震える衝撃が絶えず波となって訪れ、その場に立つことが精一杯で動く事もできない。

もしかして以前ティモが言っていたユニコーンの光魔法のような能力だろうか。だがこんな広範囲にも及ぶものだなんて思いもしなかった。

——これは一体何？何が起こってるの？

遠くで、悲鳴や悲痛な叫び声が聞こえて恐ろしくなった。何が起こっているのか状況を把握できない。隣にいるマドレーヌもそうなのか、この衝撃波に耐えながらも悪態を付いている。

ようやく光がおさまり視界が開けてくる。

目の前に現れたものを見て、絶句した。

ほんの、数メートル先。

私の前方は、地獄と化していた。

「・・・うそ」

あんなに大人数の人間がいたのに、立っている人はひとりもない。それどころかあたりは血の海で真っ赤に染まっていた。

衝撃波とともに飛んできたのは金色に光り輝く腕ぐらいの太さある大きな矢だった。それが何十、何千も空から降ったのか、隙間なく大地を埋め尽くしていた。そして人間の身体に突き刺さったものは役目を果たしたかのように砂のように消えていき、地面に突き刺さったものは未だそこに残って存在を主張している。

もし、ここよりもっと前に出ていれば、死んでいたかもしれない。その事にぞっとし、足が竦んでしまった。

「マドレーヌ、これ、どう言うことなの・・・？」

マドレーヌは切羽詰った表情で唇をかみ締めている。

「・・・私の検討違いだったわ。相手の国は本気なようね、あいつらはこの一度きりの戦いで全てを終わらせようとしている」

「それは、全力でかかってくるって事？」

「理由はわからないけど、そう言う事ね。味方を犠牲にしてまでも

早く”勝ちたい”のよ」

なんで。どうして。統率が取れてなかったことや数が少なかった理由は、ユニコーンの攻撃を放つため？犠牲は少ない方がいいと、それだけの理由？なんて、人達だろう。

「次の攻撃が来る前になんとかしないと・・・!!」

ごめんなさい、先に戻るわ！と言いマドレーヌは走り去って行った。王子かそれとも父親のところへ行くのだろうか、どちらにしろユニコーンの攻撃には強力な魔法が無い限り防ぐことは適わないだろうから少なくともマドレーヌの力も必要になるんだろう。物理的に攻撃するにしても、どこにユニコーンがいるのかもわからない。考えられる場所があるとするなら敵の陣地を突破した先、だ。だがそんなの無理だ。自殺行為過ぎる。

こんな状況で・・・どうしたらいいの。

私は茫然と立ちつくしていた。

酷い。酷過ぎる光景。

あの攻撃でかなりの人数がやられていた。味方も、敵も、全員。既に事切れている人間もいれば、手足が千切れてしまっても生きている人間もいる。痛みに叫んでいる人間や、傷ついてもなお剣を持って戦おうとする人間だっている。啞然としていると、私の後ろからはファイアドレークが何体か飛び去り、大地では新たな戦が始められていた。ユニコーンの攻撃があったというのに、彼らは臆さず前進を続けている。

これが、戦争。

なんて惨い。なんて悲惨な。

人間のひとりやふたりじゃない。何十人、何百人という規模で人間が死んでいく。

覚悟はしていたはずだ。だが実際に目の当たりにすると、躊躇してしまう迫力がある。マドレーヌは、どうしてあんなに強いんだろ

う。以前の戦にも出ていたから？慣れているから？だから、シフォンと違った空気を持っているの？どちらにせよ、こんな光景年頃の女の子に耐えられるはずないのに。

でも、そんなんじゃないだめだ。

私は足を一步、踏み出した。

ねっとりとした血の感触が足の裏から伝わり、咽返るほどの血の匂いが充満している。辺りには死体や肉片が散らばってそれを避けながら私は歩き続けた。

その光景をおいしそうだななんて、到底思えなかった。思うはずがない。むしろ胃の中にあるもの全てを吐いてしまえたらどんなに楽だろう。

放心したように歩いていると、見慣れた姿を見つけ慌てて駆け寄る。

「副隊長さん・・・！大丈夫ですか！？」

傍には無傷のファイアドレークがいるが、副隊長さんは足に酷い傷を負っていた。間一髪、あの衝撃波の範囲から避けたらしいが完全には避けることができなかったみたいだ。出血が酷く、傷口を押さえているが、手の隙間から流れている血の勢いは止まらない。何かの備えにとマドレーヌから貰っていた包帯布をポケットから出して急いで巻き止血をした。

「ヴィトさん、か？・・・ここは危険だ、早く逃げろ」

私がここに居る疑問もあるだろう。誰にも言っていないのだから。でも副隊長さんはそんなことよりも、そして自分の身よりも、私の身を案じてそう言う。止血はしたが顔は血の気がなく真っ青だ。このままだと貧血で倒れ最悪には・・・考えて、その考えを振り払うように私は叫ぶ。

「すぐに人を呼んできます！」

「いや、いい」

「でも・・・！」

副隊長さんはよろめきながらも立ち上がり、止めようと伸ばした私の手を振りほどいて、傍にいたファイアドレークに覚束ない足取りで跨ると飛んで行った。その手には槍が握られていた。

まだ、戦うというのだろうか。いつあの攻撃がまた来るかもわからないと言うのに、それでも副隊長さんは飛んで行った。

——本当に、生きて帰ってくるの？

飛んで行った方向を見ると、向こう側の方に真っ黒いものが犇めき合っているものが見えて、ぞっとした。

あれは、人間だ。それも数えきれないほどの人間がこちらに向かっている。

あんな大軍勝てるわけがない・・・！！

やはり、ティルゾート国はこの一度きりの戦で終わらせようとしているのだろうか。どうしてそんなに急ぐ必要があるんだ。

頭がくらくらとして私の意識は自然に——ぷつんと途切れた。

「もう、なんなのこれは！！」

頭の中がぐちゃぐちゃだ。フードプロセッサーかミキサー、洗濯機で脳みそをかきまわしているかのようだ。床に打ち付けたままの顔面が痛かったが、起き上がるのと同時に目を覚まそうと思いつき

り頭を振るともつと気持ちが悪くなった。

このままじゃ駄目だと椅子に座りゆつくりと深呼吸をする。

「れ、冷静になれ、私。あれは夢なんだ。そう、夢だから戦争でもなんでもアリなんだよ」

夢だと思えば少し気が楽になる。

でもなぜだろう、夢じゃないような気もするんだ。リアルすぎる光景と血の匂い。平和主義で育った私には刺激の強すぎる光景だ。夢の中の私が恐怖に怯えるのも頷ける。

「でも、どうして夢の中の私はドラゴンにならないんだろう」

ドラゴンの姿になれば少しでも役に立つんじゃないだろうか。それこそ敵の本陣まで飛んでいってあの強力な攻撃をするユニコーンを探して倒せばいい、無理なら説得するか、敵のお偉いさんを倒して混乱させる事だって、もしかしたらできるかもしれない。

でも夢の中の私はそれをしない。

「・・・やっぱり、怖いから、か」

自分のことは自分が良く知っている。殺し合いと言う戦争に恐怖を感じない人間の私なんていない。むしろその地へ行こうと思った事だけでも凄い。面倒ごととは極力回避するがモットーの私が、どうしてそこまでして戦地へ赴こうとしたのか、理解できない。守りたいものがあるからとか、現実の私にはわからない。

考え込んでいると携帯の着メロが鳴り響く。またお兄ちゃんからのメールだ。今はリアルな戦争の夢を見た精神的ダメージが大きくて確認する気力はない。きつとメールの返信をしないから催促のメールだろう。仕事してよお兄ちゃん。

「戦争、か」

武力放棄した平和な日本で育った私には縁の無いものだ。歴史の教科書や小説で読んだり映画で見たりはするが、実際に自分が体験することになったらどうするだろう。いや答えは決まっている、考える間も無く逃げる一択だ。自分の身が一番可愛いのは当たり前。嫌なものから背を向けて走り去るのも人間として当たり前。なんて

腐った人間なんだと苦笑しながら天井を見上げぎいぎいと椅子を揺らす。染みが猫の顔に見えてそう言えばハナはと、部屋を見渡したがいなかった。結局ご飯お預け状態だから、下へ行って弟にねだっているかもしれない。可愛そうなことをしたなと笑い、着替えて下へ降りようとした瞬間、頭の痛みと歪む砂嵐の視界に冷や汗が出る。「ちよつと、また――!？」

今倒れたら椅子ごとひっくり返ってしまう。今度も受け身を取る暇もなく背中から床に倒れてしまうだろう。なんとかベッドで倒れようと立ち上がろうとしたが、容赦なく、――ぷつんと意識は途切れた。

マドレーヌを探して私は戦場を駆け抜けていた。

白昼夢のことなんて気にしてられない、今大切なのは、この状況で私はどうすればいいのかだけだ。

こんな時こそドラゴンになればいい。それこそ敵の本陣まで飛んでいてあの強力な攻撃を放つユニコーンを探して説得すればいい、敵のお偉いさんを倒して混乱させる事だって、できるかもしれない。・・・でも、怖い。ドラゴンの姿になって彼らの標的になるのが、怖かった。少なからずとも、私の噂は向こうの国まで及んでいるのだから、私の姿を見るだけで攻撃態勢に入るだろう。それにあんな

大軍を相手にするなんて無理だ。確かに私は強いかもしれないが、ちりも積もれば山となる戦法には勝てない。総攻撃されてしまうのがオチだ。

自分が情けない。戦場へ行くといったのは自分のはずなのに、いざ戦場へ立つとこんなにも怖いと思うなんて。本当に情けない。情けなくて笑いが出てくる。

「・・・あれは」

まだ前線を抜けることができずに、ユニコーンの攻撃の範囲に入っていないかった交戦中の前線を走っていると、数体のファイアドレークが上空に居ることに気づいて、その中に見慣れた姿を見つけ足を止める。

ファイアドレークに乗った隊長さん、だった。

ファイアドレークの手綱を引き、上手く誘導しながら敵を殲滅している。他にも数人同じ騎士さん達がいて、人間である敵はドラゴンのファイアドレークに押されているようだった。

———凄い。

その圧倒的な彼らの強さに息をのむ。

なにより、隊長さんから目が離せなかった。左腕は肘から服が破れており、指の先まで白い鱗にびっしりと覆われている。もちろん槍をもっているのも、その手だ。人外の左腕で攻撃されれば敵はひとたまりも無いだろう。

しかし、ひとりの敵が地面すれすれに低空飛行していた隊長さんのファイアドレークに攻撃すると、ファイアドレークはバランス崩して地面に落ちた。そして他の敵の容赦ない大振りの剣が襲いかかる。だが隊長さんは素早く地面に降り立ち体制をなおすと腰に帯剣していた双剣を抜いてそれを受け止めた。盾なんかない。相手の攻撃を受け止めるときは剣か、左腕だった。練習試合で見た時よりも速い動きに敵も押されていた。しかし相手の人数が多すぎた。倒しても倒してもきりが無い。そのうち右手の剣が弾き飛ばされてしま

うが、左手にもっていた剣を右手に持ちかえると左腕で敵の剣を掴んで砕く。それに驚いて隙だらけになった胴体をその左腕が貫いた。至近距離の攻撃に血飛沫がかかるが、それを拭おうともせず次の敵に標的を定め、素早く動く。

私のあげた左腕を使いこなしている。あんな使い方もあったんだ。左腕自体が、剣となっている。

——私の知らない、隊長さん。

いつもはほんわかしているのに、今の彼に隙なんて無い、あるのは、闘争心だけ。

黒い瞳は鈍く光り、敵を見定めている。まるで獲物を狩る野生の獣だ。

ふと、そんな瞳と視線が合った。放心している私の姿を目にとめると、その瞳が大きく見開られた。

そんな折り、また——どん、という振動。

空気が震え、ぴりぴりと身体中に電気のようなものがはしる。耳鳴りまで聞こえ始めた。

また、あの衝撃波だろうか。

——まさか、だって、ここにはティルゾート国の兵士もまだいるのに・・・！！

彼らは本当に何を考えているの？あれをここで放ったら、敵の私達どころか味方さえ数多く巻き込んでしまうと言うのに。何か考えがあるのだろうかと彼らを見るが、慌てふためいて逃げる様子を見るとところからきつとユニコーンの攻撃は知らされていない。

味方を犠牲にしても勝ちたい戦。そんなものに何の価値があるんだ。

先ほどは攻撃の範囲から奇跡的にも外れていたが、この振動の大きさからして今回は範囲に入ってしまったているだろう。空を見上げると、降ってくる数は先ほどよりも少なかったが、太陽の光を浴びて黄金に光り輝く矢が存在していた。

すぐ近くに危険が迫っていたと言うのに、足が地面に縫い付けられてるかのように、私はただ茫然と突っ立ってそれを見ていた。

——ああ、痛いかな。きっと、痛いよね。でも、足が、動か—

「——ヴィクト!!」

考えてる暇なんて、ない。私の理性。

私の名を叫ぶ声がした。

空を見上げると、大きな空気の振動とともに金色の矢が降ってくるのが見える。先程よりも少ない数だが、ここに立っていれば一つぐらいは当たってしまうだろう。あれが自分の身体を貫いて腸を抉り血飛沫を地面に浴びせ、何事もなかったかのように砂のように消えて行く様を想像して、ぞっとした。

危殆に瀕する事態を身体全体で感じているのに、頭の中が真っ白になって、まるで金縛りにあったかのように逃げる事も指一本動かす事さえできずにただそれを見上げ受け入れることしかできなかった。

迫り来る光の矢。

先刻前の脳裏に焼きついた真っ赤な情景が思い出され、恐怖を感じる。

もう、駄目だ。

この距離じゃ何をしても遅い。逃げようとしても、ドラゴンの姿に戻ろうとしても、間に合わないだろう。皮膚を鱗に変化させたり、こんな高さから降ってくる凶器には簡単に貫かれてしまう。ああ、こんな時魔法のひとつでも使えたら。

私の人生はこんなにあっけなく終わってしまうんだと、何故か冷静にそう考えていた。酷く頭の中が澄み渡っていて、走馬灯なんてもの、ないんだなって。

自傷するように苦笑を浮かべた。

と、その瞬間だった。

——どん、と何かに肩を押され、後ろに倒れる形で尻餅をつく。

刹那、大きな光の矢が私の横すれすれに地面に突き刺さった。あと少し倒れる場所がずれてたら、間違いなく光の矢の餌食となっていただろう。

驚いて目を見開き突き刺さった光の矢を凝視していると、周囲からは降ってきたその矢が次々と地面に突き刺さる音、人間を貫く音、そして悲鳴や絶叫が聞こえてきた。

だがそれよりも、一番大きく、何かを裂くような、貫くような鈍い音がしたのは、倒れた直後の、私の、目の前からだった。

・・・声が、聞こえる。それはとても苦しそうな小さき呻き声だった。

ゆっくりと視線を上げ、見上げた。見慣れた色、一本だけの長いみつあみが、私の肩にかかった。

「た、いちよう・・・さん？」

いつの間に、私の近くに来ていたんだろう。隊長さんなら、フアイアドレークに乗って逃げる事ができるのに、だって、現に、先程まで戦っていた他の騎士さん達は攻撃に気付いて後方に逃げ、この攻撃を避けていた。

なのに、どうして、隊長さんはここにいるの。

——それは、なに？きらきらと輝いていて、赤い雫が伝ってい

る。それは、一体、なに。

その光の正体に気付いた時、一瞬息が止まって、愕然とした。

隊長さんの腹部には、あの光輝く矢が物の見事に貫通していた。

その矢は私の横すれすれに刺さったものだ。それこそ地面に縫いとめられる状態で、その矢は血に濡れて光っていた。そして自分の役目は果たしたと言わんばかりに矢は消えかかり、倒れそうになる隊長さんの身体を慌てて両手で受け止め支える。先の戦闘での返り血で前髪が額に張りつき、黒い瞳が至近距離で見える。

先程とは違う、いつもの優しい表情だった。

「よかつ、た」

開いた口から血が溢れ出し、私の顔にかかる。ついさっきまで身体中を廻っていたあたたかい鮮紅の血。咳き込む度に私の頬や服に真っ赤な濃い染みを付けていく。

——これは、何？何が起こったの？・・・血。真っ赤な、鮮やかな色彩。・・・ああ、勿体ないじゃないか。こんなに、溢れて、勿体ない。・・・とても、勿体ない。——違う、違う・・・違う。そんなんじゃないんだ。そんなんじゃない。そんなことじゃない。そんなことを考えたいんじゃない。なのに、どうしたらいいかわからない。

腹部に刺さったままの光り輝く大きな矢は、砂のようにさらさらと消えてしまい、栓が消えぼっかりと穴の開いた腹部からは鮮やかな血が溢れ出す。皮肉にも支えを失った隊長さんの身体は前のめりに倒れ、それを受け止める程の力を出せなかった私は、重なり合うようにそのまま地面に倒れ込んだ。瞼は閉じられていて、揺さぶっても何をして、その瞳を見る事はもうできなかった。

尚も赤い血が地面を濡らし続けていく。

「あ
・
・
・
」

その光景が信じられなくて、からからになった喉から必死に何か声を絞り出そうとした。でも、出るのは空気ばかりで、音にはならなかった。頭から血の気が無くなり、酷い耳鳴りがする。頭痛がする。身体が震えて、冷たい。でも、抱え込んでいる体長さんの体温の方が、冷たかった。

私のせい。私のせいだ。私のせいだ。私のせい。私のせい。
私のせいだ。私のせいだ。私のせいだ。私のせい。私のせ
い。私のせいだ。私のせいだ。私のせいだ。私のせいだ。私
のせいだ。

——私のせいだ！！！こんなところに呆然と突っ立ってなければ、攻撃に逸速く気付いて対処できていたら、こんな事にはならなかったかもしれないに・・・！

何が「よかった」の？ どうして私を庇ったの？ 何でそんなに嬉しそうな顔で、笑ったの・・・？ 痛そうなのに、苦しそうなのに。こんなに血が溢れて、身体に穴が開いて、助かるはずなんて、ないよ。死んでしまふかもしれないのに、どうして。

私は、なんて馬鹿なんだ。阿呆で、愚かもので、のろまで。一番失いたくない人に守られて、私だけが傷ひとつなくのうのうとして
いる。

なんだよこれ!?

必死に血を止めようと両手で押さえてても、指の隙間から溢れ出てくる。

「い・や・だよ」

夢なら覚めてよ……！！

どうして、 どうして、 どうして、 どうして、 どうして、
どうして、 どうして。

死ぬ、の？死んじやうの？本当に？

そうだ、神巫様だったら・・・！でも、あの人は城にいるんだ、
どんなに頑張っても間に合うはずかない！だったら、マドレ

「又か、誰か、・・・誰かって、誰だよ。誰だったら、助けてくれるの・・・？」

力の抜けた身体は重たく、生気が薄れていく顔色を見て、邪な思いが浮かんでくる。

・・・だったら。

失うくらいなら、今ここで食べたほうが。

——本当に、そんな事ができるの？

だって、死んじゃうんだよ。だったら私の手で、最期でも。

——本当に、食べたいと思ってる？

・・・食べたく、ないよ。食べたいわけ、ないじゃないか。でも、わからない。

どうしたら、いいのか、わからないんだよ。

また、あの意識の途切れる感覚が私を襲う。

視界と意識が朦朧となって、何も聞こえなくなる。このままこの感覚に身を委ねれば、またあの白昼夢を見るだろうか、そして今度こそ目が覚めずに、これは夢なんだと人間の生活に戻る事ができるだろうか。

なんて甘い誘惑。

・・・そうだよ、全て逃げだして、忘れてしまえばいい。

こんなに誰かを失う事が苦しいなら、何もできない自分が悔しくて、ただ見ていることしかできないのなら、現実から目をそらしたって、許されるんじゃないかって、思うんだ。

でも、・・・そんなのって、——自分勝手過ぎる。

じゃあ、どうしたらいいんだよ。

——ケイヤク ヲ——

「・・・え？」

何かが頭の中で響いた。男の声でも女の声でもない頭の中に語りかけてくるように存在を主張してきたその声は、途切れかけた私の意識を無理矢理引きとめる。

——コノ マ・・・デハ ニ・・・ゲン ニ モ・・・ル マ・

・ニ ケイヤク ヲ——

「な、なにこれっ・・・」

気持ちが悪かった。夢の次はどうとう幻聴まで聞こえてきたのだと、頭を抱えて必死に振り払おうとした。今はこんな幻に付き合っている暇なんてないのに、だがその声は語りかけることを一向に止めなかった。

——ケイヤク ヲ、ケイヤク ヲ、ケイヤク ヲ、ケイヤク

ヲ——

——ケイヤク ヲ、ケイヤク ヲ、ケイヤク ヲ、ケイヤク

ヲ——

反復する言葉。繰り返される聞いたこのある単語。洗脳されるかのように何回も何回も何十回も何百回も木霊する。

頭がどうにかなくなってしまいうで、苦しい。

——”知っていても、いいと思うのですよ。”

今度は不意に、神巫様の言葉が頭の中で響く。

混濁し濁った混沌に清い一滴の水の波紋が広がるように、頭の中の隅々まで優しく染み渡る。

それと同時に今まで騒いでいた声はなくなり、すっと開放されたように楽になった。

「け、いやくの・・・方法」

私の身に何が起こっているのかわからない、でもひとつだけ、希望の光が見えたような気がした。

もしかして神巫様はこうなることを知っていて、あの時私にそれを教えたのだろうか。そういう未来を詠んでいたから、何としても私に教える必要があった。

なんて、ヒトだろう。

腹立たしくて、憎い。

こうなる事が知っていたのなら教えてくれたって良かったはずだ。そうしたらこんな事にならなかったかもしれないのに！

でも、・・・今はそんなことどうでもいいんだ。神巫様を呪っても時間は元に戻らない。

隊長さんを救えるのなら、何だっていい。

だって、失いたくない。

死んでほしくない。

ましてや私を庇って死ぬ？何だよそれ。出来すぎた物語じゃないか！私はそんなのいらない！

私は、彼を失いたくないんだ・・・！死ぬなんて、絶対に許さない・・・！

どんな事があろうと、何度危険な目にあおうと、絶対死なせない

って、あの時誓った。隊長さんに対するこの思いが恋だというのなら、甘んじて私はそれを受け入れる。でもそんな、好きとか、愛してるとか、大事だとか、そんな言葉で表せないぐらい大切なヒトなんだ。

絶対に、死なせたくない。だから。

——お願いだから、死なないで。

そのためだったら、何だってできる覚悟はあるんだ。

契りと、黒。迷妄と、覚悟。

「隊長さん、ごめんなさい」

震える手を冷たくなった頬にそっと当てる。

私が今何をしようとしているのか、許してなんて言えない。だって、この方法しか思いつかないんだ。

・・・ずっと考えないようにしていた。相手が、もしかしたら隊長さんだってことを。それについて本人に聞いたときも曖昧な答えしか返ってこなかった。彼だけは私を聖獣アースドラゴンとして期待をしてないんだと、嬉しかった。だから、契約だなんてそんな事あるはずないと、ずっと思っていた。

・・・でもこの考えも、私の意地だったんだ。

でも、今はそんなくだらない意地をはっている場合じゃないんだ。私は自分の手首を思い切り噛んだ。上手く血管を破れなかったからもう一度強く噛むと血が並々と溢れだす。とても痛い。痛いけど、隊長さんの傷に比べたらなんてことない。溢れ出た血を口に含むと、人間の血とは違って私にとっては本当の鉄の味がする。

口いっぱいに入れて、隊長さんの頭を抱え込む。前髪を優しく払って頬を撫でた。冷たくなっていく体温が恐ろしくて、泣きそうになる。

実際、泣いてたかもしれない。

——・・・ごめんなさい。

そっと、顔を近づけた。

近くで見る隊長さんの顔は血の気のない真っ白な顔で、まるで人形のように、閉じた瞼はぴくりとも動かない。怖くなって少し躊躇し

てしまったけど、意を決して、唇をぴったりと重ね合わせる。口に含んでいた血を流し込んだ。隊長さんの口から溢れている血と混ざり合ってしまう。でもいいんだ。こうして血が混ざり合う事に意味があるのだから。

唇を離し、今度は血の滴っている腕を穴の開いた腹部に押し当てる。要するに、この血は媒体。私の一部がどんな形であれ、体内に入り混ざり合う事が重要なんだ。

そして最後は私の、思い。重たい口を開いた。

「――《血の盟約》を」

自分でも惨めと思うほどの、擦れた声だった。

こんなもので、神巫様に教わったこんな安っぽい台詞で本当に成り立つのだろうか、不安に駆られる気持ちを押し込んで、私はただ祈り続けた。お願い、と。

暫くすると、隊長さんの額から左頬にかけて薄っすらと幾何学的な模様が光り浮かび上がってきた。それは所謂契約の証と言うもので、アースドラゴンが身体の色を変えるの同じように人間は身体はどこかにその証が現れるのだと、神巫様は言っていた。黒い、刺青のように現れたそれに合わせて、ぼんやりとした淡い光が隊長さんの身体を包む。風なんてないのに、髪や服が揺れている。そして一際腹部の大きな傷が光り出し、収まる頃には最初から傷なんて無かったかのように、治ってしまったていた。

ただ、血を大量に出血したためか隊長さんの顔色はまだ悪い。

「・・・これ、どんな奇跡だよ」

あまりにも上手く事が進んだため笑い込み上げてくる。きつと引きつった顔で笑ってる事だろう。

――”契約者は一度、身体が作りかえられるのです。なのでどんな病気や怪我でも、治りますよ。”

ああ、やっぱり神巫様はこれを知っていて私に契約の仕方なんて教えたんだ。帰ることができたら絶対殴ってやる。綺麗な顔だろうと関係ない。思いつきり拳でぶん殴ってやる。

隊長さんを包み込んでいた淡い光が収まると、ゆっくりと瞼が開き恋焦がれる黒い瞳が私の姿を映した。そして血で濡れた唇が私の名を形作る。

「ごめんなさい」

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。自分勝手なことをしてごめんなさい。でも今の私には、隊長さんを救うにはこれしか方法が思いつかなかったんだ。

何度も謝っていると、隊長さんの腕が伸びてくる。

「泣か、ないで・・・」

私の目に浮かんだ涙を優しく拭った。

その時、はじめて自分が泣いているんだと気付いた。視界が少し歪んで見え、瞬きをする度に涙が零れ隊長さんの頬に流れ落ちていく。私の顔に触れる、冷たくない、温もりのある手に嬉しさが込み上げ、心の底から優しくあたたかいものが湧き上がってくる。

生きている事がこんなにも嬉しい。嬉しくて、嬉しくて、嗚咽がもれそうになった。

でも泣いてばかりじゃられないんだ。

袖で涙を乱暴に拭う。

「・・・どんな罵倒も暴力も受け取ります」

自分勝手な事をしてしまったんだ、言い訳も弁解もしない、逃げない。

「だけど、少し待ってください。私にはやらなければいけないことがあるんです」

私は何かを言いたげな隊長さんに優しく笑いかけると、立ち上がった。

身体が、とても熱い。

血管を通っている血が煮えたぎっている様に、全身が熱くなって、細胞という細胞が変化しているのがわかる。身体は光を帯び、人間の形からドラゴンへと変化する。だがいつもとは違う感覚に戸惑いながらも、胸の奥底から力強いものが湧いて出てくるものに、心が安らぐ。

こんな感覚、初めてだった。

光が消え視界がはっきりする頃には自分の姿が少し違う、という事に気がついた。

腕も、足も、胴体も、視界の端に揺らぐ翼も、尾も。

少しだけ違う。

何かが、違う。

それは。

それは、見事な。

——黒だった。

私の恋焦がれた黒だった。

日の光に反射して鱗一枚一枚が煌やかに輝きを放つ。
暗い闇色でも墨色でもない、神々しいまでの光に満ちた漆黒だっ

た。

手に届くはずのなかった色が私の身に宿っている。高揚感と懐かしさに胸が高鳴った。

「ヴィト、必ず・・・帰っておいで」

私は心配そうな顔をした彼の瞳をじっと見つめる。
そして漆黒の翼を広げ、飛び立った。

荒れ狂うように暴れ回ったと言っていていいだろう。

だが私の頭は冴え渡っていた。どう行動すれば一番効率が良いのか、敵を殲滅させる事ができるのか、考えるのはただそれだけだ。

逃げ惑う敵に容赦なく襲い掛かり、今までの数十倍、数百倍の威力のある火を吐いて、潰して、噛んで、翼や尾で薙ぎ払い、何度も空に向かって咆哮を轟かせた。

突然現れた私と言う脅威に恐れをなし、我先にと逃げ去っていくものはたくさんいた。果敢に挑んでくるものもいた。アルヴィナ国の人間は黒を宿したアースドラゴンに困惑しながらも、だんだん士気が上がっていくのも感じた。

私を止められるものは、いなかった。

人をひとり殺せばそれは罪となり、人をたくさん殺せば英雄となる。誰かがそう言っていた。強ち、間違いじゃないかもしれない。こんなにたくさん犠牲を出して、正気でいられる人間なんていない、だったら英雄と崇めてその行為を正当化させるしか受け入れる方法はないんだ。でも、私はそんな後悔や罪悪感なんて、ない。そんなものを感じる人間の私は、奥に引っ込んでしまっている。

あれほど嫌だと言っていた契約をし、数多くの人間を殲滅させる。これが神巫様やあの頭の中で響いた声の思惑だとしても、そんな事どうでもいい、これは私が自分自身で決めたことだ。

不思議な程に、落ち着いている自分がいる。

私はもう覚悟を決めていた。

——こうなったら、とことんアルヴィナ国に付き合ってやろうじゃないか。

愉快だと嗤うと血で濡れた鋭い牙が現れ、歪な笑みが零れる。

可笑しくて、可笑しくて、仕方が無い。

だがこれではいくら敵を相手にしても、数は一向に減らず埒があかない。やはり大国であるティルゾート国は一筋縄ではいかないようだ。

この戦争を一時的にでも止めさせるには、敵の大將に何かしら働きかけなければならぬだろう。それにあれからユニコーンの攻撃は一度も訪れていない。二度目の攻撃は小規模なものになっていだから、もしかしたら相当な体力の消費をしているのかもしれない。だったら彼らに働きかけるのなら今しかない、私は空高く飛んで

ティルゾート国の本陣を目指す。時折矢や魔法のようなものが襲い掛かってくるが、そんなもの私にとっては軽く払える程度の小さな攻撃。

もう、恐れは無い。

そんなものに臆している暇なんてあるのなら、今をどうするか考えるのが先だ。

飛んでいると、大きな陣営のようなものを発見し、迷いもせずスピードを上げて近づく和一際大きな天幕付近に降りる。突然現れた私にざわめきが起こり、周囲が混乱状態に陥っている。今まで以上の攻撃を受けたが、痛くも痒くも無い。そんなもので私の黒い鱗を破ることなんてできない。

「陛下！お逃げください！！」

前方で声が聞こえてそちらを振り向くと、明らかに一番偉いであろう人物を発見した。陛下と呼ばれているからこの人間がティルゾート国の一番偉い人だろう。

紫がかった濃い青の短髪に、黄金色の瞳。思ったより若い容姿。レブランシュ王子と比べて地味なイメージはあるが、ユニコーンのような輝きをもつその瞳の奥に灯っているのは深い闇のように感じる。眼光が鋭く、睨みつけるだけで人間を殺せそうな鋭い瞳だった。私の中での王族というイメージのひとつである、権力を誇示する暴君に相応しい人間だと思った。国を思いやる名君でも、王子のような庶民的な親しみやすい人間でもない。纏っている空気そのものが気味が悪くて絶対に近づきたくない人間の部類に入る。だが今は躊躇している場合ではない。

私は相手の脳に語りかけるように自分の思考をぶつけた。

『貴方が、ティルゾート国の陛下ですか』

語りかけると、一瞬驚いた表情になるが直ぐに無表情に戻る。その悠然たる面持ちに不気味さを感じた。

私を取り囲んでいる敵兵はそれぞれが武器を持ち今にも私に襲い

掛かろうと構えているというのに、妙な静寂が漂っていた。

問いかけに何も答えずただそこに立ち尽くしている。肯定と受け取り私は続けた。

『軍を引いてください。でなければ貴方ごとここを焼き払います。これは忠告です』

男をここで殺してしまうのも手かもしれない。でも力だけじゃ駄目だ。ただ混乱を招くだけで何の解決にもならない。

男は、無表情で私を見上げていた。

『もう一度言います。二度目はありません。今すぐ、軍を退きなさい』

私の問いかけは周りの人達にも聞こえていたのだろう、隣にいた従者らしき男性が「無礼な！」と叫び弓を構え私に放とうとする。

しかしそれを目の前の男は手で制した。

「・・・いいだろう」

数歩歩いて私の前まで来る。首を少し伸ばせば頭から食らい付く事ができる距離だ。

「陛下!？」

「お前は下がれ」

「し、しかし・・・!!」

「下がれと言っている」

睨まれて従者の男性は渋々と後ろに下がった。蛇に睨まれたカエルのように顔が真っ青だった。

男は私を見上げ不気味に、にやりと笑う。

「今回はお前に免じて退いてやろう。まさか、単身で乗り込んでくるとは思いもしなかったな。それにこれほどまでの力とは思わずこちらもかなりの痛手を負ってしまったようだ」

ユニコーンも思ったより働いてはくれなかったしな。と言う言葉に怒りが沸々と湧き出る。彼らを酷使させているのだと確信した。

「その力を是非とも我らの手中に収めておきたいものだ。いずれ・・・お前を手に入れてみせよう」

『私は誰のものでもない』

唸りを上げた私にいつそう口元の笑みを深くさせ、黄金色の瞳を細める。

「それはどうかな？ 契約をした時点でお前は既に契約者のものだ。ならば、契約者ごと手に入れるまで」

何と言うジャイアニズム。自己中心的で私よりも利己主義な男だ。こんな人間が一国の陛下だなんて思いたくも無い。こんな人間と話していたくない。私は翼を広げこの場所から飛び立つために風を巻き起こした。

『退きなさい。私が言えるのはそれだけだ』

最後にそれだけ語りかけると、身体を宙に浮かせて空へと飛び立つ。

「また会おう。忌み色を身に宿した黒きアースドラゴンよ」

不気味な笑い声が、地上で聞こえた。

幼馴染事情と契約事情。

ティルゾート国を退かせることに成功した私はヴィザンヌ山へと向かっていた。

生い茂る木々を上手く避け地面に降りると大きな黒い翼を畳み込む。辺りを見渡しても動物一匹すらない、とても静かな空間だった。短い間だがワームが巣食っていたせいもあって動物は逃げ出してしまったんだろう。

私が降り立った地は、人間の”私”が現れた場所だ。二重人格や多重人格でも、ましてやドラゴンの私に寄生しているわけでもない、私自身。私は私であって、他のなにものでもない。

今なら、少しだけわかる気がするんだ。

確信はないけれど、私がここにいる存在理由。

——貴方は、だれ？

一方的に語りかけてきた男とも女とも老若ともとれない不思議な声。あれは、まだすぐ傍にいますような感覚があるんだ。

暫くすると、あの声が頭に響いてくる。

——タイジュ。

以前ラウが話していた生きとし生けるもの全てを見守っている大樹と言うものだろうか。この世界の神様のような存在が、たった一匹のドラゴンに話しかけてくるなんてどう言うことだろう。それとも、やはり黒幕だったのだろうか。

——教えて、私の存在は貴方が仕組んだ事なの？

——ソウトモイウ。

ああ、やっぱり。

こうも簡単に肯定されると腹が立つものがある。どうして私なの

だとか、問い詰めたいこともたくさんある、でもそれよりも一番言いたい事があるんだ。

——・・・どう言う仕組みでこの世界が成り立っているかわからないし、私自身もそう。貴方の存在も信じられない部分もある。でもね、そう簡単に思い通りに私を扱おうなんて思わないで。

実は、人間の時の記憶が封じられたように何も思い出せなくなっってしまった。日本語も、あんなに夢みてた家族の事さえも。それは人間としての私がある手の届かない深い奥の方に引っ込んでしまっているためか、アースドラゴンとして生きていくことを決断したためか、どちらにせよ本能からアルヴィナ国を守らなければならないと言う使命感が少し沸き始めている。

でも、それでもいいと私は思っている。私の行動が誰かの思惑で操られていたとしても、この思いは紛れも無い私自身のものだ。偽者なんて言わせない。掌の上で踊らされていても、操り人形の紐を千切れる程の抗う力を私は持っている。飼い主に歯向かう牙を持っている。

私はやりたいことをやっているだけ。それがこの声の思惑だとしても、利害が一致しただけのこと。

とことん、開き直るよ私は。もう否定的な考え方はしたくないんだ。

——アイツ ト オナジ ダナ ダガ ソレモ マタ オモシロイ。

最後にそう語りかけ、その声は消えた。傍にいた感覚がなくなり、清々するというのはこういうことか。

それにしても・・・あいつ？あいつって、誰だ。

暫く考えていたが、考えても何もでてこない。

城に戻ろうと畳んだ翼を開きかけたとき、視界の端で何かが光っ

た。太陽に当たってきらりと光る何かが、地面にある。目を凝らしてみなければわからないほど小さなものだ。地面に顔を近づけて見ると、小石のようなものだった。だが小石にしては色が鮮やかすぎる。半ば土に埋もれていたそれを掘り出してみると、長方形の形をした箱が現れた。数十年、下手したら数百年、だろうか、長い間ほったらかしにされていたらしく老化がかなり激しいが、まだ所々に鮮やかな光沢のある青色を放っていた。雨かなにかで地面に埋まっていたものが掘り返されたのだろう。

どこかで見た事のある青い長方形の箱。間には切れ目が入っており、端には長い糸のようなものが括りつけられていた。

これが一体何かわからないのに、私は扱い方を知っている。壊さないように器用に切れ目に沿って箱を開けると、端が繋がっており、それはもつと長い長方形になった。

ほんの一瞬、開いた箱の上部の黒い部分が揺らいで三人の人間が現れる。中央には青年がいて、両端にいる女の子と男の子の肩を抱き寄せて笑っていた。それはすぐに消えてしまい細部まではわからなかったが、髪や瞳から彼らが黒を身に纏った人間だと言う事は確認できた。

なんとなく心に引かかって、胸騒ぎする。

懐かしいと思ったのは、誰の思い？

急いで城へと戻ると、歓喜に沸いた声が所々から聞こえてきて、

それが自分に向けられているものだとその時は思いもしなかった。ティルゾート国を退かせ表面上今回はアルヴィナ国の勝利となったから、それで喜んでいるのだろうと。

私はその時、隊長さんのことだけで頭がいっぱいだったからだ。

でも会う事はできなかった。

第四騎士隊寮の前で大きな身体を横たわらせていた私に、副隊長さんがやってきて教えてくれた。足を怪我していたためマリベルに支えられていたが、生きていて嬉しい。彼らは暗い顔で私に告げた。隊長さんはあの後、気を失ってから目を覚まさないらしい。命に別状はないと言うのだが、死んだように眠っていると。それを聞いて不安な気持ちになった。

——契約は、失敗した？

そんなこと、ない。隊長さんの怪我は治って私もこうやって生きている。それに失敗したのだとはどうしても考えることができない。アースドラゴンとしての本能がそう告げているからだ。失敗ではないと。だが、目を覚まさないのはどう言うことだろう。何かしら不可解な事が起きたのだろうか。

しかし今の私にはもう何もできることはない。

だから私は、待つ事にした。

何も考えず、ただ、待っていた。

ドラゴンの姿のまま、第四騎士隊寮の前に横たわり、彼が目を覚ますのを。

数日。

一週間が過ぎようとしていた。

考えることはたくさんあるのに、なぜか無心になって、それこそ

岩のようにそこでじっと待っていた。それを決して苦だとは思わなかった。

城に戻って来た当初は私の周りにはたくさんの人間でごった返し、まるで見世物のように取り囲まれたり、時折話しかけてくる人間もいた。その中に王子やマドレーヌ、アリアーデ達も含まれていたが、沈黙を決め込んでいた私は誰の話の相手もしなかった。ただじっとそこで瞼を閉じて動かず不思議なほど冷静な気持ちで時が来るのを待っていた。

数日経った今では諦められているのか配慮してくれているのかわらないが、偶に人間が訪れるものの、辺りは随分と静かになった。ただ王子だけは毎日私に会いに来る。どんな日も会いにきて、話をするんだ。

私のすぐ傍、汚れることを気にせず地面に座り込むと「昨日は何の話だったか」と笑いながら話し出す。

ティルゾート国との関係で職務に追われているはずなのに、毎日懲りもせず訪れるレブランシュ王子が、私にはわからなかった。ただ昔の事を話すその表情はいつもより柔らかく、だたの友達思いの青年なのだと思うせる。

「忌み色と言われているように、お前の色、私は気に入ってるぞ。それはルートリアの色だからな」

私の返事がないとわかっていても、独り言のように一歩的に喋っては満足して帰っていく。そんな日々が暫く続いていた。

「まあ、忌み色とは言っても我が国ではあまり偏見はないがな。そう言われていたのはずっと昔の事で、そんな考え方はもう廃れてしまっている。が、習慣というものは深く根付いているものでな、良く思わない人間も多少はいるんだ」

それに興味本位もあって彼らが色めくのも仕方がない、悪く思わないでくれ、と苦笑する。

他愛も無い話や今現在城で起こっていること、マドレーヌ達も心配しているということなど様々な話をする。

私は何も考えずにその話に耳を傾けているだけだった。

何の反応もない私に構わず王子は喋り続ける。

「あいつは疎いというか物事に対して執着心があまりないんだ。こちらが呆れるほど淡々と生きている人間だ。小さい頃だったか、狼に噛み付かれても泣き言をひとつもあげずに追い払うんだぞ？面白いだろ。私はまだ世間知らずの幼い子供だったからその時は雛鳥のように泣いていたな」

時折り笑いながら、昔の思い出に浸っている。

「夜の空を飛びたいといつも言っていた。空一面に広がる暗色は、あいつの瞳の色だったからな。なんだかんだ言って、他人と違う自分の色を気にしていたんだろう。前髪を長く伸ばし始めたのも物心付き始めた頃で一番デリケートな時期だな……そうだな、ただひとつだけ、ルートリアにも執着していたものがあつたんだ。それが、ドラゴンだ」

あれはいつ頃からだったか、と王子は空を見上げた。

「城を抜け出して森の中で遊んでいた時、弱りきっていた野生の幼いドラゴンを見つけて連れ帰ったんだ。そのドラゴン、ファイアドレークがルートリアのパートナードラゴンだ。雄にしては珍しく大人しいドラゴンだったよ」

悲しそうに瞼顔を伏せた。

「あれからもう何年も経つのか、……そいつはな、ルートリアを庇って死んだんだ。幼い頃から兄弟のように育ってきた片割れを失って一時期荒れ狂ってた。……だが、お前が現れて変わり始めたんだ。いい方向に。だからヴィトには感謝している。王子としてではなく、レブランシュとして、ルートリアの友人として礼を言いたい。そして、あいつを選んでくれてありがとう」

感謝をされる覚えなんて、ないのに。

「でも、お前は死ななideくれ。今回みたいにルートリアは自分の

身を犠牲にしてもと、危ない所があるんだ」

そこまで話すと、少し離れたところで王子の名を呼んでいる声が聞こえた。もう時間なんだろう。

王子は立ち上がって衣服についた汚れを手で叩き落とすと、「またな」と言って去っていった。

——明日もまた、来るのだろうか。

彼の言いたいことはよくわかる。でも私だって大切な存在を犠牲にしてまでも生きていたくない。その約束は、守れるかどうかはわからない。

今回のことだって、原因は私だ。だから、私はこの身を犠牲にしてまでも隊長さんを守りたい気持ちがある。

守られるだけなんて、もう嫌だから。

何もせずに後悔するなら、何かをしてから後悔したいんだ。

目覚める気配がして私は瞼を開きバルコニーに視線を向ける。閉め切ったカーテンと窓が開け放たれ、——懐かしい姿が現れた。

私の姿を目に留めると嬉しそうに笑う。

そして何を考えたのか、手摺りを乗り越え飛び降りてきた。かなりの高さだ、危険すぎる。私は慌てて横たえていた身体を持ち上げ背中を受け止めると、そのまま背を滑り落ちるように地面へと降り立った。重心が上手くとれなかったのか、足が地面に付いた時にふらついたので鼻先で背中を支えると、倒れることはなかった。

『なんて無茶なことをするんですか!!』

咎める私を愉快そうに目を細めて見ている。

私は心臓が止まるかと思ったのに!

「少し鈍ってるみたいだ。でも何だか身体が軽くてつい」

『ついつて・・・』

それでバルコニーから落ちて死んでしまえば元も子もない。

本当にそれがわかってるんですかと説教をしそうな勢いで言う。

「ヴィトが受け止めてくれると信じてたから」

血のように私の赤い瞳を、黒い瞳で覗きこんで優しく笑う。

「おかえり、ヴィト」

数日ぶりに見る隊長さんは懐かしくて、少し痩せてしまったような気もする。でもふんわりとした笑顔は相変わらずで、私の心を落ちつかせてくれた。その笑顔をみるだけで、今までぽっかりと空いていた隙間が埋まったかのように安心する、と同時に心がざわめく。

『・・・ただいま、です』

満足そうに隊長さんは笑みを深めた。

こんなに無邪気に笑う人だったかな。最初に会ったときは笑うどころか喋らない事も多くて、寡黙な人なんだなって、それが当たり前なんだと思っていた。でも最近をよく笑うしよく喋る。王子が言っていたことは嘘じゃないんだろう。・・・私だって大切な人が、それも自分のせいで居なくなったら立ち直れない。

でも以前の様な面影は今の隊長さんにはもうなかった。

そこで、いつもと何かが違うことに気付いた。服装が違うのは当たり前だけど、不思議に思って頭の天辺から足先まで見ると、違和感を感じたのは前髪だった。

『その髪留めどうしたんですか?』

いつもは目元が隠れるほどの長い前髪が横に流し髪留めで留とめ

られている。そのため双眸が露わになっており、左顔面には契約の証である幾何学模様が浮き上がっているのはつきりと見えていた。
「レブランシュに貰った」

隊長さんはその髪留めに触る。

王子に貰った？それは、一体どういうことだろう。それもあるうことかその証が見えている。まさか見せつけるために、髪留めを、あげた？

『・・・今すぐ外して下さい。そのままだと、自分は契約者だと言ってるようなものじゃないですか・・・！』

「そうだね。レブランシュもきつとそう言う意味も含めて俺にくれたんだと思う。でもそれと同時に守ってくれているんだ」

『守る？』

「これ、アルヴィナ国の紋章。王族や認められたものしか持つ事が許されないもの」

髪留めの先端は六角形で細かい細工が施されている。よく見るとドラゴンの形に見えなくも無い。これはもしかしてアースドラゴンだろうか。それにこの模様は城のいたる所でよく見かける。隊長さん達の制服にだって形が少し違うけれど刺繍のように縫い付けられていた。

王子はこれを隊長さんに与えることで、誰も反論できないようにするってこと？でもそれって、国公認と言う意味じゃないか。

『それでも、駄目、です。駄目なんです。私が勝手に契約しなければ、こんなことには・・・もう隊長さんに迷惑をかけたくないんです、だから、それは駄目なんです』

今までたくさん迷惑をかけてきた。今だってそうだ。私みたいに後ろ指さされるなんてことは、されてほしくない。それは私だけではない。

「どうして？」

隊長さんは不思議そうな顔で聞いてくる。言葉に詰まりかけたが、言わなくてはいけないんだ。

『だって、了承も無しに・・・勝手に契約したんですよ・・・？私を罵っても、殴っても、いいんです』

勝手に契約をするなんて普通に考えたら非常識だ。あの事態では常識も非常識も関係ないかもしれないが、隊長さんにとっては一生を左右されるような事。私の勝手な判断で巻き込んでしまった。

それが、嫌なんだ。

「ヴィトは、罵られたり、殴られたい？」

「・・・いいえ」

そんなSMな趣味は無い。それで喜ぶ生物なんて無い。少なくとも私は嫌だ。

だが、それほどのを私はしてしまったんだ。

一生、取り返しのつかないことを。

「じゃあ、しない」

あっさりと答えが返ってきて呆氣にとられてしまった。

『な、なぜですか？』

「そんなこと、気にしないでいいんだ。むしろ俺の方が謝らなければいけない。無理に契約をさせてしまって、ごめん」

あんなに嫌だって言ってたのに、と悲しそうな表情になる。

『どうして隊長さんが謝るんですか！謝らなければいけないのは私の方なのに・・・！』

確かに嫌だと言っていた、思っていた、でも最終的に決断したのは紛れもない私自身。それについて隊長さんが気に病む必要なんて無いんだ。

顔を伏せた私の頬を優しく撫でて隊長さんは言う。

「俺のせいでそんなに悩んでるヴィトを見たくない・・・そもそも死にかけて俺が悪い」

『それは私を庇ったせいだ』

「だったらお互い様。俺はヴィトを庇い、ヴィトは俺を死の淵から救ってくれた。それだったら駄目なのか？」

そんなの私にとって都合が良すぎる。

隊長さんは、言葉が続けた。

「それにヴィトは俺を選んでくれた。それだけでも十分。この色を綺麗だと、素直に好きだと言ってくれたのはヴィトが初めてだった。そして何よりその身体を俺の色で染めてくれた。こんなに嬉しい事はない。だからもう隠す必要なんてないんだ」

顔を上げてと言われ、伏せていた顔を少しだけ持ち上げる。

眩しいくらいの笑顔で隊長さんは笑っていた。

「だからありがとう」

そう言って、身を屈めたかと思うと、私の鼻先にそっとキスをした。

鱗から伝わる小さな感触に、心が、あったかくなった。

本当に、優しすぎる人だ。

「それに、罵って、殴って、ヴィトだけがすつきりするの、嫌だな」

『・・・はい？』

「俺は何も咎めない。だから、一生、悩めばいい」

なにそれ鬼畜。私はこれからずっと勝手に契約したことについて苛まれ続けなくてはいけないのか！？な、なんて人なんだ、隊長さん！

冷や汗が出てきて視線を逸らしたくなる。でも言葉とは裏腹に和やかに笑うその笑顔から瞳から逸らしたくなってじっと見つめてしまふ。

「悩んで、俺の事だけを考えて、他は何も考えなくていい。それにもう遠慮なんてしなくていいだろう？」

両手をいっぱい伸ばし私の頭を抱え込むように抱きついてくる。

「俺にもチャンスはあるんだって、期待していい？」

遠慮？ チャンス？ 期待？ 一体何の。と瞳をぱちくり瞬かせていると、隊長さんはくすくす笑う。

「好きって言っても信じてもらえない、態度で示しても見事に空振り。だったら、今度こそ信じてもらえるように、俺、頑張るから」
はてな、好き？ 態度で示していた？・・・過去の事を思い返してみると、心あたりがあり過ぎて困る。

思いだしただけでも赤面ものだ。

もしかしてあれは、隊長さんの本心だった？

好きだと言ったのも、スキニシップが激しかったのも、妙に突っかかってくるのも、全部。

でもそれは、ドラゴンだから好きとか、愛玩動物だとか、私は必死に思いこんでいたけど。どうも隊長さんが向けてくる好意はそういうもののじゃないような気がする。気のせいだとは思いたいけど、もう目を逸らし続けるのも限界かもしれない。心のどこかでそう思ってる自分が居る。

それにそう言われて気付かない程、私はそこまで鈍感じゃない。

・・・いやいやいやでもそんなわけないって！ 自惚れすぎだって！
だって、どうしたいかわからない。

こんなの、初めてだから。

頭が混らがって。

『頑張らなくて良いです』

咄嗟に言う。

「頑張る」

満面の笑みで返されてしまった。

私は変化球は苦手だが直球も苦手なんだ、もつとスローボールでお願いしたい。

何て言えばいいのかわからなくて黙っていると、隊長さんはこやかに言う。

「俺、独占欲強いから」

笑顔が眩しかった。

波が静まる表裏。

困った。物凄く困ったことになった。

いや実際本当に困ったのか、と問われると死活問題ほどではないのでそれほど困ってないことになるのだが、なにせ今までやってきたことができなくなってしまったから、戸惑うしかない。

「どうしたの？」

未だ抱きついたままの隊長さんは、急に黙り込んでしまった私に不思議そうな顔をして聞いてくる。

言うべきかどうか少し悩んだが、言うことにした。

『・・・人間になれないんです』

人間の姿、慣れ親しんだ村娘の姿になることができなくなっていた。息を吸うように人間の姿に、息を吐くようにドラゴンの姿になることができていたのに、まるで呼吸の仕方を忘れてしまったかのようだ。

「それが困った事？」

頷くと、そうなんだ。と興味のなさそうな返事が返ってくる。

拍子抜けだ。

『それだけですか』

「どんな姿でもヴィトはヴィトだから」

むしろ隊長さんは私がドラゴンの姿の方が嬉しいのか？ そうなのか？ 大のドラゴン好きだからありえる。

だが、ただでさえ図体が大きい姿なんだ。ずっとこの場所に陣取ったままと言うわけにもいかない。それに見知らぬ人が通りかかるたびに驚かれるのはなんとも言えない気持ちになる。

もう一度、試してみる事にした。

瞼を閉じて、最初にやったように村娘の姿を鮮明に思い浮かべる。

二つに結んだ栗色の髪の毛にくすんだ青の瞳。臙脂色の服には白い前掛けのエプロン。首元には控えめな紺色のリボンを結んでおり、健康的な肌は活発だと思わせる。

するとどう言うことだろう。瞼の裏に浮かんできた彼女の口元が動き私に向かって微笑むと、ゆっくりと暗闇に消えていった。

——こんなふうに笑うんだ。

私とは違う人懷っこい笑い方。自分が想像した事ながら、可愛らしい。

彼女が消えて身体が徐々に縮んでいくのを感じ瞼を開くと、視界が低くなっていた。身体を見ると思い浮かべた村娘の姿で、ようやく慣れ親しんだ姿になり嬉しくなった。

「なれました！」

が、その途端、隊長さんが倒れたから驚いた。

「ど、どうしたんですか!？」

慌てて抱き起こすが、ぐったりとした様子で弱々しく顔色も良くない。

「……なんだか、身体に力が入らなくて」

「やっぱりまだ本調子じゃないんですよ。大人しく部屋に戻りましょう」

「んー……でもなんだろうこれ、急に力が抜けた、感じ」

急に力が抜けた? 今まで普通に話していたのにおかしい。

……もしかして私のせいだろうか。

人間の姿になった瞬間に倒れるということは、何かしら関係あるんじゃないだろうかと試しにドラゴンの姿に戻ってみると、少し楽になったと隊長さんは言う。

やっぱり。

たぶん今まで他の人間を食べて補っていた魔力が、全部隊長さんに向かってるんだ。薄々変だとは思っていたんだ。すっかり忘れていたがあれから少しもお腹が減らないし、常に満たされている状態が不思議だった。

私が生きる分の魔力を隊長さんから奪い取っている。

そして私がそれを使えば使うほど、隊長さんの魔力が消耗して今みたいに倒れてしまう。と、言うことは、隊長さんが一週間も近く寝込んだのって私が暴れたせい？今まで以上に暴れた覚えが・・・なんたること！やらかした！私のせいじゃないか！

私の意志とは関係なく奪っているみたいだから、間違いが起きてしまえばとんでもないことになるかもしれない。ひやつとした。

「また何か考えてる」

落ち込んでいると、眉間をつつかれる。

そんな顔に出やすいのかな。

「非常に言いにくいことなんですが、その・・・隊長さんが倒れたのは私のせいかもしれないんです」

いえ、私のせいですと言いなおし、魔力を奪う云々を話すと、愉快そうに目を細めて笑う。

「養うよ」

やめてー！私には笑えない状況なんだ！

「や、養われるだけは嫌です！できることなら何でもしますから、言ってください！」

「何でも？」

「何でも！」

でなければ気持ちがおさまらない。

「あ、でも私ができる範囲でお願いします」

飛ぶとか、襲うとか、火を吐くとか、叫ぶとか、図体が大きいから風よけとかにもなるかも。

なんて事を真剣に言っているとまた笑われた。こっちは必死なんだけど。

「そう言えば、魔力がこんなに豊富なのに魔術師にはならなかったんですか？」

マドレーヌが言っていた魔力を測定できるものがあるのなら、と

んでもない結果になりそうだ。モランテ家に勧誘されてもおかしくない、それほど強くて不思議な力だと私は思う。そもそも何の精霊の加護を受けてるんだったか、隊長さんを経由して私の身体に溢れる魔力の源は、今まで経験したことのないもので、風とも、水とも火とも地とも言えないものだ。優しくて力強い、でも繊細で、今まで感じたことの無い心地よさ。

一体、何者なんだろう。

「苦手なんだ。魔法」

私の問いかけに苦笑して言った。

意外だ。外見で言えばどちらかというと騎士などの肉体派ではなく魔術師などの技術系なのに。

「一時期レブランシュと練習してた。でも魔力を制御できなくて、城を一部破壊してしまっただけ」

色々な人に随分怒られたよ、と。魔力があっても才能がなければ使えないものなのか、覚えておこう。

「俺にとっては無駄なものだから、いくらでも奪ってくれてかまわない」

「でも今回みたいに倒れてしまうこともあるんですよ」

私の意志とは関係なく奪っているようで加減のしようもないから、正直不安だ。

何れにしろ、まだ暫くは人間の姿になるのを控えていたほうがいいかもしれない。私が暴れたせいで根こそぎ奪ってしまったらしく調子が出ないんだろう。

それに、慣れ親しんだ愛着もあるこの姿に少しだけ――違和感を感じるんだ。頭の天辺から足のつま先まで、鱗も翼も牙もない人間の自分と言うのが考えられず、今まで人間として過ごしてきたのが不思議なくらいに思える。

思い出しかけていた人間の記憶も全く思いだせなくなっており、あんなに頻繁に見ていた白昼夢もあれから見なくなった。やっぱり

ただの夢だったのかもしれない。それを少し寂しく感じる部分もあるが、楽になった、というのが本音だ。今まで人間とドラゴンの考えに挟まれ悩んできた事も、今ではどちらかというところドラゴンの考えの方が勝っており、昔ほど悩む事はなくなっている。考え方がひとつだけというのはこうもすっきりするものなんだ。

ドラゴンとしての自分が確立した。
とでもいうのだろうか。

しかし、アースドラゴンが契約者から離れられないというのは、こういうことがあるからなのか。

・・・うん？あれ？だったら私は一生隊長さんから離れられないってことなのか・・・？

ドラゴンの姿に戻ると、見慣れた金髪が視界の端でちらりと見えた。

この時間帯は確か王子がやってくる頃だ。視線を向けると、隊長さんもつられてそちらを向く。王子は私たちの姿を目に留めると優雅に歩いてきた歩調を速めて、最後の方は走ってきた。

「お、お前たち、いつの間につ・・・！！」

息を切らしながら私と隊長さんの顔を交互に見る。あんなにまじめに走っている王子を見たのは初めてだ。いつも優雅に歩いてくるから走れないものだと思っていたよ。

視線を私の方に向けると、嬉しそうに顔を綻ばせた。

「ようやく目覚めたか！お前も随分頑固だったな！」

『それを言うなら貴方もです。毎日ご苦勞様でした』

本当に。毎日会いにきて話をして帰るなんて、なかなかできないものだ。それに忙しい身なのに職務の時間を削ってまで来てくれた。おかげでいろいろな話が聞けた。

「やはり聞いていたのだな」

満足そうに王子は頷く。

『右から左へ受け流してました』

「なに！？」

『冗談です』

「お、お前も言うようになったな・・・」

反応が面白い。一国の王子をからかうなんておこがましいよ！と言われそうだが、彼のへたれっぷりを知っている私としてはからかいたい。それぐらいしても罰はあたらないだろう。隊長さんも笑っていることだしお咎めは無しと言うことで。

そんな時、遠くで空気の震える音が微かに聞こえた。

『何か、聞こえませんか？』

不思議に思い空を見上げると、遠くで白い物体が浮かんでいる。雲かと思ったが違うらしい。つられて見上げた隊長さんや王子もそれを見とめると、首を傾げていた。

目を凝らして見ているとそれはだんだん近づいてきて、形がはっきりとしてくる。蝶だろうか、だがそれにしては羽が全体に広がっておらず、水平だ。それに蝶よりも大きい。蝶どころか、人間よりも大きい。

太陽の光に当たって金色に染まっているそれは――。

「あれは・・・！」

正体に気づいた王子が息を呑み目を見張る。

高らかな嘶きが響き渡った。

——ユニコーンだ。

それも、かなり大きい。

ユニコーンは私たちの目の前に着地すると、純白の大きな翼を畳み込む。神々しいまでの姿は私が以前見たユニコーンより身体が大きく筋肉質ながつしりとした体格だ。背に誰かを乗せているらしく、その姿を見た王子は苦い顔をした。

「エクトル・・・なぜここに」

その人物はユニコーンから颯爽と降りるとにやにやと嫌な笑みを浮かべながら近づいてくる。

「かの王子の真似をしてみたのだがな、案外、自ら動くというのも新鮮でいいものだ」

紫がかった濃い青の短髪に、黄金色の瞳。思ったより若い容姿。睨み付けるだけで人を殺せそうなほど冷たく鋭い眼光は間違いない。ティルゾート国の陛下だ。突然の訪問にぴりぴりと緊張した空気が走る。

「一体何をしに来た・・・！」

「まあ待て。そう怒鳴るな」

たった一人できたのだろうか、辺りを見渡しても従者どころか人の気配すらしない。

近くで歩んでくると、視線が王子から私の方へと向く。

「また会ったな、黒きアースドラゴンよ。黒とはまた歪な色よ。不吉で禍を齎すとされる忌色」

見事なものだと細められた瞳に、身震いした。私はこの瞳が苦手だ。本能から後ろに後退すると、変わりに王子が進み出て私と陛下の間に立つ。あの温厚な王子が張りつめた表情で睨みつけている。

「・・・一概にそうは言えないだろう。それに彼女は古き考えを覆すほどの功績を国のために尽くしてくれた。我らの聖獣を侮辱するのならば、許さない」

「ははっ、笑えるな。所詮は聖獣の力を借りなければ我らを退かせる事などできぬ小国のくせに」

「それはそちらも言えた義理ではないようだが？」

ユニコーンを酷使して早く戦争を終わらせようとするなんて無謀すぎる。もしかしたら全て全滅してしまうかもしれない言うのに。「使えるものは使う。それにお前たちの所とは違ってユニコーンは一匹ではないのだから、変わりはいくらでもいる。お前もそうなんだろ。待ちに待った聖獣が現れて腹の底ではほくそ笑んでいるんじゃないのか」

「聖獣は道具じゃない。それに彼女は私の大切な友人だ。変わりなどいない！」

きっぱりと言い切った王子に対して、ティルゾート国の陛下は参ったと言うふうに関手を上げた。

「これはこれは、アルヴィナ王に比べてレブランシュ王子殿は身内に対してはとことん甘いな。まあそういう馬鹿正直なところは、案外嫌いじゃない」

「私は嫌いだ。その腐った根性を叩きなおして出直して来い……！」

嫌われてしまったな、と含み笑う。

——かっこいい。どうしよう王子がかっこいい。まさか庇ってくれるとは思わなかったから嬉しかった。友人だと、変わりはいないんだと言われて嬉しくないわけがない。

金色の瞳が私の隣へ向く。

「なるほどな、それがお前の契約者か。……やはり、欲しいな」何を基準に嫌いじゃないとか欲しいとか言っているかわからないが、おかしい。人や生き物をただのもの、無機物を見ているかのような視線で見ている。それは王子に対しても、私に対してもだ。隊長さんを見つめるその瞳は悪寒がするほど気味が悪い。契約者ごと手に入れると言っていたことを思い出して私は牙をむき出し低い声で唸り威嚇した。

本当は王子よりも前に進み出たいのだろうが、まだ調子の悪い隊長さんは私に寄りかかっていた。だが片手は腰の帯剣に添えられ警

戒している。

「一筋縄にはいかないようだ。――だったら国ごと手に入れるまで、か」

契約者ごとから国ごとと大きな規模になりすぎた。どれだけ自分中心に世界が回っていると思っっているんだこの人は。

「と思っていたが、残念ながら今回の用事はそれではない。こんなにゆったりとしている場合ではないのでな」

「だったら何をしに来たんだ」

「話し合い」

にやりと笑う。

「話し合い？・・・何を企てる。用事があるのならば書簡で済むだろう」

「生憎と、俺様は書簡や手紙のような形式的なものは苦手なんだ。

訪れる旨を一々手紙でやりとりしていても埒が明かない。時間がかりすぎる」

だからと言って普通自分から乗り込んでくるものだろうか。私も人のことを言えた義理でもないが。

ティルゾート国の陛下は率直に言うぞ、と鋭い瞳を細めた。

「いずれこの大陸には魔物が攻めてくる。同盟を組まないか」

自信たっぷりにした顔は、やっぱり好きになれない。

魔物なんてこの世界ではお伽話でしか登場しない架空の生き物だ。信じられるわけがない。

昔話は御伽話。バジルは美味しいらしい。

「魔物？何を御伽噺のような事を。そんな戯言信じられるわけないだろう」

「そうだな。それが普通の反応だ。だから我らは一族に語り継がれていることを安易に他言しなかった。言っても信じて貰えないからな」

魔物なんてものは御伽噺の中の悪役でしか聞いたことが無い架空の生き物だ。以前ラウに聞いたときにそう答えてくれた。

突然子供の言い訳のような事を言い出し王子も啞然としている。

そんな王子に向けてティルゾート国の陛下は何かを投げて寄越した。

古い、小さな本だ。

「我が一族に受け継がれている書物だ。読めばわかる」

「一体、どう言うつもりだ？」

それが本当ならば、ティルゾート国の王族に纏わる書物をこんなぞんざいに扱うなんて気が知れない。

「俺様はもう飽きるほど読んだ。別に無くとも構わん」

王子は躊躇い、本と陛下の顔を見比べていたが、促されてその怪しい本をゆっくりと開いた。外見から見て劣化しているようにも見たが、中は新品そのものだった。魔力の気配を感じたので、魔法がかけられているのかもしれない。

気になり上から覗き込むと、その本には滲んだ文字の羅列と挿絵が載っていた。生憎私は文字が読めなくなっていたので何が書かれているのかわからなかったが、王子はぱらぱらと簡単に目を通して最後の項まで捲ると、目を見開いて「まさか、いやそんな」と小さく呟く。

何が書かれていたんだろう。

王子の反応に満足したのか、陛下はにやりと笑う。

「言っただろう、だから我らは我が国を守るためならばどんな手段も厭わない。ユニコーンしかり、お前たちとの戦争もそうだ。何れ来る災いのために力や兵力を備える必要があるからそうしてきたま
でだ」

王子は考え込んでいた。物思いに耽っている様にも見える。

「こちらの軍勢はお前たちの数倍以上だ。もとより他の国の事情など知らぬ、我が国だけを守るために勢力を伸ばし続けた。しかし先の戦でのあのアースドラゴンの力、もうこれ以上戦力を削られるのはこちらも痛い。それに時間も残っていない、暢気に戦などやっておれん。もう限界だ。――降伏しろ、と本当は言いたいが、簡単に受け入れて貰えないだろう。だから助かりたくば、協力しろ。お前たちにとっても悪い話じゃないだろう？」

戦争をしないかわりに、御伽話のような存在を相手にするため手をかせ、と。それが、同盟を組むと言う事なのだろう。

一体その小さな本に何が書かれていたのだろうか、王子は弱々しく首を横に振った。

「・・・信じられない。そう言ってまた私達を陥れようとしているのではないのか」

「まさか。信じるか信じないかはお前達次第だがな。まあ、わざわざ俺様が直々に出向いてやってるんだから、少しは信じてもらいたいかな」

「もしそうならば！ 最初から言って――！！！」

「それでお前は信じたか？」

陛下は嫌な笑みを止め、無表情で王子を睨みつける。

「それは・・・」

「それを伝えて、お前たちは信じるか？ いいや、信じる筈がない。絶対そうだ。今だって半信半疑なはずだ。”そんな馬鹿げた存在がいる筈無い。ティルゾート国の陛下は頭がおかしくなったんじゃないか”ってな」

凶星なのだろう、王子は苦い顔をして黙ってしまった。

「それに今より数百年前、我が一族のひとりがアルヴィナ国にこの事を進言したそう。だが受け入れては貰えなかった。最初に信じなかったのは、お前たちの方だ。・・・やろうと思えばお前たちの国を捻り潰すことは容易い。譲歩してやっってる事を忘れるな」

王子は何も言わずに項垂れている。

もう時間だ、とティルゾート国の陛下はユニコーンに跨ると、ユニコーンは嘶き大きな翼を広げた。

「お前たちのほうで好き勝手に話し合いをすればいい。俺様は多忙の身だから、これで帰らせてもらう。色良い返事を待ってるぞ」
風が巻き起こり、ティルゾート国のエクトル陛下は嵐のように去っていった。

協力するか、降伏するか。それとも今度こそ滅びるか。どちらにしろ大国との関係は切っても切れない。

王子は立ち尽くしており、手に持った本を見つめていた。

「レブランシュ」

まだ覚束ない足取りだが、心配そうな顔色で隊長さんは青ざめ立ち尽くしたままの王子の元まで歩くと、無言のまま本を手渡されていた。

『何が書かれているんですか』

気にならない筈が無い。

隊長さんは最初の項を開くと、私にもわかるように読み始めた。

「かつて――」

かつてどこかの世界が大地平面説を唱えられたように、この世界の大陸は平面になっている。

球状にはなっておらず、必ず端が存在するその向こうには水が滝

のように流れ落ち、中央にある核に降り注ぐ。

核は大陸から流れ落ちる水を原動力として、数多の大陸を宙に浮かせていた。核を中心にして、いくつもの大陸が存在している。

その大陸は徐々に丸みを帯び、一つの球状となった。その球状は個々として世界となり、そのひとつに存在する大陸を我々はバルトリア大陸と名付けた。

「・・・これは、昔話だ」

『昔話？』

「子供の絵本によく載ってる。この世界ができた成り立ちと言われているけど、本当かどうかは誰も知らない。・・・でもこの先は、はじめて見る」

しかし悪しきものが現れて世界を壊していった。

困った我々は一際大きな世界に封じ、それが地上に出て世界が滅びぬよう監視をつけた。

だが何れ悪しきものは力を蓄え地上に出てくるだろう。

それまで、監視がこの世界を生かしてくれる。我々にできるのは、ここまでだ。後は時の流れるまま、見守り続けよう。

なんだか投げやりな最後が気になるが。簡潔にまとめると、創造主らしからぬ存在がいて、世界を創って、突然現れた悪いものを封

じた、そしてそれがいつか出てきてこの大陸を襲う。こういうことだろう。

うん、なんだかややこしい。どこの創作物語ですか、なんておちやらけた考えは心にしまつて置くことにする。王子たちにとっては、深刻な問題なんだから。

『その悪しきものが、魔物ってことですか？』

「そう言うこと、になるのかな」

隊長さんもよくわからないようだ。私もそうだ。行き成りこの世界の成り立ちを聞かされても理解できない。

『でもそれはただの昔話で、本当かどうかかわからないじゃないですか』

大抵その様な類の話は昔の人が作り、脚色されながら現代に語り継がれているものだ。そんなことが本当にあつたかどうかなんて、私たちに確かめる術はない。

「その本には強力な魔法がかけられている。それこそ、人間では絶対にかけれないほどのものだ」

今まで黙っていた王子が疲れた様子で話し出す。

「推測でしかないが、その本はかなり昔のものだろう。下手をしたら、数千年前、とも。それに、ソレが現れると記されている暦が――近いんだ」

私には蚯蚓がのたくつたような落書きにしか見えないが、王子がそう言うのならきつとそうなのだろう。起源書でも預言書でもあるこの小さな本は、なぜティルゾート国にしか伝わっていないのか不思議だ。

また考え込んでしまった様子の王子に、隊長さんが近寄って腕を取った。

「レブランシュ、顔色がよくない。城へ戻ろう」

「・・・それを言うならルートリア、お前もだろう」

私も言わせてもらいたい。

『どちらでもいいですから二人ともさっさと屋根のある所に戻って

ください。風邪ひきますよ』

二人とも負けじと劣らずに病人のように白い顔色だ。

王子はそうだな、と笑って本を受け取り城へ戻って行った。
隊長さんは名残惜しそうな顔をしてたけど、部屋へ帰した。

なんだか、酷く疲れる。

国から大陸へ、大陸から世界へ、規模が大きくなりすぎて頭が混乱しそうだ。

あれから数日経ち、昼寝をしていた私の元にマドレーヌとシフォンが訪れた。惰眠を貪っていたわけじゃないぞ。この姿だと城の中をうろろとできないんだ。だから大人しくしているしかない。それに、今はある意味大変な状況らしいんだ。主に王子が。

懐かしいマシュマロメロンズが現れて嬉しい。

初めて見せる私の姿に怯えないだろうかと心配だったが、マドレーヌはいつもと同じだった。だがシフォンは少し抵抗があるのかマドレーヌの後ろに隠れている。少し悲しいが逃げられるよりましだろうと自分に言い聞かせた。

「この間は置いて行ってしまつてごめんなさいね」

『仕方ないよ。非常事態だったんだから』

「それと、ありがとう。勝てたのもあなたのおかげよ」

感謝される覚えはないんだが、素直に受け取っておく事にした。私は私のために行動した、それが結果的に感謝される事になっただけのこと。ここで変に否定したり突っ掛っても仕方が無い。

「ヴィト、ちゃん！」

急にシフォンがマドレーヌの後ろから出てくると、両手を豊満な胸に添えて潤んだ瞳で見上げてきた。肩が微かに震えてる。

『怖いなら、無理しなくていいよ』

「や、やだ・・・！私は大丈夫だもん！」

恐る恐る近づいてきて、手を伸ばす。ゆっくりとした動作だった。私が私じつとしていた。

小さな掌が鱗に触れると、優しく撫でられる。そして、えへへ、と嬉しそうに笑って今度は勢いよく抱きついてきた。

可愛すぎる。頬ずりしたい。が、怖がられるのも嫌なので我慢する事にした。

「あのね、アリアーデちゃんも会いたいって行ってたよ！でも今お城の中が慌しくて、お仕事が忙しいみたいなの」

『シフォンは仕事よかったの？』

「お姉ちゃんに頼んだの！」

「正確にはモランテ家、ね」

モランテ家の権力を使うとは恐るべし！マドレーヌにしてシフォン、やっぱり双子だこの子たち。

「あなたの同室の子もそわそわしてたわよ。会いたいのでしょうけれど、踏ん切りがつかないようね。彼女も彼女で問題を抱えているようだからそれも関係あるんでしょう」

マリベルの事だろう、会ったのは副隊長さんと一緒に来たときだ。話もせずにそれっきりだから、会えるのならば会いたい。結局喧嘩別れのように説得してしまったし、それを気にしているのかもしれない。それにしても問題を抱えているってどう言うことだろう。副

隊長さんの怪我のことかな。

暫く他愛も無い話をして二人は帰って行くと、擦れ違いに腕に何か黄色いものを抱えた王子がやってくる。隣には神巫様の所で会ったマイヤさんもいた。足の長さが違うためか、王子の後を雛鳥のように必死に追いかけてくる彼女は可愛らしかった。

王子？相変わらず白馬に乗ってそうな容姿だったよ。

でもなんだか顔色が優れない。

「・・・同盟を、受けることにした」

あまり嬉しくないのだろう。だが王子はきつと受け入れるだろうと私は思っていた。どんな理由があれそれが国の平和に少しでも繋がるのならば自ら危険を冒すような人だ。だがそれにしても落ち込み具合が酷い。そんなにティルゾート国の陛下の言いなりが嫌なのだろうか、確かに凄く仲が悪そうだったが。

「いや、あいつらがうるさくて適わないんだ。」今までの国の歴史を裏切るおつもりか！”とか”これを王が知れば激怒なさいますよ！”とか、うるさい。説得するのに三日はかかった」

あのおじさんたちのことだろう。ご苦労様ですと言うと、大きなため息をつく。でもオルランドさんが味方をしてくれて助かったとも言おう。あのダンディなおじ様だ。私もあの時は本当に助かったな。

しかし先ほどから気になってしかたがないものがあるんだが。

『それ、なんですか』

王子に抱えられているそれを覗き込むと、もそもそ動いている。最初は黄色い首巻のようなものかと思ったが、どうやら生き物らしい。

「バジリスクのバジル。抱えていると落ち着くんのだ」

なんだその気の抜けた顔は。そしてなんておいしそうな名前なんだ。・・・じゃない。これがあのバジリスクか、はじめて見た。

身体は黄色い羽に覆われていて、ぎょろつとした瞳に、首は忙し

なく上下左右に動いている。頭には赤い鶏冠が揺れていた。時々、こけっ、と頓狂な声で鳴いている。

——どこかで見た事がある。だがどこで見たのか思い出せない。確か黄色じゃなくて白だったような気もするようないような。

バジリスクのバジルは辺りをきよろきよろと見渡していたが、私の姿を目に留めるとかつと瞳を見開いた。

『あなただれですかそうですか！たべるつもりですかそうですか！おいしくはないんですがおいしいそうですよ！たべますかでもたべられたくありません！』

突然喚き始めたバジリスクのバジルに驚き覗き込んでいた頭を引っ込める。

『とべないどらこんでわるかったですねそうですね！ばじるはうらやましいですよそうですよ！』

「お、おい落ち着けバジル」

王子が必死に宥めているが羽をばっさばっさとならして暴れている。今にもこちらに襲い掛かりそうな勢いが激しい。

とりあえず誰と言われたので自己紹介することにした。

『ええっと、私はヴィト。あなたは？』

『ばじるはばじるですよですよ！あなたいいどらこんですねみとめます！さあばじるともだちになりましょうそうしましょう！』

そしてこけっ、とひと鳴きすると突然大人しくなった。なんだこの生き物は。

「バジルちゃん、お腹が空いているんじゃないでしょうか」

マイヤが王子の腕ですっかり静かになったバジルの頭を撫でている。あんなにかつと見開かれていた丸っこい瞳が細められていた。

「先程与えたばかりだぞ？」

あげたんかい。

『・・・いえ、私に驚いただけですよ』

そう言うと二人は不思議な顔で首をかしげていたが、私が動物とも話せることに気付いてなるほどと納得した様子で頷いていた。

私も一応人間から見たら動物の部類に入ると思うんだけど。

そんなにドラゴンらしくないの？ねえ？ドラゴンの姿なの？・・・

・ちよっと落ち込んだ。

ところでどうしてマイヤさんまで居るのか聞いたら、マイヤさんはバジルの世話係も担っているようだ。バジルと神巫様が被ってしまい噴出してしまったのは内緒だ。悪寒を感じたのも気のせいだと思う。

王子たちを見送っていると、突然上の方からくすくすと笑い声が降ってくる。見上げれば、バルコニーの手摺にもたれ掛かりこちらを見下ろしている隊長さんが居た。

『い、いつからいたんですか・・・！』

「ずっと居たよ」

『ずっと？』

隊長さんは少し考える。

「マドレーヌたちが来た頃から・・・？」

『ほとんど最初からじゃないですか！・・・お願いだから気配を消さないでください』

「ごめん、楽しそうだったから邪魔したら悪いかと思って」

なんで気付かなかったんだろう。人間よりも勘は優れていると思っていたんだけど、隊長さん相手だとどうも働かないような気がする。これが所謂身内には甘いと言う事だろうか。

『それとまた飛び降りてこないでください』

飛び降りる気満々だったのか、手摺に足をかけようとしていた隊長さんは危ない事を諭された子供の様に渋々と退いた。

隊長さんと居ると、いつもはらはらさせられて命が幾つあっても足りない気がする。当の本人は笑ってばかりだ。

・・・なんか、この状況何かの物語に似てないか。

男の人が女の人のバルコニーやテラスの下に現れて愛を語る場面。しかし彼らの家は敵対していて、それでも恋焦がれる彼らは駆け落ちしたが結局失敗してしまう悲恋話。

だが私は愛を語るなんて気障な事はしないし恥ずかしくてできない。いやしようとも思わないけど、なんとなく思い出したんだ。でもこの物語の題名が、どうしても思い出せない。どこで見たのか、読んだのかも忘れている。遠い記憶の彼方に置き忘れてしまった、と比喻すればかっこいいのかもしれないが、もどかしくて気持ち悪い。

これは、一体誰の記憶？

まだ本調子じゃない隊長さんを何とか丸め込んで部屋へ戻すと、ドラゴン舎の近くで大きな声が聞こえた。今日はなんだか周りが慌しいな。

甲高い声だから、女の子だろう。目を凝らして見ると、なんとマリベルとランスさんだった。

何やら言い合いをしている様子だ。とは言ってもマリベルが一方的に怒鳴っているようだ。

なんだなんだ、もしかして痴話喧嘩？

好奇心から二人の様子を伺っていると、怒鳴り疲れたのかマリベルは大人しくなり泣きそうな顔で俯いた。その頭をランスさんが優しく撫でている。

——こ、これは・・・いけ！ランスさん！今すぐ抱きしめるんだ！男が廢るぞ！

二人の間に何があったのかは知らないが、マリベルはランスさんのことが好きで、マドレーヌもマリベルは何か問題を抱えていると言っていたからその事かもしれない。

もしかして二股かけていたのかランスさん、それはいかんぞランスさん。まるでステファノスさんじゃないかランスさん！いかん、妄想が膨らむよランスさん！

私の思いが通じたのか、ランスさんは撫でていた手を小さな肩に添えて優しく抱き寄せた。惚れ惚れするほど絵になる二人だ。

よし！やるじゃないか！それでこそ男だ！と意気込んでいたが、マリベルはランスさんの手を荒々しく振り解き距離をとってしまう。そして。

「ランスお兄様の馬鹿！！」

一際大きな声がここまで聞こえて、そのまま走り去って行った。ランスさんは罰が悪そうな顔をしてそこに立ち尽くしていた。

棘のない花だっておっかない。

同盟を受け入れる旨を向こうの国に伝えたということは、暫く経ってからのことだった。それについて様々な意見が飛び交い批判するものや賛同するもの賛否両論あったが、とりあえず同盟を受け入れる形で収まったようだ。今まで敵としての存在が突然味方になることに戸惑うものも多いようだが、王子、頑張れ。

そして私は目の前に居るマリベルに戸惑っていた。

視線を合わせるように首を曲げると、彼女は鼻先に抱きついてきた。

ドラゴンの姿のまま彼女に会うのは初めてだが、戸惑いもなく触れてきたのには驚く。ファイアドレークより一回り大きく、誰が見ても躊躇してしまうだろうに。

微かにその小さな身体が震えているのに気がつく。

「わ、私達・・・友達、よね？」

彼女にしては弱々しい声で、いつもの自身に溢れた覇気はなかった。

友達かと問われ頷くと、マリベルは小さく息を吐く。

「私が、私じゃ・・・なくても？嫌いに、ならない？今のままで居てくれる？」

かなり動揺している。何がそこまでマリベルを不安な気持ちにさせているんだろう。

心当たりがないこともないが、彼女の言葉の答えは決まってる。

『誰であっても、私がマリベルに対する気持ちは変わらないよ。マリベルだって人間じゃない私を友達だと言ってくれた。今だってこ

うやって触れていてくれる。認めてくれている。嫌いになったりなんか、絶対しない』

嫌われることはあっても、嫌うなんてこと天変地異が起こっても絶対ありえない。断言できる。それはマリベルに限らず、私が出会い、私の存在を認めてくれた全ての人間にも言えることだ。

「・・・ほんとう？」

伏せていた瞳が私を見上げる。潤んだ、副隊長さんと同じ紺色をした瞳は大きく見開かれて今にも零れ落ちそうだ。

そこで、彼女が化粧をしていない事に気がついた。めったな事が必要れば化粧をせずに部屋から出ないというのが彼女なのに。こうしてみると、髪が短かければ美のつく少年だと言われてもわからないだろうな、と・・・邪念ははらおう。

『何かあったの？』

そう聞くと、弱々しく笑って頭を振る。

「ううん、何でもないわ。忘れて」

何でも無いということはないだろう。こんなに意気消沈している姿を見てしまえば放っては置けない。だが本人が何でもないと言うのなら、無理に聞くことはできないだろう。

ああ、でもランスさんとか、ランスさんとか、ランスさんとかの話は是非聞きたい。

『でも』

「わ、私が忘れて、って言ってるの！それより、見事な黒ね！」

あからさまに話を逸らされたが、そんなに話したくない事なのだろうか。

『変、かな？』

「いいえ、思っていたよりも野蛮じゃなくて綺麗だわ！私は好きよ」
マリベルはありのままの感情を素直にぶつけてくるから好きだ。

——ああ、駄目だ。やっぱり聞きたい。

『ランスさんと何かあったの』

これは、直球に聞きすぎたかな。

マリベルは目を見開き私を見上げる。

「・・・もしかして、見てたの？」

『・・・ここから見えたよ。”ランスお兄様の馬鹿！” って』

こうなりやとことん聞こう。気になって夜も眠れないんだ。冗談だけ。

私の言葉に、恥ずかしそうに赤く染めた頬に両手を添えている。

「やだ・・・！見られてたのね」

『もしかして血が繋がってる、とか？』

お兄様と言っていたし、もしかしての腹違いとか、それで悩んでいるのかと一瞬頭を過ぎったが、マリベルは首を横に振った。

「いいえ、兄弟じゃないわ！その、小さい頃から遊んでもらった名残なの。本当のお兄様みたいに良くしてくれたわ。でも今では何だか恥ずかしいから、人前ではお兄様って呼ばないの」

なるほど、そういう経緯があったのか。もしかしてランスさんがマリベルに対してさん付けだったり敬語だったりするのも、合わせているのかな。ふたりだけの秘密を暴いてしまったようで心が痛む。ごめんよマリベル。ふたりにそんな暗黙の決まり事があったなんて知らなかったんだ。

『マリベル、私応援するよ』

ドラゴンだけど、一応雌だから恋の応援は大丈夫だと思う。たまには女の子らしくするのも良いかもしれない。が、意気込んでいる私とは裏腹にきょとした表情が返ってきた。

「応援って、どうして？」

『ランスさんのことが好きなんだよね？兄妹のように育ってしまったが故にその壁を乗り越えられなくて、悩んでるんだよね』

マリベルは驚いた表情になって慌てている。

私の見間違いじゃなければ、いつもランスさんの話をする時のマリベルは瞳がきらきらと輝いていて、恋する乙女の表情だ。それを恋と言わずして何と言う。

いやあ、恋する女の子だなあなんて思っていたら、全く想定外の答えが返ってきてこっちが驚いた。

「ちょ、ちょっと待ちなさい！いつ私が両思いになりたいとか言ったのよ！？そしてどこにそんな想像力があるのよ！思い込みにも程があるわ！」

少しからかいも含めて過剰に言ってしまった所もあるが、必死な形相で否定されてしまった。

『え、違うの？』

違うわよ！と怒鳴られてしまった。や、そんなまさか。だって今までの彼女の態度を見ても、明らかに意識をしていたし、嫌よ嫌よも好きのうちと言うじゃないか。ツンデレなマリベルならありえる。でもマリベルは、私が思っていたよりも真面目な顔をして言う。

「ランス様、・・・お兄様は、好きというか、まあ好きだけど！それはただの憧れなの！ただそれだけ！お兄様って男性として凄くかっこいいじゃない！紳士的だったり、頼りがいがあったり、だから私もあんなふうにな——」

突然はっとした表情になり、慌てた様子で口を噤む。

『あんなふうにな？』

「な、何でもないわ！忘れなさい！それよりヴィトのことを知っていたわ！」

また強引に話を逸らされて、もうそれ以上ランスさんのことは聞けなかった。まあマリベルが少し元気になったから良いとしよう。

隊長さんの調子も良くなり、人間になってもいいよと言われたの

で、久しぶりに人間の姿になることができたが、やはり以前より違和感を感じるのは仕方ない。

そのまま隊長さんに連れられ城の中へ連れていかれた。

コンパスの違う足だが、歩調を合わせてくれている。

「どこに行くんですか？」

「同盟国となったよね」

私の質問には答えずに行き成りそんな事を言う。相変わらずのマイペース。とりあえず頷いておいた。

「それで、交流会が催される」

「なるほど」

最近周りが騒がしかったのはそのせいか。

今まで敵対していたのだから、仲良くなるためにはそのぐらいの行事は必要だろう。そんな面倒な事、あの陛下だったらやらないと思っていたが、何か思惑でもあるのだろうか。疑うのは私の専売特許。同盟記念の交流会、と言えば響きはいいのかもしれないが、面倒な事が起きないといいんだけど。それに喧嘩してきた相手といきなり仲良くしてください、と言われてもギスギスするだけじゃないかと少し心配だ。

「今日なんだ」

「・・・急ですね」

素直に驚いた。

「もうずっと前から決まってたよ。ヴィトが知らなかっただけ」

「まあ、そうでしょうね」

ずっと城から遠いところにいたし、噂に疎いのも仕方が無い。他人事にそう言う、隊長さんは歩みを止めて私に振り返りにっこりと笑う。

「蚊帳の外は駄目だよ、ヴィト」

え？と呆けていると、いつの間にか目の前にシフォンとアリアーデが立っており、私の両腕を掴むと無理やり歩かされる。

「ええ？シフォン？アリアーデ？どうして」

「さくさく歩くわよー」

「うふふー」

何だかふたりの笑顔が怖い。一体どこに連れていかれるんだろう、挙動不審になってしまう。

「いってらっしゃい」

笑顔の隊長さんに見送られながら、私はシフォンとアリアーデに連れていかれた。

着いた部屋はマドレーヌの部屋だった。ようやくふたりから開放され一息ついていると、部屋の中には背の高い女の人が居て私たちに気づくと微笑みながら近寄ってきた。

「これはこれは麗しきお嬢さん。久しぶりだな」

「ミネットさん？」

真っ赤に燃えるような髪にステファノスさん並の口説き文句。間違いない、ミネットさんだ。

いつもより華美な服装で正装をしているのはわかる。これから催されるという交流会のためだろう。だがなぜ、男物なんだ。女の人には舞踏会に行くような動きにくいドレスを着るんじゃないのか。が、似合ってるから何も文句は言えない。まさにこれが所謂男装の麗人。かっこいい。

ミネットさんに見惚れていると、マドレーヌが部屋の奥から現れた。

「来たわね、ヴィト」

長い髪はお団子にされており、クリーム色のふんわりと広がったドレスを着ていた。綺麗だ。それしか出てこない。私が男だったら即プロポーズしてる。もしくは結婚を前提にお付き合い・・・って私はミネットさんか！

「それはそうとあの子はいないのかい？桃色の髪をした可憐な少女

だよ」

「マリベルのこと？あの子は確か今日は参加しないはずよ。用事があるとかで」

そんなの私は全く聞いていない。というか交流会自体聞いていない。知っていたのなら誰か教えてくれてもいいじゃないか！

「それは残念だな、可憐な華とも謳われる彼女を一目見ておきたかったんだが」

「棘があるから気をつけたほうがいいわよ」

マドレーヌは面白そうに笑う。

「棘ごと愛すよ。それにそのぐらいの障害がなければ恋は燃えないというものだろう？」

ぐふ、愛でできてるのかミネットさんは。近くにいるだけで恥ずかしい。そんな気障な台詞をさらっと言えるなんてやっぱりただものじゃない。そもそも同性と言う時点で障害ありまくりだろう！突っ込みたい気持ちを押さえ込んでいると、ミネットさんがふと私の方を向く。

「もちろん、ヴィトも愛らしいよ」

冗談なのか本気なのか判断できない。いやきつと冗談だ。そしてミネットさんは女の人だ。落ち着け私。どんなに男物が似合っている、彼女は彼女だ。

引きつった顔でありがとうございますとお礼を言うと、律儀だな、と言われてしまった。

「はいはい、話はそこまで。ヴィト、こっちに来てくれないかしら」
部屋の奥へ促されると、そこには目の疑うようなものが大量にあった。

「あの、これは？」

ベッドの上、所狭しに、目が痛くなるような色とりどりの布が散乱している。布と言うか服だ。服と言うか、・・・ドレスだ。

「何って、着替えるに決まってるじゃない。まさかその服装でパー

ティに出るつもり？」

パーティ？なにそのお洒落な響き。交流会じゃなかったの？そう聞くと、交流会と言う名目のパーティらしい。

え、ちよつとまって今何て言った？

「わ、私が？」

「当たり前でしょ？主役が出なくてどうするの！」

「主役！？や、そんな。無理だから・・・！」

そんな話聞いてない！

アリアーデが持っているのは眩しいばかりの豪華な衣装だ。そんな動きにくいもの着たくない。女、雌として少しは懂れるけど、華美な服装は苦手なんだ！逃げたい。物凄く逃げたい。だが後ろはシフォンとアリアーデが壁のように立っており、逃げる事ができない。そうこうしているうちにマドレーヌに追い詰められてしまった。

「我儂言わないの！」

「シフォンとか、アリアーデとかが着ればいいんじゃないかな！私よりきつと似合うよ！」

さつとふたりに目を向けると、視線を逸らされた。

「何事も経験よ、ヴィト」

「ごめんね 私たち給仕があるから」

「わ、私も給仕をする・・・！」

今まで使用人として働いてきたんだ。そうだよ、使用人だから給仕をしないと！だが、シフォンに縋りつくとアリアーデに引き剥がされてマドレーヌの元へ逆戻り。

「主役が給仕をするとか前代未聞よ！相手の国のお偉い方とかも来るんだから、ちゃんとしなさい！」

「だってそれ動きにくそうだよ！もし何かあったらどうするの」

「ドラゴンになって反撃すればいいでしょう」

そんなご無体な！！投げやりすぎるよマドレーヌ！それでも魔術師の卵なの！

「全くもう、女の子なら着たいと思わないの？可愛いわよ、これ」

「私ドラゴンだから。オンナノコチガウ」

「誤魔化さないの！」

怒られてしまった。

確かに可愛いよ。綺麗だよ。でもそれは私にとって観賞用であつて、自ら身に着けるようなものじゃないんだ！

「じゃ、じゃあ私もミネツトさんみたいに男物を着る」

ミネツトさんが着ているのなら私も着ていいはずだ！そう宣言すると、呆れられた。

「何言ってるの。ヴィトならそれはそれで似合うかもしれないけど、今回は駄目よ」

中々観念しない私に痺れを切らしたのかマドレーヌは大きなため息をついた。

「・・・ミネツト、手伝ってくれるかしら」

「了解。君の頼みとあらば」

ちよ、それは卑怯だと思う！ミネツトさんと私じゃ明らかに体格差がありすぎる！こんなところでドラゴンに戻るわけにもいかないし、四対一だなんて本当に卑怯だ！

私の声にならない悲鳴が、響き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9492v/>

ドラゴン・ライフ

2011年11月28日01時43分発行